

美乃利遺跡発掘調査報告書Ⅱ

令和 6 (2024)年8月
加古川市教育委員会

『美乃利遺跡発掘調査報告書Ⅱ』正誤表

以下の間違いがありましたので、お詫びして訂正いたします。


頁・行	誤	正
67・68・120 頁 図版 35	 <p data-bbox="322 380 516 398">図 96 溝 (SD) 1 出土遺物</p>	<p data-bbox="591 297 902 404">当該遺物は、溝 (SD) 1 から出土した遺物ではなく、本書未掲載遺構の出土遺物であったため、資料の利用等にあたってはご注意ください。</p>



写真1 遺跡上空から加古川上流を望む（南西から）



写真2 遺跡上空から加古川下流を望む（北東から）



写真3 調査区1（第1遺構面）全景（写真上が北東）※簡易合成



写真 4 SB6・SB7 (北東から)



写真 5 SK8 遺物出土状況 (東から)



写真6 SD1 遺物出土状況（北から）



写真7 SD1 出土遺物



写真8 調査区2（第1遺構面）全景（写真上が北）※簡易合成



写真9 SD10 (北西から)



写真10 SK20 遺物出土状況 (北から)

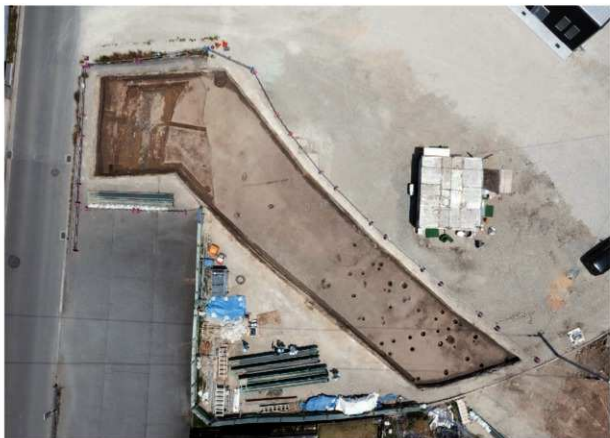


写真 11 調査区 3 (第 1 遺構面) 全景 (写真上が北東)



写真 12 SB9, SA4 (北から)



写真 13 SD8 断面（北東から）



写真 14 調査区3（第2遺構面）全景（北から）

序 文

加古川市は、市名の由来ともなっている県下最大の一級河川「加古川」が市域の中央をほぼ南北に貫流しており、古来その恵みを享受し発展してきました。現在の加古川市は、おもに市域の中・南部において市街化や商業・サービス業の集積が進み、生活の利便性がますます向上している一方、市域の北部には今もなお豊かな自然が広がっており、牧歌的な風景を目の当たりにすることができます。このような様相を呈する現在の加古川市ですが、かつては今以上に豊かな自然が広がっていたことは疑いないでしょう。そして私たちの祖先は、そのような自然豊かな環境のなかで、現在の私たち以上に自然をより身近なものとして感じ、日々生活を送ってきたものと思われれます。

私たち祖先の生きた証は、さまざまな「モノ」や「コト」、すなわち文化財として現在に残っています。その足跡は地中にも数多く残されており、発掘調査を行うと、埋蔵文化財という形でその確かな軌跡を私たちの目の前に現します。科学技術の発展や国際情勢の変化などにより、私たちを取り巻く環境は日々変化していますが、これらの文化財を後世へ守り伝えていくことは現在に生きる私たちの責務であり、現在まで残っているのは先人たちの努力なくしてはなしえなかったことも忘れてはなりません。

本書で報告する美乃利遺跡は、古くから周知されていた遺跡であるものの、比較的近年になって発掘調査が行われるようになった遺跡のひとつです。これまで行われてきた発掘調査によって弥生時代から中世にかけて営まれた複合遺跡であることが判明していましたが、このたびの調査でも複数の時期の遺構や遺物が多数確認されました。また、過去の調査で確認されていた遺構につながる遺構の存在も確認することができ、周辺の状況も含めて美乃利遺跡の様相が徐々に明らかになってきました。その成果について、より多くの方々を知っていただければと思います。

本書が、郷土の歴史や文化について知っていただく資料のひとつとして、また文化財保護へのご理解を深めていただく一助となるとともに、先人たちの営みに思いを馳せるきっかけとなれば幸いです。

末筆ではございますが、日頃より文化財保護行政に多大なるご理解とご協力を賜っている市民の皆様をはじめ、ご指導ご鞭撻を賜っている関係機関、各位に厚くお礼申しあげます。

令和6年8月

加古川市教育委員会
教育長 小南克己

例 言

- ・本書は、兵庫県加古川市加古川町大野地内に所在する美乃利遺跡の発掘調査報告書である。
- ・発掘調査は、加古川市が進めている中津水足線外1線道路改良事業（大野バイパス）に伴い、令和元（2019）・3（2021）年度に加古川市教育委員会が主体となって実施した。なお、各年度の調査期間は、以下のとおりである。

令和元年度：令和2（2020）年2月17日から6月17日まで

令和3年度：令和4（2022）年3月28日から8月5日まで

- ・整理作業及び報告書作成作業は、令和3年度の発掘調査と併行して令和4年4月1日に開始し、令和6（2024）年8月30日の本書の刊行をもって終了した。
- ・発掘調査、整理作業及び報告書作成作業は、加古川市教育委員会が実施し、安西工業株式会社、株式会社アコードの協力を得た。
- ・遺構図のトレースは、株式会社アコードが実施した。
- ・遺物の水洗・註記・接合・復元は、井上かおり、窪田美佳、佐藤薫、前田富子（以上、加古川市会計年度任用職員）と安西工業株式会社が実施した。
- ・遺物の実測・トレースは、おもに株式会社アコードが実施したほか、その一部を平尾英希（加古川市教育委員会）、大河琉香（加古川市会計年度任用職員、大手前大学）が行った。
- ・本書掲載の遺構写真は平尾が撮影し、空中写真は安西工業株式会社が撮影した。
- ・本書掲載の遺物写真は株式会社アコードが撮影した。
- ・挿図の作成は、おもに株式会社アコードが実施したほか、その一部を平尾、西村秀子（加古川市会計年度任用職員）が行った。
- ・金属器及び木器の保存処理は、株式会社アコードが実施した。
- ・本書の執筆・編集は平尾が担当した。
- ・本書にかかる出土遺物、図面及び写真は、加古川市教育委員会が保管・管理している。
- ・発掘調査から報告書刊行にいたるまで、下記の方々や諸機関にご指導、ご協力を賜りました。記して感謝を申し上げます（五十音順、敬称略）。

池田征弘 大北 浩 岡田 功 岡本一士 上月昭信 佐古雄記 友久伸子 萬代和明

森内秀造 山本祐作

大野町内会 株式会社コーメイ 株式会社タカモク 日岡保育園 兵庫県教育委員会

凡 例

- 本書における標高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用した。また、遺構配置図中の座標値は、世界測地系（第V系）に基づき、現場での作図段階で設定したものである。
- 本書掲載の遺構番号は、整理事業段階に改めて付したものであり、遺構種別ごとに通し番号を付している。なお、遺構記号については、『発掘調査のてびき』（奈良文化財研究所 2013）に則り、以下のとおりとする。

SA：柵

SB：掘立柱建物

SD：溝

SI：堅穴建物

SK：土坑

SP：ピット

SX：その他

- 本書掲載の遺物実測図は、出土遺構にかかわらず通し番号を付している。また、通し番号は、遺物の種別ごとに付しており、土器・土製品については番号のみ、石器、金属器（鉄器）、木器（部材を含む）については、それぞれ番号の前にS、I、Ⅱと表記している。
- 遺物実測図において、須恵器の断面は黒塗り、陶磁器の断面はグレートーン、金属器の断面は斜線、そのほかの遺物の断面は白抜きで表現している。
- 遺物観察表の計測値で用いている「*」は復元値、「>」は残存値を示す。
- 土の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局及び財団法人日本色彩研究所『新版標準土色帖』（2015年版）に準じた。

目 次

巻頭図版

序文

例言・凡例

目次

第 I 章 遺跡の位置と環境	1
1. 遺跡の位置	1
2. 地理的・歴史的環境	1
a) 地理的環境	
b) 歴史的環境	
第 II 章 調査の経緯と既往の調査	8
1. 調査にいたる経緯と経過	8
a) 調査にいたる経緯	
b) 調査の経過及び調査体制	
2. 既往の調査	13
a) 遺跡としての認識	
b) 複合遺跡としての認識	
第 III 章 調査の成果	15
1. 調査の概要	15
2. 基本層序	16
3. 遺構・遺物	21
a) 調査区 1	
b) 調査区 2	
c) 調査区 3	
第 IV 章 総括	128

写真図版

抄録

挿 図 目 次

図 1 遺跡位置図	2	図 59 ビット (SP)23 及び出土遺物	45
図 2 周辺地形図	3	図 60 ビット (SP)24 及び出土遺物	47
図 3 周辺道路分布図	4	図 61 ビット (SP)25 及び出土遺物	47
図 4 事業対象範囲及び確認調査位置	8	図 62 ビット (SP)26 及び出土遺物	47
図 5 令和元～2 年度調査風景	10	図 63 ビット (SP)27 及び出土遺物	47
図 6 令和 3～4 年度調査風景	10	図 64 ビット (SP)28 及び出土遺物	47
図 7 木製品保存処理作業状況	10	図 65 ビット (SP)29 及び出土遺物	48
図 8 整理作業 (デジタルトレース) 状況	10	図 66 ビット (SP)30 及び出土遺物	49
図 9 昭和 43 (1968) 年の分布調査成果	12	図 67 ビット (SP)31 及び出土遺物	49
図 10 過去の発掘調査地点	13	図 68 ビット (SP)32 及び出土遺物	49
図 11 調査区配置図	15	図 69 ビット (SP)33 及び出土遺物	50
図 12 調査区 1 土層断面図	17	図 70 ビット (SP)34 及び出土遺物	50
図 13 調査区 2・3 土層断面図	19	図 71 ビット (SP)35 及び出土遺物	50
図 14 調査区 1 (第 1 遺構面) 遺構平面図	22	図 72 ビット (SP)36 及び出土遺物	50
図 15 掘立柱建物 (SB)1 及び出土遺物	23	図 73 ビット (SP)37 及び出土遺物	51
図 16 掘立柱建物 (SB)2 及び出土遺物	23	図 74 ビット (SP)38 及び出土遺物	51
図 17 掘立柱建物 (SB)3	24	図 75 ビット (SP)39 及び出土遺物	51
図 18 掘立柱建物 (SB)3 出土遺物	25	図 76 ビット (SP)40 及び出土遺物	52
図 19 掘立柱建物 (SB)4 及び出土遺物	26	図 77 ビット (SP)41 及び出土遺物	52
図 20 掘立柱建物 (SB)5	26	図 78 ビット (SP)42 及び出土遺物	52
図 21 掘立柱建物 (SB)6	27	図 79 ビット (SP)43 及び出土遺物	52
図 22 掘立柱建物 (SB)6 出土遺物	28	図 80 ビット (SP)44 及び出土遺物	54
図 23 掘立柱建物 (SB)7	29	図 81 性格不明遺構 (SX)1	55
図 24 掘立柱建物 (SB)7 出土遺物	30	図 82 性格不明遺構 (SX)1 出土遺物	56
図 25 櫓 (SA)1	31	図 83 性格不明遺構 (SX)2 及び出土遺物	57
図 26 土坑 (SK)1 及び出土遺物	31	図 84 性格不明遺構 (SX)3 及び出土遺物	57
図 27 土坑 (SK)2 及び出土遺物	32	図 85 性格不明遺構 (SX)4 及び出土遺物	58
図 28 土坑 (SK)3 及び出土遺物	32	図 86 性格不明遺構 (SX)5 及び出土遺物	59
図 29 土坑 (SK)4 及び出土遺物	33	図 87 性格不明遺構 (SX)6 及び出土遺物	60
図 30 土坑 (SK)5 及び出土遺物	34	図 88 調査区 1 (第 2 遺構面) 遺構平面図	61
図 31 土坑 (SK)6 及び出土遺物	34	図 89 土坑 (SK)11 及び出土遺物	62
図 32 土坑 (SK)7 及び出土遺物	34	図 90 土坑 (SK)12 及び出土遺物	63
図 33 土坑 (SK)8	35	図 91 土坑 (SK)13 及び出土遺物	63
図 34 土坑 (SK)8 出土遺物	36	図 92 土坑 (SK)14・15 及び出土遺物	64
図 35 土坑 (SK)9 及び出土遺物	37	図 93 ビット (SP)45 及び出土遺物	65
図 36 土坑 (SK)10 及び出土遺物	37	図 94 ビット (SP)46 及び出土遺物	66
図 37 ビット (SP)1 及び出土遺物	38	図 95 溝 (SD)1	67
図 38 ビット (SP)2 及び出土遺物	38	図 96 溝 (SD)1 出土遺物	68
図 39 ビット (SP)3 及び出土遺物	38	図 97 溝 (SD)2・3 及び出土遺物	69
図 40 ビット (SP)4 及び出土遺物	39	図 98 調査区 1 包含層等出土遺物 (1)	71
図 41 ビット (SP)5 及び出土遺物	39	図 99 調査区 1 包含層等出土遺物 (2)	74
図 42 ビット (SP)6 及び出土遺物	39	図 100 調査区 1 下層包含層出土遺物	75
図 43 ビット (SP)7 及び出土遺物	40	図 101 調査区 2 (第 1 遺構面) 遺構平面図	76
図 44 ビット (SP)8 及び出土遺物	41	図 102 掘立柱建物 (SB)8 及び出土遺物	77
図 45 ビット (SP)9 及び出土遺物	41	図 103 櫓 (SA)2・3	78
図 46 ビット (SP)10 及び出土遺物	41	図 104 土坑 (SK)16 及び出土遺物	79
図 47 ビット (SP)11 及び出土遺物	41	図 105 土坑 (SK)17 及び出土遺物	79
図 48 ビット (SP)12 及び出土遺物	42	図 106 土坑 (SK)18 及び出土遺物	80
図 49 ビット (SP)13 及び出土遺物	42	図 107 土坑 (SK)19 及び出土遺物	80
図 50 ビット (SP)14 及び出土遺物	42	図 108 ビット (SP)47 及び出土遺物	81
図 51 ビット (SP)15 及び出土遺物	43	図 109 ビット (SP)48 及び出土遺物	81
図 52 ビット (SP)16 及び出土遺物	43	図 110 溝 (SD)4 及び出土遺物	82
図 53 ビット (SP)17 及び出土遺物	43	図 111 溝 (SD)5 及び出土遺物	82
図 54 ビット (SP)18 及び出土遺物	43	図 112 調査区 2 (第 2 遺構面) 遺構平面図	84
図 55 ビット (SP)19 及び出土遺物	45	図 113 土坑 (SK)20 及び出土遺物	85
図 56 ビット (SP)20 及び出土遺物	45	図 114 ビット (SP)49 及び出土遺物	85
図 57 ビット (SP)21 及び出土遺物	45	図 115 調査区 2 包含層等出土遺物	86
図 58 ビット (SP)22 及び出土遺物	45	図 116 調査区 2 下層包含層出土遺物	87

図 117	調査区 3 (第 1 遺構面) 遺構平面図	88	図 128	溝 (SD) 8	99
図 118	堀立柱建物 (SB) 9 (1)	90	図 129	溝 (SD) 8 出土遺物	102
図 119	堀立柱建物 (SB) 9 (2)	91	図 130	調査区 3 (第 2 遺構面) 遺構平面図	104
図 120	堀立柱建物 (SB) 9 出土遺物	92	図 131	竪穴建物 (SI) 1	105
図 121	櫛 (SA) 4 及び出土遺物	93	図 132	ビット (SP) 51 及び出土遺物	105
図 122	櫛 (SA) 5	93	図 133	溝 (SD) 9 及び出土遺物	106
図 123	櫛 (SA) 5 出土遺物	94	図 134	溝 (SD) 10	107
図 124	櫛 (SA) 6 及び出土遺物	94	図 135	溝 (SD) 10 出土遺物 (1)	111
図 125	土坑 (SK) 21 及び出土遺物	95	図 136	溝 (SD) 10 出土遺物 (2)	112
図 126	ビット (SP) 50 及び出土遺物	96	図 137	調査区 3 包含層等出土遺物	115
図 127	溝 (SD) 6・7 及び出土遺物	97	図 138	調査区 3 下層包含層出土遺物	115

表 目 次

表 1	周辺道路一覧	5	表 4	遺物観察表 (石器)	127
表 2	美乃利遺跡における各時期の検出遺構一覧	14	表 5	遺物観察表 (鉄器)	127
表 3	遺物観察表 (土器・土製品)	116～126	表 6	遺物観察表 (木器)	127

図 版 目 次

写真 1	遺跡上空から加古川上流を望む (南西から)	巻頭図版 1	写真 27	SB3P3 根石検出状況 (北から)	図版 3
写真 2	遺跡上空から加古川下流を望む (北東から)	巻頭図版 1	写真 28	SB3P4 断面 (北から)	図版 3
写真 3	調査区 1 (第 1 遺構面) 全景 (写真上が北東)	巻頭図版 1	写真 29	SB3P5 断面 (西から)	図版 3
写真 4	SB6・SB7 (北東から)	巻頭図版 2	写真 30	SB3P5 板材検出状況 (北西から)	図版 4
写真 5	SK8 遺物出土状況 (東から)	巻頭図版 3	写真 31	SB3P6 断面 (東から)	図版 4
写真 6	SD1 遺物出土状況 (北から)	巻頭図版 4	写真 32	SB3P7 断面 (北から)	図版 4
写真 7	SD1 出土遺物	巻頭図版 4	写真 33	SB3P8 断面 (東から)	図版 4
写真 8	調査区 2 (第 1 遺構面) 全景 (写真上が北)	巻頭図版 5	写真 34	SB3P8 根石検出状況 (北から)	図版 4
写真 9	SD10 (北西から)	巻頭図版 6	写真 35	SB3P9 断面 (北東から)	図版 4
写真 10	SK20 遺物出土状況 (北から)	巻頭図版 6	写真 36	SB3P10 石積み検出状況 (北東から)	図版 4
写真 11	調査区 3 (第 1 遺構面) 全景 (写真上が北東)	巻頭図版 7	写真 37	SB3P10 完掘状況 (北から)	図版 4
写真 12	SB9、SA4 (北から)	巻頭図版 7	写真 38	SB4P1 断面 (東から)	図版 5
写真 13	SB8 断面 (北東から)	巻頭図版 8	写真 39	SB4P2 断面 (南西から)	図版 5
写真 14	調査区 3 (第 2 遺構面) 全景 (北から)	巻頭図版 8	写真 40	SB4P4 断面 (西から)	図版 5
写真 15	調査区 1 南側南半 (第 1 遺構面) 全景 (北東から)	図版 1	写真 41	SB4P5 断面 (西から)	図版 5
写真 16	調査区 1 南側北半 (第 1 遺構面) 全景 (南西から)	図版 1	写真 42	SB5 (北から)	図版 5
写真 17	調査区 1 北側 (第 1 遺構面) 全景 (南西から)	図版 2	写真 43	SB5P2 根石検出状況 (東から)	図版 5
写真 18	SB1P1 断面 (西から)	図版 2	写真 44	SB5P3 断面 (東から)	図版 5
写真 19	SB1P2 断面 (北から)	図版 2	写真 45	SB5P4 根石検出状況 (北西から)	図版 5
写真 20	SB1P3 断面 (南から)	図版 2	写真 46	SB6・SB7 (北東から)	図版 6
写真 21	SB2P1 断面 (南から)	図版 2	写真 47	SB6P1 断面 (南から)	図版 6
写真 22	SB2P2 断面 (北から)	図版 3	写真 48	SB6P3 断面 (北西から)	図版 6
写真 23	SB2P3 断面 (北西から)	図版 3	写真 49	SB6P5 断面 (南東から)	図版 6
写真 24	SB3P2 断面 (南から)	図版 3	写真 50	SB6P6 断面 (北から)	図版 6
写真 25	SB3P3 断面 (北西から)	図版 3	写真 51	SB7P1 断面 (南東から)	図版 7
写真 26	SB3P3 柱根 (北西から)	図版 3	写真 52	SB7P2 断面 (南から)	図版 7
			写真 53	SB7P3 遺物出土状況 (西から)	図版 7
			写真 54	SB7P4 断面 (東から)	図版 7
			写真 55	SB7P5 断面 (南西から)	図版 7
			写真 56	SB7P6 断面 (北西から)	図版 7
			写真 57	SB7P7 断面 (北西から)	図版 7
			写真 58	SB7P8 断面 (南から)	図版 7
			写真 59	SB7P9 断面 (南西から)	図版 8
			写真 60	SB7P10 断面 (西から)	図版 8

写真 61	SB7P11 断面 (東から)	図版 8
写真 62	SB7P11 遺物出土状況 (北東から)	図版 8
写真 63	SB7P12 断面 (南東から)	図版 8
写真 64	SB7P12 遺物出土状況 (東から)	図版 8
写真 65	SA1P3 断面 (北から)	図版 8
写真 66	SA1P4 断面 (北から)	図版 8
写真 67	SK1 断面 (北東から)	図版 9
写真 68	SK3 断面 (北から)	図版 9
写真 69	SK4 遺物出土状況 1 (北から)	図版 9
写真 70	SK4 遺物出土状況 2 (南から)	図版 9
写真 71	SK8 断面 (南東から)	図版 9
写真 72	SK8 遺物出土状況 (東から)	図版 9
写真 73	SK9 断面 (北西から)	図版 9
写真 74	SK9 遺物出土状況 (北から)	図版 9
写真 75	SP1 遺物出土状況 (西から)	図版 10
写真 76	SP7 断面 (東から)	図版 10
写真 77	SP13 断面 (北東から)	図版 10
写真 78	SP19 断面 (西から)	図版 10
写真 79	SP21 断面 (北から)	図版 10
写真 80	SP24 断面 (北から)	図版 10
写真 81	SP27 断面 (南西から)	図版 10
写真 82	SP27 遺物出土状況 (南西から)	図版 10
写真 83	SP28 断面 (東から)	図版 11
写真 84	SP29 完掘状況 (東から)	図版 11
写真 85	SP32 断面 (南東から)	図版 11
写真 86	SP44 (第 1 面) 遺物出土状況 (南西から)	図版 11
写真 87	SP44 (第 2 面) 遺物出土状況 (西から)	図版 11
写真 88	SP44 (第 3 面) 遺物出土状況 (東から)	図版 11
写真 89	SP44 (第 4 面) 遺物出土状況 (東から)	図版 11
写真 90	SP44 (第 5 面) 遺物出土状況 (北から)	図版 11
写真 91	SX1 土層断面 (北から)	図版 12
写真 92	SX2 検出状況 (北から)	図版 12
写真 93	SX3 礫出土状況 (北東から)	図版 12
写真 94	SX4 検出状況 (北から)	図版 12
写真 95	SX4 (a - a') 断面 (北から)	図版 12
写真 96	SX4 炭化物集中部断面 (北西から)	図版 13
写真 97	SX4 (b - b'、c - c') 断面 (北から)	図版 13
写真 98	SX5 断面 (西から)	図版 13
写真 99	SX6 断面 (南東から)	図版 13
写真 100	調査区 1 南側 (第 2 遺構面) 全景 (東から)	図版 13
写真 101	調査区 1 中央南側 (第 2 遺構面) 全景 (南西から)	図版 14
写真 102	調査区 1 中央北側 (第 2 遺構面) 全景 (南東から)	図版 14
写真 103	調査区 1 北側 (第 2 遺構面) 全景 (南東から)	図版 14
写真 104	SK11 断面 (南東から)	図版 15
写真 105	SK11 遺物出土状況 (南から)	図版 15
写真 106	SK12 検出状況 (東から)	図版 15
写真 107	SK12 断面 (北から)	図版 15
写真 108	SK12 完掘状況 (南東から)	図版 15
写真 109	SK12 遺物出土状況 (北から)	図版 15
写真 110	SK13 断面 (南東から)	図版 15
写真 111	SK13 炭化物検出状況 (東から)	図版 15
写真 112	SK14 断面 (南から)	図版 16
写真 113	SP45 断面 (西から)	図版 16
写真 114	SP46 遺物出土状況 (南から)	図版 16
写真 115	SP46 断面 (北から)	図版 16
写真 116	SD1 遺物出土状況 (南から)	図版 16
写真 117	SD1 南半部遺物出土状況 1 (東から)	図版 17
写真 118	SD1 南半部遺物出土状況 2 (南西から)	図版 17
写真 119	SD2・3 完掘状況 (北西から)	図版 17
写真 120	調査区 1 北西壁土層堆積 (南から)	図版 17
写真 121	S88 (北から)	図版 18
写真 122	S88P1 断面 (北から)	図版 18
写真 123	S88P2 断面 (北から)	図版 18
写真 124	S88P4 断面 (北から)	図版 18
写真 125	S88P5-1・2 断面 (北西から)	図版 18
写真 126	S88P6 断面 (南西から)	図版 18
写真 127	SA2・SA3 (南から)	図版 18
写真 128	SA2P3 (前)・SA3P3 (後) 断面 (南から)	図版 18
写真 129	SK16 完掘状況 (北西から)	図版 19
写真 130	SK19 遺物出土状況 (東から)	図版 19
写真 131	SD4 断面 (東から)	図版 19
写真 132	SD4 遺物出土状況 (北西から)	図版 19
写真 133	調査区 2 (第 2 遺構面) 全景 (北西から)	図版 19
写真 134	SK20 断面 (北から)	図版 19
写真 135	SP49 遺物出土状況 (東から)	図版 19
写真 136	調査区 2 西壁土層堆積 (東から)	図版 19
写真 137	調査区 3 (第 1 遺構面) 全景 (南から)	図版 20
写真 138	S89、SA4 (北西から)	図版 20
写真 139	S89P1 断面 (北東から)	図版 21
写真 140	S89P2 断面 (北東から)	図版 21
写真 141	S89P4 断面 (南西から)	図版 21
写真 142	S89P4 (第 1 面) 遺物出土状況 (北東から)	図版 21
写真 143	S89P4 (第 2 面) 遺物出土状況 (南から)	図版 21
写真 144	S89P5 断面 (北東から)	図版 21
写真 145	S89P6 断面 (南西から)	図版 21
写真 146	S89P6 根石検出状況 (西から)	図版 21
写真 147	S89P7 断面 (北東から)	図版 22
写真 148	S89P8 断面 (北東から)	図版 22
写真 149	S89P9 断面 (西から)	図版 22
写真 150	S89P9 根石検出状況 (西から)	図版 22
写真 151	S89P10 断面 (北東から)	図版 22
写真 152	S89P11 断面 (北東から)	図版 22
写真 153	S89P12 完掘状況 (南西から)	図版 22
写真 154	SA4P1 断面 (北東から)	図版 22
写真 155	SA4P2 断面 (北東から)	図版 23
写真 156	SA4P3 断面 (北東から)	図版 23
写真 157	SA5 (写真上が東)	図版 23
写真 158	SA5P1 断面 (西から)	図版 23
写真 159	SA5P2 断面 (西から)	図版 23
写真 160	SA5P3 断面 (西から)	図版 23
写真 161	SA5P4 断面 (南東から)	図版 23
写真 162	SA5P4 遺物出土状況 (南西から)	図版 23
写真 163	SA6 (南から)	図版 24
写真 164	SA6P1-1・2 断面 (西から)	図版 24
写真 165	SA6P2 断面 (南東から)	図版 24
写真 166	SA6P3 断面 (南西から)	図版 24
写真 167	SK21 断面 (東から)	図版 24
写真 168	SK21 遺物出土状況 (南から)	図版 24
写真 169	SP50 遺物出土状況 (南東から)	図版 24
写真 170	SP50 完掘状況 (北東から)	図版 24
写真 171	SD6・SD7 検出状況 (北から)	図版 25
写真 172	SD6 断面 (南西から)	図版 25
写真 173	SD7 (c - c') 断面 (南西から)	図版 25
写真 174	SD7 遺物出土状況 (南西から)	図版 25

写真 175	SD8 (北東から)	図版 25	写真 189	出土遺物 (4)	図版 31
写真 176	SI1 (東から)	図版 26	写真 190	出土遺物 (5)	図版 32
写真 177	SI1 周壁溝断面 (南東から)	図版 26	写真 191	出土遺物 (6)	図版 33
写真 178	SD9 (北東から)	図版 26	写真 192	出土遺物 (7)	図版 34
写真 179	SD9 断面 (北東から)	図版 26	写真 193	出土遺物 (8)	図版 35
写真 180	SD10 (北から)	図版 26	写真 194	出土遺物 (9)	図版 36
写真 181	SD10 断面 (南から)	図版 27	写真 195	出土遺物 (10)	図版 37
写真 182	SD10 下層断面 (南から)	図版 27	写真 196	出土遺物 (11)	図版 38
写真 183	SD10 遺物出土状況 (南西から)	図版 27	写真 197	出土遺物 (12)	図版 39
写真 184	調査区3西壁土層堆積 (南東から)	図版 27	写真 198	出土遺物 (13)	図版 40
写真 185	SD8 付近下層土層堆積 (北から)	図版 27	写真 199	出土遺物 (14)	図版 41
写真 186	出土遺物 (1)	図版 28	写真 200	出土遺物 (15)	図版 42
写真 187	出土遺物 (2)	図版 29	写真 201	出土遺物 (16)	図版 43
写真 188	出土遺物 (3)	図版 30	写真 202	出土遺物 (17)	図版 44

第 I 章 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置

美乃利遺跡は、加古川市加古川町大野、同町美乃利に所在する（図 1）。

加古川市は、播磨灘に面した兵庫県南部のほぼ中央に位置する施行時特例市で、市域の中央を県下最大の一級河川「加古川」が北東から南西に向かって貫流している。行政区域的には西側を高砂市・姫路市、北側を加西市・小野市、東側を三木市・加古郡稲美町・同郡播磨町・明石市の 6 市 2 町と接しており、兵庫県を大きく 10 地域に区分した場合では「東播磨地域」に含まれる。

現在、国道 2 号線や国道 250 号線（明姫幹線）、山陽新幹線などの主要基幹交通路が東西に横断しているほか、JR 加古川線が南北に通るなど、東播磨地域の中核的都市として機能している。近年では、地域高規格道路に位置づけられる東播磨南北道路、中津水足線及び中津神吉線の敷設工事が進められており、市域におけるヒト・モノの動きは今後益々活発になっていくものとみられる。

美乃利遺跡が所在する加古川町大野・美乃利地区は加古川左岸に位置する。近年、両地域ともに市街化が進んでいるものの、その一部には田園風景が残っており、かつての面影を偲ぶことができる。

2. 地理的・歴史的環境

a) 地理的環境

加古川市域の地形は、加古川下流域の沖積低地、加古川右岸域の山地・丘陵、加古川左岸域の台地・段丘の大きく 3 つに分けることが可能である。

丹波市青垣町の栗鹿山山麓に源を発する加古川は、篠山川や杉原川、万願寺川など多くの中小河川と合流したのち、小野市委田町、樫山町付近で流れの向きを大きく南西に変える。その後、市域に入る直前で美養川と合流した加古川本流は市域北東部から市内に流れ込む。市域に入ったのちは、西川や草谷川などの小河川と合流し、升田山と日岡山の狭窄部を経て、その下流域に大規模な沖積平野を形成している。河川が現在の流路に固定化される以前は、さらに幾多の河川が分岐と合流を繰り返していたものとみられ、低地にはいくつもの自然堤防が形成されている。

加古川右岸域では、高御位山や城山、飯盛山など、標高 200 ～ 300 m の山地・丘陵が連なっている。これらの山地・丘陵は、おもに流紋岩質凝灰岩、いわゆる「竜石」からなっており、山麓を中心に麓層面や扇状地が形成されている。なお、一部には花崗閃緑岩からなる山地・丘陵も存在する。

一方、このような地形的特徴をもつ加古川右岸域に対して、加古川左岸域は、六甲山地の隆起運動によって形成された隆起扇状地となっており、神戸市西区の雌岡山を頂点として南西方向に形成された「いなみの台地」が広がっている。台地の縁辺部には段丘の形成が顕著で、形成作用の相違によって、草谷川と曇川に挟まれた範囲に形成された河成段丘の「加古台地」と、曇川以南に列状に形成された海成段丘の「日岡台地」に区分される。また、これらの台地は、それぞれ形成時期の異なる複数の段丘に細分でき、加古台地は加古段丘 1 ～ 4、日岡台地は日岡段丘 1 ～ 5 と野口段丘 1 ～ 4 の各段丘によって構成されている（田中 1989）。

このように大別できる市域の地形のなかで、美乃利遺跡は加古川下流域の沖積低地に位置する（図 2）。また、遺跡周辺の地理的環境については、『美乃利遺跡』（山田編 1997）のなかで地形学の見地から詳細な検討が行われている（高橋 1997）。この成果によると、現在の美乃利遺跡は「完新世段丘 I 面」、「完新世段丘 II 面」、「現犯蓋原面」にまたがって立地しており、本書で報告する今回調査地は

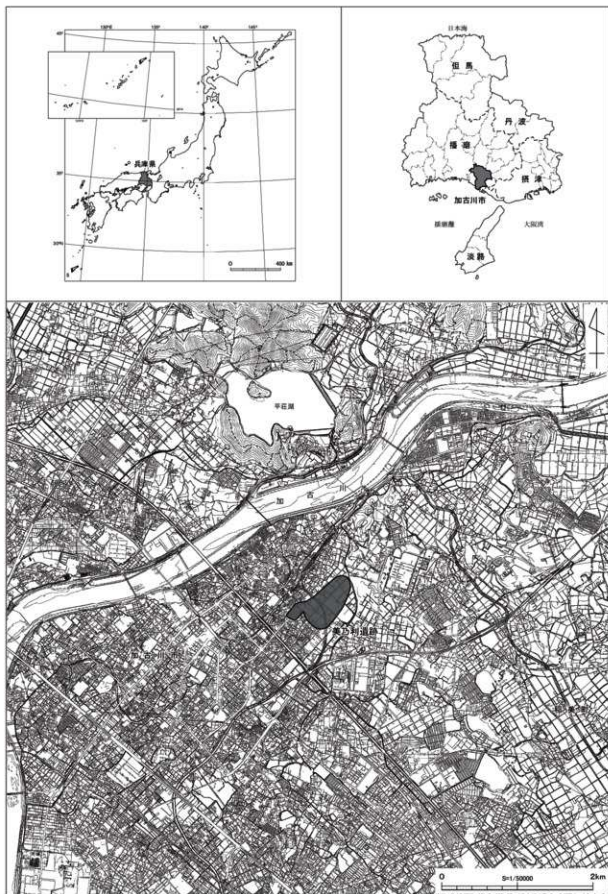


图1 遺跡位置图



図2 周辺地形図

「現氾濫原面」に相当する場所に立地している。

b) 歴史的環境

おもに美乃利遺跡(図3-1、以下括弧内の数字は図3と表1に対応)周辺に分布する遺跡を取り上げ、おおよそ中世までを対象とした各時代の歴史の様相について概観しておく。

旧石器時代・縄文時代

現在のところ、旧石器時代に関するものとしては遺物が確認されているのみで、遺構が確認された事例はない。加古川右岸では過去に平荘湖周辺でナイフ形石器、削器、角錐状石器などが採集されている。一方、加古川左岸では、日岡山遺跡(23)でナイフ形石器、細石刃石器核などが採集されているほか、坂元遺跡(37)でナイフ形石器の出土が確認されている。

縄文時代についても旧石器時代の状況とほぼ同様で、遺物のみ確認されている事例が大部分を占める。当該期の遺構としては、坂元遺跡で縄文晩期の篠原式の埴塹が確認されている。このほか、砂部遺跡(6)や溝之口遺跡(30)で縄文晩期の土器が出土している。

このように、美乃利遺跡の周辺で確認されている旧石器時代・縄文時代の遺跡については、遺物のみ確認されているものが大多数で、当該期の遺構はほとんど確認されていない。現状では、旧石器時代から縄文時代にかけての人々の生活の様相は不明瞭といわざるを得ない。

弥生時代

弥生時代前期に遡る遺跡には美乃利遺跡(1)がある。美乃利遺跡では、溝状遺構や土坑のほか、当該期に帰属する可能性のある水田跡が広範囲で検出されており、前期段階の稲作の痕跡が確認された事例として注目される。ただ、現在のところ、それ以外の遺跡はほとんど確認されていない。

ところが、弥生時代中期以降このような状況が一変し、加古川下流域では遺跡数が増加する。加古



图3 周边遗迹分布图

表1 周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	美乃利遺跡	弥生～中世	19	石守遺跡	古墳～奈良	32	栗津遺跡	弥生～古墳
2	神吉遺跡	弥生	20	石守古墳群	古墳	33	平野遺跡	弥生
3	天下原遺跡	弥生～奈良	21	水足1号墳	古墳	34	北在家遺跡	弥生～古墳
4	天下原古墳	古墳	22	水足2号墳	古墳	35	鶴林寺	平安
5	神吉南遺跡	弥生～奈良	23	日岡山遺跡	散布地	36	浜の宮遺跡	弥生～古墳
6	砂部遺跡	縄文～奈良	24	日岡遺跡	弥生～古墳	37	坂元遺跡	縄文～平安
7	升田遺跡	奈良	25	日岡山壘棺墓	弥生	38	良野遺跡	弥生
8	佐伯寺跡	平安	26	広沢山遺跡	古墳～平安	39	具平塚古墳	古墳
9	平荘胡古墳群		27	日岡山古墳群		40	細田橋居跡	中世
	a カンス塚古墳	古墳		a ひれ墓古墳	古墳	41	大塚遺跡	中世
	b 池尻2号墳	古墳		b 勅使塚古墳	古墳	42	安田橋居跡	中世
	c 升田山15号墳	古墳		c 西大塚古墳	古墳	43	長砂遺跡	弥生
	d 池尻16号墳	古墳		d 南大塚古墳	古墳	44	聖徳山古墳	古墳
10	平山遺跡	弥生		e 北大塚古墳	古墳	45	長砂橋居跡	中世
11	平山古墳群	古墳		f 西車塚古墳	古墳	46	敬信寺	平安～中世
12	地蔵寺古墳群	古墳		g 東車塚古墳	古墳	47	野口城跡	中世
13	二塚1号墳	古墳		h 神納塚古墳	古墳	48	野口庵寺	奈良
14	二塚2号墳	古墳		i 狐塚古墳	古墳	49	古大内城跡	中世
15	若神社古墳	古墳	28	中津橋居跡	中世	50	古大内遺跡	奈良
16	高田橋居跡	中世	29	大野遺跡	平安～中世	51	古代山陽道	奈良
17	石守橋居跡	中世	30	溝之口遺跡	弥生～平安	52	横倉城跡	中世
18	石守庵寺	奈良	31	溝之口庵寺	奈良			

川右岸では平山遺跡(10)、砂部遺跡など、加古川左岸では美乃利遺跡、溝之口遺跡、坂元遺跡などで当該期の遺構・遺物が確認されている。

砂部遺跡では、堅穴建物のほかに溝状遺構や土坑など多数の遺構が確認されており⁽¹⁾、溝状遺構からは多量の弥生土器とともに石包丁や石斧などの石器類が出土している。平山遺跡では、中期後半頃の堅穴建物1棟が確認されており、弥生土器とともに打製石包丁片や砥石、石錘などの石器類が出土している。弥生前期の水田跡などが確認された美乃利遺跡では、中期前葉頃の掘立柱建物、溝状遺構や土坑などのほか、中期後半頃の堅穴建物や掘立柱建物などが多数確認されており、弥生土器、石鏃や石包丁などの石器類、管玉などが出土している。溝之口遺跡や坂元遺跡では、おもに中期後半頃を中心とする時期の堅穴建物や周溝墓などが多数確認されており、多量の弥生土器をはじめ、各種石器類などが出土している。このように、弥生中期以降の加古川下流域では、その各所で集落が営まれるようになる。また、加古川左岸の美乃利遺跡、溝之口遺跡、坂元遺跡では、弥生中期後半に集落規模が拡大している状況が窺え、拠点集落といえるまで成長していた可能性も考えられる。

しかし、弥生時代後期になると、これらの集落の多くは規模を縮小するとともに、その周辺に新たな小規模集落が出現する。このような集落として栗津遺跡(32)や北在家遺跡(34)などがあり、栗津遺跡では弥生後期の堅穴建物1棟や土器溜まりなどが確認されている。それまでの集落動態とは対照的で、特定の場所に集中せず小規模な集落が分散しているかのような様相を呈する。ただ、このような状況のなか、美乃利遺跡では、弥生時代終末期頃の堅穴建物などが複数棟確認されており、なかには鍛冶工房の可能性が高い大型建物も存在し、他地域との交流も含め注目される。

古墳時代

古墳時代になると市域には数多くの古墳が築造されるようになり、古墳時代前期から後期(終末期

を含む)にかけて様々な古墳が築造されている。

古墳時代前期の古墳には、日岡山古墳群(27)と聖陵山古墳(44)がある。日岡山古墳群は、前期古墳9基のほか、約20基の後期古墳によって構成される古墳群である。このうち、前期古墳には、ひれ墓古墳(日岡陵古墳)、西大塚古墳、南大塚古墳、北大塚古墳、勅使塚古墳の5基の前方後円墳と、西車塚古墳、東車塚古墳、神納塚古墳、狐塚古墳の4基の円墳がある。全長約55～90mの前方後円墳や直径約30～40mの円墳が連続して築造されており、有力な首長系譜が存在していたものとみられる。また、過去の土取り工事の際には東車塚古墳などで三角縁神獣鏡や腕輪形石製品などが採集されており、日岡山古墳群の築造集団は倭王権と密接な関係にあったことが推測される。一方、聖陵山古墳は、海岸部近くに単独で立地する全長約70mの前方後円墳もしくは前方後方墳である。天文12(1543)年と明治10(1887)年に発掘が行われたという記録が残っており、竪穴式石槨とみられる埋葬施設から刀や銅鏃などが出土したとされる。

古墳時代中期の古墳には、カンス塚古墳(9a)と池尻2号墳(9b)がある。カンス塚古墳は、造出しをもつ直径約30mの円墳である。埋葬施設は「渡来系竪穴式」石槨で、石槨内から須恵器、刀剣や鏃、横刃板鋌留短甲などの武器・武具類、鎌や斧、鉄鉋などの農具類、金製垂飾付耳飾など、多種多様な副葬品が出土している。池尻2号墳は、墳丘の形態や規模は不明であるものの、カンス塚古墳と同様、「渡来系竪穴式」石槨を埋葬施設にもつ。石槨内からは須恵器、剣や鉾、横刃板衝角付冑などの武器・武具類、轡などの馬具類、U字形鋤鎌や斧などの農具類などが出土している。カンス塚古墳、池尻2号墳ともに、豊富な武器・武具類や渡来系文物を有する点で注目される。

古墳時代後期になると、市域各所で群集墳が形成され始める。群集墳は、基本的に横穴式石室を埋葬施設にもつ数基から数十基の古墳で構成されるが、なかには平荘湖古墳群(9)のように60基以上もの古墳が築造された古墳群も存在する。また、平荘湖古墳群では、升田山15号墳(9c)や池尻16号墳(椎見窟古墳)(9d)のように特大型の横穴式石室をもつ古墳も築造されている。このほか、2基の横穴式石室をもつ前方後円墳の可能性のある二塚1号墳(13)、同2号墳(14)や、切石を用いて横穴式石室を構築している地藏寺古墳などの特徴的な古墳も存在する。

一方、古墳時代の居住域については、砂部遺跡や溝之口遺跡などの一部の遺跡で確認されているに過ぎない。詳細については不明であるものの、砂部遺跡では古墳時代中期頃の掘立柱建物や大溝などが確認されており、初期須恵器を含む各種須恵器、手づくね土器や滑石製品などが出土している。溝之口遺跡では、古墳時代中期前半頃の竪穴建物において韓式系軟質土器や鍛冶滓などが出土しているほか、古墳時代後期を中心とする時期の竪穴建物や溝などが複数確認されている。

奈良時代・平安時代

律令国家として成熟期を迎え、仏教による鎮護国家を目指した奈良時代になると、様々な制度による国家的機構が全国各地で出現するとともに、仏教寺院の造営が隆盛する。美乃利遺跡の周辺では、このような社会変化が反映された性格の遺跡として、古大内遺跡(50)、溝之口遺跡、石守廃寺(18)、野口廃寺(48)などがある。古大内遺跡は「賀古駅家」に比定されている遺跡で、これまでの発掘調査によって、駅館院の出入口部と、古代山陽道(51)からの進入路などが確認されており、「播磨国府系瓦」の一型式である「古大内式軒瓦」などの古瓦が出土している。また、古大内遺跡の北約1.1kmに位置する坂元遺跡では、当該期の掘立柱建物が多数確認されているほか、縁軸陶器や灰軸陶器、墨書土器や硯、木簡などの遺物が出土しており、「賀古駅家」の駅戸集落である可能性が指摘されている。溝之口遺跡では、当該期の掘立柱建物が多数確認されており、なかには「コ」の字形に整然と

配置された建物群も存在し、土師器や須恵器、緑釉陶器のほか、石鈔などが出土している。さらに、掘立柱建物の近くで確認された井戸では、「大穀」などと墨書された須恵器や畜串などが出土している。このような遺構・遺物の存在から、当該期の溝之口遺跡は官衙的な性格をもつ集落であったと推測されている。

石守廃寺は、過去に行われた発掘調査によって寺院のおおよその構造などが明らかになっている。伽藍配置は法隆寺式で、石積基壇の塔跡や瓦積基壇の金堂跡が確認されているほか、複数棟の掘立柱建物などが検出されており、須恵器、細弁十六葉蓮華文軒丸瓦や斜格子文軒平瓦などの古代瓦、水煙や風鐸などが出土している。なお、石守廃寺の塔心礎は現在、寶塔寺の境内に移設されている。野口廃寺では発掘調査によって瓦積基壇の講堂跡や塔跡などが確認されている。須恵器や古代瓦などが出土しており、古代瓦には複弁八葉蓮華文軒丸瓦や均整忍冬唐草文軒平瓦のほか、「北宿式軒瓦」などの「播磨国府系瓦」がある。両寺院ともに飛鳥時代末頃ないし奈良時代初頭から平安時代にかけて存続した寺院と考えられている。

なお、このような官衙的な性格をもつ遺跡や古代寺院といった特徴的なものが存在する一方で、一般的な集落跡と考えられる遺跡も当然存在し、例えば、美乃利遺跡では複数の掘立柱建物や溝などが確認されている。

平安時代の遺跡としては、美乃利遺跡や大野遺跡（29）などで一定量の遺構・遺物が確認されているほか、平安時代に建立されたと考えられる鶴林寺（35）などが存在する。隣接して存在する美乃利遺跡と大野遺跡では、両遺跡ともに平安時代中期以降の掘立柱建物が複数棟確認されているほか、溝や土坑などが検出されており、おもに土師器や須恵器などが出土している。

すでに述べたように、平安時代には石守廃寺などの古代寺院が存続する一方で、鶴林寺が建立されたと考えられている。縁起の記述や白鳳期の聖観音立像などの存在から前身となる宗教施設が存在していた可能性もあるが、奈良時代に遡る古代瓦が出土していないこと、天台寺院に共通した伽藍配置をもつことなどから平安後期までに建立されたと推定される。

このほか、二塚1号墳・2号墳の墳丘において平安後期から末頃の銅製経筒と陶製経筒が出土している。

中世以降

中世以降の特徴的な遺跡として、石守構居跡（17）、中津構居跡（28）、安田構居跡（42）、長砂構居跡（45）、野口城跡（47）などの城館跡がある。なかには、羽柴秀吉による播磨攻めの合戦場となった野口城跡のようにその存在が広く知られているものもあるが、これらの城館跡の多くは、江戸時代の文献史料、周辺の地名や地形からその場所が推定されており、発掘調査によって遺構が確認された事例はほとんどない。各城館跡の実態は不明といわざるを得ないのが現状である。

一方、城館跡以外の遺跡には、大野遺跡や大塚遺跡（41）などがあり、各遺跡で一定量の遺構・遺物が確認されている。大野遺跡では、鎌倉時代から室町時代にかけての深い堀によって区画された方形の屋敷地が確認されており、遺物としては、土師器や須恵器のほか、備前焼、丹波焼、舶載磁器など、各地の土器が出土している。大塚遺跡では鎌倉時代の掘立柱建物1棟が検出されており、農村集落の一部であったと推測されている。

註

- (1) 各報告書のなかでは前期後半頃の遺構として報告されているが、本書では掲載されている実測図から中期前葉頃と判断しておく。

第Ⅱ章 調査の経緯と既往の調査

1. 調査にいたる経緯と経過

a) 調査にいたる経緯

加古川市においては近年、加古川駅を中心とした骨格道路の形成、また東西方向の交通機能の強化を目的として、市内幹線道路の整備を進めている。そのなかのひとつに、平成13年度以降継続的に進められている「中津水足線外1線道路改良事業（大野バイパス）」があり、その関連事業として市道平野神野線と市道中津水足線の交差点部から道路を北側へ延長する計画が令和元年度以降に予定された（図4）。

工事着手に先立ち、加古川市教育委員会（以下「市教委」とする）は、事業担当課である道路建設課から事業予定地における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会を受けた。市教委は、事業予定地の大部分が周知の埋蔵文化財包蔵地である「美乃利遺跡」に該当しているとともに、その一部が「大野遺跡」に該当していることを伝え、工事着手前に文化財保護法第94条第1項に基づく発掘通知の提出が必要になるとの回答を行うとともに、工事が地中の埋蔵文化財に与える影響を調べるため、事前の確認調査への協力を依頼した。

その後、平成30年10月23日付で発掘通知が市教委に提出され、今後どのような予定で工事及び埋蔵文化財の調査を実施していくか、担当課である道路建設課と協議を進めていき、事前に確認調査を実施することになった。平成30年12月15日、事業予定地の地権者から承諾を得ることができた土地に一辺2.0m四方のトレンチと長さ2.0m、幅1.2mのトレンチを各1か所設定して調査を行っ

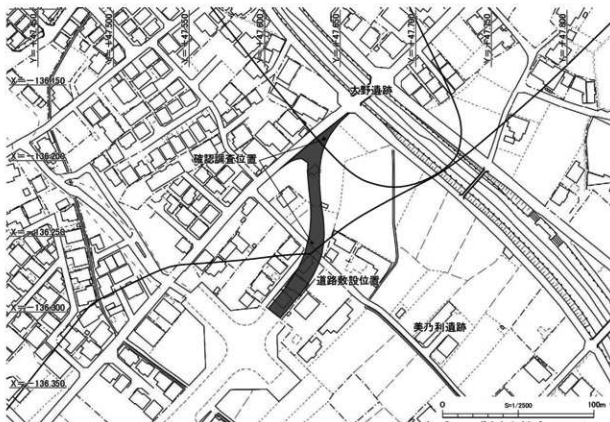


図4 事業対象範囲及び確認調査位置

た結果（図4）、いずれの調査区においても遺構・遺物が確認された。そのため、今回の事業実施にあたっては、事業予定地全域で発掘調査を行う必要があると判断し、その旨の指導事項を添えて、兵庫県教育委員会（以下「県教委」とする）へ進達した。

この進達に対し、平成31年1月15日付で、県教委から発掘調査を実施する必要がある旨の通知があった。これを受け、市教委と道路建設課はさらに協議を重ね、新たに道路を敷設する部分について発掘調査を実施することとした。発掘調査は、事業の実施計画の都合上、令和元（2019）年度と令和3（2021）年度に分けて行うことになった。令和元年度の発掘調査については令和2年2月17日から同年6月17日にかけて実施し、令和3年度については令和4年3月28日から同年8月5日にかけて実施した。諸般の事情により、いずれも年度をまたいだ調査となった。

なお、今回調査地の周辺では、県教委や市教委による発掘調査がこれまでも幾度か実施されており、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が多数確認されている。これまで行われてきた既往の調査については次節で述べることにする。

b) 調査の経過及び調査体制

調査の経過及び調査体制は以下のとおりである。なお、当初の計画では、令和5年度末にすべての作業を終える予定であったが、諸般の事情により、報告書の刊行は年度をまたぐこととなった。

平成30（2018）年度 確認調査

加古川市教育長 田淵博之
加古川市教育指導部 部長 大西隆博
加古川市教育指導部 次長 平田喜昭
文化財調査研究センター 所長 沼田好博
副所長 宮本佳典
庶務担当係長 安田啓一郎
主査 藤原典子
学芸員 山中リュウ、淺井達也、平尾英希
埋蔵文化財専門員 西岡巧次

令和元（2019）年度 本発掘調査（おもに下半期）

加古川市教育長 小南克己
加古川市教育指導部 部長 山本照久
加古川市教育指導部 次長 杉本達之
文化財調査研究センター 所長 沼田好博
副所長 宮本佳典
庶務担当係長 吉岡和誠
主査 藤原典子、高下寛
学芸員 山中リュウ、淺井達也、平尾英希
埋蔵文化財専門員 岡田美穂



図5 令和元～2年度調査風景



図6 令和3～4年度調査風景



図7 木製品保存処理作業状況



図8 整理作業（デジタルトレース）状況

令和2（2020）年度 本発掘調査（おもに上半期）

加古川市教育長 小南克己

加古川市教育指導部 部長 山本照久

加古川市教育指導部 次長 杉本達之

文化財調査研究センター 所長 沼田好博

副所長 宮本佳典

庶務担当係長 藤本庸介

主査 高下寛、九鬼一文

学芸員 山中リュウ、平尾英希、古林舞香

埋蔵文化財専門員 岡田美徳

令和3（2021）年度 本発掘調査（おもに下半期）

加古川市教育長 小南克己

加古川市教育指導部 部長 山本照久

加古川市教育指導部 次長 杉本達之

文化財調査研究センター 所長 河村孝弘

副所長 宮本佳典

庶務担当係長 藤本庸介
主査 前田正尚、高下寛
学芸員 山中リュウ、平尾英希、古林舞香
埋蔵文化財専門員 岡田美穂

令和4（2022）年度 本発掘調査（おもに上半期）及び整理作業

加古川市教育長 小南克己
加古川市教育指導部 部長 桐山朋宏
加古川市教育指導部 次長 杉本達之
文化財調査研究センター 所長 河村孝弘
副所長 宮本佳典
事業担当係長 山中リュウ
庶務担当係長 萩原美和
主査 前田正尚、高下寛
学芸員 平尾英希、古林舞香
埋蔵文化財専門員 岡田美穂

令和5（2023）年度 整理作業及び報告書作成作業

加古川市教育長 小南克己
加古川市教育指導部 部長 桐山朋宏
加古川市教育指導部 次長 杉本達之
文化財調査研究センター 所長 河村孝弘
副所長 宮本佳典
事業担当係長 山中リュウ
庶務担当係長 赤坂睦子
主査 前田正尚、高下寛
学芸員 平尾英希、古林舞香
埋蔵文化財専門員 岡田美穂

令和6（2024）年度 報告書作成作業

加古川市教育長 小南克己
加古川市教育指導部 部長 松尾光隆
加古川市教育指導部 次長 杉本達之
文化財調査研究センター 所長 坂本和彦
副所長 宮本佳典
事業担当係長 山中リュウ
主査 前田正尚、高下寛
学芸員 平尾英希、古林舞香
埋蔵文化財専門員 乗本愛美

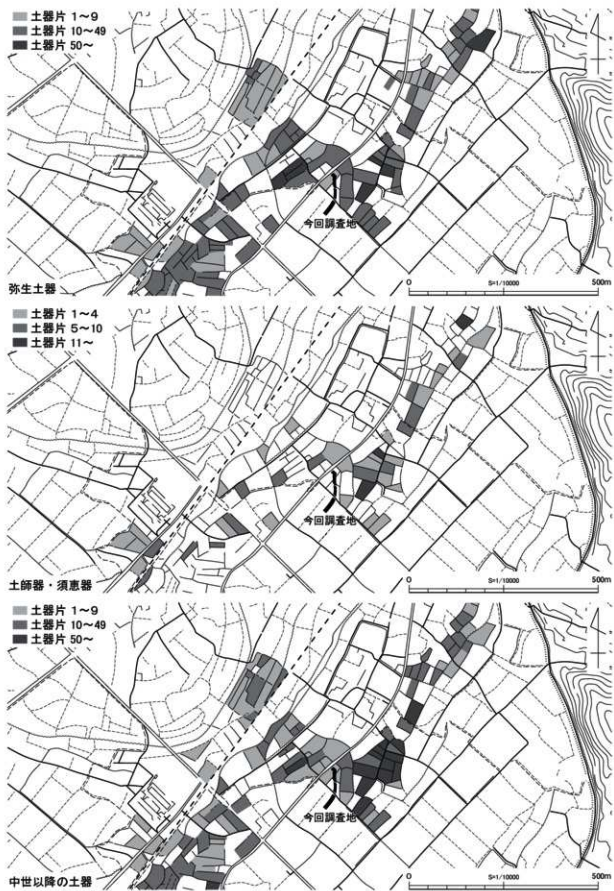


図9 昭和43(1968)年の分布調査成果(石野ほか1968年を一部改変)

2. 既往の調査

a) 遺跡としての認識

美乃利遺跡において本格的な発掘調査が行われるようになったのは、平成2（1990）年度に兵庫県教育委員会によって実施された発掘調査以降のことで、比較的近年のことである。しかし、その存在が認識され始めたのは、昭和43（1968）年頃まで遡ると推測される。

昭和43年、「播磨国道加古川バイパス」工事に伴い、溝之口遺跡（当時の遺跡名称は「東溝遺跡」）の発掘調査が行われた。工事中に偶然発見された遺跡であったことから、その範囲や時代を把握することを目的に、遺跡周辺の広範囲にわたる土地で分布調査が行われた（石野ほか1968）。この分布調査の結果をみると（図9）、現在の溝之口遺跡と美乃利遺跡の遺跡範囲とほぼ重なる広い範囲で、弥生土器や須恵器などが数多く採集されていることがわかる。その当時、溝之口遺跡と美乃利遺跡がそれぞれ別個の遺跡として把握されていたかどうか定かではないが、現在の美乃利遺跡周辺も多くの遺物が採集される場所として認識されていたことはほぼ確実であろう。ちなみに、この分布調査の結果について、今回調査地点の状況を見ると、弥生土器、須恵器、中世以降の土器のいずれもが集中して分布する場所の近隣に位置していることがわかる。

b) 複合遺跡としての認識

平成2年度以降、兵庫県教育委員会や加古川市教育委員会によって美乃利遺跡の発掘調査が継続的に行われており、遺跡の様相が少しずつ明らかになってきた。これまで美乃利遺跡で実施されている大規模な発掘調査の場所は大きく2地点に分かれる（図10）。ここでは便宜的に平成2・3年度及び同9年度に県教委が調査を実施した場所をA地点、平成27年度に市教委が調査を実施した場所をB地点と仮称し、これらの成果をもとに美乃利遺跡の変遷について簡単に整理しておく（表2）。

弥生時代

これまでに確認されている遺構・遺物のなかで時期的に最も遡るのは弥生時代前期の水田跡で、A地点のほぼ全域で検出されている。ただ、これまでのところ当該期の居住域は確認されておらず、また遺物もほとんど出土していない。

居住域が明確になるのは中期前葉頃のこと、A地点の北側を中心に竪穴建物や掘立柱建物、溝、土坑などが検出されている。しかし、検出遺構の多くは土坑であり、建物の数は非常に少ない。その後、若干の空白期を挟んで中期後葉になると、A地点では竪穴建物、掘立柱建物ともに棟数が著しく増加する。また、これらの建物は、A地点の中央やや東側を南北に流れる溝によって大きく2か所に分かれて分布している。

ところが、後期になると建物数は大きく減少する。ただ、B地点では終末期頃の竪穴建物が複数棟検出されており、なかには鍛冶工房の可能性のある大型竪穴建物も確認されていて注目される。

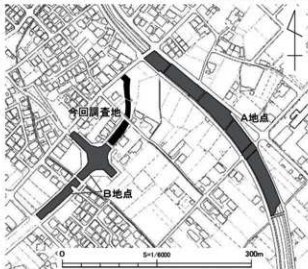


図10 過去の発掘調査地点

表2 美乃利遺跡における各時期の検出遺構一覧

時代	A地点		B地点	
	主な遺構		主な遺構	
弥生時代	前期	水田跡	-	-
	中期前期	竪穴建物（1?）、竪立柱建物（2?）、溝、土坑、ピット、木棺墓	-	-
	中期中期	-	-	-
	中期後葉	竪穴建物（3）、竪立柱建物（4）、溝、土坑	-	-
	後期	竪穴建物（2）、竪立柱建物（1）、溝	-	-
	終末期	-	竪穴建物（3）、溝、土坑	-
古墳時代	前期	-	-	-
	中期	-	-	-
	後期	溝	溝	-
奈良時代	竪立柱建物（4）、溝、土坑、ピット、木棺墓		溝	溝
平安時代	前期	-	溝	-
	中期	竪立柱建物（1）、溝、ピット	-	-
	後期	竪立柱建物（7）、溝、土坑、井戸、木棺墓、水田跡、森跡	溝、土坑、井戸	-
中世			溝	-

古墳時代

古墳時代の遺構・遺物についてはほとんど確認されておらず、A地点、B地点ともに後期と考えられる溝が検出されている程度である。前後の時代と比べると、古墳時代の遺構・遺物は極めて希薄である。

奈良時代

奈良時代になると、A地点において遺構の増加が認められる。なかには、掘立柱建物も検出されているが、検出遺構の大多数は溝であり、掘立柱建物の棟数はそれほど多くない。一方、B地点では溝が検出されているのみである。なお、当該期の注目される遺物として、A地点のほぼ西端で検出された溝から「郡」と墨書された須恵器の杯が出土している。

平安時代

平安時代前期の遺構はほとんど確認されていないが、おもに中期以降の遺構が検出されており、その後、鎌倉時代初頭頃にかけて増加傾向にある。A地点では掘立柱建物のほか、井戸や木棺墓、畠跡などが検出されており、B地点では溝や土坑、井戸が検出されている。

中世以降

鎌倉時代初頭の遺構・遺物のなかには平安時代後期と厳密に区別できないものも存在しているが、A地点では中世後半頃の掘立柱建物、溝や土坑、水田跡などが検出されており、B地点では鎌倉時代の溝が検出されている。このほか、A地点では、近世以降と考えられる溝や土坑、鋤溝などが確認されている。

このように、美乃利遺跡では弥生時代から近世、ひいては現在にいたるまでの遺構・遺物が数多く確認されており、複合遺跡としての様相を呈している。ただ、弥生時代中期後葉や平安時代後期から鎌倉時代初頭には遺構・遺物が多数確認されているのに対して、古墳時代の遺構・遺物はほとんど確認されていないなど、時期によって遺構・遺物の分布に疎密が認められる。

第三章 調査の成果

1. 調査の概要

前述したように、今回の「中津水足線外1線道路改良事業（大野バイパス）」に伴う発掘調査は、令和元（2019）年度と令和3（2021）年度の2か年に分けて実施し、令和元年度については事業予定地の南側を、令和3年度については事業予定地の北側を調査した（図11）。

令和元年度は、事業予定地を北西-南東方向に通る私道を挟んだ旧宅地と畑地において発掘調査を実施した。便宜的に、南側の旧宅地に設定した調査区を調査区1、北側の畑地に設定した調査区を調査区2として調査を行った。調査区1の調査面積は419㎡、調査区2の調査面積は175㎡である。なお、調査にあたっては、排土置き場の問題から、調査区1と調査区2については調査区をそれぞれ2分割し、打って返しによって調査を行った。また、調査期間の終盤に着手した調査区1の南側半分については、排土置き場の関係で、さらに2区画に分割して調査せざるを得なかった。このため、調査区1では、最終的に調査区を5区画に分割して発掘調査を行ったことになる。

令和3年度は、事業予定地北側の造成地において発掘調査を実施した。令和元年度の続きで調査を行った調査区3の調査面積は296㎡である。なお、調査区3の調査にあたっては、令和元年度に調査を実施した調査区2を排土置き場として利用した。

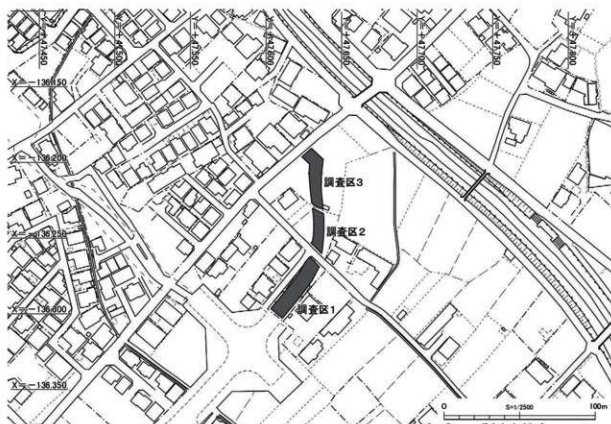


図11 調査区配置図

2. 基本層序

今回調査地における層序は、表土層（第Ⅰ層）、遺物包含層（第Ⅱ層）、基盤層（第Ⅲ層）の大きく3段階の堆積によって成り立っている。ただ、「第Ⅰ章 遺跡の位置と環境／第2節 地理的・歴史的環境」でも述べたとおり、今回調査地は加古川下流域の沖積低地（氾濫原）に位置するとことに加え、現在にいたるまで人々の生活が続いている場所であることから、調査地の土層堆積は複雑な様相を呈していた。以下、調査区ごとに層序を述べていく（図12・13）。

調査区1（図12）

調査前まで宅地として利用されていた土地で、建物解体後の地表面の標高は7.2～7.4 mである。第Ⅰ層は、造成土、旧耕作土、床土から成り（Ⅰ-1～3層）、それぞれ場所によって層厚に若干の相違がみられるものの、第Ⅱ層との境界付近の標高は6.4 m前後とほぼ水平である。第Ⅱ層は、弥生時代から中世にかけての遺物を含む遺物包含層である。調査区1では17層（Ⅱ-1～17層）に細分したが、これらの包含層は基本的に南側から北側に向かって堆積している。なお、包含層からは各時代の遺物が出土しているが、各層との対応関係はほとんど検討できていない。第Ⅲ層は、今回調査において基盤層と判断した土層である。第Ⅲ層上面の標高は調査区の南側で6.3 m前後を測るのに対して、北側で6.2 m前後を測り、全体的に北側に向かってやや傾斜している。また、第Ⅲ層の上面には凹凸が認められ、この凹凸に対応するように一部第Ⅱ層（Ⅱ-14～17層）が堆積している。

調査区1では、Ⅱ-14～17層、Ⅲ-2・3・5層上面を第1面目の遺構面として調査を行ったのち、第Ⅲ層上面の凹地に堆積する第Ⅱ層下面を第2面目の遺構面として調査した。ただ、調査区壁面の土層観察によると、今回調査の第1遺構面より上方に遺構面が存在していることが確実であるが、今回の調査ではこれらの遺構を平面的に明らかにすることができなかった。

調査区2（図13）

調査着手前まで畑地として利用されていた土地で、地表面の標高は6.6～6.8 mである。第Ⅰ層は、耕作土、床土から成り（Ⅰ-1・2層）、第Ⅱ層との境界付近の標高は6.4～6.5 mとほぼ水平である。第Ⅱ層は、弥生時代から中世にかけての遺物を含む遺物包含層で、調査区2では4層（Ⅱ-1～4層）に細分した。第Ⅲ層上面の凹凸に対応するように層厚に若干の相違がみられ、特に調査区の南側では包含層が厚く堆積している。なお、調査区1と同様、各包含層と出土遺物の対応関係はほとんど検討できていない。第Ⅲ層は、基盤層と判断した土層である。前述のように、第Ⅲ層の上面には凹凸が認められるとともに、調査区の北側ではその標高が6.2～6.3 mを測るのに対して、調査区の南側では6.0 mを測り、全体的に南に向かって傾斜している。

調査区2では、Ⅱ-4層、Ⅲ-1層上面を第1面目の遺構面として調査を行ったのち、調査区の南端付近に厚く堆積するⅡ-4層の下面を第2面目の遺構面として調査した。ただ、調査区壁面の土層観察によると、今回調査の第1遺構面より上方に遺構面が存在していることが確実である。しかし、今回の調査ではこれらの遺構を平面的に明らかにすることができなかった。

調査区3（図13）

調査前まで企業の敷地として利用されていた土地で、地表面の標高は7.2～7.4 mである。第Ⅰ層は、造成土、旧耕作土、床土から成り（Ⅰ-1～3層）、全体的に北西に向かって若干傾斜しながら堆積している。第Ⅱ層との境界付近の標高は調査区の南側で6.5 mを測るのに対して、調査区の北西側では6.4 mを測る。第Ⅱ層は、弥生時代から中世にかけての遺物を含む遺物包含層で、調査区3では29層（Ⅱ-1～29層）に細分した。複雑な土層堆積状況を呈しているが、全体的な傾向としては

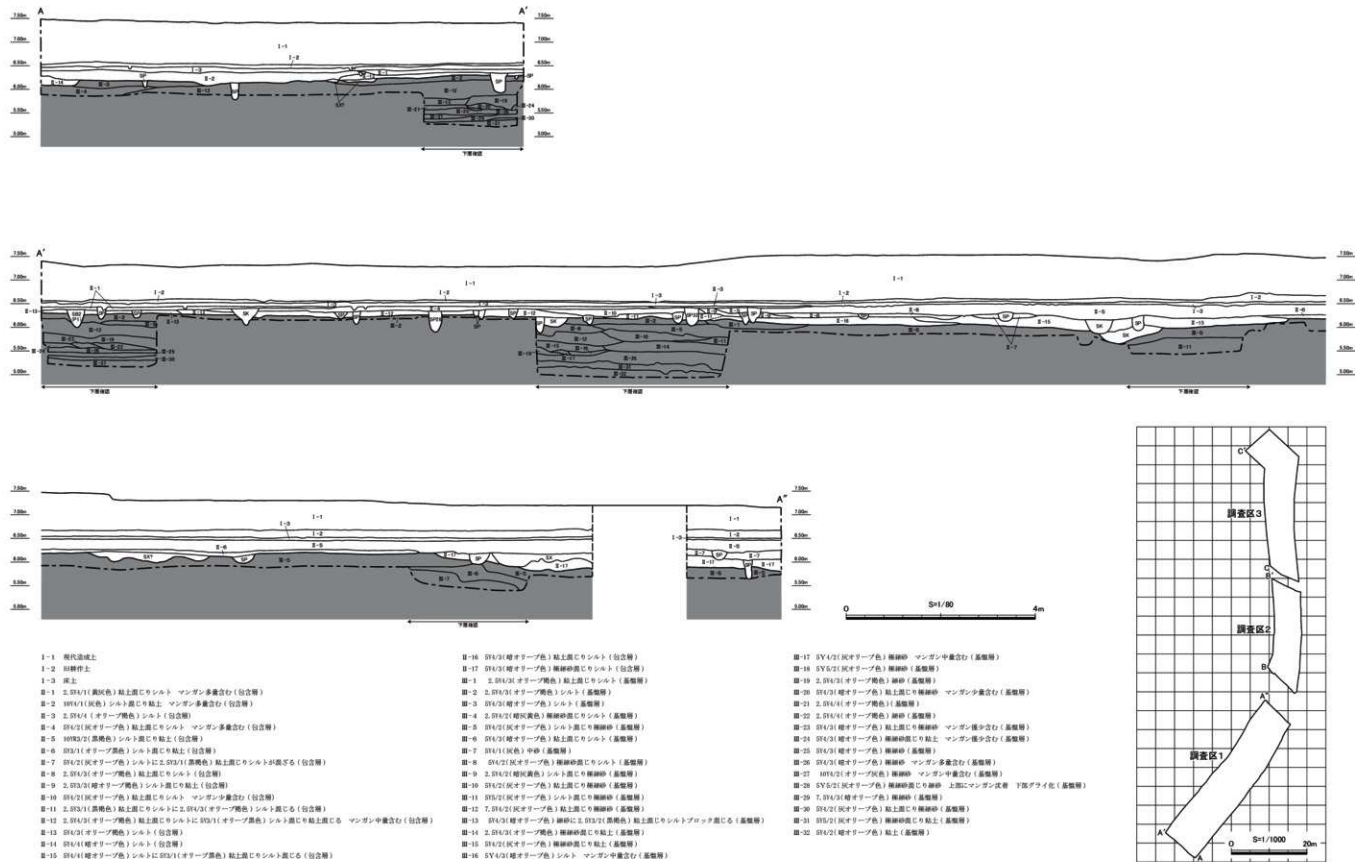


図 12 調査区 1 土層断面図

北西に向かって傾斜しながら堆積している。特に調査区の北西側で厚く堆積する傾向がみられ、調査区の南側では第Ⅲ層との境界付近の標高が6.2～6.3mを測るのに対して、調査区の北西側では5.7～5.8mを測る。第Ⅲ層は基盤層と判断した土層で、全体的に北西に向かって傾斜しており、特に調査区の北西端付近において大きく傾斜する。

調査区3では、ほぼ旧耕作土ないし床土直下のⅡ-2～4・9～11・21層上面を第1面目の遺構面として調査を行ったのち、第Ⅲ層上面を第2面目の遺構面として調査した。ただし、第2面目の遺構面については、第Ⅲ層が調査区の北西側付近で大きく傾斜していることもあり、北西側の一部では第Ⅲ層上面において調査を実施することができていない。

3. 遺構・遺物

調査の結果、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が多数確認された。遺構の種類としては、竪穴建物、掘立柱建物、土坑、ピット、溝状遺構などが検出されているが、その圧倒的多数を占めるのはピットである。遺物は、おもに弥生土器、土師器や須恵器などの土器類とともに、若干の鉄器、石器などが遺物収納コンテナで計48箱分出土した。以下では、比較的良好な遺物を伴っている遺構を中心に、調査区ごとに詳述していく。

a) 調査区1

調査区1(第1遺構面)

検出できた遺構の種類と数量は、掘立柱建物7棟、柵1列、土坑約35基、ピット約474基、溝状遺構2条、性格不明遺構12基である(図14)。ただ、ピットの検出数からすると、今回復元し得た掘立柱建物の棟数はあまりにも少ないため、本来は7棟以上の掘立柱建物が存在していたことは確実に考えられる。

■掘立柱建物

掘立柱建物(SB)1(図15、写真18～20・186)

形態・規模：調査区の南端付近に位置する。大部分が調査区外に及んでおり全容は不明である。そのため、桁行と梁行の方向は判断し難いが、それぞれ1間以上となり、柱間は2.6～2.8mを測る。西辺ないし北辺の柱穴を基準とした建物方位はN-15°-EもしくはN-75°-Wを示す。柱穴の平面形は円形ないし不整形を呈し、長径は0.25～0.43mである。断面形はU字状で、検出面からの深さは0.36～0.40mを測る。P1・P3で柱痕跡が確認されたほか、P1では底部付近に根石とみられる石材が据えられていた。

出土遺物：おもに土師器、須恵器が出土している。1は須恵器の皿の口縁部片である。体部は底部付近から内灣して立ち上がったのち、口縁部付近で僅かに外反する。内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、口縁端部は丸くおさめる。2は須恵器の鉢である。残存状況は良くないが、内外面ともに回転ナデ調整が施されており、体部は平高台の底部から内灣気味に立ち上がる。底部は静止糸切りとみられ、端部には底部切り離しの際の痕跡が確認できる。3は土師器の托の底部である。ほぼ高台部のみが残っているもので、高台は厚みのある台形を呈している。外面には回転ナデ調整が施され、底部は回転糸切りである。

時期：出土遺物から平安時代後期頃と考えられる。

掘立柱建物(SB)2(図16、写真21～23)

形態・規模：調査区の南端付近に位置し、東側にはSB1が存在する。大部分が調査区外に及んで

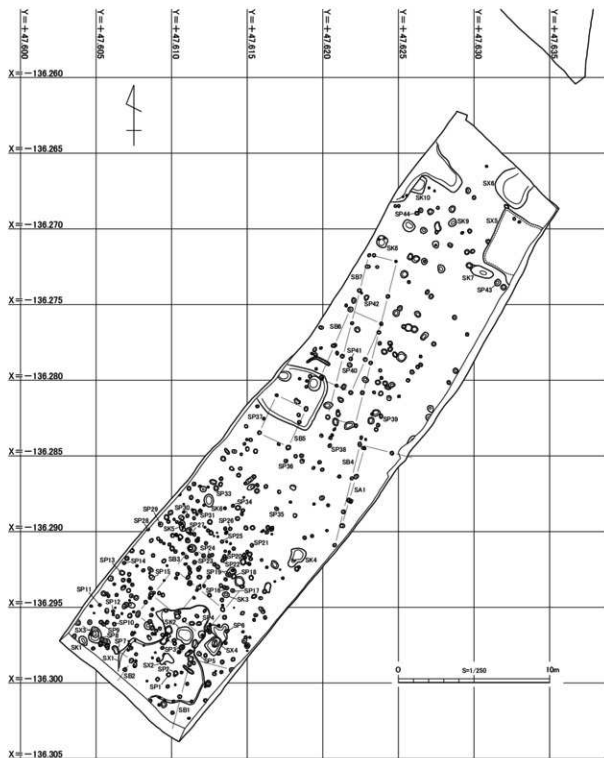


図 14 調査区 1 (第 1 遺構面) 遺構平面図

おり全容は不明である。そのため、桁行と梁行の方向は判断し難いが、桁行または梁行がそれぞれ 2 間以上と 1 間以上になる建物と考えられる。柱間は 2.2 m 前後を測る。柱穴の並びを基準とした建物方位は $N - 55^{\circ} - W$ を示す。柱穴の平面形は楕円形を呈し、長径は 0.32 ~ 0.65 m である。断面形は P1 が U 字状であるほか、P2 では一部 2 段状を呈しており、検出面からの深さは 0.44 m 前後を測る。P3 では柱痕跡が確認された。なお、P2 は SP8 などに切られている。

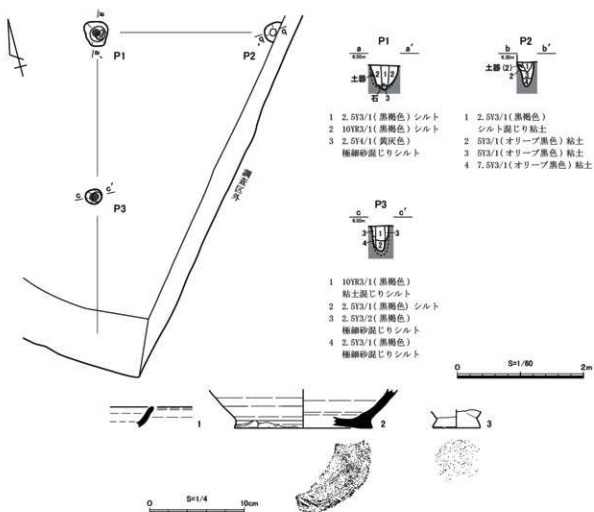


図15 掘立柱建物(SB)1及び出土遺物

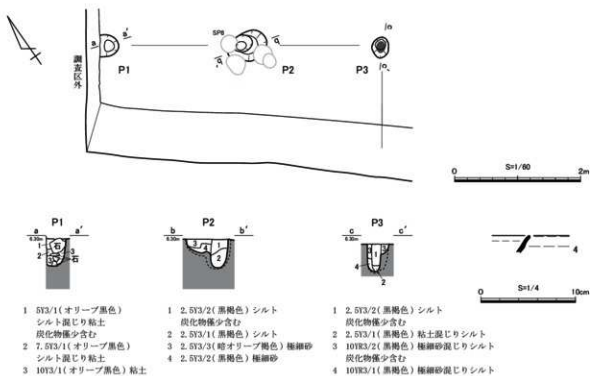


図16 掘立柱建物(SB)2及び出土遺物

出土遺物：おもに土師器、須恵器の小片が出土している。4は須恵器の碗の口縁部片とみられる。残存状況は良くないが、内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。口縁部はやや外反し、端部は丸くおさめる。

時期：出土遺物によって時期を決定することは難しいが、ほかの建物の方位などを参考にする、鎌倉時代頃と推定される。

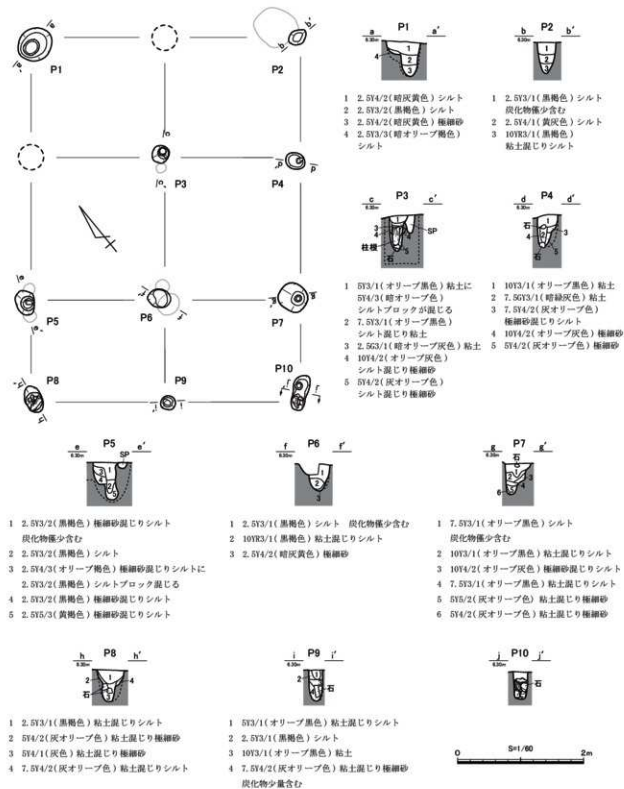


図17 掘立柱建物(SB)3

掘立柱建物 (SB) 3 (図 17・18、写真 24～37・186)

形態・規模：調査区の南側に位置し、南側にはSB1・SB2が存在する。一部の柱穴を検出し得なかったが、桁行3間、梁行2間の総柱建物で、建物面積は約23.9㎡である。柱間にはややばらつきがあり、1.5～2.3mを測る。桁行を基準とした建物方位はN-38°-Eを示す。柱穴の平面形はおもに円形を呈しているが、P10のように楕円形のものも存在し、長径は0.24～0.58mを測る。断面形はU字状を呈するものが多いが、柱の抜き取りが行われているとみられるP1やP5、P7などは若干歪な形状となっている。検出面からの深さは0.43～0.59mを測る。P3では根柱が良好な状態で残存していたほか、P3・P4・P8などでは底部付近に根石とみられる石材が据えられていた。このほか、P5では底部で板状の木材が出土し、P10では掘方の南西側斜面に10～20cmの石材が2～3段積み上げられていた。前者については礎板の可能性や柱の高さを調整するための工夫であった可能性が考えられ、後者は柱を安定させるための工夫であったと推測される。

出土遺物：おもに土師器、須恵器が出土している。5～8は須恵器の杯もしくは碗の口縁部片である。5は内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、体部ないし口縁部は直線的に外反し口縁端部にいたる。6は口縁部がやや肥厚し、その端部は丸くおさめる。内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。7は内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、外反する口縁部は端部に向かって若干肥厚するとともに、その端部は丸くおさめる。8は内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、口縁端部は丸くおさめる。9～13は土師器の皿である。9の体部は底部との境界付近で内灣気味に立ち上がったのち直線的に外反する。全体的に磨滅しているため調整等は不明瞭であるが、外面では粘土接合痕が確認される。10の口縁部はヨコナデによって直線的に短く外反し、底部は内外面ともにナデ調整が施されている。11の体部は内灣気味に立ち上がりそのまま口縁端部にいたる。底部外面にはほとんど調整等が施されておらず、ユビオサエの痕跡が若干残る。12の口縁部はヨコナデによって直線的に外反し、面を有する端部は凹状を成している。13は磨滅のため内外面ともに調整等は不明であるが、口縁部は直線的に短く外反する。14は土師器の羽釜の鏝部片である。口縁部は内傾しながら立ち上がり、内外面ともにヨコナデ調整が施されている。外面には厚みのある鏝をやや外上方に向けて貼り付けている。また、鏝部下面には煤が附着している。

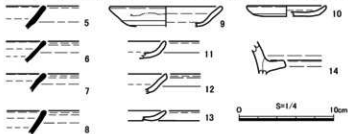


図 18 掘立柱建物 (SB) 3 出土遺物

時期：出土遺物から鎌倉時代頃と考えられる。

掘立柱建物 (SB) 4 (図 19、写真 38～41)

形態・規模：調査区中央の東側に位置する。大部分が調査区外に及んでいるものとみられ、全容は不明である。そのため、桁行と梁行の方向は判断し難いが、桁行または梁行がそれぞれ3間以上と1間以上になる建物と考えられる。柱間は2.2～2.3mを測る。西辺ないし北辺の柱穴を基準とした建物方位はN-14°-EもしくはN-76°-Wを示す。柱穴の平面形はおもに円形を呈しており、長径は0.22～0.30mである。断面形は基本的にU字状で、検出面からの深さは0.06～0.34mを測る。なお、いずれの柱穴においても柱痕跡などは確認されなかった。

出土遺物：おもに土師器、須恵器の小片が出土している。15は須恵器の杯あるいは碗の口縁部片

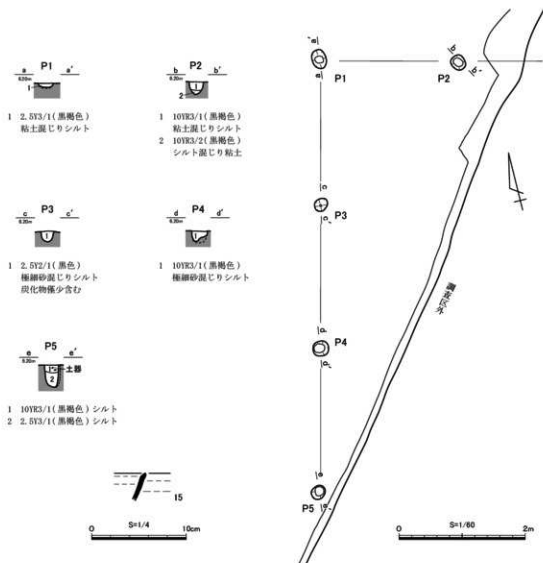


図19 掘立柱建物(SB)4及び出土遺物

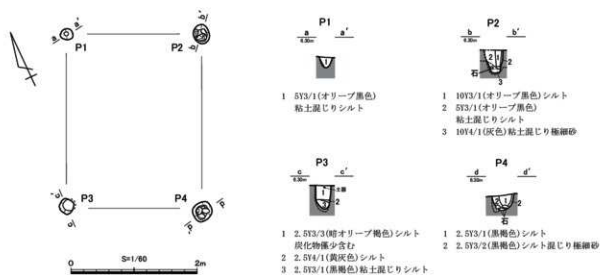


図20 掘立柱建物(SB)5

である。残存状況は良くないが、内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。

時期：出土遺物によって時期を決定することは難しいが、ほかの建物の方位などを参考にとすると、平安時代後期頃と推定される。

掘立柱建物 (SB) 5 (図 20、写真 42 ~ 45)

形態・規模：調査区中央のやや西寄りに位置する。桁行1間、梁行1間の掘立柱建物で、建物面積は約6.2㎡である。柱間は桁行で2.8m前後、梁行で2.2m前後を測り、梁行に比して桁行の間隔が広がっている。桁行を基準とした建物方位はN-24°-Eを示す。柱穴の平面形はおもに円形を呈しており、長径は0.20~0.33mである。断面形はU字状を呈しており、検出面からの深さは0.20~0.33mを測る。P2・P4では柱痕跡が確認されたほか、底部付近に根石が据えられていた。

出土遺物：遺物は出土していない。

時期：時期を決定することは困難であるが、ほかの建物の方位などを参考にとすると、平安時代後期頃と推定される。

掘立柱建物 (SB) 6 (図 21・22、写真 46 ~ 50・186)

形態・規模：調査区中央のやや北寄りに位置し、南側にはSB4・SB5が存在する。桁行2間、梁行1間の掘立柱建物で、建物面積は約10.8㎡である。柱間は梁行に比して桁行の間隔が若干広く、桁行で2.4~2.6m、梁行で2.2m前後を測る。桁行を基準とした建物方位はN-22°-Eを示す。

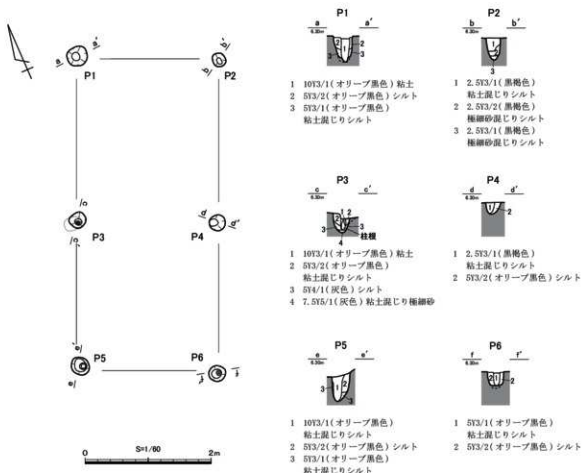


図 21 掘立柱建物 (SB) 6

柱穴の平面形はおもに円形を呈しており、長径は0.22～0.34 mを測る。断面形はU字状を呈するものが大部分を占めるが、P6のように方形のものも存在する。検出面からの深さは0.19～0.46 mを測る。P1やP5、P6などでは柱痕跡が確認されたほか、P3では柱根が残存していた。P3は、実際には第2遺構面で検出されたものであるが、柱穴の形態や規模、土質などからSB6を構成する柱穴のひとつと判断した。

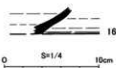


図22 掘立柱建物(SB)6出土遺物

なお、各柱穴の並びなどを参考にすると、当該建物は、建物南側に位置するSB5とともに同一建物を構成する可能性もある。その場合、SB6とSB5を併せた建物の形態・規模は、桁行4間、梁行2間以上の総柱建物になる。

出土遺物：おもに土師器、須恵器が出土している。16は須恵器の椀の底部片である。体部は内灣気味に立ち上がり、内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。底部は回転糸切りである。

時期：出土遺物によって時期を決定することは難しいが、ほかの建物の方位などを参考にすると、平安時代後期頃と推定される。

掘立柱建物(SB)7(図23・24、写真46・51～64・186)

形態・規模：調査区中央のやや北寄りに位置し、位置的にはSB6と重複する。桁行5間、梁行1間の掘立柱建物で、建物面積は約20.2㎡である。柱間は梁行に比して桁行の間隔が若干広く、桁行で2.0～2.5 m、梁行で1.8～1.9 mを測る。桁行を基準とした建物方位はN-14°-Eを示す。柱穴の平面形はいずれも円形を呈しており、長径は0.17～0.28 mを測る。断面形は基本的にU字状で、検出面からの深さは0.13～0.40 mを測り、P4・P6などでは柱痕跡が確認されている。また、P11・P12では底部付近から平瓦片が重なるように出土しており、それぞれ根石の替わりとして瓦片が用いられ、その役割を果たしていたものと考えられる。なお、P11・P12から出土した平瓦片は互いに接合し、P10から出土した小片もこの平瓦片と同一個体であった。

出土遺物：おもに土師器、須恵器、瓦が出土しているほか、鍛冶滓とみられる小片が1点出土している。17は土師器の杯もしくは椀の口縁部片である。内外面ともにナデ調整ののち口縁部付近はヨコナデによって仕上げられているものとみられ、直線的に外反する体部は口縁部においてやや内側に立ち上がる。18は土師器の杯の底部である。全体的に磨滅しているため調整等是不明瞭であるが、底部は回転糸切りで、底部付近の一部には強いナデの痕跡が残る。体部は、やや器壁に厚みのある底部から比較的きつく立ち上がる。19は須恵器の椀である。体部は口縁部に向かって緩やかに立ち上がり、口縁端部において僅かに外反する形状を呈する。内外面ともに回転ナデによって仕上げられているものの、全体的に器壁が若干厚いつくりをしている。20は須恵器の椀の底部である。内面では底部から体部に立ち上がるころに若干の段を有し、内灣気味に立ち上がる。内外面ともに回転ナデによって仕上げられ、底部は回転糸切りである。21は須恵器の鉢である。体部は厚みのある平高台の底部から緩やかに立ち上がる。外面の大部分では回転板ナデとみられる調整が施されており、高台付近には連続的なユビオサエの痕跡が残る。内面では底部付近に不定方向のナデ調整を施すほかは回転ナデによって仕上げられている。底部はへら切りとみられ、一部で底部切り離しの際の痕跡が確認できる。22は平瓦である。凹面、凸面ともにナデ調整が施されているものの、凹面の一部には布目圧痕が残る。側面と端面もナデ調整であるが、面を有する下端部のほぼ中央には沈線状の凹みが瓦の彎曲に沿って残る。瓦製作に伴う何らかの痕跡とみられる。一方、上部端は丸くおさめる。

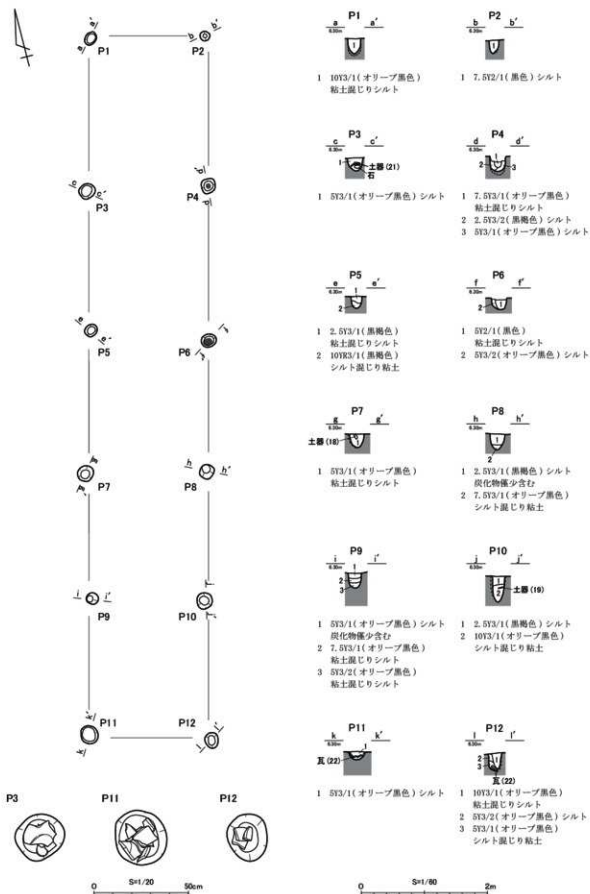


図23 掘立柱建物(SB)7

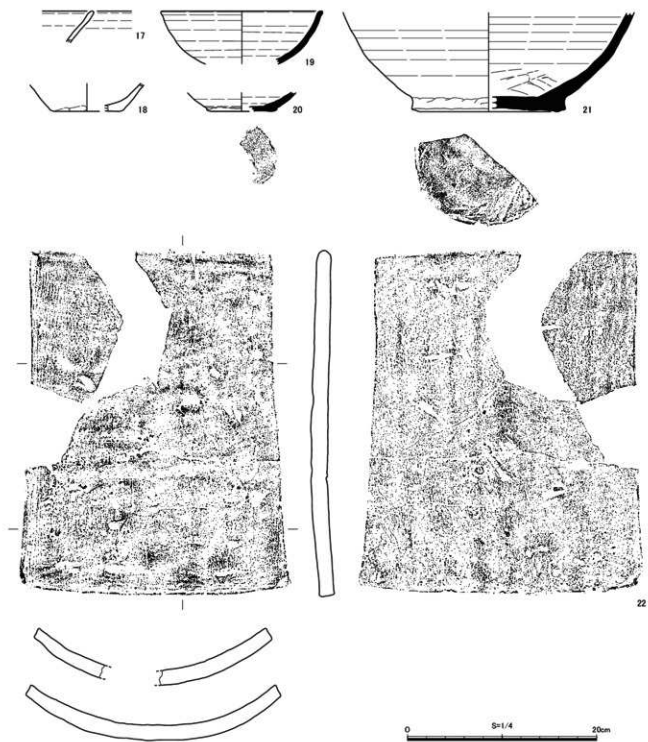


图24 掘立柱建物(SB)7出土遺物

時期：出土遺物から平安時代後期頃と考えられる。

■ 櫓

櫓 (SA) 1 (図25、写真65・66)

形態・規模：調査区中央の東側に位置し、SB4に隣接する位置で検出された柱穴列である。主軸方位はN-16°-Eで、現状では4基の柱穴が1.6～1.9m間隔で並んでいるものの、南側の調査区外へ及んでいる可能性もある。P1の検出面の高さがほかの柱穴に比べて低くなってしまったが、柱穴の平面形はおもに円形を呈しており、長径は0.19～0.33mである。断面形は基本的にU字状を呈しているものの、P3では一部2段状を呈している。検出面からの深さは0.26～0.41mを測る。P4では柱痕跡が確認された。

出土遺物：土器片が僅かに出土しているのみである。

時期：出土遺物によって時期を決定することは難しいが、ほかの建物の方位などを参考にすると、平安時代後期頃と推定される。

■ 土坑

土坑 (SK) 1 (図26、写真67・187)

形態・規模：調査区の南西端部に位置する。平面形は不整形楕円形で、長径0.68m、短径0.50mを測る。断面形はやや歪な皿状を呈しており、検出面からの深さは0.19mを測る。

出土遺物：おもに土師器、須恵器の小片が出土している。23は土師器の甕の口縁部片とみられる。胴部から緩やかに外反し、口縁部は上方へ突出させている。全体的に磨滅しているものの、ヨコナデ調整が施されている。24は須恵器の椀である。体部は内灣気味に立ち上がったのち、口縁部で緩やかに外反する。内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、口縁部は丸くおさめる。

時期：出土遺物から平安時代後期頃と考えられる。

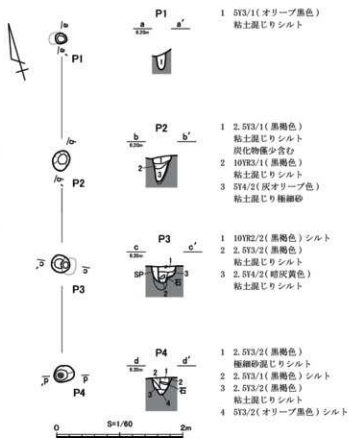


図25 櫓 (SA) 1

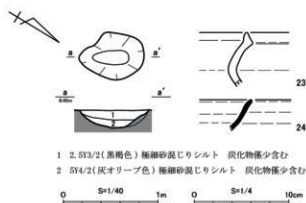


図26 土坑 (SK) 1 及び出土遺物

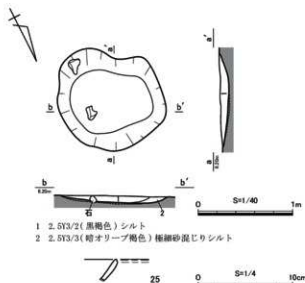


図27 土坑(SK)2及び出土遺物

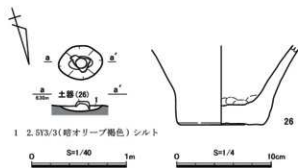


図28 土坑(SK)3及び出土遺物

施されている。胎土の特徴として、1～5mmの砂礫を多く含んでいる。

時期：出土遺物から弥生時代中期前半頃と考えられる。

土坑 (SK) 4 (図29、写真69・70・187)

形態・規模：調査区中央の南寄りに位置する。平面形は不整形で、長軸1.42m、短軸1.02mを測る。断面形は皿状を呈しており、検出面からの深さは0.25mを測る。土坑内からは破片となった状態の弥生土器が多く出土した。

出土遺物：おもに弥生土器が出土している。27～29は高杯である。27は高杯の杯部である。磨滅のため内外面ともに調整等は不明瞭であるが、杯部は深い椀状に成形されており、口縁部外面には1条の凹線文がめぐらされている。28は高杯の杯部である。内灣気味に立ち上がったのち緩く屈曲し、ほぼ真上に立ち上がる。面を有する口縁端部はやや凹状を成している。全体的に磨滅しているため調整等は不明瞭であるが、口縁部外面には2条の凹線文がめぐらされている。29は高杯の脚部片である。磨滅のため内外面ともに調整等は不明瞭であるが、外面には条数3条前後の櫛描直線文がやや間隔をあけて複数めぐらされている。内面上部にはしぼり痕が残る。なお、杯部と脚部の成形にあたっては円盤充填法を用いているものとみられる。30は高杯などの脚部片とみられる。磨滅のため内外面ともに調整等は不明であるが、直線的に立ち上がる脚部には円形の透孔が焼成前に穿孔されている。

土坑 (SK) 2 (図27)

形態・規模：調査区の南側に位置する。平面形は不整形で、長径1.22m前後、短径0.96m前後を測る。断面形は浅い皿状を呈しており、検出面からの深さは0.10mを測る。なお、土坑内の東寄りでは15cm前後の礫が2個出土した。

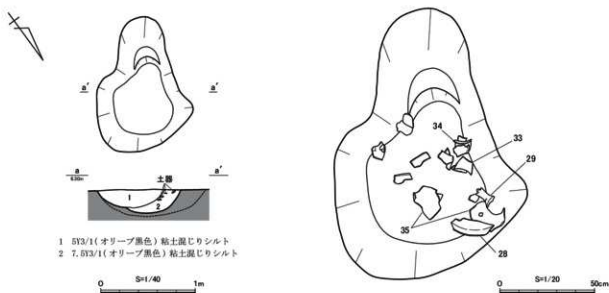
出土遺物：おもに土師器の小片が出土している。25は土師器の杯の口縁部片とみられる。口縁部はヨコナデによって直線的に外反し、その端部は凹状を成している。

時期：出土遺物によって時期を絞り込むことは難しいが、中世と考えられる。

土坑 (SK) 3 (図28、写真68・187)

形態・規模：調査区の南側に位置する。平面形は楕円形で、長径0.46m、短径0.36mを測る。断面形は皿状を呈しており、検出面からの深さは0.06mを測る。土坑のほぼ中央から弥生土器が逆さまの状態出土した。

出土遺物：おもに弥生土器が出土している。26は甕もしくは壺の底部である。全体的に磨滅しているため調整等は不明瞭であるが、底部内面にはユビオサエの痕跡が残り、ナデ調整が



1 5Y3/1(オリーブ黒色)粘土混じりシルト
2 7.5Y3/1(オリーブ黒色)粘土混じりシルト

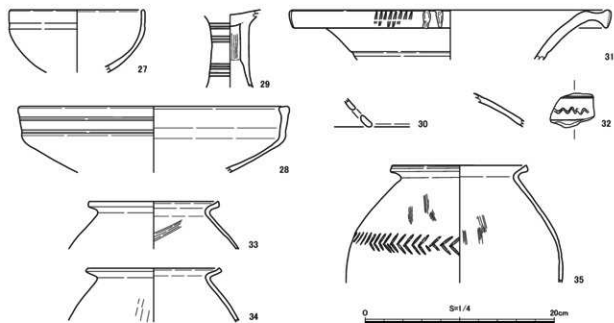


図29 土坑(SK)4及び出土遺物

31は広口壺の頸部から口縁部にかけての破片である。緩やかに外反する頸部は口縁部付近で外側へ屈曲し、口縁端部にいたる。上下に拡張させた口縁端部には刺突列点文を施し、2個一組の棒状浮文を貼り付ける。なお、頸部の残存部分において1条の凹線文が確認される。32は壺の胴部片である。磨滅のため内外面ともに調整等は不明であるが、外面には条数2条の櫛描直線文に挟まれた区間に条数2条の櫛描波状文がめぐらされている。33～35は甕である。33は口縁部で、ヨコナデによって「く」の字状に屈曲する。全体的に磨滅しており調整等は不明瞭であるが、胴部内面にはハケメ調整が施されている。34も口縁部で、ヨコナデによって「く」の字状に屈曲する。全体的に磨滅しているため調整等は不明瞭であるが、胴部外面にはハケメ調整が施されている。35はヨコナデによって「く」の字状に短く外反する口縁部をもつ。内外面ともにタテ方向のハケメ調整が施されており、肩部外面には刺突による綾杉文がめぐらされている。

時期：出土遺物から弥生時代中期後葉頃と考えられる。

土坑 (SK) 5 (図30、写真187)

形態・規模：調査区中央の南寄りに位置する。平面形は歪な楕円形で、長径0.66 m、短径0.38 mを測る。断面形は一部2段状を呈しており、検出面からの深さは0.27 mを測る。埋土には10～30cmの礫が含まれていた。ただ、断面的に確認することはできなかったが、底部の一部には柱の当たりの可能性がある凹みが見られることから、本来はピットに分類すべきものかもしれない。

出土遺物：土師器、須恵器が出土している。

36は土師器皿の小片である。口縁部はヨコナデによって成形され、やや内灣しながら口縁端部にいたる。底部外面はほとんど調整等が施されていない。**37**は須恵器の柄の口縁部片である。内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。**38**は須恵器の脚部片とみられるが、器種は不明である。やや内傾しながら立ち上がったのち、緩やかに外反する。外面は基本的にヨコナデによって仕上げられているのに対して、内面は上部にのみヨコナデが認められ、下部はヘラケズリが施されている。焼成不良のため全体的に浅黄褐色を呈する。

時期：出土遺物によって時期を決定することは難しいが、中世と考えられる。

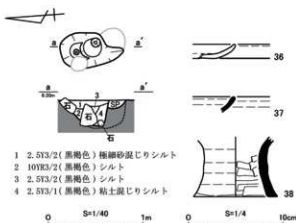


図30 土坑(SK)5及び出土遺物

土坑 (SK) 6 (図31)

形態・規模：調査区中央の南寄りに位置する。平面形は楕円形で、長径0.83 m、短径0.61 mを測る。断面形は皿状を呈しており、検出面からの深さは0.16 mを測る。

出土遺物：土師器、須恵器が出土している。**39**は土師器の皿である。口縁部はヨコナデによって直線的に成形されている。底部内面はナデ調整が施されているのに対して、底部外面にはユビオサエの痕跡が明瞭に残る。

時期：出土遺物から平安時代後期から鎌倉時代と考えられる。

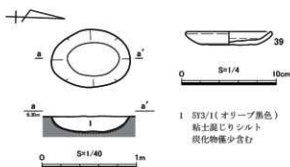


図31 土坑(SK)6及び出土遺物

土坑 (SK) 7 (図32、写真187)

形態・規模：調査区北側の東寄りに位置する。平面形は歪な楕円形で、残存長径1.55 m、短径0.66 mを測る。断面形は緩やかなU字状を呈しており、検出面からの深さは0.35 mを測る。

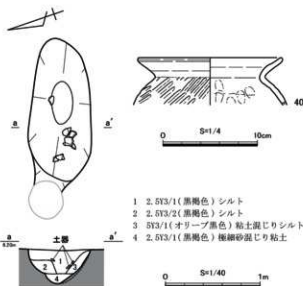


図32 土坑(SK)7及び出土遺物

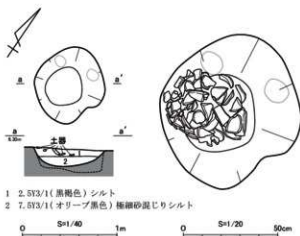
出土遺物：弥生土器が出土している。**40**は弥生土器の甕の口縁部である。胴部は右上がりのタタキによって成形されている。胴部内面にはナデ調整が施されているものの、ユビオサエの痕跡や粘土接合痕が残る。口縁部はヨコナデによって「く」の字状に外反しているが、口縁端部付近で強いヨコナデ調整が施されており、内面に僅かな段が生じている。

時期：出土遺物から弥生時代後期から終末期頃と考えられる。

土坑 (SK) 8 (図 33・34、写真 71・72・187・188)

形態・規模：調査区北側の西寄りに位置する。平面形は歪な円形で、径 0.75～0.82 m を測る。断面形は皿状を呈しており、検出面からの深さは 0.20 m を測る。2層の堆積から成る埋土のうち、おもに第1層から弥生土器が多量に出土した。出土状況からこれらの土器は一括して廃棄されたものと推測される。

出土遺物：弥生土器が出土している。**41**～**43**は甕である。**41**の胴部は、中位やや上方に最大径をもち、器壁の厚い底部からなだらかに立ち上がる。口縁部は如意状に外反し、その端部は丸くおさめる。磨滅のため調整等はほとんど不明であるが、底部内面にはユビオサエの痕跡が残り、外面の一部ではタテ方向のハケメが僅かに確認される。また、底部外面では、端部のやや内側においてユビオサエが円環状に施されている。胎土の特徴として、1～6mmの砂礫を多く含む。**42**は胴部から口縁部にかけての破片である。胴部は中位やや上方に最大径をもち、そこからやや内上方へ立ち上がったのち、如意状に外反して口縁端部にいたる。端部は丸くおさめる。磨滅のため調整等は不明瞭であるが、胴部外面にはタテ方向のハケメ調整が施されている。胎土の特徴として、1～6mmの砂礫を多く含む。**43**は底部から胴部にかけての破片である。胴部は中央の器壁が薄い底部からなだらかに立ち上がる。磨滅のため調整等はほぼ不明であるが、底部内面にはユビオサエの痕跡が残る。胎土の特徴として、1～6mmの砂礫を多く含んでいる。なお、接合箇所はないものの、形態、胎土や焼成の類似から**42**と同一個体とみられる。**44**は壺で、全体的に器壁が厚いつくりをしている。底部を欠くものの、胴部は器高の中程よりやや上部に最大径をもち、底部及び口縁部に比して著しく膨らむ形状を呈する。口縁部はやや内側に彎曲する頸部から緩やかに外反し、口縁端部は丸くおさめる。内面には全面的にナデ調整が施されているが、ユビオサエの痕跡が明瞭に残り、外面にはタテないしナメ方向のハケメ調整が施されている。また、胎土の特徴として、1～5mmの砂礫を多く含んでいる。**45**は壺の頸部から口縁部にかけての破片である。全体的に器壁が厚いつくりのもので、頸部は胴部からほぼ直上に立ち上がったのち、緩やかに外反しながら口縁端部にいたる。磨滅のため一部調整等が不明瞭なところもあるが、胴部内面はナデ調整、頸部ないし口縁部外面はタテ方向のハケメ調整が施されている。また、口縁端部にはヨコナデ調整が施されるとともに、端面下端に刻目をめぐらす。胎土の特徴として、1～4mmの砂礫を多く含んでいる。**46**は壺の底部とみられる。底部の器壁が著しく厚いもので、胴部はそこから大きく開きながら立ち上がる。磨滅のため内面の調整等は不明であるものの、胴部外面ではタテ方向のハケメ調整のちミガキ調整が施されて



- 1 2.5/3/1 (黒褐色) シルト
- 2 7.5/3/1 (オリーブ黒色) 極細砂礫じりシルト

図 33 土坑 (SK) 8

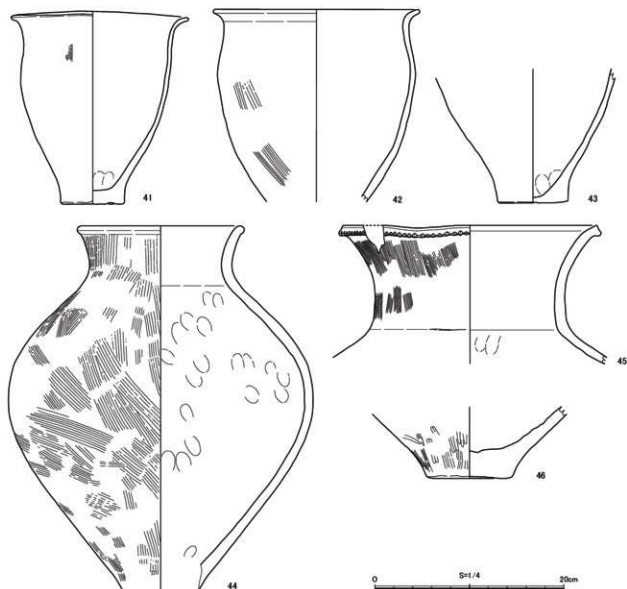


図34 土坑(SK)8 出土遺物

いる。胎土の特徴として、1～4mmの砂礫を多く含んでいる。

時期：出土遺物から弥生時代前期末から中期前葉頃と考えられる。

土坑(SK)9(図35、写真73・74・188)

形態・規模：調査区北側に位置する。平面形は楕円形ないし隅丸長方形で、長径0.54m、短径0.43mを測る。断面形は歪な方形を呈しており、検出面からの深さは0.24mを測る。3層から成る埋土のうち、第1層から製塩土器が出土した。

出土遺物：おもに製塩土器が出土している。47は砲弾形を呈する製塩土器で、体部は尖底部から外上方に直線的に立ち上がる。磨滅のため調整等是不明瞭であるが、内外面ともにユビオサエの痕跡が明瞭に残る。胎土の特徴として、1～3mmの砂礫を多く含み、白色のものが目立つ。

時期：出土遺物から奈良時代と考えられる。

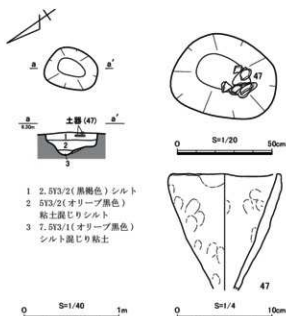


図35 土坑 (SK) 9 及び出土遺物

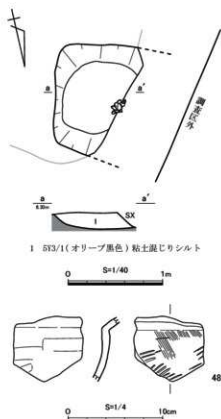


図36 土坑 (SK) 10 及び出土遺物

土坑 (SK) 10 (図36)

形態・規模：調査区北端付近の西寄りに位置する。大部分が別遺構に切られているため全容は不明であるが、残存部における平面形は隅丸方形で、残存長は約0.80 mである。断面形は皿状を呈しており、検出面からの深さは0.17 mを測る。底部の一部において弥生土器片がややまとまって出土しているが、概して残存状況は良くない。

出土遺物：弥生土器が出土している。48は弥生土器の鉢の頸部片で、器壁が均一的なつくりのものである。口縁部は、内溝しながら立ち上がる胴部から鈍角に屈曲する。胴部外面は右上がりのタタキ調整ののちタテ方向のハケメ調整が施されている。一方の内面では板ナデ調整が施されている。

時期：出土遺物から弥生時代後期から終末期頃と考えられる。

■ピット

ピット (SP) 1 (図37、写真75・188)

形態・規模：調査区の南端付近に位置する。平面形は円形で、最大径は0.28 mである。断面形はU字状を呈し、検出面からの深さは0.42 mを測る。柱痕跡が確認されるほか、底部付近から平瓦片が出土した。根石の替わりに瓦片を用いたものとみられる。

出土遺物：瓦のほか、土師器、須恵器の小片が出土している。49は平瓦片である。凹面には布目圧痕が残る。凸面は斜格子文タタキののち一部ナデ調整が施されている。側面はケズリののちナデ調整が施されているものとみられる。

時期：出土遺物から平安時代後期から鎌倉時代前半頃と考えられる。

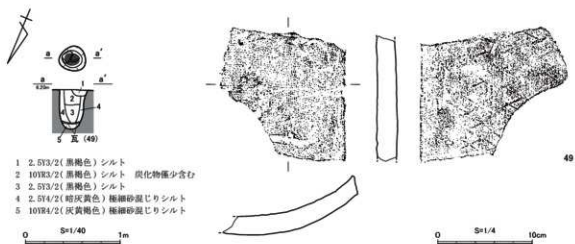


図37 ビット(SP)1及び出土遺物

ビット(SP) 2 (図38)

形態・規模：調査区の南端付近に位置し、SP1に隣接する。平面形は円形で、最大径は0.31 mである。断面形はU字状を呈し、検出面からの深さは0.42 mを測る。

出土遺物：土師器、須恵器が出土している。50・51は須恵器の碗の口縁部片である。50は残存状況は良くないが、体部は内溝気味に立ち上がり、口縁部においてやや外反する。内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。焼成不良のため全体的に淡橙色を呈する。51の口縁部は直線的に外反し、その端部は丸くおさめる。内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。

時期：出土遺物から平安時代後期から鎌倉時代前半頃と考えられる。

ビット(SP) 3 (図39)

形態・規模：調査区の南側に位置し、SB3に隣接する。平面形は円形で、最大径は0.38 mである。断面形は2段状を呈し、検出面からの深さは0.34 mを測る。

出土遺物：おもに土師器が出土している。52は土師器の皿である。底部から口縁部にかけてやや内溝しつつつながりに立ち上がる。口縁部がヨコナデ調整であるほかはナデ調整が施されているものとみられる。

時期：出土遺物から平安時代後期から鎌倉時代前半頃と考えられる。

ビット(SP) 4 (図40)

形態・規模：調査区の南側に位置し、SB3に隣接する。平面形は楕円形で、長径0.31 m、短径

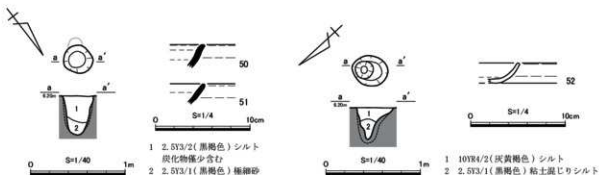


図38 ビット(SP)2及び出土遺物

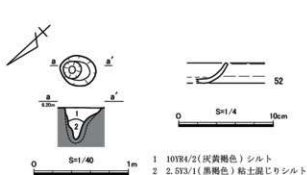


図39 ビット(SP)3及び出土遺物

0.25 mである。断面形は緩やかなU字状を呈し、検出面からの深さは0.18 mを測る。

出土遺物:おもに須恵器が出土している。53は須恵器の鉢である。体部は底部からなだらかに立ち上がったのち直線的に外反する。内面は器表面が荒れているため調整等は不明瞭であるが、内外面ともに回転ナデによって仕上げられているものとみられる。また、底部は回転糸切りとみられる。

時期:出土遺物から平安時代後期から鎌倉時代前半頃と考えられる。

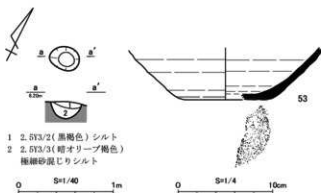


図40 ピット(SP)4及び出土遺物

ピット (SP) 5 (図41)

形態・規模:調査区の南側に位置し、SB1・SB3に隣接する。平面形は円形で、最大径は0.30 mである。断面形はU字状を呈し、検出面からの深さは0.40 mを測る。

出土遺物:土師器、須恵器が出土している。54は須恵器の碗の底部である。残存状況は良くないが、底部は回転糸切りで、内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。

時期:出土遺物から平安時代後期頃と考えられる。

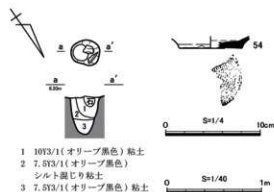


図41 ピット(SP)5及び出土遺物

ピット (SP) 6 (図42、写真188)

形態・規模:調査区の南側、SB3の東側に位置し、SX4を切る。平面形は楕円形で、長径0.31 m、短径0.18 mである。断面形は緩やかなU字状を呈し、検出面からの深さは0.20 mを測る。

出土遺物:おもに須恵器が出土している。55は須恵器の碗である。均整がとれていないが、底部から比較的なだらかに立ち上がる体部は直線的に外反し口縁端部にいたる。内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、端部は丸くおさめる。底部は回転糸切りである。

時期:出土遺物から鎌倉時代前半頃と考えられる。

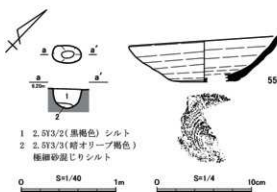


図42 ピット(SP)6及び出土遺物

ピット (SP) 7 (図43、写真76・188)

形態・規模:調査区の南西端付近に位置し、SB2に隣接する。平面形はやや歪な楕円形で、長径0.56 m、短径0.36 mである。断面形は歪な形状をしており、検出面からの深さは0.57 mを測る。底部付近には根石とみられる石材が据えられていた。

出土遺物: おもに土師器が出土している。**56**は土師器の皿である。全体的に器壁が薄いつくりで、底部から口縁部にかけて緩やかに内灣しながら立ち上がる。口縁部がヨコナデによって仕上げられているほかはナデ調整が施されている。

時期: 出土遺物から鎌倉時代頃と考えられる。

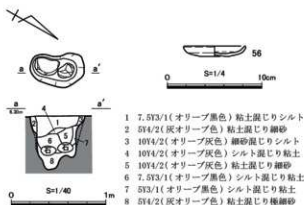


図43 ビット (SP) 7 及び出土遺物

ビット (SP) 8 (図 44)

形態・規模: 調査区の南西端付近に位置し、SB2P2、SX3 を切っている。平面形は円形で、最大径は 0.27 m である。断面形はU段状を呈し、検出面からの深さは 0.36 m を測る。

出土遺物: 土師器と須恵器の小片が出土している。**57**は土師器の皿である。底部と体部の境界付近で内灣しながら立ち上がったのち、直線的に外反し口縁端部にいたる。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整が施されており、その端部はややシャープに仕上げられている。

時期: 出土遺物から鎌倉時代後半頃と考えられる。

ビット (SP) 9 (図 45、写真 188)

形態・規模: 調査区の南西端付近に位置し、SB2 に隣接する。平面形は円形で、最大径は 0.28 m 前後である。断面形はU字状を呈し、検出面からの深さは 0.39 m を測る。

出土遺物: 土師器、須恵器が出土している。**58**～**60**は土師器の皿である。**58**の口縁部は回転ナデによって成形されており、やや厚めの底部から直線的に短く外反する。口縁端部は丸くおさめる。底部は回転系切りである。**59**の口縁部はヨコナデによって成形されており、底部から直線的に外反する。底部内面はナデ調整が施されているのに対して、外面にはほとんど調整等が施されておらず、ユビオサエの痕跡が残る。なお、精良な胎土によって製作されている。**60**の口縁部はヨコナデによって成形されており、口縁端部に向かって内灣しながら立ち上がるとともに器壁が肥厚する。端部は外上方へ若干つまみ上げられている。底部は内外面ともにナデ調整が施されている。

時期: 出土遺物から鎌倉時代頃と考えられる。

ビット (SP) 10 (図 46、写真 188)

形態・規模: 調査区の南西端付近、SB2 と SB3 の間に位置する。平面形は円形で、最大径は 0.25 m である。断面形はU字状を呈し、検出面からの深さは 0.15 m を測る。なお、断面では柱痕跡とみられる土層が確認された。

出土遺物: 土師器と須恵器のほか、青磁片が出土している。**61**は土師器の皿である。底部から口縁部にむかって肥厚しながら僅かに立ち上がり、端部を外上方へ若干つまみ上げることで口縁端部としている。口縁部付近がヨコナデによって仕上げられているほかはナデ調整が施されており、底部外面にはユビオサエの痕跡が若干残る。**62**は青磁の碗である。残存状況は良くないが、体部外面には蓮弁文が浮き彫りされており、軸には貫入が入る。龍泉窯系青磁とみられる。

時期: 出土遺物から鎌倉時代後半頃と考えられる。

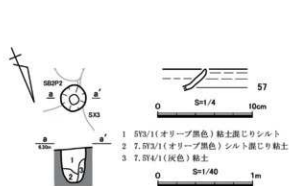


図44 ピット(SP)8及び出土遺物

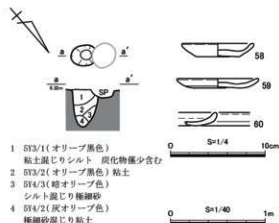


図45 ピット(SP)9及び出土遺物

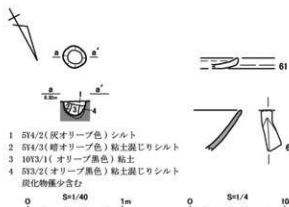


図46 ピット(SP)10及び出土遺物

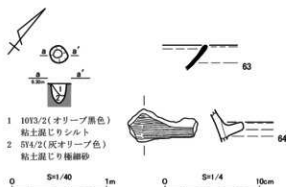


図47 ピット(SP)11及び出土遺物

ピット (SP) 11 (図47)

形態・規模：調査区の南西端付近に位置する。平面形は円形で、最大径は0.19 mである。断面形はU字状を呈し、検出面からの深さは0.20 mを測る。

出土遺物：土師器、須恵器が出土している。**63**は須恵器の碗の口縁部片である。体部はやや内湾しながら外反し口縁端部にいたる。口縁端部はやや肥厚するとともに端部を丸くおさめる。内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。**64**は土師器の羽釜の鏝部片である。残存状況は良くないが、内傾する胴部ないし口縁部の外面にやや厚みのある鏝を外上方に向けて貼り付けている。内面にはヨコ方向のハケメ調整が施されている。

時期：出土遺物から鎌倉時代頃と考えられる。

ピット (SP) 12 (図48、写真188)

形態・規模：調査区の南西端付近に位置する。平面形は円形で、最大径は0.19 mである。断面形はU字状を呈し、検出面からの深さは0.36 mを測る。断面では柱痕跡が認められる。

出土遺物：土師器、須恵器が出土している。**65・66**ともに須恵器の碗の底部である。**65**の体部は内湾気味に立ち上がり、内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。底部の大部分を欠損しているため、その調整等は不明である。**66**は底部から体部に立ち上がる場所に若干の段を有し、内湾しながら立ち上がる。内外面ともに回転ナデによって仕上げられ、底部は回転糸切りである。

時期：出土遺物から平安時代後期から鎌倉時代前半頃と考えられる。

ピット (SP) 13 (図 49、写真 77・188)

形態・規模：調査区の南側、SB3 の西側に位置する。平面形は円形で、最大径は 0.34 m である。断面形はやや歪んだ U 字状を呈し、検出面からの深さは 0.50 m を測る。柱根が良好な状態で残存していた。

出土遺物：弥生土器が出土している。67 は弥生土器の大口壺の頸部から口縁部にかけての破片である。頸部は緩やかに外反したのち、口縁部付近で外側へ屈曲し口縁端部にいたる。上下に拡張させた端部には綾杉文をめぐらし、円形浮文を貼り付ける。現状では 1 個の円形浮文が確認されるのみであるが、その隣接箇所にも剥離痕が認められるため本来は 2 個一組であったとみられる。頸部外面にはタテ方向のハケメ調整が施されたのち、4 条の凹線文がめぐらされている。

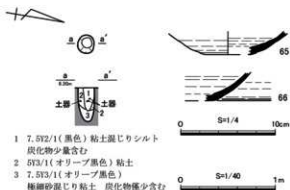


図 48 ピット (SP) 12 及び出土遺物

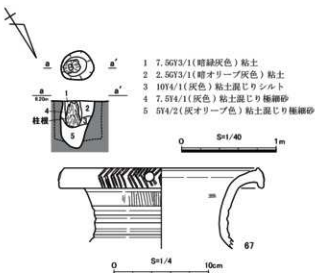


図 49 ピット (SP) 13 及び出土遺物

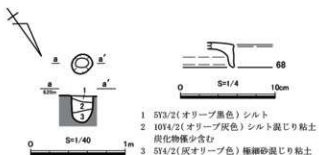


図 50 ピット (SP) 14 及び出土遺物

時期：出土遺物から弥生時代中期後葉頃と考えられる。

ピット (SP) 14 (図 50)

形態・規模：調査区の南側、SB3 の西側に位置する。平面形は円形で、最大径は 0.22 m である。断面形は U 字状を呈し、検出面からの深さは 0.28 m を測る。

出土遺物：弥生土器が出土している。68 は弥生土器の高杯の口縁部片である。ヨコナデによって成形されているとみられ、水平方向へ拡張したのち下方へほぼ直角に垂下する。

時期：出土遺物から弥生時代中期後葉頃と考えられる。

ピット (SP) 15 (図 51)

形態・規模：調査区の南側、SB3 の西側に位置する。平面形は円形で、最大径は 0.38 m である。断面形は一部 2 段状を呈し、検出面からの深さは 0.28 m を測る。

出土遺物：おもに土師器、須恵器が出土している。69 は須恵器の椀あるいは皿の底部片とみられる。体部は底部からなだらかに立ち上がり、内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。底部は回転糸切りである。

時期：出土遺物から平安時代後期から鎌倉時代前半頃と考えられる。

ピット (SP) 16 (図 52)

形態・規模：調査区の南側に位置し、SB3 に隣接する。平面形は楕円形で、長径 0.25 m、

短径 0.20 m である。断面形はやや急なU字状を呈し、検出面からの深さは 0.22 m を測る。なお、断面の下部において柱痕跡が確認された。

出土遺物：おもに土師器が出土している。70 は土師器の杯ないし碗とみられる。体部と口縁部の境界付近にぶい稜をもち、口縁部はヨコナデによって直線的に立ち上がる。体部外面にはユビオサエの痕跡が若干残る。71 は土師器皿の口縁部片である。残存状況は良くないが、口縁部はヨコナデによって内灣気味に立ち上がる。

時期：出土遺物から平安時代後期から鎌倉時代前半頃と考えられる。

ピット (SP) 17 (図 53、写真 188)

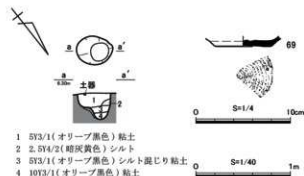
形態・規模：調査区の南側に位置し、SP16 に隣接する。平面形は円形で、最大径は 0.26 m である。断面形は緩やかなU字状を呈し、検出面からの深さは 0.15 m を測る。

出土遺物：おもに土師器が出土している。72 は土師器の杯である。底部から体部にかけて緩やかに屈曲したのち、直線的に外反し口縁端部にいたる。全体的に磨滅しているため調整等は不明瞭であるが、内外面ともにナデ及びヨコナデ調整によって仕上げられているものとみられる。73 は土師器の皿である。口縁部はヨコナデによって成形されており、内灣気味に短く立ち上がり端部にいたる。底部内面はナデ調整が施されているのに対して、底部外面はほとんど調整等が施されていない。

時期：出土遺物から平安時代後期から鎌倉時代前半頃と考えられる。

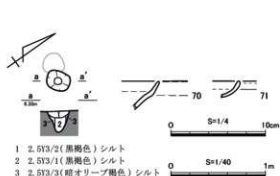
ピット (SP) 18 (図 54)

形態・規模：調査区南側の中央付近に位置する。SB3 に隣接し、SP19 を切っている。平面形は不整円形で、最大径は 0.32 m である。断面形は方形を呈し、検出面からの深さは 0.18 m 前後を測る。一部柱根が残存するとともに、その直下には人頭大の平らな石材 1 個が据えられていた。



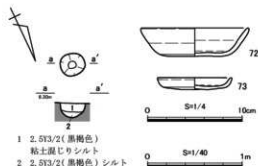
- 1 5V3/1(オリーブ黒色)粘土
- 2 2.5V4/2(暗灰黄色)シルト
- 3 5V3/1(オリーブ黒色)シルト混じり粘土
- 4 10V3/1(オリーブ黒色)粘土

図 51 ピット (SP) 15 及び出土遺物



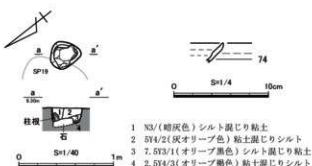
- 1 2.5V3/2(黒褐色)シルト
- 2 2.5V3/1(黒褐色)シルト
- 3 2.5V3/3(暗オリーブ褐色)シルト

図 52 ピット (SP) 16 及び出土遺物



- 1 2.5V3/2(黒褐色)粘土混じりシルト
- 2 2.5V3/2(黒褐色)シルト

図 53 ピット (SP) 17 及び出土遺物



- 1 N3/(暗灰色)シルト混じり粘土
- 2 5V4/2(灰オリーブ色)粘土混じりシルト
- 3 7.5V3/1(オリーブ黒色)シルト混じり粘土
- 4 2.5V4/3(オリーブ褐色)粘土混じりシルト

図 54 ピット (SP) 18 及び出土遺物

出土遺物：おもに土師器、須恵器が出土している。74は土師器の皿の口縁部片である。残存状況は良くないが、体部は内灣気味に立ち上がったのち、外側へ屈曲し口縁端部にいたる。内外面ともにヨコナデによって仕上げられている。

時期：出土遺物から鎌倉時代後半頃と考えられる。

ビット (SP) 19 (図 55、写真 78)

形態・規模：調査区南側の中央付近に位置する。SB3に隣接し、SP18によって切られている。検出面での平面形は楕円形ないし隅丸長方形で、長径0.71 m、短径0.46 mの土坑状を呈している。ただ、その内部には2基のビットが存在し、土層断面においても同様の状況が確認された。検出面からの深さは南西側のビットで0.58 m、北東側のビットで0.52 mを測る。柱の立替えが行われた痕跡と考えられる。

出土遺物：おもに土師器、須恵器が出土している。75は土師器の皿の小片である。底部と体部の境界付近で屈曲したのち、直線的に短く外反し口縁端部にいたる。体部ないし口縁部はヨコナデによって成形されており、その端部はシャープに仕上げられている。

時期：出土遺物から鎌倉時代後半頃と考えられる。

ビット (SP) 20 (図 56、写真 188)

形態・規模：調査区南側の中央付近に位置する。平面形は楕円形で、長径0.44 m、短径0.34 mである。断面形はやや歪なU字状を呈し、検出面からの深さは0.24 mを測る。

出土遺物：おもに土師器、須恵器が出土している。76は土師器の鍋の口縁部片とみられる。胴部外面にはタテ方向のハケメ調整が施されており、そこからヨコナデによって「く」の字状に屈曲する口縁部が成形されている。

時期：出土遺物から平安時代後期から鎌倉時代前半頃と考えられる。

ビット (SP) 21 (図 57、写真 79・189)

形態・規模：調査区の南側に位置する。平面形は円形で、最大径は0.24 mである。断面形はU字状を呈し、検出面からの深さは0.30 mを測る。柱痕跡とみられる第1層の上部から土師器の鍋 (77) の破片がまとまって出土した。

出土遺物：おもに土師器、須恵器が出土している。77は土師器の鍋で、いわゆる「甕形タイプ」のものである (岡田ほか2003)。胴部はタタキによって成形されており、ほぼ中位に最大径をもつやや扁平な円形を呈している。口縁部はヨコナデによって「く」の字状に外反し、その端部は玉縁状に仕上げられている。外面には全面的に煤が付着し、底部内面には炭化物の付着が認められる。78は須恵器の碗の底部片である。内面では底部から体部に立ち上がるに若干の段を有し、体部はやや内灣しながら立ち上がる。底部は回転糸切りで、内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。

時期：出土遺物から鎌倉時代後半頃と考えられる。

ビット (SP) 22 (図 58、写真 189)

形態・規模：調査区の南側、SB3の北側に位置する。平面形は円形で、最大径は0.23 mである。断面形はU字状を呈し、検出面からの深さは0.17 mを測る。

出土遺物：土師器が出土している。79は土師器の皿である。底部と体部の境界付近において器壁

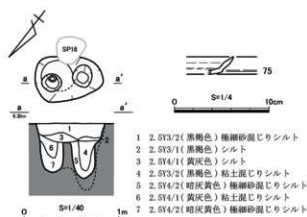


図55 ピット(SP) 19 及び出土遺物

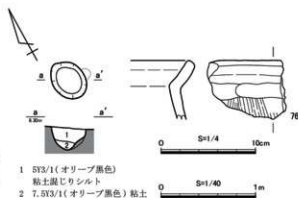


図56 ピット(SP) 20 及び出土遺物

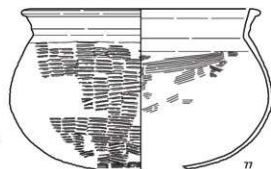
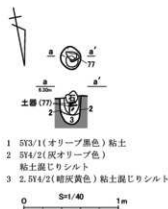


図57 ピット(SP) 21 及び出土遺物

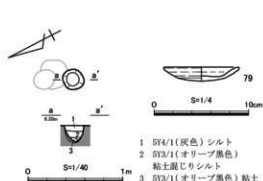


図58 ピット(SP) 22 及び出土遺物

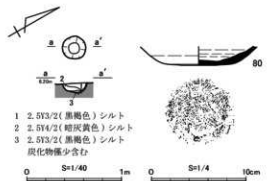


図59 ピット(SP) 23 及び出土遺物

が薄くなり、やや肥厚したのち口縁端部にいたる。底部内外面はナデ調整が施されているものの、外面にはユビオサエの痕跡が若干残る。

時期：出土遺物から鎌倉時代後半頃と考えられる。

ピット (SP) 23 (図59、写真189)

形態・規模：調査区の南側に位置し、SB3に隣接する。平面形は円形で、最大径は0.25 mである。断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは0.10 mを測る。

出土遺物：おもに土師器、須恵器が出土している。80は須恵器杯の底部である。底部外面には回転糸切り痕を残し、体部は内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。

時期：出土遺物から平安時代後期から鎌倉時代前半頃と考えられる。

ピット (SP) 24 (図 60、写真 80)

形態・規模：調査区の南側に位置し、SB3に隣接する。平面形は楕円形で、長径 0.26 m、短径 0.19 mである。断面形はU字状を呈し、検出面からの深さは 0.46 mを測る。柱根が良好な状態で残存していた。

出土遺物：柱根が確認されているのみで、遺物は出土していない。W1の樹種はマツ属複雑管束亜属である。残存長 29.0cm、最大径 12.6cmを測り、柱根の下端の広い範囲には鋭利なはつきり痕ないし切削痕が残る。

時期：時期を決定することは困難であるが、埋土の土質などから中世と推定される。

ピット (SP) 25 (図 61、写真 189)

形態・規模：調査区の南側、SB3の北側に位置する。平面形は隅丸方形で、一辺 0.20 m前後である。断面形はU字状を呈し、検出面からの深さは 0.18 mを測る。

出土遺物：土師器が出土している。81は土師器の皿である。口縁部はヨコナデによって成形されており、直線的に短く外反する。底部外面はほとんど調整等が施されていない。

時期：出土遺物によって時期を絞り込むことは難しいが、中世と考えられる。

ピット (SP) 26 (図 62)

形態・規模：調査区南側の中央付近に位置する。平面形は円形で、最大径は 0.24 mである。断面形はU字状を呈し、検出面からの深さは 0.38 mを測る。

出土遺物：土師器が出土している。82は土師器の皿である。残存状況は良くないが、底部と体部の境界付近で内灣したのち、外反し口縁端部にいたる。口縁部はヨコナデによって仕上げられている。

時期：出土遺物から鎌倉時代後半頃と考えられる。

ピット (SP) 27 (図 63、写真 81・82・189)

形態・規模：調査区の南側、SB3の北側に位置する。平面形は円形で、最大径は 0.16 mである。断面形はU字状を呈し、検出面からの深さは 0.18 mを測る。底部から須恵器の皿(83)が伏せたような状態で出土した。

出土遺物：須恵器が出土している。83は須恵器の皿である。体部は内灣気味に立ち上がり、体部と口縁部の境界付近で若干屈曲したのち口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。底部は回転糸切りで、内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。

時期：出土遺物から平安時代後期頃と考えられる。

ピット (SP) 28 (図 64、写真 83)

形態・規模：調査区南側の中央付近、西壁沿いに位置する。大部分が調査区外に及んでおり、遺構の一部を確認したに過ぎないが、平面形は円形とみられ、検出範囲での最大径は 0.21 mである。調査区の壁面で確認された土層断面によると、第II層(II-12層)から掘り込まれており、断面形はU字状で、遺構上面からの深さは 0.44 mを測る。また、断面では柱痕跡が確認された。

出土遺物：土師器が出土している。84は土師器の皿である。ヨコナデによって口縁部は内灣気味に短く立ち上がる。底部内面はナデ調整が施されているのに対して、底部外面はほとんど調整等が施されていない。

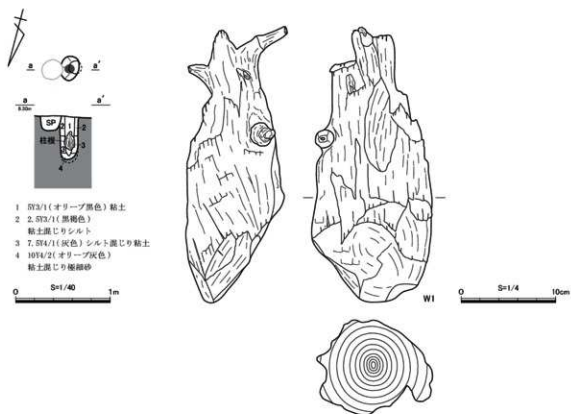


図60 ビット(SP)24及び出土遺物

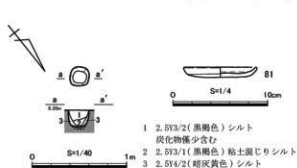


図61 ビット(SP)25及び出土遺物

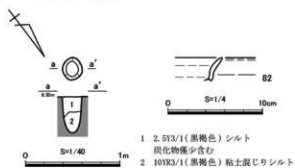


図62 ビット(SP)26及び出土遺物

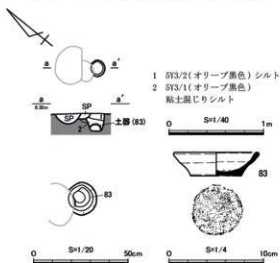


図63 ビット(SP)27及び出土遺物

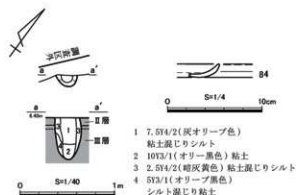


図64 ビット(SP)28及び出土遺物

時期：出土遺物によって時期を絞り込むことは難しいが、中世と考えられる。

ピット (SP) 29 (図 65、写真 84・189)

形態・規模：調査区南側の北西壁付近に位置する。平面形は円形で、最大径は0.30 mである。断面形は2段状を呈しており、検出面からの深さは0.43 m前後を測る。出土状況については記録作業を行うことができていないものの、柱痕跡の底部付近から土師器(86～89)がまとめて出土した。

出土遺物：おもに土師器が出土している。85～87は土師器の皿である。85の口縁部はヨコナデによって成形されており、直線的に短く外反する。底部はナデ調整が施されているものの、器壁に若干の厚薄が認められる。86の口縁部はヨコナデによって成形されており、やや内灣しながら立ち上がる。底部内面はナデ調整が施されているのに対して、底部外面にはユビオサエの痕跡が明瞭に残る。87は底部から体部にかけて内灣しながら立ち上がったのち、直線的に外反し口縁端部にいたる。口縁部がヨコナデによって仕上げられているほかはナデ調整が施されている。88は土師器の杯である。底部は残存していないが、体部ないし口縁部は直線的に外反し、口縁端部は丸くおさめる。内面にはナデとともに板ナデとみられる調整が施されているのに対して、外面はナデ及びヨコナデ調整によって仕上げられている。89は土師器の鍋で、いわゆる「甕形タイプ」のものである(岡田ほか2003)。胴部下半を欠いているが、その上半はタタキによって成形されており、内面にはヨコないしナメ方向のハケメ調整が施されている。口縁部はヨコナデによって「く」の字状に外反し、その端部を外方へ短くつまみ出して口縁端部とする。外面には全面的に煤の付着が認められる。

時期：出土遺物から鎌倉時代後半頃と考えられる。

ピット (SP) 30 (図 66、写真 189)

形態・規模：調査区南半の北西壁付近に位置する。平面形は円形で、最大径は0.23 mである。正確に記録作業を行うことができなかったが、断面形は緩やかなU字状を呈しており、検出面からの深さは0.18 m前後を測る。

出土遺物：土師器と土鍾が出土している。90は土師器の皿の小片である。やや外灣しながら外反し口縁端部にいたる。全体的に磨滅しているが、内外面ともにヨコナデ調整が施されているものとみられる。91は管状土鍾である。片側の大部分が欠損しているが、中央付近で最大径をもち、両端に向かって径は小さくなっていく。径のほぼ中央に0.4cm前後の円形の孔が貫通しており、その内面には長軸方向の擦痕がみられる。

時期：出土遺物によって時期を決定することは難しいが、鎌倉時代後半頃と推定される。

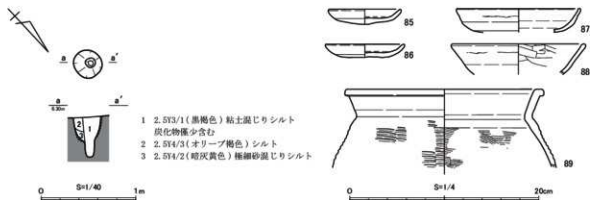


図 65 ピット (SP) 29 及び出土遺物

ピット (SP) 31 (図 67)

形態・規模：調査区南半の北西壁付近に位置し、SP30に隣接する。平面形は円形で、最大径は0.29 mである。断面形は皿状を呈しており、検出面からの深さは0.15 mを測る。調査当初は別のピットに切られていると判断していたが、その後の再検討のなかで、当該ピットが別のピットを切っていると判断するにいたった。

出土遺物：土師器、須恵器が出土している。92は土師器の杯である。底部と体部の境界付近から器壁が厚くなり、ほぼ均一の厚さのまま直線的に外反し口縁端部にいたる。体部ないし口縁部はヨコナデによって仕上げられている。底部外面にはほとんど調整等が施されておらず、ユビオサエの痕跡が僅かに残る。

時期：出土遺物から鎌倉時代後半頃と考えられる。

ピット (SP) 32 (図 68、写真 85)

形態・規模：調査区南半の北西壁沿いに位置する。平面的に検出できず、北西壁面において断面のみを確認できたものであるため、平面形は不明である。土層断面によると、SP32は第II層（II-5層）から掘り込まれており、断面形はやや歪なU字状で、遺構上面からの深さは0.38 mを測る。

出土遺物：土師器、須恵器が出土している。93は土師器の皿である。口縁部はヨコナデによって直線的に外反する。底部外面はほとんど調整等が施されていないが、ユビオサエの痕跡が若干残る。

94は須恵器の碗の底部である。残存状況は良くないが、底部外面に回転糸切り痕が残るほかは内外面ともにナデ調整が認められる。

時期：出土遺物によって時期を絞り込むことは難しいが、中世と考えられる。

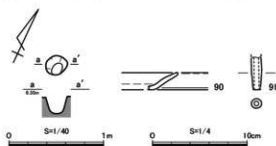
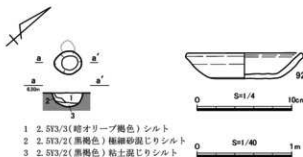


図 66 ピット (SP) 30 及び出土遺物



1. 5Y3/3(暗オリーブ褐色) シルト
2. 5Y3/2(黒褐色) 極細砂混じりシルト
3. 5Y3/2(黒褐色) 粘土混じりシルト

図 67 ピット (SP) 31 及び出土遺物

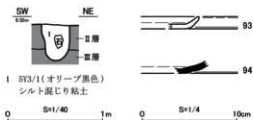


図 68 ピット (SP) 32 及び出土遺物

ピット (SP) 33 (図 69)

形態・規模：調査区南半の中央やや北寄りに位置する。平面形は円形で、最大径は0.35 mである。断面形はU字状を呈しており、検出面からの深さは0.30 mを測る。

出土遺物：おもに土師器、須恵器が出土している。95は土師器の皿である。口縁部はヨコナデによって成形され、直線的に短く外反し口縁端部にいたる。底部外面はほとんど調整等が施されていない。

時期：出土遺物によって時期を絞り込むことは難しいが、中世と考えられる。

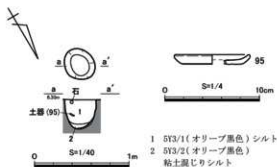


図69 ビット(SP)33及び出土遺物

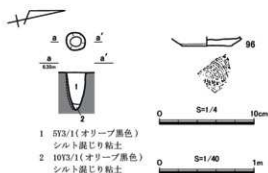


図70 ビット(SP)34及び出土遺物

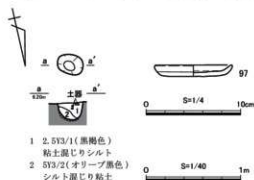


図71 ビット(SP)35及び出土遺物

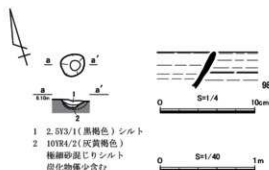


図72 ビット(SP)36及び出土遺物

ビット (SP) 34 (図70)

形態・規模：調査区南半の中央やや北寄りに位置する。平面形は円形で、最大径は0.21 mである。断面形は立ち上がり急なU字状を呈しており、検出面からの深さは0.40 mを測る。

出土遺物：おもに土師器が出土している。96は土師器の杯もしくは皿の底部片とみられる。残存状況は良くないが、内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、底部は回転糸切りである。

時期：出土遺物によって時期を絞り込むことは難しいが、中世と考えられる。

ビット (SP) 35 (図71、写真189)

形態・規模：調査区南半の中央やや北寄りに位置する。平面形は楕円形ないし隅丸長方形で、長径0.27 m、短径0.20 mである。断面形はU字状を呈しており、検出面からの深さは0.18 mを測る。

出土遺物：おもに土師器が出土している。97は土師器の皿である。口縁部はヨコナデによって成形されており、直線的に短く外反する。底部外面はほとんど調整等が施されていない。

時期：出土遺物によって時期を絞り込むことは難しいが、中世と考えられる。

ビット (SP) 36 (図72、写真189)

形態・規模：調査区の中央付近、SB4の南側に位置する。平面形は円形で、最大径は0.26 mである。断面形はやや歪な皿状を呈しており、検出面からの深さは0.09 mを測る。

出土遺物：須恵器片が出土しているのみである。98は須恵器の椀である。体部は直線的に立ち上がり口縁端部にいたる。内外面ともに回転ナデによって仕上げられているが、外面には1条の沈線がめぐらされている。

時期：出土遺物によって時期を決定することは難しいが、平安時代後期頃と推定される。

ピット (SP) 37 (図 73)

形態・規模：調査区の中央付近、SB4 の西側に位置する。平面形は円形で、最大径は 0.18 m である。断面形はU字状を呈しており、検出面からの深さは 0.30 m を測る。

出土遺物：土師器と瓦片が出土している。99 は平瓦片である。凹面の一部には布目圧痕が認められるものの、その大部分には不規則な凹凸が残っている。一方、凸面と側面には丁寧なナデ調整が施されている。

時期：出土遺物によって時期を絞り込むことは難しいが、中世と考えられる。

ピット (SP) 38 (図 74、写真 189)

形態・規模：調査区の中央付近、SB7 の南側に位置する。平面形は円形で、最大径は 0.26 m である。断面形は緩やかなU字状を呈しており、検出面からの深さは 0.14 m を測る。

出土遺物：須恵器の椀が出土している。100 は須恵器の椀である。体部は内溝気味に立ち上がり、内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。内面では底部から体部に立ち上がるころに若干の段を有する。底部は回転糸切りとみられる。

時期：出土遺物から平安時代後期頃と考えられる。

ピット (SP) 39 (図 75)

形態・規模：調査区の中央付近、SB7 の東側に位置する。平面形は楕円形で、長径 0.30 m、短径 0.21 m である。断面形は緩やかなU字状を呈しており、検出面からの深さは 0.17 m を測る。

出土遺物：おもに土師器、須恵器が出土している。101 は土師器の甕の口縁部片とみられる。残存状況等は良くないが、口縁部はヨコナデによって仕上げられているものとみられる。頸部において屈曲したのち、やや内側に彎曲しながら外反し口縁端部にいたる。また、口縁部は端部に向かってやや肥厚するとともに、その端部には面を有する。

時期：出土遺物によって時期を絞り込むことは難しいが、飛鳥時代から奈良時代頃と考えられる。

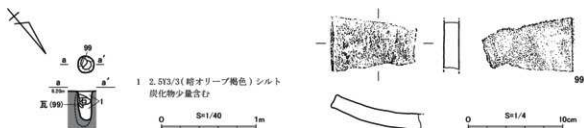


図 73 ピット (SP) 37 及び出土遺物

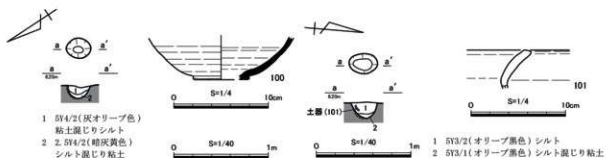


図 74 ピット (SP) 38 及び出土遺物

図 75 ピット (SP) 39 及び出土遺物

ピット (SP) 40 (図 76)

形態・規模：調査区中央のやや北寄りに位置し、位置的にはSB6・SB7と重複する。平面形は円形で、最大径は0.31 mである。断面形は緩やかなU字状を呈しており、検出面からの深さは0.18 mを測る。柱痕跡が確認されている。

出土遺物：おもに土師器、須恵器が出土している。102は須恵器の碗の底部である。内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、底部は回転糸切りである。体部は底部から立ち上がるころに若干の段を有し、内灣気味に立ち上がる。外面では残存する体部の上方において1条の沈線が確認される。底部中央付近の器壁が著しく薄いつくりであるのに対して、体部の器壁は比較的厚い。

時期：出土遺物から平安時代後期頃と考えられる。

ピット (SP) 41 (図 77、写真 189)

形態・規模：調査区中央のやや北寄りに位置し、SP40に隣接する。平面形は円形で、最大径は0.23 mである。断面形は緩やかなU字状を呈しており、検出面からの深さは0.18 mを測る。柱痕跡が確認されている。

出土遺物：おもに土師器が出土している。103は土師器の碗である。器壁はほぼ均一で、体部は底部から緩やかに立ち上がる。内外面ともに底部付近にナデ調整が施されているほかは回転ナデによって仕上げられているものとみられる。底部には幅が細くて高さのある高台を貼り付ける。なお、体部外面の一部では粘土接合痕が確認される。

時期：出土遺物から平安時代後期頃と考えられる。

ピット (SP) 42 (図 78)

形態・規模：調査区北半のほぼ中央に位置し、位置的にはSB7と重なる。平面形は不整形円形で、

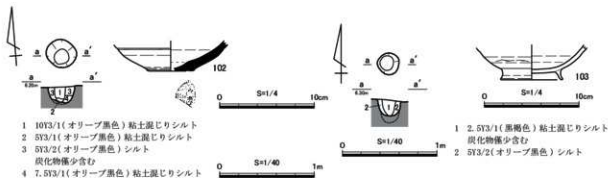


図 76 ピット (SP) 40 及び出土遺物

図 77 ピット (SP) 41 出土遺物

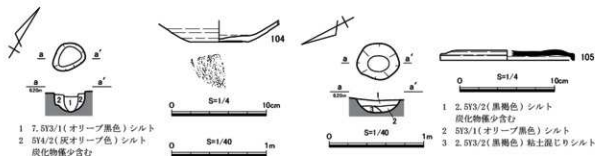


図 78 ピット (SP) 42 及び出土遺物

図 79 ピット (SP) 43 及び出土遺物

長径 0.36 m、短径 0.27 m である。断面形はU字状を呈しており、検出面からの深さは 0.22 m を測る。柱痕跡が確認されている。

出土遺物：おもに土師器が出土している。104 は土師器の椀の底部である。全体的に磨滅しているため調整等是不明瞭であるが、内外面ともに回転ナデによって仕上げられているとみられ、体部は直線的に外反する。底部は回転糸切りである。

時期：出土遺物から平安時代後期頃と考えられる。

ピット (SP) 43 (図 79)

形態・規模：調査区北側の東壁付近に位置し、SK7 に隣接する。平面形はやや歪な円形で、最大径は 0.45 m である。断面形は皿状を呈しており、検出面からの深さは 0.15 m を測る。

出土遺物：おもに須恵器が出土している。105 は須恵器の蓋である。回転ヘラケズリによって平坦に仕上げられた天井部は、端部をほぼ直角に屈曲させてかかりを成形する。内外面ともに口縁部付近は回転ナデによって仕上げられているが、天井部内面の中央付近にはナデ調整が施されている。

時期：出土遺物から平安時代前期頃と考えられる。

ピット (SP) 44 (図 80、写真 86～90・189・190)

形態・規模：調査区北側の西壁付近に位置する。平面形は円形で、最大径は 0.28 m である。断面形はU字状を呈しており、検出面からの深さは 0.26 m を測る。ピット内からは破片となった状態の弥生土器が多数出土した。なお、これらの弥生土器については、任意の面で平面図を作成したのち、面ごとに取り上げを行った。

出土遺物：計 4 個体の弥生土器が出土しているが、1 個体については小片のため掲載できていない。106 は弥生土器の甕である。胴部は全体的に器壁が薄く、あまり肩のはらない形状をしている。頸部付近から口縁部にかけてヨコナデ調整が施され、口縁部は「く」の字状に短く外反する。口縁端部は面を有し、その上端を上方へ拡張させる。胴部内面は最大径をもつ付近を境として、下半にはタテないしナメ方向のケズリ調整が、上半にはタテ方向のハケメ調整が施されている。一方の外面では、下半にタテ方向のミガキ調整が、上半にタテ方向のハケメ調整が施されている。107 は弥生土器の壺などの脚部とみられる。脚端部は丸くおさめ、内上方に向かってくびれながら立ち上がり胴部と接合する。胴部と脚部の成形にあたっては円盤充填法を用いている。磨滅のため調整等是不明瞭であるが、脚部内面にはヨコ方向のケズリ調整が施されており、外面にはタテ方向のミガキとみられる痕跡が残る。また、脚端部のやや上方には、12 個の円形透孔がほぼ等間隔で焼成前に穿孔されている。108 は弥生土器の甕あるいは壺の底部で、若干内灣しつつ緩やかに立ち上がる胴部をもつ。内面では底部付近にナデ調整が施されているほかはタテ方向のケズリ調整が施されている。一方の外面は、タテ方向のハケメ調整が施されているが、底部付近の一部ではタキ状の痕跡が確認できる。

時期：出土遺物から弥生時代中期後葉頃と考えられる。

■ 性格不明遺構

性格不明遺構 (SX) 1 (図 81・82、写真 91・190)

形態・規模：調査区の南端付近に位置する落込みである。南西側は調査区外に及んでいるものの、検出された範囲での平面形は不整形で、長軸 6.8 m 以上、短軸約 5.9 m を測る。深さは 0.04～0.08 m と全体的に浅く、その直下は基本的に基盤層（第Ⅲ層）となっている。ただ、土層断面の観察によ

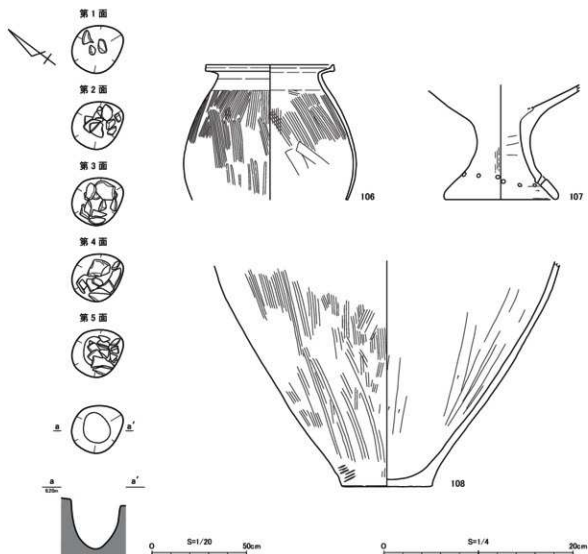


図80 ピット(SP)44及び出土遺物

ると、埋土には複数の堆積層が認められ、少なくとも3段階の堆積によって成り立っているが、SK2やSX2などの別遺構と切り合い関係があることから判断すると、本来的には時期の異なる堆積層が含まれていると考えられる。なお、SX1直下の基盤層上面では多数の遺構が検出されている。

出土遺物：おもに土師器と須恵器が出土したほか、青磁の小片などが出土している。109と110は須恵器の椀の口縁部で、111と112は須恵器の椀の底部である。109は内外面ともに回転ナデによって仕上げられ、口縁端部は僅かに外反する。110は体部から口縁部にかけて内灣気味に緩やかに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。111は残存状況は良くないが、内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、内面では底部から体部に立ち上がるところに僅かな段を有する。底部は回転糸切りである。112も残存状況は良くないが、外方へ踏ん張る貼付け輪高台をもつ。113～118は須恵器の鉢で、113～116が口縁部、117・118が底部である。113の体部ないし口縁部は直線的に外反し、端部を上方に突出させて口縁端部とする。内外面ともに基本的に回転ナデによって仕上げられているものの、内面では口縁部付近のみで、それより下位にはナデ調整が施されている。114の体部は直線的に外反するとともに口縁部に向かってやや肥厚し、その端部は上方へつまみ上げている。体部内面にナデ調整が施されているほかは回転ナデによって仕

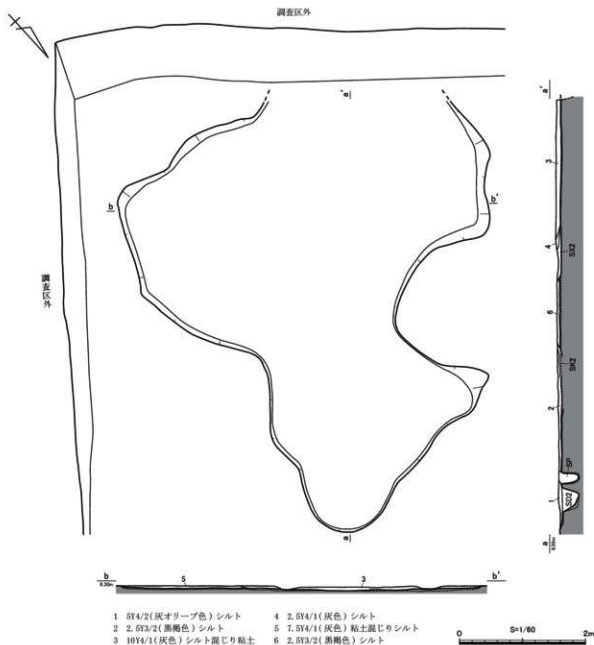


図81 性格不明遺構 (SX) 1

上げられている。115は内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、体部ないし口縁部は直線的に外反し、口縁端部は上方に突出させる。なお、外面の一部では粘土接合痕が確認される。116は口縁端部を外下方及び上方へ拡張させるもので、口縁端部の成形にあたっては、外下方へ折り曲げたのち、上側に粘土を付加して端部を拡張させているものとみられる。117は底部から体部にかけてなだらかに立ち上がる。外面は回転ナデによって仕上げられているのに対して、内面はナデ調整である。底部は回転系切りである。118は残存状況は良くないが、底部は回転系切りで、内外面ともにナデ調整が施されているとみられる。119は須恵器の甕の口縁部片とみられる。残存状況は良くないものの、口縁部を外側に屈曲させることで端部を成形しており、内外面ともに回転ナデ調整が施されている。また、その上部には凹線状の凹みがめぐらされている。120～128の多くは土師器の皿であるが、125や128については杯の可能性もある。120は口縁部に向かって短く立ち上がるとともに、外面で

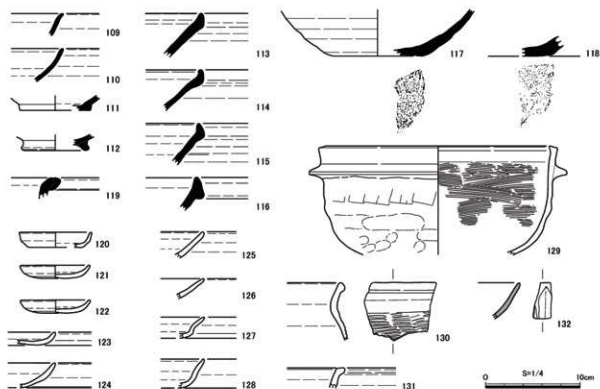


図82 性格不明遺構(SX)1出土遺物

は体部と口縁部の境界付近に稜をもつ。磨滅のため内外面ともに調整等は不明瞭であるが、体部ないし口縁部の内面は回転ナデ調整、底部は回転糸切りとみられる。**121**の口縁部はヨコナデによって成形されており、直線的に短く外反する。端部はややシャープに仕上げられている。**122**の口縁部はヨコナデによって成形されており、内灣気味に短く立ち上がる。底部内外面にはナデ調整が施されているものの、外面側の調整は全体的に粗い。**123**の口縁部はヨコナデによって成形されており、底部から口縁端部に向かって内灣気味に立ち上がり、端部はややシャープに仕上げられている。底部の内外面にはナデ調整が施されている。**124**は底部から口縁部にかけて内灣気味に立ち上がるとともに、体部と口縁部の境界付近で若干器壁が肥厚し端部にいたる。内外面ともに口縁部はヨコナデ調整で、その箇所以外はナデ調整が施されている。また、内面の一部にはユビオサエの痕跡が僅かに残る。**125**の体部ないし口縁部は基本的にヨコナデによって仕上げられており、直線的に外反し口縁端部にいたる。端部については丸くおさめる。**126**は全体的に磨滅しているため調整等は不明であるが、体部ないし口縁部は直線的に外反する。**127**は外面では底部と体部の境界に明瞭な稜をもち、そこから内側にやや彎曲しながら外反し口縁端部にいたる。体部ないし口縁部はヨコナデによって仕上げられており、底部は内外面ともにナデ調整が施されているものとみられる。**128**は底部から体部にかけて内灣気味に立ち上がったのち、口縁部との境界付近から外反し口縁端部にいたる。磨滅のため内外面ともに調整等は不明瞭であるが、体部ないし口縁部はヨコナデによって仕上げられているものとみられる。**129**は瓦質土器の羽釜である。胴部は底部付近から内灣しながら立ち上がったのち、外傾しながらほぼ直上に立ち上がり口縁端部にいたる。口縁端部は面を有し、凹状を成す。端部のやや下位には短い鏝を水平に貼り付けている。胴部外面の下半にはユビオサエ及びナデ調整の痕跡が明瞭に残り、その上半は板ナデ調整が施されている。一方、胴部内面はヨコ方向のハケメ調整が施されている。また、鏝部下面及び胴部外面には煤の付着が顕著である。**130・131**は土師器の鍋で、いわゆる「壺形タイプ」

のものである(岡田ほか2003)。**130**の胴部はタタキによって成形され、内面にはナデ調整が施されている。頸部ないし口縁部はヨコナデによって緩やかに外反し、その端部は玉縁状を呈する。また、口縁端部付近において煤の付着が認められる。**131**は残存状況は良くないが、内外面ともにヨコナデ調整が施されており、その端部を外方へ短くつまみ出して口縁端部としている。**132**は青磁の碗である。残存状況は良くないが、体部外面に蓮弁文が浮き彫りされた龍泉窯系青磁である。

時期：出土遺物には時期幅が認められるとともに、各遺物を層位的に確認することができていないため詳細は不明であるが、最終的な堆積時期は南北朝時代頃と推定される。

性格不明遺構 (SX) 2 (図 83、写真 92・190)

形態・規模：調査区の南端付近に位置し、SB1 や SB3 に隣接する。ほぼ底面のみでの検出であったため、深さなどは不明であるが、検出された範囲での平面形は不整形で、長軸は約 0.8 m を測り、埋土には多量の炭化物が含まれていた。また、埋土からは多くの土師器片が出土した。

出土遺物：おもに土師器片が出土している。**133**～**135**は土師器の皿である。**133**の口縁部は直線的に短く外反し、端部はややシャープに仕上げられている。底部は内外面ともにナデ調整が施されているものの、外面にはユビオサエの痕跡が僅かに残る。**134**の口縁部はヨコナデによって成形されており、直線的に短く外反する。底部外面にはナデ調整が施されている。**135**の体部は内灣気味に立ち上がったのち、口縁部との境界付近で外反し口縁端部にいたる。磨滅によって調整等は不明瞭であるものの、内外面ともにヨコナデによって仕上げられている。

時期：出土遺物から鎌倉時代後半頃と考えられる。

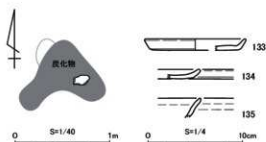


図 83 性格不明遺構 (SX) 2 及び出土遺物

性格不明遺構 (SX) 3 (図 84、写真 93)

形態・規模：調査区の南西端付近に位置する。SB2 に隣接するほか、SP8 などに切られている。平面形は不整形円形で、長軸約 1.0 m、短軸約 0.8 m を測る。断面形は 2 段状を呈しており、検出面からの深さは 0.76 m を測る。底部付近からは多数の礫が落ち込んだような状態で出土した。

出土遺物：おもに土師器、須恵器が出土している。**136**は土師器の杯あるいは碗の口縁部片である。磨滅のため内外面ともに調整等は不明であるが、体部は内灣気味に立ち上がり口縁端部にいたる。

時期：出土遺物から平安時代後期頃と考えられる。

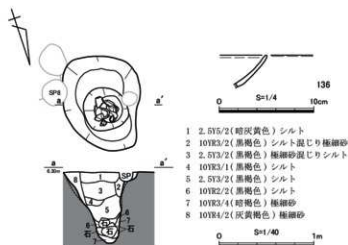


図 84 性格不明遺構 (SX) 3 及び出土遺物

- 1 2. 5Y5/2 (暗灰黄色) シルト
- 2 10Y3/2 (黒褐色) シルト混じり極細砂
- 3 2. 5Y3/2 (黒褐色) 極細砂混じりシルト
- 4 10Y3/1 (黒褐色) シルト
- 5 2. 5Y3/2 (黒褐色) シルト
- 6 10Y2/2 (黒褐色) シルト
- 7 10Y2/4 (暗褐色) 極細砂
- 8 10Y4/2 (灰黄色) 極細砂

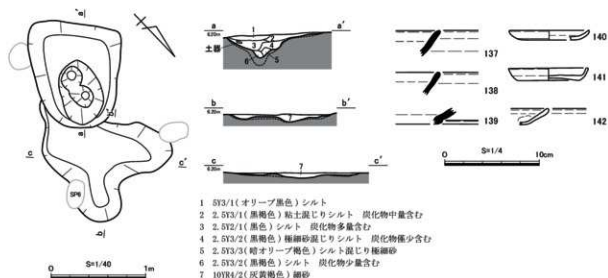


図85 性格不明遺構(SX)4及び出土遺物

性格不明遺構(SX)4(図85、写真94～97・190)

形態・規模：調査区の南側、SB3の東側に位置し、SP6などに切られている。平面形は、長軸約1.1m、短軸約0.9mの隅丸長方形の土坑状の掘込みに不整形な落込みが附属したような形状をしており、さらに隅丸長方形の土坑状の落込みは遺構内にビット状の掘込みをもっている。各底面には凹凸が認められ、断面形はいずれも歪な形状をしているが、最も深いところで前者は0.27m、後者は0.08mを測る。隅丸長方形の土坑状の掘込みの埋土に多くの炭化物が含まれていたほか、不整形の落込みの埋土から鍛冶滓とみられる小片が出土していることから、SX4は鍛冶関連遺構の可能性がある。

出土遺物：おもに土師器と須恵器が出土しているほか、鍛冶滓とみられる小片が1点出土している。137～139は須恵器の椀で、137・138は口縁部片、139は底部片である。137は直線的に外反する口縁部片で、内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。138は内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、口縁部は丸くおさめる。139は残存状況は良くないが、底部外面を除いて内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、内面では底部と体部の境界付近に段を有している。140～142は土師器の皿である。140の口縁部はヨコナデによって成形されており、内溝気味に短く外反し端部にいたる。底部内面はナデ調整が施されているものの、外面にはほとんど調整等が施されていない。141は磨滅のため調整等は不明瞭であるが、口縁部は内外面ともに回転ナデによって仕上げられているとみられ、その器壁は薄く、短く立ち上げられている。また、底部は回転糸切りとみられる。142の体部は直線的に外反するとともに口縁部部に向かってやや肥厚する。磨滅のため調整等は不明瞭であるが、内外面にはユビオサエの痕跡が残る。

時期：出土遺物とSP6との切り合い関係から平安時代後期から鎌倉時代前半頃と考えられる。

性格不明遺構(SX)5(図86、写真98・191)

形態・規模：調査区の北東端付近、東壁沿いに位置する。東側が調査区外に及んでおり全容は不明である。平面形は基本的に隅丸方形を呈するが、南西辺の一部が外側へ広がる形状をしている。この広がりを含めた南西辺、北東辺間の長さは約4.3mを測る。検出面からの深さは0.03～0.09mである。一見すると堅穴建物とみられるが、埋土の土質は遺物包含層とほとんど変わらず、また遺構内からはその北側でビット2基が検出されたのみであることから、ここでは落込みとして報告する。

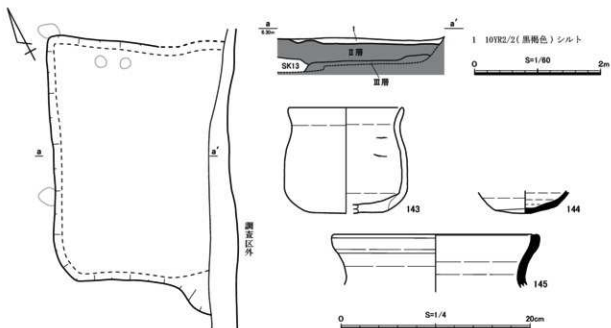


図86 性格不明遺構(SX)5及び出土遺物

出土遺物：おもに土師器、須恵器が出土している。143は土師器の埴である。胴部はやや厚みのある底部から急な角度で立ち上がり、頸部で僅かにくびれたのち、緩やかに外上方に外反する。全体的に磨滅しているため調整等は不明瞭であるが、内外面ともにナデ調整が施されているものとみられる。また、胴部内面の一部に粘土接合痕が残るほか、断面で明瞭な剥離痕が確認できる。144は須恵器の杯の底部である。体部は丸みをおびた底部から内灣気味に立ち上がる。底部が回転ヘラ切りであるほかは回転ナデによって仕上げられている。145は須恵器の甕の口縁部とみられる。頸部で内側にやや彎曲したのち、内灣しながら緩やかに立ち上がり口縁端部にいたる。端部は面を有しており、やや凹状を成している。内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。

時期：出土遺物から飛鳥時代から奈良時代前半頃に堆積したものと考えられる。

性格不明遺構(SX)6(図87、写真99・191)

形態・規模：調査区の北端に位置する。北側が調査区外に及んでおり全容は不明である。検出された範囲での平面形は不整円形を呈し、最大径約2.4mである。断面形は皿状を呈しており、検出面からの深さは0.24mを測る。

出土遺物：おもに土師器、須恵器が出土しているほか、平瓦とみられる小片が1点出土している。146は須恵器の蓋である。回転ヘラケズリによって平坦に仕上げられた天井部は、周縁部でやや段を有したのち端部をほぼ直角に屈曲させてかかりを成形する。口縁部付近の外面及び内面は基本的に回転ナデによって仕上げられているものの、内面の一部にはナデ調整も施されている。147～149は須恵器の甕で、147は口縁部片、148・149は底部片である。147は体部ないし口縁部が内灣気味に立ち上がり、端部付近で僅かに外反する形状を示す。内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。148・149はいずれも内外面ともに回転ナデ調整が施されており、底部は回転糸切りである。149は底部と体部の境界付近にほとんど段を有さず、なだらかに立ち上がる。150は須恵器の壺の口縁部片である。残存状況は良くないものの、頸部ないし口縁部は大きく開きながら外反し、口縁端部付近でさらに外方に引き出される。内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。

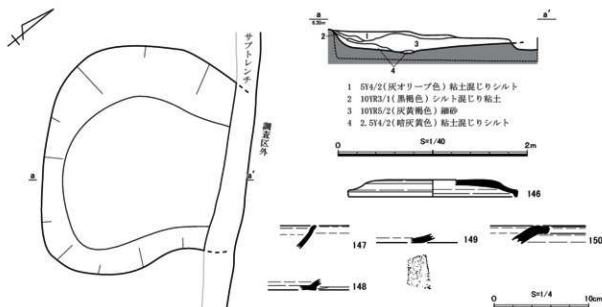


図 87 性格不明遺構 (SX) 6 及び出土遺物

時期：出土遺物には時期幅が認められるが、147～149 などから平安時代後期から鎌倉時代前半頃と推定される。

調査区 1 (第 2 遺構面)

調査区の南端部、中央部、北端部付近では第Ⅲ層が落ち込んでおり、それぞれ凹地状となっていた。この凹地に堆積する第Ⅱ層の下面を第 2 面目の遺構面として調査を行った結果、土坑 10 基、ビット 45 基、溝状遺構 6 条、性格不明遺構 1 基を検出した (図 88)。ここでは便宜的に「南側第 2 遺構面」、「中央第 2 遺構面」、「北側第 2 遺構面」と仮称しておく。

■土坑

土坑 (SK) 11 (図 89、写真 104・105・191)

形態・規模：中央第 2 遺構面で検出した土坑で、調査区中央の南寄り、西壁付近に位置する。多くのビットに切られているものの、平面形は不整形形で、最大径は約 1.3 m である。断面形は幅広の U 字状を呈しており、検出面からの深さは 0.24 m を測る。土坑内の一部では破片となった状態の弥生土器がまがまが出土した。

出土遺物：弥生土器片が多数出土している。ほぼ同一個体のものとみられるが、各破片の接点は少なかった。151 は壺の胴部から口縁部にかけての破片である。頸部は緩やかに外反し口縁端部にいたる。口縁端部は面を有しており、やや凹状を成している。全体的に磨滅しているため調整等は不明瞭であるが、胴部内面の一部にユビオサエの痕跡が残る。胎土の特徴として、1～5 mm の砂礫を多く含んでいる。152 は底部で、全体的に磨滅しているため調整等は不明瞭であるが、底部内面にユビオサエの痕跡が僅かに残る。胎土の特徴として、1～5 mm の砂礫を多く含んでいる。

時期：出土遺物から弥生時代中期前葉頃と考えられる。

土坑 (SK) 12 (図 90、写真 106～109・191)

形態・規模：中央第 2 遺構面で検出した土坑で、調査区中央のやや北寄りに位置する。一部ビットに切られているものの、平面形は不整形形で、長軸約 2.6 m、短軸約 1.9 m を測る。断面形は基本的に

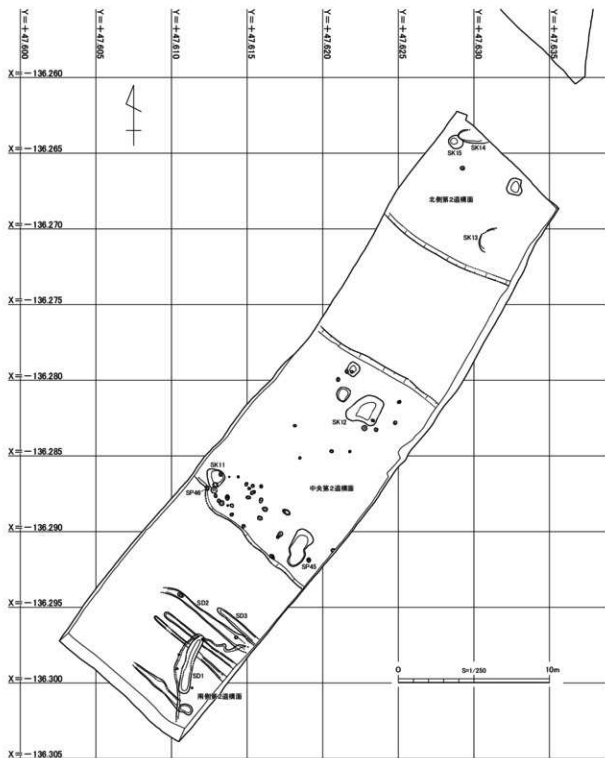
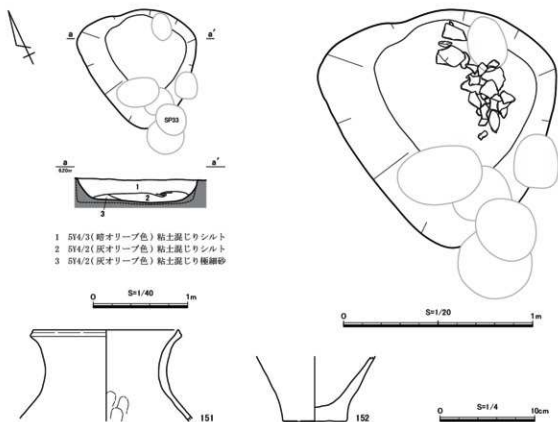


図 88 調査区 1 (第 2 遺構) 遺構平面図

皿状を呈しており、検出面からの深さは 0.41 m を測る。土坑内からは底部などの大きめの破片を含む弥生土器が多数出土した。

出土遺物：弥生土器が出土している。153 は長頸壺の頸部片である。残存状況は良くないものの、内面にはナデ調整が施されており、外面には条数 6 条の櫛描直線文がやや間隔をあけて複数回めぐらされている。154 は壺の肩部付近とみられる胴部片である。内面はナデ調整で、外面には条数 9 条前



- 1 SF4/3(暗オリーブ色)粘土混じりシルト
2 SF4/2(灰オリーブ色)粘土混じりシルト
3 SF4/2(灰オリーブ色)粘土混じり極細砂

図89 土坑(SK)11及び出土遺物

後の櫛描直線文と櫛描波状文が複数回めぐらされている。はっきりとした施文の順序は不明であるが、上側から波状文1帯、直線文1帯、波状文1帯、直線文2帯が確認される。155は甕である。胴部は、やや器壁の厚い底部からなだらかに立ち上がり、中位やや上方に最大径をもつ。内面では頸部付近にナメ方向のハケメ調整が施されているほかはおもにタテ方向にナデ調整されている。一方の外側面はタテ方向のハケメ調整が施されている。口縁部はヨコナデによって如意状に短く外反する形状を呈しており、口縁端部には刻目をめぐらす。156～158は甕ないし壺の底部である。156は底部中央の器壁が薄く、胴部は直線的に立ち上がる。磨滅のため調整等はほとんど確認できないが、底部内面の一部にはユビオサエの痕跡が僅かに残る。157は底部の器壁がやや厚く、胴部は少し外に開きながら立ち上がる。全体的に磨滅しているため内外面ともに調整等は不明瞭であるが、内面では底部にユビオサエの痕跡が残るほか、ナデ調整が施され、外面にはタテ方向のハケメ調整が施されている。158の胴部は器壁の厚い底部から直線的に立ち上がる。内面では底部付近にユビオサエの痕跡が残るほか、ナデ及び板ナデ調整が施されている。一方、胴部外面にはタテ方向のミガキ調整が施されている。

時期：出土遺物から弥生時代中期前半頃と考えられる。

土坑(SK)13(図91、写真110・111・191・192)

形態・規模：北側第2遺構面から検出した土坑で、調査区北側の東寄りに位置する。土層を確認するために設定したサブトレンチなどによって本来の形態や規模は明らかにし得なかったが、残存範囲から推測される平面形は不整形円で、径は約1.7m以上である。断面形は基本的に皿状を呈しており、検出面からの深さは0.30mを測る。土坑内からは弥生土器片が比較的多く出土したほか、底部付近に堆積する第2層には炭化物が多量に含まれていた。

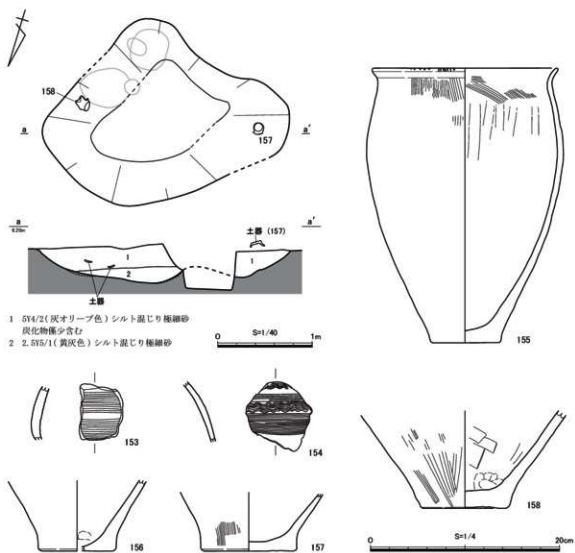


図90 土坑(SK)12及び出土遺物

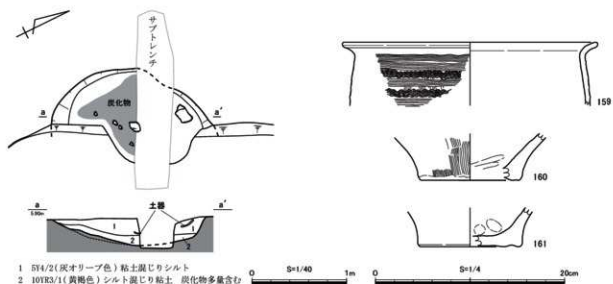


図91 土坑(SK)13及び出土遺物

出土遺物：弥生土器が出土している。159は甕の口縁部である。口縁部はヨコナデによって成形されており、やや内傾しつつ立ち上がる胴部から如意状に外反する。内面はナデ調整で、外面にはタテ方向のハケメ調整が施されたのち、条数7条前後の櫛描直線文と櫛描波状文が施文されている。頸部付近から下方に向かって、直線文2帯、波状文1帯、直線文1帯、波状文1帯、直線文1帯が確認される。160・161は弥生土器の甕もしくは壺の底部である。160は全体的に器壁が厚いつくりのものである。磨滅のため調整等は不明瞭であるが、内面の一部にはナデ調整の痕跡が残り、外面ではタテ方向のハケメ調整が施されている。胎土の特徴として、1～4mmの砂礫を比較的多く含んでいる。161は器壁がやや厚いつくりをしており、胴部は底部から内溝気味に立ち上がる。磨滅のため調整等はほぼ不明であるが、底部内面にはユビオサエの痕跡が残る。胎土の特徴として、1～4mmの砂礫を多く含んでいる。胎土などの特徴から160と161は同一個体の可能性もある。

時期：出土遺物から弥生時代中期前半頃と考えられる。

土坑 (SK) 14 (図 92、写真 112・192)

形態・規模：北側第2遺構内で検出した土坑で、調査区の北端部に位置し、SK15を切っている。北東壁沿いに設定したサブトレンチによって一部記録し得なかったが、平面形は楕円形で、長径1.7m以上、短径約0.9mである。断面形は皿状を呈しており、検出面からの深さは0.11mを測る。西端部の一部で炭化物が集中して確認されたほか、土坑内からは弥生土器片が出土した。

出土遺物：弥生土器が出土している。162～165はいずれも甕の口縁部である。162は胴部に比して頸部が窄まる形状を呈しており、口縁部は「く」の字状に短く外反する。口縁端部は上下に拡張させ、端面には2条の凹線文がめぐらされている。163の口縁部は「く」の字状に短く外反し、口縁端

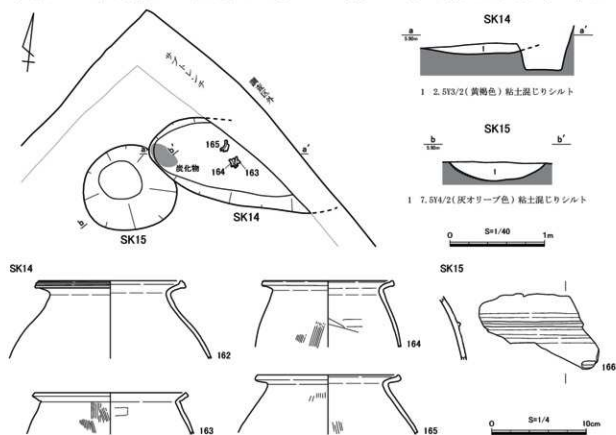


図92 土坑 (SK) 14・15 及び出土遺物

部は面を有する。全体的に磨滅しているため調整等は不明瞭であるものの、胴部内面では板ナデとみられる調整が、外面ではタテ方向のハケメ調整が施されている。164は胴部があまり膨らまないものである。口縁部は「く」の字状に短く外反するとともに、端部を僅かに上方へ拡張させる。全体的に磨滅しているため調整等は不明瞭であるが、胴部内面では板ナデとみられる調整が、外面ではタテ方向のハケメ調整が施されている。165は胴部に比して頸部がやや窄まる形状をしている。口縁部は「く」の字状に短く外反するとともに、端部を上方へ拡張させる。全体的に磨滅しているため調整等は不明瞭であるが、胴部は内外面ともにタテ方向のハケメ調整が施されている。

時期：出土遺物から弥生時代中期後葉頃と考えられる。

土坑 (SK) 15 (図 92、写真 192)

形態・規模：北側第2遺構内で検出した土坑で、調査区の北端部に位置し、SK14に切られている。平面形は円形で、最大径は0.98 mである。断面形は皿状を呈しており、検出面からの深さは0.20 mを測る。

出土遺物：弥生土器が1点出土している。166は弥生土器の壺の胴部片である。外面では水平方向に貼り付けられた断面三角形の突帯が1条残るが、その上下にある剥離痕の存在から、本来は4条の突帯が貼り付けられていたものとみられる。また、水平方向の突帯の下方には曲線状に貼り付けられたであろう突帯の一部が確認できる。

時期：出土遺物から弥生時代中期前葉頃と考えられる。

■ピット

ピット (SP) 45 (図 93、写真 113・192)

形態・規模：中央第2遺構内で検出したピットで、調査区中央の南寄り、東壁付近に位置する。平面形は不整円形で、最大径は0.29 mである。断面形は一部2段状を呈しており、検出面からの深さは0.40 mを測る。

出土遺物：弥生土器が出土している。167は弥生土器の壺の胴部片とみられる。外面にはタテ方向のハケメ調整が施されたのち、条数6条前後の櫛描波状文と櫛描直線文が交互にめぐらされている。

時期：出土遺物から弥生時代中期後半頃と考えられる。

ピット (SP) 46 (図 94、写真 114・115・192)

形態・規模：中央第2遺構内で検出したピットで、調査区中央の南寄り、西壁付近に位置する。平面形は楕円形で、長径0.27 m、短径0.20 mを測る。断面形はU字状を呈しており、検出面からの深さは0.15 mを測る。また、ピット内からは伏せたような状態で須恵器の甕 (168) が出土した。

層序や出土遺物を勘案すると、本来は第2面目の遺構面より上方から掘り込まれたものである可能性が高い。

出土遺物：須恵器の甕が出土している。168

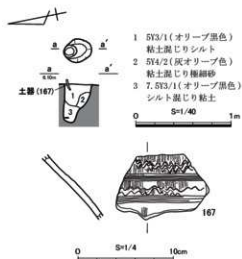


図 93 ピット (SP) 45 及び出土遺物

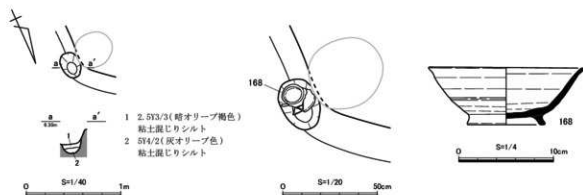


図94 ピット(SP)46及び出土遺物

の体部は直線的に立ち上がったのち、口縁部を短く外反させる。内外面ともに基本的に回転ナデによって仕上げられているが、体部外面の中位には1条の鈍い沈線がめぐらされている。底部外面はヘラ切りのちナデ調整が施されているものとみられ、そこに高さのある高台を貼り付ける。輪高台は外方へ踏ん張る形状をしている。

時期：出土遺物から平安時代中期頃と考えられる。

■溝状遺構

溝状遺構(SD)1(図95・96、写真116～118・192・193)

形態・規模：南側第2遺構面で検出した溝状遺構で、調査区の南端付近に位置する。第1面目の遺構や土層確認用のサブトレンチによって一部確認できなかったところがあるが、検出された範囲での長さは約3.9m、最大幅は0.7m前後である。断面形は場所によって若干の相違があるものの、基本的にU字状を呈しており、検出面からの深さは0.24～0.28mを測る。溝内からは多くの弥生土器が出土しており、特に南半部に集中して認められた。同一個体の土器(172)の破片がやや離れた位置で出土しているほか、ほぼ完形のものも一部欠損した状態で出土していることから、これらの弥生土器は投棄されたものと考えられる。

出土遺物：多くの弥生土器が出土しているが、そのほとんどが甕である。169・170はほぼ完形の甕である。169の胴部は右上がりのタタキによって成形されており、その内面にはおもにナナメ方向のハケメ調整が施されているが、その一部に粘土接合痕を残している。口縁部はヨコナデによって成形されており、端部はややシャープに仕上げられている。また、口縁部の外面には粘土接合痕とともにタタキ調整を施す際に工具の一部が当たったと考えられる痕跡が確認できる。170の胴部は右上がりのタタキによって成形され、その内面にはおもにナナメ方向のハケメ調整が施されている。また、内面では肩部付近に明瞭なユビオサエの痕跡が残っているほか、複数の粘土接合痕が確認される。口縁部はヨコナデによって成形されており、やや内側に彎曲しながら外反し、端部を丸くおさめる。なお、胴部外面の下半部には煤の付着が認められる。171は全体的に不均整なつくりであるが、胴部は右上がりのタタキによって成形されており、やや厚みのある底部から立ち上がる。口縁部はヨコナデによって成形され、胴部との境界からやや外上方にむかって直線的に立ち上がる。一方、内面の調整等については、その一部において工具痕及び粘土接合痕が確認されるほか、ハケメの痕跡が僅かに認められるのみである。172の胴部は肩のはらない形状をしている。外面では右上がりのタタキのちハケメ調整が施されているものの、胴部上半がタテ方向のハケメ調整であるのに対して、その下半にはヨコ方向のハケメ調整が施されている。一方、胴部内面にはヨコないしナナメ方向のハケメ調整が施さ

れている。口縁部はヨコナデによって成形されており、やや内側に彎曲しながら外反し口縁端部にいたる。端部はややシャープに仕上げられている。なお、胴部下半及び口縁端部付近の外面には煤の付着が認められる。173は口縁部片で、口縁部は胴部から比較的緩やかに屈曲し、やや外灣しながら口縁端部にいたる。磨滅のため調整等は不明瞭であるが、胴部はタタキによって成形され、その内面にはケズリが施されている。174の胴部はやや肩のはる形状をしており、口縁部はそこから「く」の字状に屈曲し、やや内側に彎曲しながら外反する。全体的に磨滅しているため調整等は不明瞭であるが、胴部外面の肩部付近では右上がりのタタキ調整のちタテ方向のハケメ調整が施されている。一方の内面は板ナデ調整が施されているものとみられる。175は右上がりのタタキによって成形された胴部で、頸部付近には内外面ともにヨコナデ調整が施されている。内外面ともに複数の粘土接合痕が残っており、特に頸部内面のやや下位において顕著な粘土接合痕がみられる。176～180は弥生土器の底部で、176～178は甕、179は甕ないし壺、180は壺ないし鉢の底部とみられる。176の胴部は右上がりのタタキによって成形されており、内面にはナデ調整が施されている。底部はドーナツ状上げ底とみられ、外面の一部にはユビオサエの痕跡が僅かに残る。177の胴部は右上がりのタタキによって成形されており、内面にはナデ調整が施されている。また、底部中央付近の内面には、底部中央から放射状に伸びた工具痕が残る。底部はドーナツ状上げ底とみられる。178は磨滅のため外面の調整等は不明瞭であるが、内面はナデ調整が施されているものとみられる。また、底部内面には工具痕が残る。179は全体的に磨滅しているため調整等は不明瞭であるが、胴部は底部から比較的なだらかに立ち上がる。底部には木の葉圧痕が残る。180の胴部は底部から大きく開きながら立ち上がる。外面は全体的に磨滅しているが、タテ方向のハケメが僅かに確認できる。一方、内面にはヨコないしナメ方向のハケメ調整が施されている。

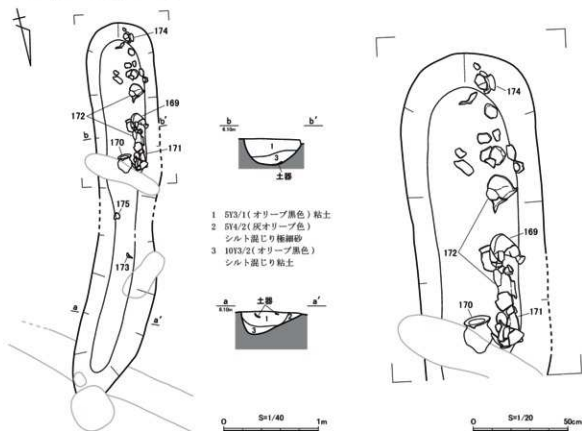


図95 溝(SD)1

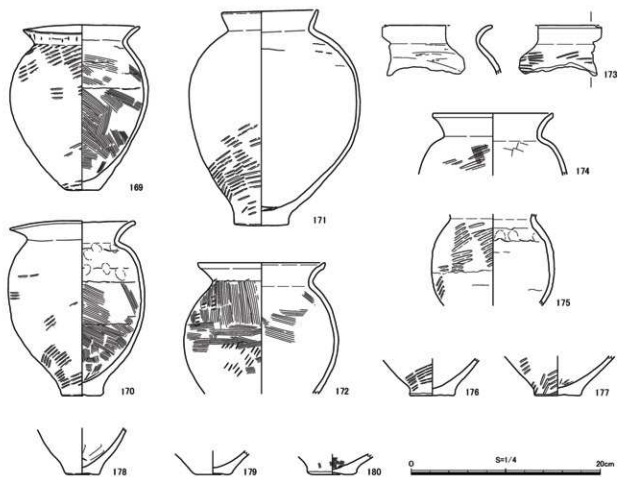


図96 溝(SD)1 出土遺物

時期：出土遺物から弥生時代終末期頃と考えられる。

溝状遺構 (SD) 2 (図97、写真119・193)

形態・規模：調査区の南側に位置し、北西-南東方向に延びる溝状遺構である。大部分が第1面目の遺構面に属しているものの、南東側の一部は南側第2遺構面で検出された。南東側は調査区外に及んでおり、また北西側では溝の延長部分を検出することができていないため本来の形態や規模は明らかにし得ないが、検出された範囲での長さは約6.5m、最大幅は0.92mである。断面形は基本的にU字状を呈しているが、一部2段状を呈する箇所もある。検出面からの深さは0.30m前後を測る。

出土遺物：おもに弥生土器が出土している。181・182はそれぞれ弥生土器の壺の胴部片とみられる。181は残存状況は良くないが、外面には突帯を貼り付けたのち、その上端に連続して刻目が施されている。突帯の上側及び下側にはそれぞれ3条の篦描直線文が残存する。胎土の特徴として、1~3mmの砂礫を比較的多く含んでいる。182は小片のため天地が逆である可能性もあるが、緩やかに彎曲する胴部外面には櫛描直線文、櫛描波状文、櫛描流水文が描かれている。一方の内面はナデ調整である。胎土の特徴として、1~3mmの砂礫を比較的多く含んでいる。

時期：出土遺物から弥生時代中期前葉頃と考えられる。

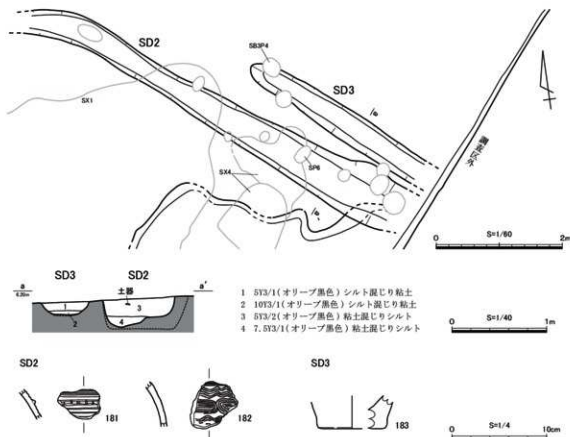


図97 溝(SD)2・3及び出土遺物

溝状遺構 (SD) 3 (図97、写真119)

形態・規模：調査区の南側に位置し、SD2のすぐ北側で検出された溝状遺構である。遺構面としては第1面目の遺構面に属しているが、SD2との類似性から、ここでは第2面目の遺構面として報告する。延長方向はSD2と同様、北西-南東方向である。南東側が調査区外に及んでおり全容は不明であるが、検出された範囲での長さは約3.1m、最大幅は0.48mである。断面形は幅広のU字状を呈しており、検出面からの深さは0.13m前後を測る。

出土遺物：弥生土器が出土している。183は弥生土器の甕などの底部片である。残存状況は良くないが、外面の一部ではナゲとみられる調整が確認される。胎土の特徴として、1～5mmの砂礫を多く含んでいる。

時期：出土遺物によって時期を絞り込むことは難しいが、弥生時代中期前半頃と考えられる。

■遺物包含層等出土遺物 (図98～100、写真193～195)

おもに遺物包含層から出土した遺物のなかで比較的残りが良いものを中心に報告する。細かな出土層位については確認できていないが、184～250、S1がⅡ-1～15層、251がⅡ-14層、252～259がⅡ-17層から出土した遺物である。全体的な対応関係をみておくと、184～250、S1が第1遺構面より上方に堆積する包含層等から出土した遺物、251が南側第2遺構面上に堆積する包含層から出土した遺物、252～259が北側第2遺構面上に堆積する包含層から出土した遺物である。

184～191は弥生土器である。184は広口壺の口縁部片とみられる。磨滅のため調整等是不明であるが、口縁部は内側に彎曲しながら外反し口縁端部にいたる。その端部は丸くおさめる。胎土の特徴として、1～3mmの砂礫を多く含んでいる。185は壺の口縁部である。全体的に磨滅しているため調整等是不明瞭であるが、頸部及び口縁部にはヨコナデ調整が施されている。頸部は胴部から短く立ち上がったのち、外上方に外反し口縁端部にいたる。頸部内面には明瞭な粘土接合痕が残る。口縁部は端部に向かってやや肥厚し、その端部は面を有する。186は高杯の口縁部片である。残存状況は良くないが、水平方向へ拡張したのち下方へほぼ直角に垂下する。屈曲部の直下には1条の凹線文がめぐらされている。187は甕の口縁部片である。磨滅のため全体的に調整等是不明瞭であるが、口縁部はヨコナデ調整が施されており、その端部を外上方に突出させる。内側にも若干突出するが、口縁部はほぼ逆「L」字状を呈している。また、外面では口縁部の直下に櫛描直線文がめぐらされている。188は甕などの底部片である。磨滅のため内外面ともに調整等是不明であるが、胴部はやや厚みのある底部からなだらかに立ち上がる。胎土の特徴として、1～3mmの砂礫を多く含む。189は甕などの底部片である。残存状況は良くないが、外面にはユビオサエの痕跡が僅かに残る。190は壺などの底部である。磨滅のため内外面ともに調整等是不明であるが、比較的器壁が薄いつくりの底部である。191は甕の底部である。全体的に磨滅しているが、外面にはタテ方向のミガキ調整が、内面にはケズリ調整とみられる痕跡が僅かに残る。

192～217は土師器である。192は杯ないし碗である。内外面ともにヨコナデ調整によって仕上げられており、体部ないし口縁部は内灣しながら立ち上がり、口縁端部はややシャープに仕上げられている。なお、外面では粘土接合痕が僅かに確認される。193は皿で、いわゆる暗文土師器である。底部からなだらかに立ち上がる体部は緩やかに外反し口縁端部にいたる。底部はナデ調整、体部ないし口縁部は回転ナデによって仕上げられているものの、体部外面の底部付近には回転ヘラケズリ調整が施されている。体部内面にはナメ方向の暗文が施され、口縁端部の直下には1条の沈線がめぐらされている。194は碗である。内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、全体的に器壁が薄いつくりのものである。体部は内灣気味に立ち上がったのち、口縁部において短く外反する。195は碗である。体部は内灣しながら立ち上がり、口縁部にいたってやや外反する。底部は回転ヘラ切りで、内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。196は皿である。体部はやや肥厚しながら直線的に外反し口縁端部にいたる。内外面ともに口縁部付近はヨコナデによって仕上げられている。197は皿である。底部付近から体部にかけてなだらかに立ち上がったのち、直線的に外反し口縁端部にいたる。口縁部がヨコナデによって仕上げられているほかはナデ調整が施されている。198は皿である。残存状況は良くないが、底部と体部の境界付近に稜をもち、やや内灣しながら外反し口縁端部にいたる。199は皿の口縁部片である。全体的に磨滅しており調整等是不明瞭であるが、内外面ともに回転ナデによって仕上げられているものとみられる。体部ないし口縁部は直線的に立ち上がり、口縁端部直下の内面には凹線状の凹みがめぐらされている。200は皿の口縁部片である。体部ないし口縁部は直線的に外反し口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。磨滅のため内外面ともに調整等是不明である。201は皿である。外面では底部と体部の境界付近に稜をもち、やや内灣しながら立ち上がり口縁端部にいたる。端部は丸くおさめる。磨滅のため内外面ともに調整等是不明である。202は皿である。磨滅のため内外面ともに調整等是不明であるが、体部ないし口縁部は直線的に外反し、口縁端部は丸くおさめる。203は皿である。口縁部はヨコナデによって成形されており、直線的に短く外反する。底部内面はナデ調整が施されているのに対して、底部外面はほとんど調整等が施されていない。204は皿である。ヨコナデによって口縁部は内灣気味に短く立ち上がる。底部内面はナデ調整が

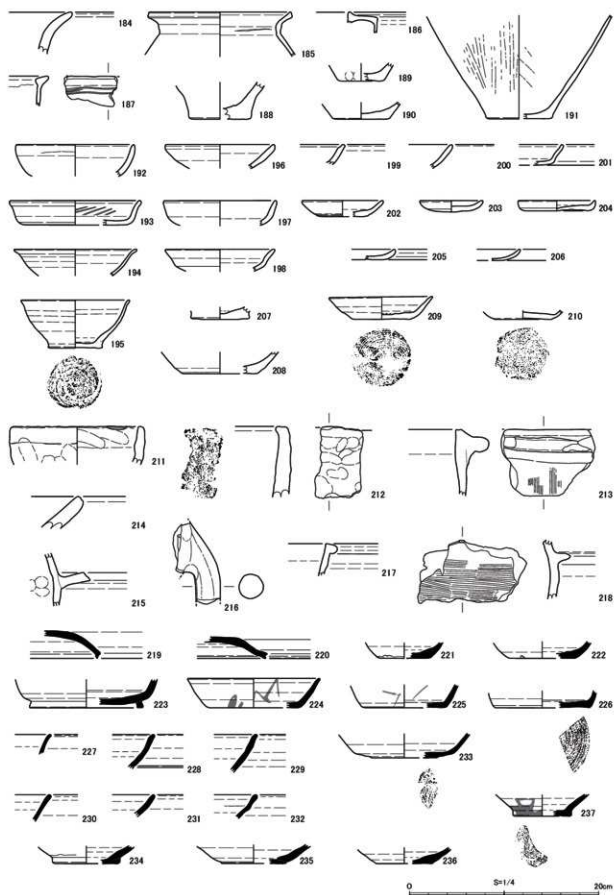


図98 調査区1包含層等出土遺物(1)

施されているのに対して、底部外面にはほとんど調整等が施されておらず、ユビオサエの痕跡が残る。**205**は皿で、内外面ともにナデ調整が施されており、外面にはユビオサエの痕跡が僅かに残る。口縁端部はヨコナデによってややシャープに仕上げられている。**206**は皿である。器壁は薄く、内外面ともにナデ調整が施されており、外面にはユビオサエの痕跡が僅かに残る。**207**は椀の底部とみられる。内外面ともに回転ナデによって仕上げられているものの、底部外面については磨滅のため調整等不明である。**208**は杯の底部片とみられる。全体的に磨滅しているため調整等は不明であるが、体部は底部から内溝気味に立ち上がる。**209**は皿である。体部は直線的に外反し口縁端部にいたる。内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。底部は回転糸切りであるが、その中程に何らかの工具の当たりとみられる直線的な凹みが残る。**210**は杯もしくは皿の底部とみられる。底部が回転糸切りであること以外は、磨滅のため内外面ともに調整等は不明である。**211**は製塩土器の口縁部である。緩やかに立ち上がる口縁部で、内面にはナデ及びヨコナデ調整、外面にはナデ調整が施されており、外面では粘土接合痕が明瞭に確認できる。胎土の特徴として、1～4mmの砂礫を多く含んでいる。**212**は製塩土器の口縁部片とみられる。内面にはうっすらと布目圧痕が残り、外面にはユビオサエとナデの痕跡が明瞭に残る。型作りによるものと考えられる。**213**は羽釜の口縁部片である。胴部は直立気味に立ち上がり口縁端部にいたる。面を有する端部はやや凹状を成している。口縁端部直下の外面に厚みのある銚を水平に貼り付けている。胴部内面はナデ調整、外面はタテ方向のハケメ調整が施され、口縁部付近は内外面ともにヨコナデによって仕上げられている。**214**は鍋の口縁部片である。残存状況が悪く、また磨滅のため調整等は不明であるが、器壁の厚い口縁部は直線的に外反し口縁端部にいたる。端部には若干の面を有する。胎土の特徴として、1mm前後の砂礫を多く含んでいる。**215**は羽釜の銚部片である。胴部外面には厚みのある銚を外上方に向けて貼り付けており、内面にはユビオサエの痕跡が残る。**216**は脚付羽釜の脚部片である。脚部は断面円形で、ナデによって丁寧な成形されており、その一部には煤が付着している。**217**は鍋の口縁部片で、内外面ともにヨコナデ調整が施されており、口縁端部は玉縁状を呈する。

218は瓦質土器とみられる羽釜の胴部から口縁部にかけての破片である。全体的に内溝しながら立ち上がり、短い銚をほぼ水平に貼り付けている。胴部内面にはヨコ方向のハケメ調整が施され、外面にはユビオサエの痕跡が僅かに残る。また、銚部下面及び胴部外面には煤が付着している。

219～247は須恵器である。**219**は蓋である。内外面ともに基本的に回転ナデによって仕上げられているが、内面の一部にはナデ調整が施されている。口縁端部はかなりシャープに成形されている。**220**は蓋である。天井部は笠形を呈し、口縁端部付近に若干の平坦面をもつ。その端面には凹線状の凹みがめぐらされているとともに、若干のかがりが成形されている。天井部外面に回転ヘラケズリが施されているほかは回転ナデによって仕上げられている。なお、口縁端部付近の外面平坦面には自然釉が円を描くように付着する。**221**は杯の底部片である。内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、体部は底部から緩やかに立ち上がる。底部は回転ヘラ切りとみられる。**222**は杯の底部片とみられる。残存状況は良くないが、内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。なお、底部外面の一部に工具の当たりとみられる痕跡が残る。**223**は杯の底部である。杯部は全体的に器壁が厚いつくりをしており、体部は底部との境界付近でやや明瞭に屈曲して立ち上がる。内外面ともに回転ナデによって仕上げられているものの、内面の一部にはナデ調整が施されている。底部は回転ヘラ切りののち、やや高さのある高台を若干内側に貼り付ける。**224**は杯で、内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。底部は回転ヘラ切り後、ナデ調整が施されているとみられる。また、内外面では火押痕が認められる。**225**は杯の底部片である。体部は底部から明瞭に屈曲して外上方に立ち上がり、

内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。底部は回転ヘラ切りののち、その外側部分にのみナデ調整を施す。内外面では火瘡痕が認められる。精良な胎土によって製作されている。226は杯の底部片とみられる。体部は平坦な底部から急な角度で立ち上がる。体部は内外面ともに基本的に回転ナデによって仕上げられているが、外面では底部付近に回転ヘラケズリ調整が施されている。底部は回転ヘラケズリによって仕上げられている。胎土は精良である。227は杯の口縁部片とみられる。内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、緩やかに外反する体部ないし口縁部は、口縁端部においてやや強めに外反する形状を示す。全体的に器壁が薄く、精良な胎土を特徴とする。228は碗である。内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、体部外面には1条の沈線がめぐらされている。229は碗の口縁部片である。体部は直線的に立ち上がり、やや外反する口縁端部をもつ。内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。230は碗の口縁部片である。体部ないし口縁部は直線的に外反し端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。231は碗の口縁部片である。残存状況は良くないが、内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、端部は丸くおさめる。232は皿の口縁部片とみられる。内外面ともに回転ナデによって仕上げられているが、口縁端部のやや下位の外面には凹凸が認められる。口縁端部は丸くおさめる。233は杯の底部片とみられる。底部は静止糸切りとみられ、内外面ともに回転ナデによって仕上げられているが、底部内面の一部には回転ナデののちナデ調整が施されている。234は碗の底部である。内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、体部は底部からなだらかに立ち上がる。底部は回転糸切りとみられる。なお、外面の一部には粘土接合痕が残る。235は碗の底部片である。内面では底部から体部に立ち上がる場所に若干の段を有する。底部は回転糸切りで、内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。236は碗の底部片である。底部から体部にかけての立ち上がりは比較的なだらかで、体部は内溝気味に立ち上がる。全体的に磨滅しているため調整等は不明瞭であるものの、内外面ともに回転ナデが施されているものとみられる。237は碗の底部である。底部は回転糸切りで、内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。内面では底部から体部に立ち上がる場所に若干の段を有する。外面では火瘡痕が認められる。238は碗の底部である。底部から体部に立ち上がる場所に段を有し、体部は内溝しながら立ち上がる。内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、底部は回転ヘラ切りである。239は碗の底部である。内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、内面では底部から体部に立ち上がる場所に若干の段を有する。底部は回転糸切りであるが、一部に何らかの工具等の当たりとみられる直線状の痕跡が残る。240は碗の底部である。内面では底部と体部の境界付近に若干の段を有するものの、比較的なだらかである。内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、底部は回転糸切りである。241は碗の底部である。内面では底部と体部の境界付近に若干の段を有する。内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、底部は回転糸切りである。242は皿である。内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、体部ないし口縁部はやや内溝しながら緩やかに立ち上がる。また、口縁端部は丸くおさめる。底部は回転糸切りである。243～247は鉢で、243～246が口縁部、247が底部である。243は内外面ともにナデ調整が施されているとみられる。口縁部はヨコナデによって仕上げられており、端部にむかってにぶく肥厚する。244の体部は直線的に外反するとともに口縁部に向かってやや肥厚しており、その端部は上方へ若干つまみ上げられている。内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。245の体部は直線的に外反し口縁端部を玉縁状に仕上げる。内外面ともに基本的に回転ナデによって仕上げられているが、内面には回転ナデののちナデ調整が施されている。246は内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。口縁端部は上下に肥厚する。247は底部から体部にかけてなだらかに立ち上がる。全体的に磨滅しており

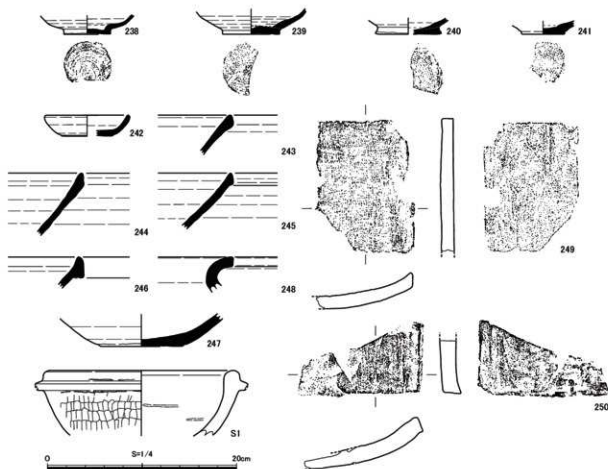


図99 調査区1包含層等出土遺物(2)

調整等是不明瞭であるが、体部外面には回転ナデ調整が施されているものとみられる。248は甕の頸部から口縁部にかけての破片である。ヨコナデによって緩やかに外反し、端部は面をもつ。全体的に焼成不良な個体である。

249・250は平瓦片である。249の凹面には布目圧痕が残る。凸面、側面及び端面はケズリによって平滑に仕上げられており、凸面にはさらにナデ調整が施されている。250の凹面には布目圧痕が残る。凸面はタタキのちナデ調整が施されている。側面と端面はケズリによって平滑に仕上げられている。

S1は石鏝で、石材は滑石とみられる。胴部は内灣しながら立ち上がり、口縁端部にいたる。胴部外面は丁寧な削りが施され、口縁端部のやや下位には鏝が削り出されている。胴部内面ないし口縁部は光沢をもつほどの丁寧な磨きが施されている。鏝部下面及び胴部外面には煤が付着している。

251～259は弥生土器である。251は壺あるいは鉢の底部片である。やや厚みのある底部から内灣気味に胴部が立ち上がる。磨滅のため調整等是不明瞭であるが、内面の一部にナデとみられる調整が施されている。252は蓋である。口縁部を欠くものの、体部は厚みのある頂部からやや内側に彎曲しながら口縁部に向かって大きく開いている。頂部は皿状に凹む。内外面ともにハケメ調整ののち、丁寧なナデ調整が施されている。また、頂部付近の体部外面には連続的なユビオサエの痕跡が残る。253は甕の口縁部である。胴部は緩やかに立ち上がり、口縁部はヨコナデによって如意状に短く外反する。胴部内面はナデ調整が施され、外面にはタテ方向のハケメ調整ののち、口縁部のやや下位に6条の篋描直線文がめぐらされている。胎土の特徴として、1～4mmの砂礫を多く含む。254は甕の底部である。胴部は底部からなだらかに立ち上がる。磨滅のため内外面ともに調整等是不明瞭であるが、

外面はタテ方向のハケメ調整が施されている。胎土の特徴として、1～4mmの砂礫を多く含んでいる。**255**は壺である。胴部の径に比して頸部がかなり細くなる形状を呈する。内面にはナデ調整が施されているものの、ユビオサエの痕跡が各所に残っている。外面では、肩部付近を境にして下方にはヨコ方向のハケメ調整が、上方にはタテ方向のハケメ調整が施されている。また、頸部には、やや幅広で一定の深さをもつ条数5条の櫛描直線文がやや間隔をあけてめぐらされている。**256**は壺の頸部片で、口縁部寄りの破片とみられる。口縁部に向かって大きく開く形状を呈しており、内面はナデ調整、外面はタテ方向のハケメ調整が施されている。また、外面の下側では3条の篋描直線文が確認できる。**257**は壺の胴部から頸部にかけての破片である。緩やかに内側に彎曲しながら立ち上がる。内面にはナデ調整が施され、外面では確認できる範囲で9条の篋描直線文がめぐらされている。ただ、この直線文については、2条を一単位とする何らかの工具によって施文された可能性もある。胎土の特徴として、1～4mmの砂礫を多く含んでいる。**258**は壺の底部で、器壁がやや厚いつくりをしている。胴部外面では、底部付近にタテ方向のハケメ調整、その上方にヨコ方向のハケメ調整が施されている。一方、内面では、底部付近にユビオサエの痕跡が僅かに残るものの、全体的に磨滅しているため調整等は不明瞭である。胎土の特徴として、1～4mmの砂礫を比較的多く含んでいる。**259**は甕などの底部である。磨滅のため内外面ともに調整等は不明瞭であるが、外面にはナデ調整が施されているものとみられる。胎土の特徴として、1～5mmの砂礫を多く含んでいる。

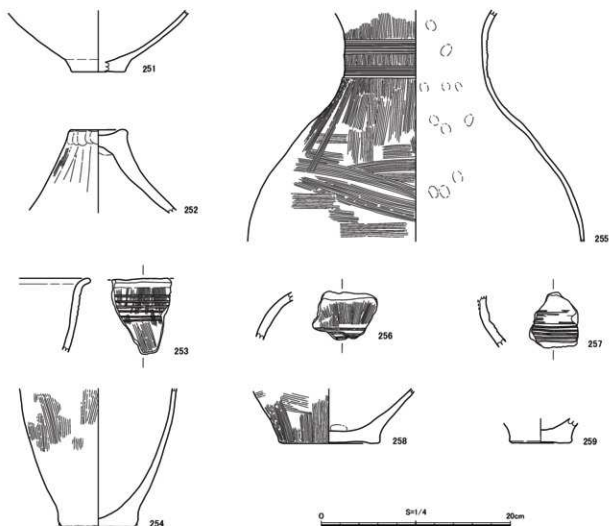


図100 調査区1下層包含層出土遺物

b) 調査区 2

調査区 2 (第 1 遺構面)

検出できた遺構の種類と数量は、掘立柱建物 2 棟、柵 2 列、土坑 11 基、ピット 65 基、溝状遺構 8 条である (図 101)。なお、調査区 2 の北側で遺構の一部が確認された SB9 と SD10 については大部分が調査区 3 において検出されているため次項で述べる。

■ 掘立柱建物

掘立柱建物 (SB) 8 (図 102、写真 121 ~ 126・195)

形態・規模：調査区中央のやや南側、西壁沿いに位置し、北側には SA2・SA3 が存在する。西側が調査区外に及んでいるため全容は不明である。現状では桁行と梁行の方向を明らかにし難いが、桁行または梁行がそれぞれ 2 間と 2 間以上になる総柱建物と考えられる。また、P5 では柱の据え直しが行われているものとみられ、その切り合い関係から P5-1 から P5-2 へ据え直しが行われたものと判

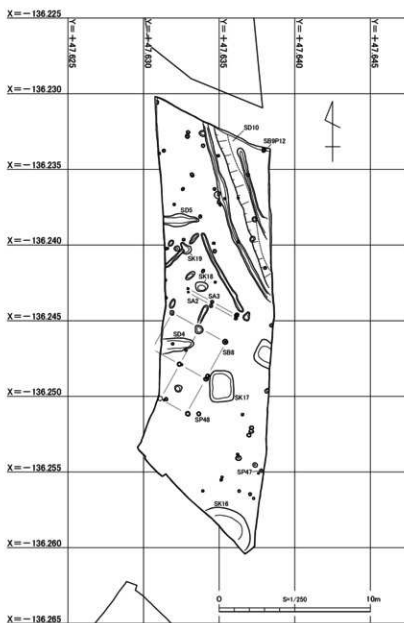


図 101 調査区 2 (第 1 遺構面) 遺構平面図



図102 掘立柱建物(SB)8及び出土遺物

断される。柱間は、P5の建て替え前と建て替え後で若干の相違があり、建て替え前で1.9～2.8m、建て替え後で1.9～2.7mを測る。東辺の柱穴を基準とした建物方位はN-27°-E、北辺の柱穴を基準とした建物方位はN-63°-Wを示す。柱穴の平面形はおもに円形を呈しており、長径は0.26～0.35mであるが、柱の抜き取りが行われているとみられるP2の平面形は重なる円形で長径0.58mを測る。断面形はおもにU字状を呈しているが、P3のように2段状を呈するもの存在している。深さは検出面の高さの違いによって相違するが、0.08～0.27mを測る。P3・P4・P5-1・P6では柱痕跡が確認された。なお、後述するSA2・SA3は当該建物に伴う櫓である可能性が高い。

出土遺物：おもに土師器、須恵器が出土している。260は須恵器の碗の口縁部片である。体部ないし口縁部は内灣気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。

時期：出土遺物からは平安時代後期頃と考えられるが、建物方位などを参考にとすると、後述するSB9とほぼ同時期の建物である可能性もあるため、平安時代後期から鎌倉時代頃と判断しておく。

■櫓

櫓(SA)2(図103、写真127・128)

形態・規模：調査区のほぼ中央に位置し、SB8の北側で検出された柱穴列である。主軸方位はN-63°-Wで、現状では3基の柱穴が1.7～1.9m間隔で並んでいる。柱穴の平面形は基本的に円形で、最大径は0.12～0.21mである。断面形はU字状ないし皿状を呈しており、検出面からの深さは0.06～0.08mを測る。柱穴列の配置や主軸方位から推測すると、SB8と関連のある櫓と考えられる。

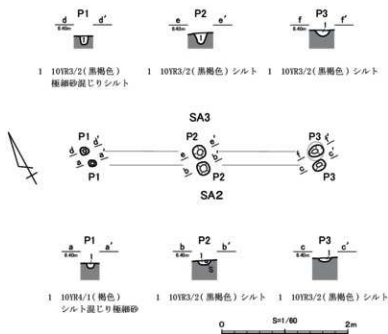


図103 櫛(SA)2・3

また、新旧関係は明らかにできなかったが、SA3とは建て替えの関係にあるものと考えられる。

出土遺物：土器片が僅かに出土しているのみである。

時期：出土遺物によって時期を決定することは難しいが、配置や主軸方位を参考にすると、SBSと関連のある櫛と考えられることから平安時代後期から鎌倉時代頃と推定される。

櫛(SA)3(図103、写真127・128)

形態・規模：調査区のほぼ中央に位置し、SA2に隣接して検出された柱穴列である。現状では3基の柱穴が1.8m間隔で並んでおり、主軸方位はSA2と同様、N-63°-Wである。柱穴の平面形は基本的に円形で、最大径は0.14～0.23mである。断面形はU字状ないし皿状を呈しており、検出面からの深さは0.10～0.18mを測る。

出土遺物：須恵器などの小片が僅かに出土しているのみである。

時期：出土遺物によって時期を決定することは難しいが、配置や主軸方位を参考にすると、SA2と同様、平安時代後期から鎌倉時代頃と推定される。

■土坑

土坑(SK)16(図104、写真129・195)

形態・規模：調査区の南端に位置する。南西側が調査区外に及んでおり全容は不明であるが、検出された範囲での平面形は円形で、最大径は約3.6mである。断面形は皿状を呈しており、検出面からの深さは0.48mを測る。ただ、土坑内に堆積する埋土のうち、最も新しい時期に堆積した第1層は遺物包含層に対応する。

出土遺物：弥生土器が出土している。261は弥生土器の広口壺である。頸部ないし口縁部は、球状を呈する胴部から「く」の字状に外反し口縁端部にいたる。端部は玉縁状をなす。胴部内面にはユビオサエの痕跡が明瞭に残るとともに、その一部で粘土接合痕が確認される。一方の外面では、やや右

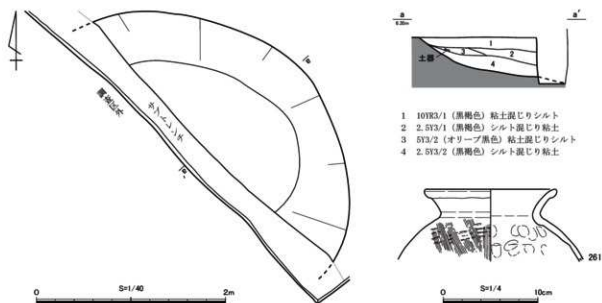


図104 土坑(SK)16及び出土遺物

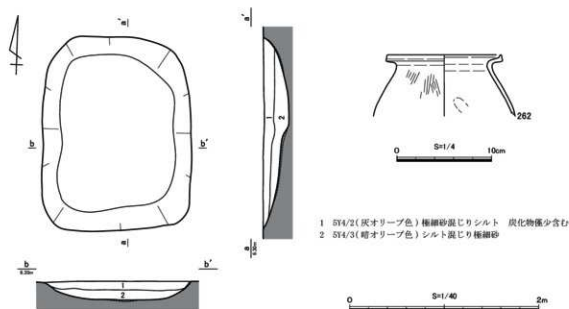


図105 土坑(SK)17及び出土遺物

上りのタタキ調整のち、タテ方向のハケメ調整が施されている。

時期：出土遺物から弥生時代後期から終末期頃と考えられる。

土坑 (SK) 17 (図 105、写真 195)

形態・規模：調査区南半のほぼ中央に位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸約 2.1 m、短軸約 1.6 m を測る。断面形は皿状を呈しており、検出面からの深さは 0.28 m を測る。

出土遺物：弥生土器が出土している。262 は弥生土器の甕の口縁部である。胴部は全体的に器壁が薄く、あまり肩のはらない形状をしている。口縁部はヨコナデによって「く」の字状に短く外反する。口縁端部は面を有するとともに、その上端を上方へ拡張させる。このほか、胴部内面にはユビオサエとみられる痕跡が僅かに残り、胴部外面ではタテ方向のハケメ調整が施されている。

時期：出土遺物から弥生時代中期後葉頃と考えられる。

土坑 (SK) 18 (図 106、写真 195)

形態・規模：調査区中央のやや北寄りに位置する。平面形は不整形円形で、長径約 0.8 m、短径約 0.6 m を測る。断面形は緩やかな U 字状を呈しており、検出面からの深さは 0.41 m を測る。

出土遺物：弥生土器が出土している。

263 は弥生土器の壺などの底部とみられる。胴部は、器壁の厚い底部から比較的なだらかに立ち上がる。磨滅のため調整等は不明瞭であるが、内面にはおもにナデ調整が施され、外面にはタテ方向のハケメ調整が施されている。胎土の特徴として、1～5 mm の砂礫を比較的多く含んでいる。

時期：出土遺物から弥生時代中期前半頃と考えられる。

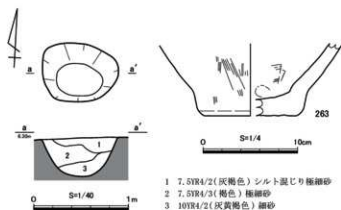


図 106 土坑 (SK) 18 及び出土遺物

土坑 (SK) 19 (図 107、写真 130・195)

形態・規模：調査区中央の北寄り、西壁付近に位置する。平面形は不整形で、長軸約 0.9 m、短軸約 0.6 m を測る。断面形は基本的に皿状を呈しており、検出面からの深さは 0.18 m を測る。土坑内からは比較的大きめの破片を含む弥生土器が北側と南側の 2 か所に分かれて出土した。

出土遺物：弥生土器が出土している。264 は弥生土器の甕である。底部を欠いているものの、胴部は上方に向かって緩やかに立ち上がり、その上端部分を外方へ短く折り曲げて口縁部とする。磨滅のため上半部の調整等については不明であるが、胴部内面にはナデ調整、外面にはタテ方向のハケメ調整が施されている。胎土の特徴として、1～4 mm の砂礫を比較的多く含んでいる。265 は弥生土器の甕などの底部である。胴部は中央付近の器壁が薄い底部からなだらかに立ち上がる。内面では底部付近にユビオサエの痕跡が残るほか、丁寧なナデ調整が施されている。外面では板ナデ調整が施されて

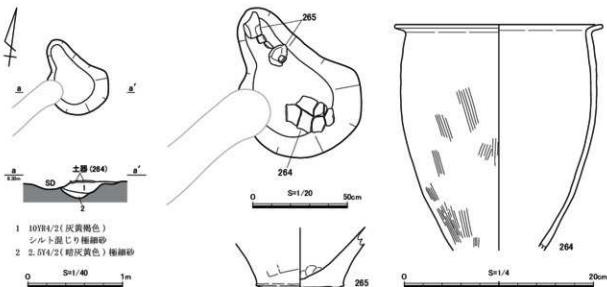


図 107 土坑 (SK) 19 及び出土遺物

いるものとみられる。

時期：出土遺物から弥生時代中期前半頃と考えられる。

■ピット

ピット (SP) 47 (図 108)

形態・規模：調査区の南側、東壁付近に位置する。平面形は円形で、最大径は0.22 mである。断面形はU字状を呈しており、検出面からの深さは0.24 mを測る。

出土遺物：土師器、須恵器が出土している。266は須恵器の柄の底部である。器壁がほぼ均一なつくりのもので、体部は底部からなだらかに立ち上がったのち直線的に外反する。内外面ともに基本的に回転ナデによって仕上げられており、底部は回転糸切りである。

時期：出土遺物から平安時代後期から鎌倉時代前半頃と考えられる。

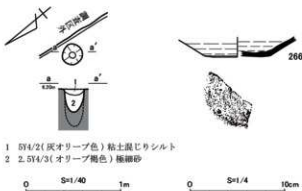


図 108 ピット (SP) 47 及び出土遺物

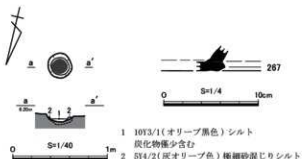


図 109 ピット (SP) 48 及び出土遺物

ピット (SP) 48 (図 109、写真 196)

形態・規模：調査区の南側に位置する。平面形は円形で、最大径は0.26 mである。断面形は皿状を呈しており、検出面からの深さは0.09 mを測る。柱痕跡が確認されている。

出土遺物：おもに須恵器片が出土している。267は須恵器の鉢あるいは壺の底部片とみられる。残存状況は良くないが、端面にシャープな稜をもつ円盤状の粘土板を底部とし、その上面に粘土を積み上げて胴部を成形している。胴部は内外面ともに回転ナデ調整が施されているものとみられる。

時期：出土遺物から時期を絞り込むことは難しいが、平安時代中期から後期頃と考えられる。

■溝状遺構

溝状遺構 (SD) 4 (図 110、写真 131・132・196)

形態・規模：調査区中央のやや北寄り、西壁沿いに位置する。西側が調査区外に及んでおり全容は不明であるが、西・東方向に延びる溝状遺構である。検出された範囲での長さは約1.8 m、最大幅は0.96 mである。断面形は皿状を呈しており、検出面からの深さは0.28 m前後を測る。溝内の東端付近からは弥生土器の底部 (268) が出土した。

出土遺物：弥生土器が出土している。268は弥生土器の甕もしくは壺の底部である。胴部は、器壁の厚い底部から少し外に開きながら立ち上がる。磨滅のため調整等是不明瞭であるが、底部内面にはユビオサエの痕跡が残る。胎土の特徴として、1~5 mmの砂礫を多く含んでいる。

時期：出土遺物から弥生時代中期前半頃と考えられる。

溝状遺構 (SD) 5 (図 111、写真 196)

形態・規模：調査区北半のほぼ中央、西壁沿いに位置する。西側が調査区外に及んでおり全容は不

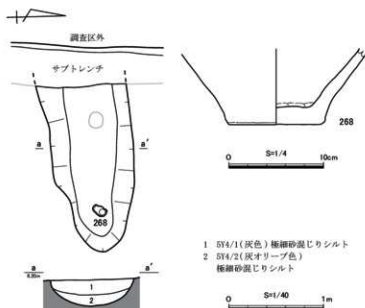


図110 溝(SD)4及び出土遺物

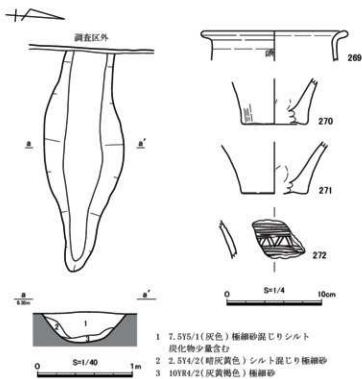


図111 溝(SD)5及び出土遺物

明であるが、SD4と同様、西・東方向に延びる溝状遺構である。検出された範囲での長さは2.33 m、最大幅は0.85 mである。断面形は壁面が緩やかに立ち上がるU字状を呈しており、検出面からの深さは0.32 m前後を測る。

出土遺物：小片ではあるが、比較的多数の弥生土器片が出土しているほか、微小なサヌカイト片が出土している。269は甕の口縁部片とみられる。ほぼ直上に立ち上がる胴部を短く折り曲げて口縁部としており、全体的に厚ぼったい形状をしている。磨滅のため調整等は不明瞭であるが、口縁部がヨコナデによって仕上げられているほか、胴部外面にはタテ方向のハケメ調整が施されているものと

みられる。胎土の特徴として、1～4mmの砂礫を多く含んでいる。270・271は甕の底部とみられる。270の胴部はやや器壁の厚い底部からなだらかに立ち上がる。磨滅のため調整等は不明瞭であるが、内面では底部付近にユビオサエの痕跡が僅かに残り、胴部外面ではタテ方向のハケメ調整が施されている。また、底部外面では縁辺のやや内側にユビオサエが施されている。胎土の特徴として、1～4mmの砂礫を多く含む。271の底部は中央付近の器壁が薄くなっているものとみられ、胴部はそこからなだらかに立ち上がる。磨滅のため調整等はほぼ不明であるが、内面では底部付近にユビオサエの痕跡が僅かに残り、また、底部外面では縁辺のやや内側にユビオサエを施している。胎土の特徴として、1～3mmの砂礫を多く含む。272は壺の胴部片とみられる。残存状況は良くないが、内面ではナデ調整が施されているものとみられ、外面では条数2条の櫛描鋸歯文の上下に条数3条前後の櫛描直線文をめぐらせている。胎土の特徴として、1～4mmの砂礫を多く含む。

時期：出土遺物から弥生時代中期前葉頃と考えられる。

調査区2（第2遺構面）

調査区の南端付近に厚く堆積した遺物包含層の下面を第2遺構面として調査を行った結果、土坑2基、ビット1基を検出した（図112）。

■土坑

土坑（SK）20（図113、写真134・196）

形態・規模：調査区の南側、第2遺構面の北寄りに位置する。平面形は円形で、最大径は0.41mである。断面形は緩やかなU字状を呈しており、検出面からの深さは0.18mを測る。土坑内からはやや大きめの弥生土器の破片がまとまって出土した。

出土遺物：弥生土器が出土している。273は壺の頸部から口縁部にかけての破片である。全体的に器壁が厚く、頸部は緩やかに内側へ彎曲しながら外反し口縁端部にいたる。面を有する端部には刻目を施す。磨滅のため調整等は不明瞭であるが、頸部外面には櫛描直線文がめぐらされており、現状では10条の直線文が残存する。胎土の特徴として、1～6mmの砂礫を多く含んでいる。274は壺の口縁部である。頸部ないし口縁部は、胴部から若干内側に彎曲したのち緩やかに外反し口縁端部にいたる。端部は丸くおさめる。磨滅のため調整等は不明瞭であるが、外面では頸部付近に櫛描直線文と櫛描波状文がめぐらされている。胎土の特徴として、1～4mmの砂礫を多く含んでいる。なお、外面の一部には昆虫の圧痕とみられる凹みが確認される。275は甕などの底部とみられる。底部の器壁が著しく厚く、胴部はやや開きながら立ち上がる。磨滅のため調整等は不明瞭であるが、底部内面付近にはユビオサエの痕跡とともに粘土接合痕が確認され、外面ではタテ方向のハケメ調整が施されている。胎土の特徴として、1～5mmの砂礫を多く含んでいる。

時期：出土遺物から弥生時代中期前葉頃と考えられる。

■ビット

ビット（SP）49（図114、写真135・196）

形態・規模：調査区の南側、第2遺構面の南寄りに位置する。平面形は円形で、最大径は0.29mである。断面形は皿状を呈しており、検出面からの深さは0.06mを測る。底部付近から弥生土器の水差のやや大きめの破片が出土した。

出土遺物：弥生土器の水差が出土している。276の胴部は口縁部に比して著しく膨らみ、肩部に幅2.9cm前後の粘土板を貼り付けて把手とする。頸部は胴部からほぼ真上に立ち上がり口縁端部にいた

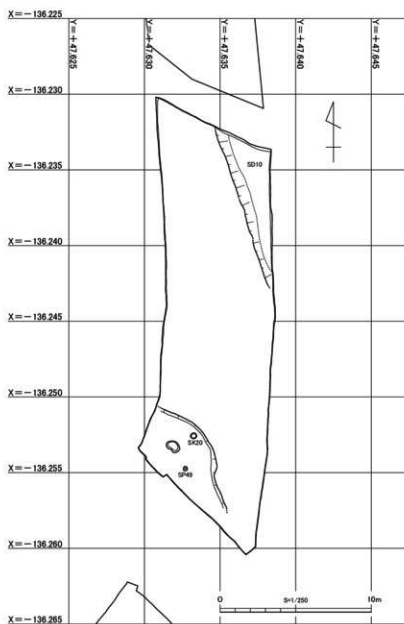


図 112 調査区 2 (第 2 遺構面) 遺構平面図

る。端部には若干の面を有する。磨滅のため調整等是不明瞭であるが、胴部内面では最大径をもつ付近を境として、下半にタテ方向のケズリ調整、上半にナナメ方向のハケメ調整が施されている。一方、外面ではナナメ方向のハケメ調整が施されている。また、頸部外面には 7 条の凹線文をめぐらせている。

時期：出土遺物から弥生時代中期後葉頃と考えられる。

■ 遺物包含層等出土遺物 (図 115・116、写真 196)

調査区 1 と同様、細かな出土層位について確認することはできていないが、277～289、S 2 が I - 1・2 層、II - 1～4 層、290 が II - 5 層から出土した遺物である。全体的な対応関係をみておくと、277～289、S 2 が第 1 遺構面より上方に堆積する包含層等から出土した遺物、290 が調査区南側の第 2 遺構面上に堆積する包含層から出土した遺物である。

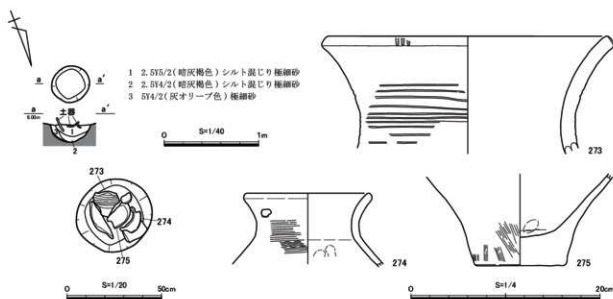


図113 土坑(SK)20及び出土遺物

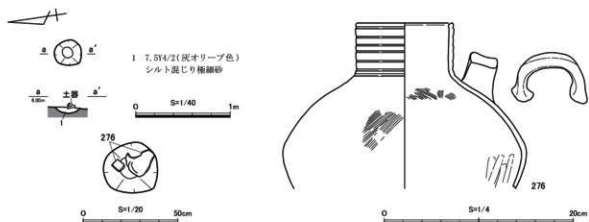


図114 ピット(SP)49及び出土遺物

277～282は弥生土器である。277は甕の胴部から口縁部にかけての破片である。やや内溝しながらほぼ直上に立ち上がり、端部を短く外反させて口縁部となす。磨滅のため調整等は不明瞭であるが、内面ではタテ方向のハケメ調整ののち板ナデ調整が施されているものとみられる。外面では頸部付近に僅かにユビオサエの痕跡が残っている。胎土の特徴として、1～3mmの砂礫を多く含む。278は甕の口縁部片である。小片のため傾きについては若干変わる可能性があるが、胴部は内傾気味に立ち上がるものとみられ、上端には粘土紐を外方に貼り付けて逆L字状の口縁部としており、口縁部やや下方の胴部外面には条数5条前後の櫛描直線文が複数回めぐらされている。胎土の特徴として、1～4mmの砂礫を比較的多く含む。279は甕の口縁部である。口縁部は「く」の字状に短く外反する。口縁端部は若干肥厚するとともに、その上端を上方へ拉張させており、面を有する端部には3条の凹線文がめぐらされている。全体的に磨滅しているため調整等は不明瞭であるが、胴部外面ではヨコ方向のタタキ調整ののち、タテ方向のハケメ調整が施されているとみられる。280は二重口縁壺の口縁部片とみられる。磨滅のため調整等は不明であるが、口縁部は内側に彎曲しながら外反し、その端部はややシャープに仕上げられている。281は器種不明であるが、何らかの底部片とみられる。底部は外方に大きく開き、台状を呈する。磨滅のため調整等は不明瞭であるが、外面にはタテ方向のハケメ調整

が施されている。ただ、当該資料については天地が逆の可能性もあり、その場合は高杯などの脚部とみられる。282は脚部である。上部の器形は今一つ判然としないが、高杯であろうか。非常に厚重なつくりのもので、ほぼ円柱状を呈する脚部から「八」の字状に短く開く底部をもつ。内外面ともにナデ調整が施されており、底部の付け根付近には円形の透孔が3か所以上に穿孔されている。

283～288は須恵器である。283は杯である。体部ないし口縁部は直線的に外反し口縁端部にいたる。内外面ともに回転ナデによって仕上げられているが、底部内面の一部には回転ナデののちナデ調整が施されている。底部は回転ヘラ切りである。284は皿である。体部ないし口縁部は直線的に短く外反し、口縁端部はややシャープに仕上げられている。内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、底部は回転ヘラ切りとみられる。内外面では火燦痕が認められる。285は椀ないし皿の底部片とみられる。体部は内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、底部には若干高さのある高台を貼り付けている。ただ、底部の調整等については不明である。286は椀の底部である。底部は回転糸切りで、体部は平坦な底部から若干内灣しながら緩やかに立ち上がる。内外面ともに基本的に回転ナデによって仕上げられているものとみられるが、底部内面にはヘラ状工具もしくはコテ状工具による螺旋状の成形痕ないし調整痕が残る。このような特徴から、久留美窯跡群で生産されたものの可能性がある。287は皿である。内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、体部ないし口縁部は直線的に外反し、口縁端部は丸くおさめる。底部は回転糸切りである。288は皿の底部片とみられる。体部はやや器壁が薄い底部中央付近から直線的に外反する。内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、底部は回転糸切りとみられる。

289は土師器の托の底部とみられる。体部は平坦な底部からほぼ真上に立ち上がる形状を示している。磨滅のため調整等は不明瞭であるが、内外面ともに回転ナデによって仕上げられているものとみ

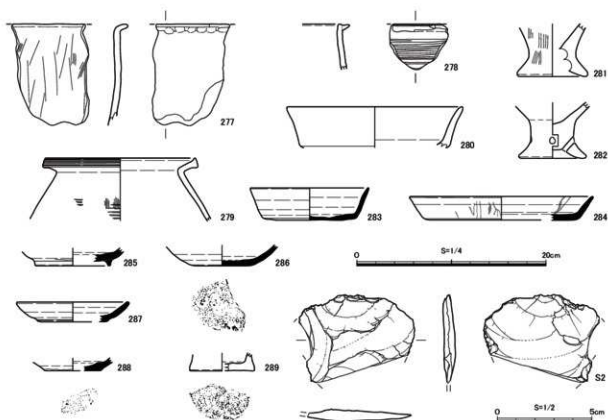


図115 調査区2包含層等出土遺物

られる。底部は回転系切りである。

S 2はサヌカイトの二次加工剥片とみられる。一部欠損箇所がみられるものの、石核から剝離したのち腹面の縁辺に微細な加工を施している。

290は弥生土器の壺などの底部とみられる。磨滅のため調整等は不明であるが、底部は中央付近の器壁が薄く、胴部はなだらかに開きながら立ち上がる。



図116 調査区2下層包含層出土遺物

c) 調査区3

調査区3 (第1遺構面)

検出できた遺構の種類と数量は、掘立柱建物1棟、柵3列、土坑5基、ピット51基、溝状遺構4条、性格不明遺構1基である(図117)。

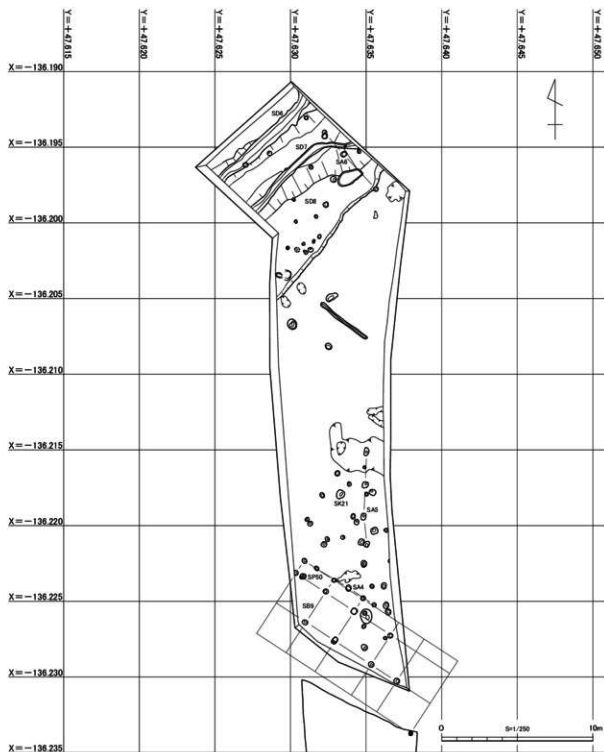


図117 調査区3(第1遺構面)遺構平面図

■掘立柱建物

掘立柱建物 (SB) 9 (図 118 ~ 120、写真 138 ~ 153・197)

形態・規模：調査区3の南端部から調査区2の北端付近にかけて検出された掘立柱建物である。北西側と南東側が調査区外に及んでいるため全容は不明であるが、建物の北東辺平側に庇がつく桁行5間以上、梁行3間の総柱建物とみられる。桁行方向の柱間は2.0～2.9mを測るが、梁行方向では身舎部分と庇部分に広狭があり、前者が2.2～2.4mを測るのに対して、後者が0.9～1.0mを測る。桁行を基準とした建物方位はN-57°-Wを示す。

各柱穴の平面形はおもに円形であるが、P6やP9のように隅丸方形や隅丸長方形を呈するものも存在する。長径ないし長軸は、ほかの柱穴と比べて低い標高での検出となってしまったP12を除くと、身舎部分のものが0.33～0.47m、庇部分のものが0.30～0.35mを測り、庇部分の柱穴がやや小規模な傾向にある。断面形は基本的にU字状を呈しているが、P9のように方形を呈するものや、P12のように2段状を呈するものもある。検出面からの深さは0.30～0.50mを測る。各柱穴で柱痕跡が確認されたほか、P2では柱根が良好な状態で遺存していた。また、P6とP9では、柱痕跡の下部に根石とみられる石材が据えられていた。このほか、P4の底部付近からは比較的量の土師器片と1個の河原石が折り重なった状態で出土した。

なお、後述するSA4については当該建物の一部である可能性も考えられるが、出土遺物から判断される遺構の時期から別遺構と判断した。

出土遺物：土師器、須恵器のほか、土錘が出土している。**291**は土師器の杯である。体部は底部から緩やかに立ちあがったのち、内灣気味に外反し口縁端部にいたる。端部は若干肥厚させるとともに丸くおさめる。磨滅のため調整等は不明瞭であるが、基本的に内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。底部は回転糸切りである。**292**は土師器の杯あるいは皿である。底部の大部分を欠くものの、体部は底部から内灣気味に立ち上がったのち、直線的に外反し口縁端部にいたる。口縁部はヨコナデ調整が施されており、端部は丸くおさめる。**293**は土師器の皿である。内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、体部は底部から口縁部にかけて緩やかに内灣しながら外反し口縁端部にいたる。また、端部は丸く仕上げられている。底部は回転糸切りである。なお、精良な胎土によって製作されている。**294**は土師器の皿の口縁部片である。残存状況は良くないが、内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、体部は緩やかに内灣しながら外反し、口縁端部は丸く仕上げられている。**295**は土師器の皿である。口縁部は直線的に外反し、その器壁は底部より薄く成形されている。内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、底部は回転糸切りである。**296**は土師器の皿の小片で、全体的に器壁が薄いつくりのものである。磨滅のため内外面ともに調整等は不明瞭であるが、口縁部はヨコナデによって成形されており、直線的に短く外反する。**297**は須恵器の椀とみられる。体部は底部からなだらかに立ち上がり、やや内灣しながら外反する。内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、器壁は口縁部に向かって若干薄くなる。底部は回転ヘラ切りである。**298**は管状土錘である。中央付近で最大径をもち、両端に向かって径は小さくなっていく。径のやや片寄った位置に0.5cm前後の円形の孔が貫通する。

W2はP2内に遺存していた柱根である。樹種はヒノキで、残存長約20cm、最大径約8cmを測る。柱根の下端の一部には鋭利なほつり痕ないし切削痕が残る。

時期：出土遺物から鎌倉時代頃と考えられる。

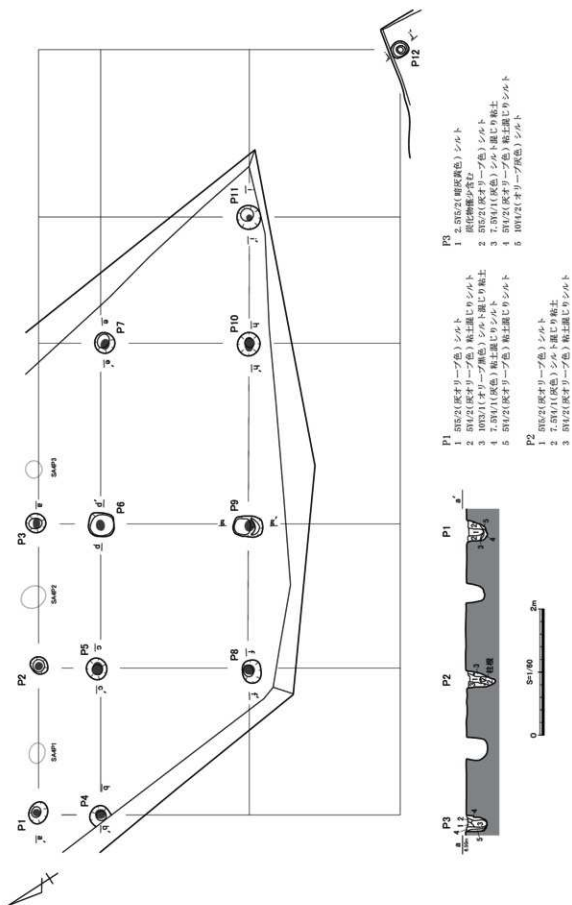


図118 掘立柱建物(SB)9 (1)

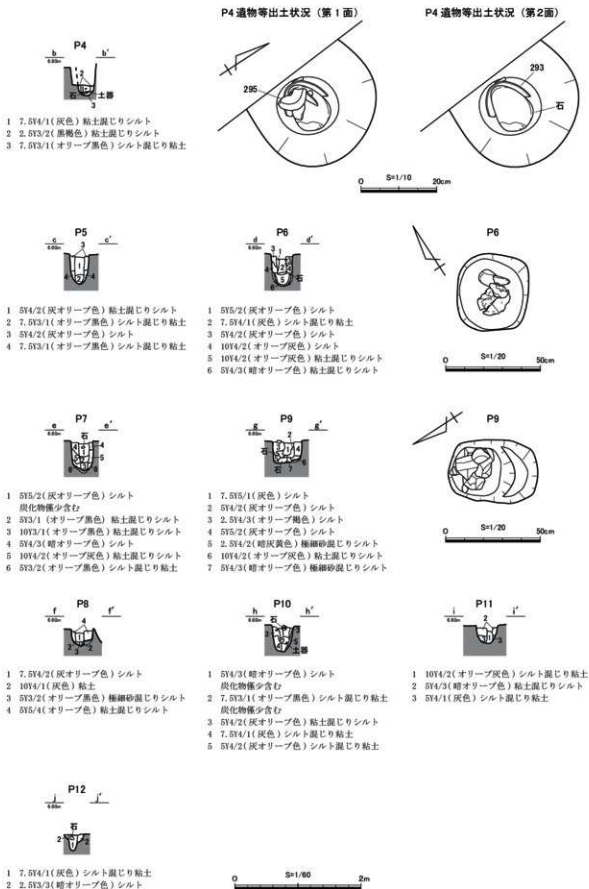


図119 掘立柱建物(SB)9(2)

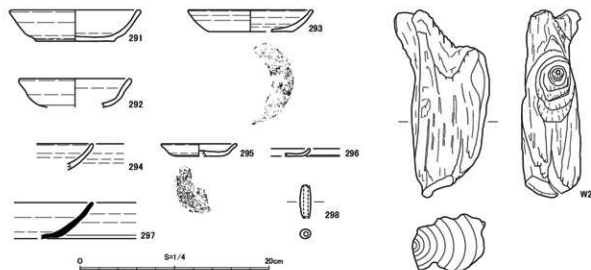


図 120 掘立柱建物 (SB) 9 出土遺物

■ 櫛

櫛 (SA) 4 (図 121、写真 154 ~ 156)

形態・規模：調査区の南端付近に位置し、SB9 の底部分とほぼ重なる位置で検出された柱穴列である。主軸方位は N - 58° - W で、現状では 3 基の柱穴が 2.0 ~ 2.4 m 間隔で並んでいる。柱穴の平面形は基本的に円形で、最大径は 0.27 ~ 0.41 m である。断面形は U 字状で、検出面からの深さは 0.27 ~ 0.34 m を測り、いずれの柱穴でも柱痕跡が確認された。

出土遺物：須恵器の小片などが出土している。299 は須恵器の蓋である。残存状況は良くないが、平坦な天井部は口縁端部に向かって緩やかに下降したのち、下方に若干のかかりを成形する。内外面ともに基本的に回転ナデによって仕上げられているが、内面の一部にはナデ調整が施されている。

時期：柱穴列の配置や主軸方位をみると、SB9 の一部である可能性も考えられるが、出土遺物からここでは奈良時代頃と判断しておく。

櫛 (SA) 5 (図 122・123、写真 157 ~ 162・197)

形態・規模：調査区の南側に位置する。P1 から P3 にかけての柱穴が直線的に並ぶのに対し、P4 はこの直線上からやや東に振れているが、現状では 4 基の柱穴が 1.9 ~ 2.2 m 間隔で並んでおり、主軸方位はほぼ南北を示す。柱穴の平面形は隅丸方形のものが多く、各柱穴によってばらつきが認められる。長軸ないし長径は 0.41 ~ 0.53 m を測る。断面形についてもばらつきがあり、P1 のようにやや歪な形態をしているものもあれば、P3 のように V 字状を呈しているものも存在する。検出面からの深さは 0.11 ~ 0.36 m を測る。P4 からはやや大きめの破片を含む須恵器片が出土した。いずれの柱穴においても柱の抜き取りが行われているものと推測される。

なお、遺構の検出状況を見ると、P4 に切られている別ビットが P1・P2・P3 に対応する柱穴であった可能性もあるが、炭化物を多く含むという土質の類似性から P4 が対応するものと判断した。

出土遺物：土師器や須恵器、土錘が出土している。このほか、P1 と P3 では被熱した粘土塊が出土している。300 は須恵器の碗である。体部は底部から口縁部にかけて緩やかに内灣しながら立ち上がるが、口縁部で僅かに外反する。内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、底部は回転糸切りである。全体的に器壁が薄く、底径が小さいという形態的特徴から、相生窯跡群で生産された須恵

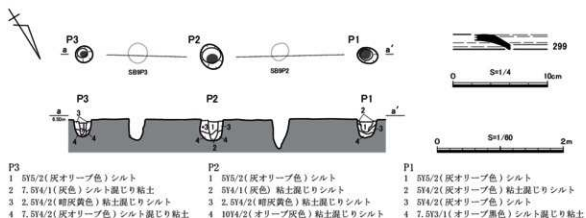


図121 槽(SA)4及び出土遺物

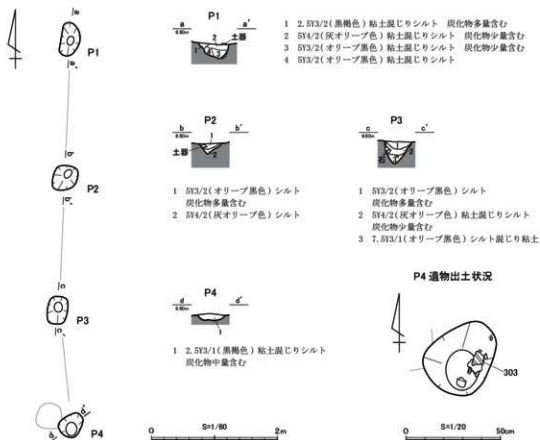


図122 槽(SA)5

器の可能性ある。301は須恵器の皿の小片である。底部を欠くものの、体部は内溝気味に立ち上がったのち、口縁部において僅かに外反して口縁端部にいたる。内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、口縁端部は丸くおさめる。302は須恵器の甕の口縁部片である。口縁部は内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、内側に彎曲しながら外反し口縁端部にいたる。端部はその上部を上方へ強くつまみ上げている。303は須恵器の双耳壺の胴部片とみられる。胴部はやや膨らむ形状のもので、外面では回転ナデとともに回転板ナデとみられる調整が施されており、その上方において1条の沈線が確認される。胴部内面では回転ナデ調整が施されている。304は棒状土錘である。片側を欠損しているものの、断面は基本的に円形で、端部付近において平たくなる形状を呈する。端部に

は0.5cm前後の円形の孔が穿孔されている。ナデによって仕上げられているが、外面の一部には粘土接合痕が確認される。

時期：出土遺物から平安時代中期頃と考えられる。

柵 (SA) 6 (図 124、写真 163 ~ 166・197)

形態・規模：調査区の北端付近に位置し、SD8の遺構埋土を掘り込んで検出された柱穴列である。現状では4基の柱穴が確認されており、このうち最も北西側に位置するP1で

はP1-1からP1-2に建て替えが行われたものとみられる。各柱穴間の間隔にはばらつきがあり、P1とP2で1.7~2.0m、P2とP3で3.1mを測る。主軸方位はN-63°-Wである。柱穴の平面形はおもに円形で、最大径は0.28~0.39mを測る。断面形は方形を呈するものと2段状を呈するものがあり、検出面からの深さは0.17~0.40mを測る。いずれの柱穴でも柱痕跡が確認された。

出土遺物：おもに土師器と須恵器が出土している。305は土師器の鍋で、いわゆる「鍋形タイプ」のものである(岡田ほか2003)。やや丸みをおびながら内傾気味に立ち上がる胴部に受口状の口縁部をもつ。口縁部はヨコナデによって仕上げられており、胴部外面にはタテ方向のハケメ調整が、内面にはナデ調整が施されている。

時期：出土遺物及びSD8との切り合い関係から鎌倉時代頃と考えられる。

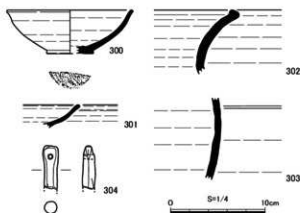


図123 柵(SA)5出土遺物

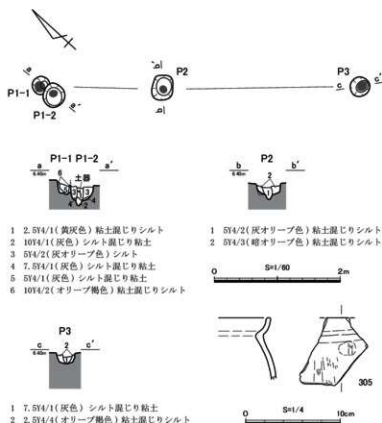


図124 柵(SA)6及び出土遺物

■土坑

土坑 (SK) 21 (図 125、写真 167・168・197)

形態・規模：調査区中央のやや南寄りに位置する。平面形は不整形円で、最大径は0.60 mである。断面形は皿状を呈しており、検出面からの深さは0.13 mを測る。土坑内からは土師器片がまとまって出土した。

出土遺物：おもに土師器が出土している。306～308は土師器の皿である。306の体部は底部からなだらかに立ち上がり、直線的に外反し口縁端部にいたる。端部はややシャープに仕上げられている。手づくねによって成形されており、内外面ともにナデ調整が施されている。307の体部は底部からなだらかに立ち上がり、直線的に外反し口縁端部にいたる。端部は丸くおさめる。手づくねによって成形されており、内外面ともに基本的にナデ調整が施されているものの、口縁部付近はヨコナデによって仕上げられている。308は皿の小片で、口縁部はヨコナデによって成形されており、内溝気味に短く立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。

時期：出土遺物から鎌倉時代頃と考えられる。

■ピット

ピット (SP) 50 (図 126、写真 169・170・197)

形態・規模：調査区南側の西壁付近に位置し、SB9P4に隣接する。平面形は不整形な隅丸方形で、長軸は0.39 m、短軸は0.35 mである。断面形は一部2段状を呈しており、検出面からの深さは0.36 mを測る。ピット内に堆積する埋土のうち、第1層から大きめの須恵器片(309)が出土した。

出土遺物：おもに須恵器が出土している。309は須恵器の鉢とみられる。底部の大部分を欠くものの、底部は平高台で、内面では体部に立ち上がるころに段を有し、体部は緩やかに膨らみながら立ち上がる。内外面ともに回転ナデによって仕上げられているものの、体部外面の一部にはタキの痕跡が残る。また、体部内面の下半では回転ナデののちナデ調整が施されている。

時期：出土遺物から平安時代中期頃と考えられる。

■溝状遺構

溝状遺構 (SD) 6 (図 127、写真 171・172・197)

形態・規模：調査区の北端付近に位置し、後述する大溝 (SD8) が埋没したのちに掘り込まれた北東-南西方向に延びる溝である。両端が調査区外に及んでいるため全容は不明であるが、検出された

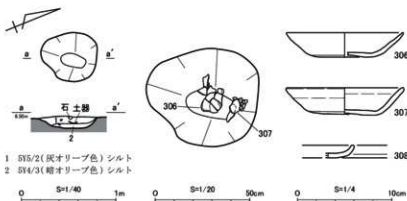


図 125 土坑 (SK) 21 及び出土遺物

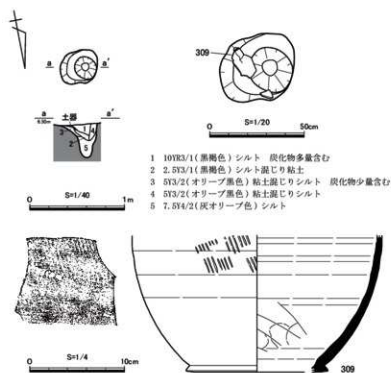


図126 ビット(SP)50及び出土遺物

範囲での長さは約7.7m、最大幅は約1.7mである。断面形は基本的に皿状を呈しており、検出面からの深さは0.18m前後を測る。

出土遺物：おもに土師器と須恵器が出土している。310は土師器の皿である。全体的に器壁が薄いつくりのもので、体部ないし口縁部はヨコナデによって直線的に反外し口縁端部にいたる。端部はややシャープに仕上げられている。311は須恵器の椀の底部片である。残存状況は良くないが、体部は底部からなだらかに立ち上がり、内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。312～314は須恵器の鉢で、312は口縁部片、313・314は底部である。312は内外面ともに回転ナデによって仕上げられているものの、内外面には顕著な凹凸が残る。口縁端部は上方へ強くつまみ上げている。313は磨滅のため調整等是不明瞭であるが、体部外面は回転ナデによって仕上げられており、底部内面にはナデ調整が施されている。底部は回転糸切りである。314は底部の大部分を欠いているため、切り離し技法等は不明であるが、体部は直線的に開きながら立ち上がる。内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、内面では回転ナデののちナデ調整が施されている。

時期：出土遺物から南北朝時代頃に埋没したものと考えられる。

溝状遺構 (SD) 7 (図127、写真171・173・174・198)

形態・規模：調査区の北端付近に位置し、SD6と同様、SD8を掘り込んでいる溝である。東から西へ延びたのち、SD6とほぼ並行するように北東-南西方向に延びている。両端が調査区外に及んでいるため全容は不明であるが、検出された範囲での長さは約8.4m、最大幅は約0.6mである。断面形は皿状を呈しており、検出面からの深さは0.12m前後を測る。溝の南側からほぼ完形に復元できる土師器の皿(316)が出土した。

出土遺物：おもに土師器と須恵器が出土している。315～318は土師器の皿である。315の口縁部はヨコナデによって成形されており直線的に短く立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。底部内外面

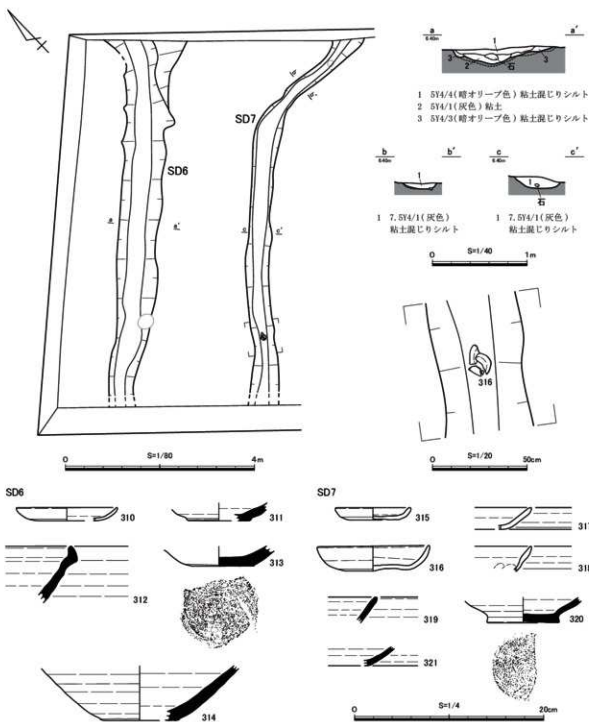


図127 溝(SD)6・7及び出土遺物

にはナデ調整が施されているものの、外面ではユビオサエの痕跡が僅かに残る。**316**の体部ないし口縁部はヨコナデによって内灣気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。底部内面はナデ調整が施されているのに対して、底部外面にはほとんど調整等が施されておらず、ユビオサエの痕跡が明瞭に残る。**317**の体部ないし口縁部はヨコナデによって直線的に外反しており、口縁端部はややシャープに仕上げられている。底部内外面にはナデ調整が施されている。**318**は残存状況は良くないが、体部は底部から内灣気味に立ち上がったのち、若干肥厚して外側へ屈曲し口縁端部にいたる。体部ないし口縁部は基本的にヨコナデ調整が施されているものの、底部付近の内面にはユビオサエの痕跡が残る。

319は須恵器の碗の口縁部片である。残存状況は良くないが、内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、口縁端部は丸くおさめる。320は須恵器の碗の底部である。底部は厚みのある平高台で、底部から体部に立ち上がるころ若干の段を有する。内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、底部は回転糸切りである。321は須恵器の碗の底部片である。残存状況は良くないが、体部は底部からなだらかに立ち上がり、内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。底部は回転糸切りである。

時期：出土遺物から鎌倉時代後半頃に埋没したものと考えられる。

溝状遺構 (SD) 8 (図 128・129、写真 175・198・199)

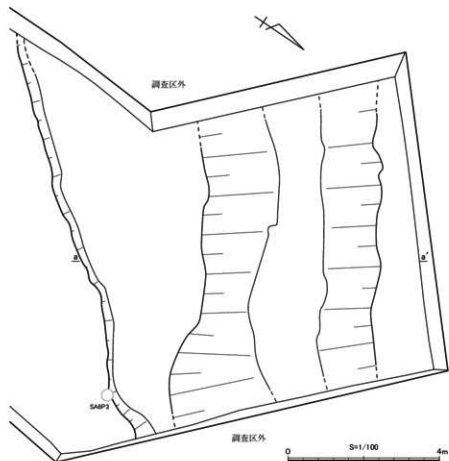
形態・規模：調査区の北端に位置し、北東・南西方向に延びる大溝である。両端が調査区外に及んでいるため全容は不明であるが、検出された範囲での長さは約11.1mである。幅は約9.3mであるが、北西側の肩部が検出されていないため本来の溝幅は明らかではない。断面形は基本的に壁面が外側に向かって緩やかに立ち上がる幅広のU字状を呈しているが、その両側にはテラス状の平坦面が存在する。検出面からの深さは、最深部で1.70m前後を測り、テラス状の平坦面で0.09～0.26mを測る。

土層断面の観察によると、SD8では埋没と掘削が繰り返されており、土層堆積はかなり複雑な様相を呈しているが、おおよそ5段階の堆積によって埋没したものと考えられる。まず、テラス状の平坦面を含めた広い範囲が埋没し(第88～89層)、その後、大溝の大部分が埋没する(第39～87層)。大溝の埋没後は、大溝内の西側に幅約2.0mの溝が、東側に幅約1.7mの溝が掘削され、再びこれらの溝が埋没する(第23～38層、第7～22層)。これらの溝については、ほぼ同時期に機能していた可能性もあるが、土層の切り合い関係から、西側の溝が埋没したのちに東側の溝が掘削され埋没したものとみられる。そして、最終的に大溝が全体的に埋没したと考えられる(第1～6層)。

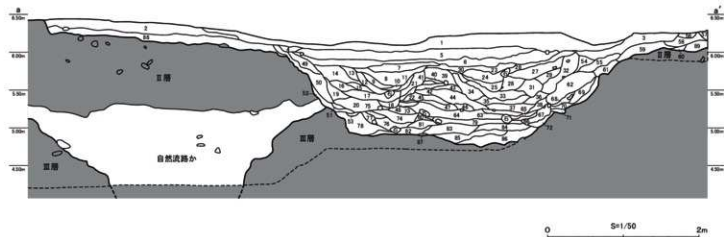
ただ、平成9年度に近隣で実施された県教委の発掘調査成果を参照すると(山田編2006)、今回の調査では、本来の溝の底部まで確認できていない可能性が高い。

なお、SD8とは直接関係しないものの、SD8の東側で下層確認を実施したところ、標高5.38mより下位のところで溝とみられる落込みが確認された。一部を掘削したのみにとどまるが、各層とも分級がよく、また何らの遺物も含まれていなかったことから自然流路の可能性が考えられる。

出土遺物：おもに土師器と須恵器が出土しているほか、瓦片などが出土している。322～351は須恵器である。322は杯である。杯部は内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、体部ないし口縁部は外上方に直線的に立ち上がる。底部はヘラ切りののちナデ調整が施されているものとみられ、そこに高台を貼り付けている。323は杯である。底部内面がナデ調整であるほかは内外面ともに回転ナデ調整が施されており、体部ないし口縁部は直線的に外反し、端部はややシャープに仕上げられている。底部は回転ヘラ切りののち、一部ナデ調整が施されているものとみられる。324は杯の底部とみられる。体部は底部から緩やかに立ち上がる。底部はヘラ切りののちナデ調整が施されているものとみられ、やや内側に高台を貼り付ける。高台は外方へ踏ん張る形状をしている。325は杯の底部とみられる。内外面ともに回転ナデによって仕上げられているものの、底部内面の一部には回転ナデののちナデ調整が施されている。底部は回転ヘラ切りとみられる。326は杯である。体部ないし口縁部は直線的に外反し、口縁端部はややシャープに仕上げられている。内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、底部は回転ヘラ切りである。327は杯の底部片とみられる。残存状況は良くないが、内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、外面では底部と体部の境界に明瞭な稜をもつ。328は碗である。体部は底部からなだらかに立ち上がり、内外面ともに回転ナデによって仕上げ



- 1 1018/2 (灰黄褐色) 粘土混じりシルトに514/4 (暗オリーブ色) シルトが混じる
- 2 2.514/3 (オリーブ褐色) シルト混じり粘土に514/3 (暗オリーブ色) シルトが混じる
- 3 2.513/1 (黒褐色) シルト混じり粘土に514/3 (暗オリーブ色) シルトが混じる
- 4 514/2 (灰オリーブ色) シルト
- 5 7.514/2 (灰オリーブ色) 粘土混じりシルトに
- 6 2.514/3 (オリーブ褐色) シルトに
- 7 2.514/1 (黄褐色) 粘土混じりシルトが混じる マンガン少量含む
- 8 2.514/1 (暗オリーブ色) 粘土混じりシルト マンガン極少量含む
- 9 2.513/1 (黒褐色) シルト混じり粘土に
514/2 (灰オリーブ色) 粘土混じりシルトが混じる
- 10 2.514/3 (オリーブ褐色) 粘土混じりシルトに
1014/2 (オリーブ褐色) シルト混じり粘土が混じる
- 11 2.514/4 (オリーブ褐色) 粘土混じりシルトに2.515/2 (暗灰黄色) 粘土が混じる
- 12 1018/3 (灰黄色) 粘土が混じる マンガン極少量含む
- 13 1018/3 (に灰黄褐色) 粘土混じりシルト マンガン極少量含む
- 14 1018/3 (に灰黄褐色) 粘土混じりシルト
- 15 2.514/3 (オリーブ褐色) シルト混じり粘土
- 16 7.514/2 (灰オリーブ色) シルト混じり粘土に
2.514/3 (オリーブ褐色) 粘土混じりシルトが混じる
- 17 2.515/2 (暗灰黄色) 粘土に2.514/3 (オリーブ褐色) シルト混じり粘土が混じる
- 18 514/3 (暗オリーブ色) シルトに2.514/1 (灰黄色) 粘土が混じる
- 19 514/4 (暗オリーブ色) シルトに2.514/1 (灰黄色) 粘土が混じる
- 20 2.515/2 (暗灰黄色) 極細砂混じり粘土に1014/6 (褐色) シルトが混じる
- 21 2.514/3 (オリーブ褐色) 粘土混じりシルトに
514/1 (灰黄色) 粘土が混じる マンガン極少量含む



- 22 7.514/1 (灰黄色) 粘土混じり極細砂
- 23 2.514/4 (オリーブ褐色) 粘土混じりシルトに
2.515/2 (暗灰黄色) 粘土が混じる マンガ中量含む 一部グライ化
- 24 7.514/1 (灰黄色) 粘土に2.514/6 (オリーブ褐色) シルトが混じる マンガン極少量含む
- 25 7.514/1 (灰黄色) 粘土に2.514/3 (オリーブ褐色) 粘土混じりシルトが混じる
- 26 2.514/4 (オリーブ褐色) シルト マンガ中量含む
- 27 514/4 (暗オリーブ色) 粘土混じりシルト マンガン極少量含む
- 28 2.514/4 (オリーブ褐色) 粘土混じりシルトに2.515/2 (暗灰黄色) 粘土が混じる
- 29 514/3 (暗オリーブ色) 極細砂混じりシルト
- 30 2.514/4 (オリーブ褐色) シルトに514/1 (灰黄色) 粘土が混じる マンガン少量含む
- 31 514/4 (暗オリーブ色) シルト マンガ少量含む
- 32 514/3 (暗オリーブ色) 粘土混じりシルト マンガ中量含む
- 33 1015/2 (オリーブ灰色) 極細砂混じり粘土に
1014/2 (オリーブ灰色) 粘土が混じる マンガン極少量含む
- 34 514/3 (暗オリーブ色) シルト混じり粘土に
2.515/2 (暗灰黄色) 極細砂混じり粘土が混じる
- 35 2.515/2 (暗灰黄色) 極細砂混じり粘土に2.514/6 (オリーブ褐色) シルトが混じる
- 36 514/3 (暗オリーブ色) シルト混じり粘土 マンガン極少量含む
- 37 515/2 (灰オリーブ色) 粘土混じりシルトに2.514/6 (オリーブ褐色) 中粒砂が混じる
- 38 2.514/3 (オリーブ褐色) シルト混じり粘土
- 39 2.514/4 (オリーブ褐色) シルト マンガン極少量含む
- 40 1014/2 (オリーブ灰色) 極細砂混じり粘土
- 41 514/4 (暗オリーブ色) 極細砂混じりシルト
- 42 513/2 (オリーブ褐色) 粘土混じりシルトに
- 43 514/4 (暗オリーブ色) シルトブロックが混じる
- 44 514/3 (暗オリーブ色) 極細砂混じりシルトに
- 45 2.515/2 (暗灰黄色) 極細砂混じりシルトが混じる
- 46 2.515/2 (黒褐色) 粘土混じりシルトに1015/2 (灰黄色) 極細砂が混じる
- 47 1014/2 (オリーブ褐色) 極細砂に1014/1 (灰黄色) 粘土ブロックが混じる
- 48 7.514/2 (灰オリーブ色) シルト混じり極細砂
- 49 514/2 (灰オリーブ色) 極細砂混じり粘土が混じる
- 50 7.514/2 (灰オリーブ色) シルト混じり極細砂
- 51 1014/1 (灰黄色) 粘土に2.514/4 (灰黄色) 粘土混じりシルトが混じる
- 52 515/2 (灰オリーブ色) シルト混じり粘土に
515/2 (暗灰黄色) シルト混じり極細砂が混じる
- 53 514/3 (暗オリーブ色) シルトに7.514/1 (灰黄色) 粘土混じりシルトが混じる
- 54 1014/1 (灰黄色) シルト混じり粘土に
515/2 (暗灰黄色) シルト混じり極細砂が混じる
- 55 513/1 (オリーブ褐色) 粘土に7.514/2 (灰オリーブ色) シルト混じり粘土が混じる
- 56 515/3 (灰オリーブ色) シルトに501/1 (暗オリーブ灰色) 粘土ブロックが混じる
- 57 2.513/1 (黒褐色) シルト混じり粘土に
514/3 (暗オリーブ色) シルトが混じる マンガ少量含む

- 58 514/2 (灰オリーブ色) 粘土混じりシルト
- 59 514/3 (暗オリーブ色) 粘土混じりシルトに
1014/1 (灰黄色) シルト混じり粘土が混じる マンガン極少量含む
- 60 7.514/1 (灰黄色) シルト混じり粘土に
7.514/3 (暗オリーブ色) 粘土混じりシルトが混じる
- 61 514/3 (暗オリーブ色) 粘土混じりシルトに
515/2 (オリーブ褐色) シルト混じり粘土が混じる
- 62 2.515/1 (黒褐色) 粘土に514/4 (暗オリーブ色) シルトブロックが混じる
- 63 2.514/6 (オリーブ褐色) 中砂と515/2 (灰オリーブ色) 極細砂がラミナ状に堆積
- 64 2.514/6 (オリーブ褐色) 細砂と1015/2 (オリーブ灰色) 極細砂がラミナ状に堆積
- 65 514/2 (灰オリーブ色) 極細砂に7.514/1 (灰黄色) シルト混じり粘土が混じる
- 66 514/1 (灰黄色) シルト混じり粘土
- 67 1015/2 (オリーブ灰色) 極細砂混じり粘土に2.514/4 (オリーブ褐色) シルト混じり粘土と1015/2 (オリーブ灰色) 極細砂が混じる
- 68 514/3 (暗オリーブ色) シルト混じり粘土に7.514/1 (灰黄色) 粘土ブロックが混じる
- 69 1014/2 (オリーブ灰色) シルト混じり粘土に
514/4 (暗オリーブ色) シルトブロックが混じる
- 70 2.514/3 (オリーブ褐色) シルト混じり粘土に
515/2 (灰オリーブ色) シルト混じり粘土が混じる
- 71 515/2 (灰オリーブ色) 極細砂混じり粘土
- 72 1013/1 (黒褐色) 粘土に1015/2 (オリーブ灰色) 極細砂混じり粘土が混じる
- 73 7.513/1 (オリーブ褐色) シルト混じり粘土に
1015/2 (オリーブ灰色) 極細砂が混じる
- 74 514/3 (暗オリーブ色) 極細砂と
7.514/2 (灰オリーブ色) 粘土混じり極細砂がラミナ状に堆積
- 75 1014/1 (灰黄色) 極細砂混じり粘土に514/3 (暗オリーブ色) 粘土混じり極細砂が混じる
- 76 2.515/2 (暗灰黄色) シルト混じり粘土に2.515/2 (暗灰黄色) 粘土混じり極細砂が混じる
- 77 2.515/2 (黒褐色) 極細砂混じり粘土に
514/3 (暗オリーブ色) シルトブロックが混じる
- 78 514/3 (暗オリーブ色) シルト混じり極細砂に
1015/2 (オリーブ灰色) シルト混じり粘土を5%含む
- 79 2.514/4 (オリーブ褐色) 細砂と514/4 (暗オリーブ色) 極細砂がラミナ状に堆積 $\phi 3 \sim 10\text{mm}$ の礫を10%含む
- 80 514/2 (灰オリーブ色) 極細砂
- 81 2.515/6 (黄褐色) 極細砂 $\phi 10 \sim 20\text{mm}$ の礫を40%含む
- 82 514/3 (暗オリーブ色) シルト混じり極細砂
- 83 7.514/1 (灰黄色) 極細砂と515/3 (灰オリーブ色) 極細砂がラミナ状に堆積
- 84 2.514/1 (灰黄色) シルト混じり極細砂
- 85 515/3 (灰オリーブ色) 極細砂がラミナ状に堆積
- 86 1014/1 (灰黄色) 極細砂
- 87 514/3 (暗オリーブ色) 粘土混じり極細砂
- 88 514/3 (暗オリーブ色) 粘土混じりシルトに
513/1 (オリーブ褐色) 粘土混じりシルトが混じる マンガ中量含む
- 89 514/4 (暗オリーブ色) シルト混じり粘土に
7.514/2 (灰オリーブ色) シルト混じり粘土が混じる マンガ極少量含む

図128 溝 (SD)8

られている。底部は回転糸切りである。329～333はいずれも口縁部片で、329は杯、330～333は碗の口縁部片とみられる。329は残存状況は良くないが、全体的に器壁が薄いつくりのもので、直線的に外反する体部は口縁部で若干外反し、口縁端部を丸くおさめる。330は内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、内灣気味に立ち上がる体部は口縁部において外反し端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。331は外面では口縁部に明瞭な段を有し、そこから短く外反して口縁端部にいたる。また、口縁部のやや下位には鋭い段が削り出されている。332の体部は内灣気味に立ち上がるとともに口縁部付近の外面で明瞭な段をもち、口縁端部は強い回転ナデによって短く屈曲する。内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。333の体部ないし口縁部は内灣気味に外反し、口縁端部は丸くおさめる。内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。334～343は碗の底部である。334の体部はやや厚みのある平高台からやや開きながら立ち上がり、内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。底部は回転糸切りである。335は内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、内面では底部から体部に立ち上がるに若干の段を有する。底部は回転ヘラ切りののち、回転ナデ調整が施されているものとみられる。336は内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、体部はやや厚みのある平高台から内灣気味になだらかに立ち上がる。底部は回転糸切りである。337の体部は内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、器壁の薄い底部からなだらかに立ち上がる。底部は回転糸切りである。338は内面では底部から体部に立ち上がるに段を有する。内外面ともに回転ナデによって仕上げられているが、底部内面の一部には回転ナデのちナデ調整が施されている。底部は回転糸切りである。339の碗部は内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、体部は底部から比較的なだらかに立ち上がる。底部は回転糸切りののち、やや高さのある高台をその端部に貼り付ける。輪高台は外方へ強く踏ん張る形状をしている。340の碗部は内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、底部には回転糸切りののち、高さのある高台を貼り付ける。高台は外方へ踏ん張る形状をなす。341は内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、体部は底部からなだらかに立ち上がる。底部は回転ヘラ切りののち、回転ナデ調整が施されている。342は内外面ともに基本的に回転ナデによって仕上げられており、内面では底部から体部に立ち上がるに段を有する。底部は回転ヘラ切りののち、回転ナデ調整が施されているものとみられる。343は残存状況は良くないが、内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、底部は回転ヘラ切りとみられる。底部にはやや高さのある高台を貼り付ける。高台は端部を丸くおさめ、外方へ踏ん張る形状をしている。344は皿である。体部はやや開きながら内灣気味に立ち上がったのち、口縁部において僅かに外反し口縁端部にいたる。端部は丸くおさめる。内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、底部にはやや高さのある高台を貼り付ける。高台は外方へ踏ん張る形状をなす。345・346はいずれも壺の頸部から口縁部にかけての破片である。345は内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、頸部は口縁部付近で大きく外反するとともに口縁端部に向かってシャープに成形されている。口縁部では端部のやや内側上部を上方へつまみ上げている。なお、胎土は精良である。346は内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、頸部は口縁端部に向かって緩やかに開きながら立ち上がるとともに口縁部付近で大きく外反する。口縁端部は上方へつまみ上げられており、その端部には回線状の回みがめぐっている。347は双耳壺の肩部付近の破片とみられる。残存状況は良くないが、内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、外面には断面三角形の突帯が1条残る。348は双耳壺の胴部片とみられる。小片のため天地が逆である可能性もあるが、外面には断面台形の突帯が1条残る。内外面ともに基本的に回転ナデによって仕上げられている。349は甕の口縁部片である。口縁部は内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、内側に彎曲しながら外反し口縁端部にいたる。端部は上

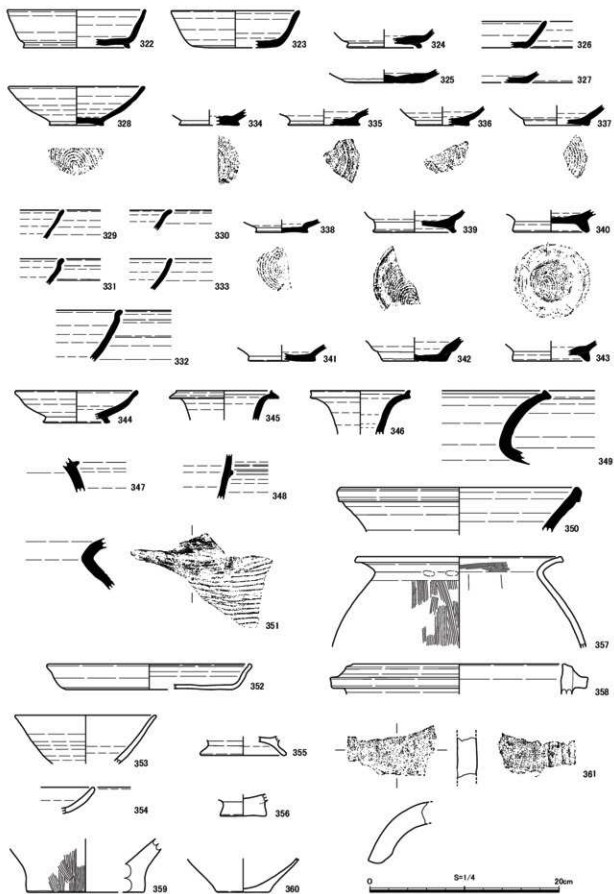


图129 溝(SD)8出土遺物

下に肥厚させているが、特にその上部を上方へ強くつまみ上げている。350は甕の口縁部とみられる。内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、口縁部は内灣気味に外反し、口縁端部は玉縁状をなす。焼成不良のため全体的ににぶい橙色を呈する。351は甕の頸部片である。残存状況は良くないが、頸部で大きく屈曲したのち、やや内側に彎曲しながら外反する形状を呈する。胴部は僅かに左上がりのタタキによって成形されており、内面にはナデ調整が施されている。

352～358は土師器である。352は皿である。体部は底部からなだらかに立ち上がり、やや内側に彎曲しながら緩やかに外反する。口縁端部は丸くおさめ、内面ではその直下に沈線状の凹みがめぐらされている。体部ないし口縁部は内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。底部外面にはナデ調整が施されているもの、ユビオサエの痕跡が顕著に残る。精良な胎土によって製作されている。353は椀である。体部ないし口縁部は直線的に外反するとともに口縁端部に向かって器壁が薄くなる。全体的に磨滅しているが、内外面ともに回転ナデ調整が施されている。354は皿である。体部ないし口縁部は内灣気味に立ち上がり口縁端部にいたる。磨滅のため調整等は不明瞭であるが、内面では回転ナデとみられる調整が施されている。355は椀の底部である。磨滅のため内外面ともに調整等は不明瞭であるが、椀部の底部端に幅が細くて高さのある高台を貼り付ける。高台は外方へ強く踏ん張る形状を呈しており、端部は丸くおさめる。356は托の底部である。ほぼ高台部のみが残っているもので、高台は厚みのある円柱状を呈している。外面には回転ナデ調整が施されており、底部は回転糸切りである。357は甕の胴部から口縁部にかけての破片である。口縁部はヨコナデによって球状を呈する胴部から「く」の字状に外反し、その内面では口縁に沿ってハケメ調整が施されている。胴部は、磨滅のため調整等が不明瞭なところもあるが、外面にはタテ方向のハケメ調整が施されている。358は羽釜の口縁部片である。ほぼ直上に立ち上がる口縁部は内外面ともにヨコナデによって仕上げられており、外面では口縁端部の直下に厚みのある銚を水平に貼り付けている。

359・360は弥生土器である。359は壺の底部とみられ、全体的に器壁が厚いつくりのものである。磨滅のため調整等は不明瞭であるが、外面ではタテ方向のハケメ調整が施されている。胎土の特徴として、1～3mmの砂礫を多く含んでいる。360は壺などの底部である。磨滅のため内外面ともに調整等は不明であるが、全体的に器壁が薄いつくりのもので、胴部は底部から内灣気味に立ち上がる。

361は丸瓦片である。残存状況は良くないが、凹面には布目圧痕が残り、凸面にはナデ調整が施されている。一方、側面にはケズリ調整が施されている。焼成不良のため全体的ににぶい橙色を呈する。

時期：出土物から奈良時代から平安時代後期頃にかけて埋没したものと考えられる。

調査区3（第2遺構面）

検出できた遺構の種類と数量は、堅穴建物1棟、土坑9基、ピット47基、溝状遺構2条である（図130）。

■堅穴建物

堅穴建物(S1)1(図131、写真176・177)

形態・規模：調査区3の南端付近で検出された堅穴建物であるが、隅部が確認されたのみで、大部分は後述するSD10によって切られている。隅部の状況から建物の平面形は方形と推測される。建物の規模についてはほとんどわからないが、各辺の残存長は北西辺で約1.1m、南西辺で約2.4mを測り、検出面から床面までの深さは0.20m前後である。床面の周囲には幅0.15～0.25m、深さ0.14m前後の周壁溝がめぐっている。なお、床面からは炭化物を比較的多く含む土坑状の掘込みとピットがそれぞれ1基ずつ検出されたが、どのような性格をもつものかは不明である。

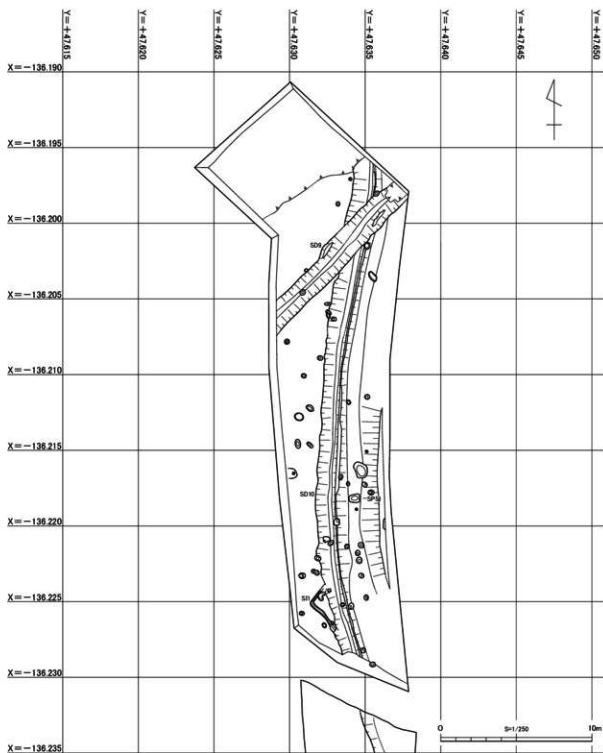


図 130 調査区3(第2遺構面)遺構平面図

出土遺物：弥生土器の小片が僅かに出土しているほか、須恵器片が1点出土しているが、後者は混入と考えらえる。

時期：出土遺物から時期を決定することは難しいが、SD10との切り合い関係から弥生時代中期後葉以前と推定される。

■ピット

ピット (SP) 51 (図132、写真199)

形態・規模：調査区中央の東壁付近に位置し、SD10の遺構埋土を掘り込んでいる。平面形は円形で、最大径は0.36 mである。断面形は一部に僅かな段差をもつU段状を呈しており、検出面からの深さは0.25 mを測る。

出土遺物：須恵器片のほか、土鍾が出土している。362は棒状土鍾である。片側を欠損しているものの、断面は基本的に円形で、端部付近において平たくなる形状を呈する。端部には0.6cm前後の円形の孔が穿孔されている。外面の一部には粘土接合痕が確認される。

時期：出土遺物から時期を決定することは難しいが、古墳時代以降と推定される。また、当該遺構については第1遺構面から掘り込まれたピットである可能性もある。

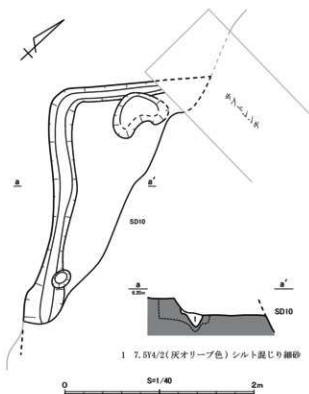


図131 竪穴建物(SI)1

■溝状遺構

溝状遺構 (SD) 9 (図133、写真178・179・199)

形態・規模：調査区の北側に位置し、SD10を切って北東-南西方向に直線的に延びる溝である。両端が調査区外に及んでいるため全容は不明であるが、検出された範囲での長さは約11.9 m、幅は約1.5～1.9 mである。断面形はV字状を呈しており、検出面からの深さは1.02 m前後を測る。

出土遺物：土師器と須恵器の小片が出土している。363は須恵器の杯の底部である。残存状況は良くないが、内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、底部は回転ヘラ切りである。364は土師器甕の頸部付近の胴部片である。残存状況は良くないが、胴部外面にはタテ方向のハケメ調整ののち一部ヨコ方向のハケメ調整が施されている。また、頸部には強いヨコナデがめぐらされている。一方の内面ではナデ調整が施されている。なお、胴部外面には煤の付着が認められる。

時期：出土遺物から奈良時代頃に埋没したものと考えられる。

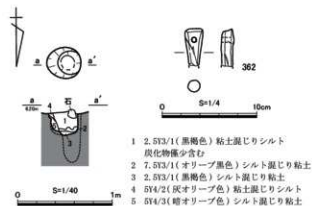


図132 ピット(SP)51及び出土遺物

- 1 2.SY3/1(黒褐色)粘土混じりシルト
炭化物燻少含む
- 2 7.SY3/1(オリーブ黒色)シルト混じり粘土
- 3 2.SY3/1(黒褐色)シルト混じり粘土
- 4 5Y4/2(灰オリーブ色)粘土混じりシルト
- 5 5Y4/3(暗オリーブ色)シルト混じり粘土

溝状遺構 (SD) 10 (図134～136、写真180～183・199～202)

形態・規模：調査区東半の大部分に及ぶ範囲で検出された溝である。西方にやや弧を描きつつ、ほぼ北-南方向に延びており、その一部は調査区2の北東部でも検出されている。両端が調査区外に及んでいるため全容は不明であるが、溝内では幅広の溝(以下、「主流路」という)と幅狭の溝(以下、「副

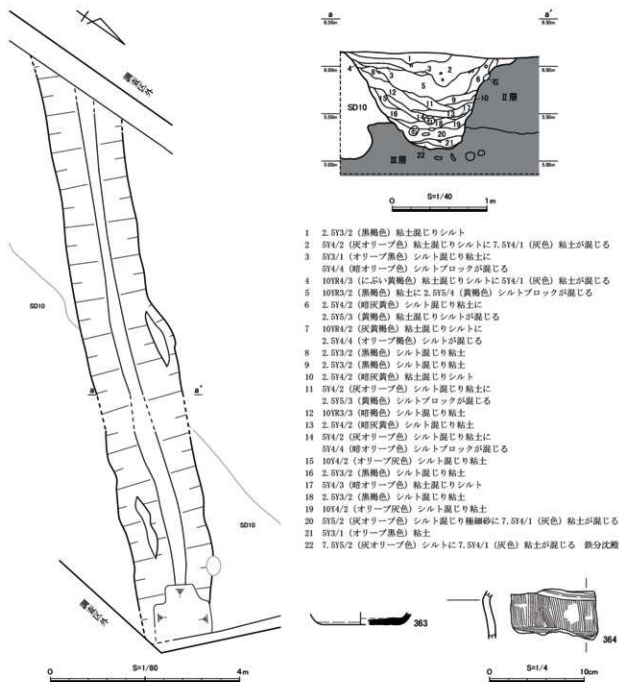
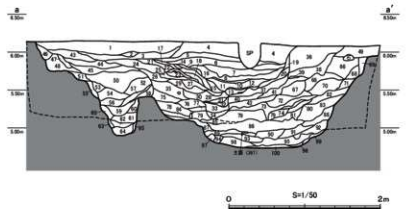
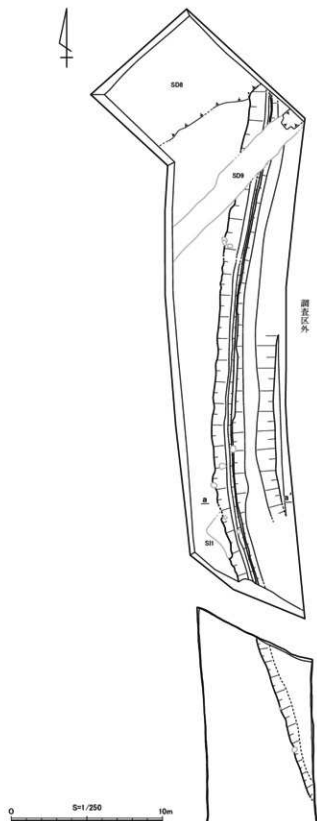


図133 溝 (SD) 9 及び出土遺物

流路」という)の2条の溝が畦状の高まりを挟んで並行するように延びており、検出範囲での長さは約47.2mを測る。東側の肩部が検出されていないため本来の溝幅は明らかでないが、幅は4.6m以上となる。主流路の断面形は壁面が緩やかに立ち上がる幅広いU字状を呈しており、東側にはテラス状の平坦面が存在する。検出面からの深さは、最深度で1.42～1.45mを測り、テラス状の平坦面で0.14mを測る。一方、主流路西側の副流路の断面形は壁面が急斜に立ち上がるU字状を呈しており、検出面からの深さは1.09～1.26mを測る。

土層断面の観察によると、SD10では埋没と掘削が繰り返されており、土層堆積はかなり複雑な様相を呈しているが、おおよそ3段階の堆積によって埋没したものと考えられる。まず、主流路ととも



- | | |
|-----------------------------------|------------------------------------------|
| 1 10YR3/2 (黒褐色) 粘土混じりシルト マンガン僅少含む | 32 5Y4/2 (灰オリーブ色) シルト混じり粘土に |
| 2 10YR4/3 (にぶい黄褐色) シルト混じりシルト | 2 5Y3/1 (黒褐色) シルト混じり粘土が混じる |
| 3 2.5Y3/2 (黒褐色) 粘土混じりシルト | 33 2.5Y3/1 (黒褐色) 粘土に |
| 4 5Y4/4 (暗オリーブ色) シルト | 7 5Y3/2 (灰オリーブ色) 粘土が混じる 鉄分粒少量含む |
| 5 5Y4/3 (暗オリーブ色) 粘土混じりシルト | 34 7.5Y4/2 (灰オリーブ色) 細砂混じりシルトに 黒色) 粘土が混じる |
| 6 2.5Y4/4 (オリーブ褐色) シルトに | 35 10YR2/2 (黒褐色) 粘土混じりシルト |
| 10Y4/2 (オリーブ灰色) 粘土混じりシルトが混じる | 36 2.5Y3/2 (黒褐色) 粘土混じりシルト マンガン僅少含む |
| 7 7.5Y4/2 (灰オリーブ色) 細砂 | 37 10YR3/1 (黒褐色) シルト混じり粘土 |
| 8 2.5Y3/2 (黒褐色) シルト混じり粘土に | 38 7.5Y4/1 (灰色) 粘土混じりシルトに |
| 2.5Y4/2 絶対黄褐色シルトが混じる | 5Y4/4 (暗オリーブ色) 粘土混じりシルトが混じる |
| 9 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐色) 粘土混じりシルトに | 39 5Y2/2 (灰オリーブ色) シルト混じり粘土 |
| 10Y3/1 (黒褐色) 粘土が混じる | 40 7.5Y2/1 (黒褐色) 粘土混じりシルトに |
| 10 5Y4/2 (灰オリーブ色) 細砂混じりシルトに | 2.5Y3/2 (黒褐色) シルト混じり細砂が混じる |
| 2.5Y5/3 (黄褐色) シルトが混じる | 41 5Y3/1 (オリーブ褐色) シルト混じり粘土に |
| 11 5Y3/2 (オリーブ褐色) シルト混じり粘土に | 2.5Y4/3 (オリーブ褐色) シルトが混じる |
| 10YK4/4 (暗褐色) シルトが混じる | 42 5Y4/2 (灰オリーブ色) 細砂 |
| 12 7.5Y4/2 (灰オリーブ色) 粘土混じりシルト | 7.5Y3/1 (オリーブ褐色) 粘土混じりシルトが混じる |
| 13 10YR2/1 (黒色) 粘土 | 43 10YR2/2 (黒褐色) 粘土混じりシルト |
| 14 10YR3/1 (黒褐色) 粘土 | 44 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐色) 粘土混じりシルト |
| 15 2.5Y3/1 (黒褐色) シルト混じり粘土に | 45 2.5Y3/2 (黒褐色) シルト |
| 10YR3/3 (暗褐色) シルトが混じる | 46 5Y4/4 (オリーブ褐色) シルトに |
| 16 10YR3/3 (暗褐色) シルトに | 10Y4/2 (オリーブ灰色) 粘土混じりシルトが混じる |
| 7.5Y3/1 (オリーブ褐色) シルト混じり粘土が混じる | 47 10YR4/4 (褐色) シルトに |
| 17 5Y3/2 (オリーブ褐色) 粘土混じりシルト | 7.5Y4/2 (灰オリーブ色) シルトが混じる |
| 18 10YR2/1 (黒褐色) 粘土に | 48 2.5Y4/3 (オリーブ褐色) 中砂混じりシルトに |
| 10YR5/3 (にぶい黄褐色) シルト混じり粘土が混じる | 10YR2/3 (暗褐色) シルトブロックが混じる |
| 19 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐色) 粘土混じりシルト | 49 2.5Y4/4 (オリーブ褐色) 粘土混じりシルト マンガン僅少含む |
| 20 2.5Y3/1 (黒褐色) シルト混じり粘土 | 50 10YR2/2 (黒褐色) 粘土混じりシルトに |
| 21 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐色) シルトに | 51 10YR2/2 (黒褐色) 粘土混じりシルトに |
| 22 2.5Y4/3 (オリーブ褐色) シルトに | 10YR4/3 (にぶい黄褐色) シルトが混じる |
| 10YR3/2 (黒褐色) 粘土混じりシルトが混じる | 52 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐色) 粘土混じりシルトに |
| 23 2.5Y3/2 (黒褐色) シルト混じり粘土に | 5Y4/1 (灰色) シルト混じり粘土が混じる |
| 2.5Y4/3 (オリーブ褐色) シルト混じり粘土に | 10YR3/2 (暗褐色) シルト混じりシルトが混じる |
| 24 2.5Y3/2 (黒褐色) シルトに | 54 5Y3/2 (オリーブ褐色) 細砂混じりシルトに |
| 10Y3/1 (オリーブ褐色) 粘土混じりシルトが混じる | 7.5Y4/2 (灰オリーブ色) 粘土混じりシルトが混じる |
| 25 2.5Y3/1 (黒褐色) シルト混じり粘土 | 55 7.5Y4/2 (灰オリーブ色) 細砂混じりシルト |
| 26 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐色) シルトに | 56 5Y3/2 (オリーブ褐色) シルトに |
| 5Y3/1 (オリーブ褐色) 粘土混じりシルトが混じる | 10YR4/3 (にぶい黄褐色) シルトが混じる |
| 27 10YR2/2 (黒褐色) 粘土混じりシルトに | 57 2.5Y3/2 (黒褐色) 粘土混じりシルト |
| 10YR4/2 (灰黄褐色) 粘土混じり粘土に | 58 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐色) シルトが混じる |
| 29 10YR2/1 (黒色) シルト混じり粘土 | 2.5Y4/4 (オリーブ褐色) シルトブロックが混じる |
| 30 5Y3/1 (オリーブ褐色) シルト混じり粘土に | 59 10YR2/2 (黒褐色) 粘土混じり細砂 |
| 7.5Y4/2 (灰オリーブ色) シルト混じり粘土が混じる | 5Y4/3 (暗オリーブ色) シルトが混じる |
| 10Y4/2 (オリーブ灰色) 粘土混じりシルトに | 60 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐色) シルト混じり細砂に |
| 2.5Y3/1 (黒褐色) シルト混じり粘土が混じる | 7.5Y3/1 (オリーブ褐色) シルト混じりシルトが混じる |

- | |
|-------------------------------------|
| 61 7.5Y3/1 (オリーブ褐色) 粘土混じりシルトに |
| 2.5Y4/4 (暗オリーブ色) シルトブロックが混じる |
| 62 2.5Y4/3 (暗オリーブ褐色) 細砂混じりシルトに |
| 7.5Y3/1 (オリーブ褐色) シルト混じり粘土が混じる |
| 63 7.5Y3/1 (オリーブ褐色) 細砂混じり粘土に |
| 7.5Y4/3 (暗オリーブ色) シルト混じり細砂が混じる |
| 64 5Y3/1 (オリーブ褐色) 粘土に |
| 2.5Y4/3 (オリーブ褐色) シルト混じり粘土が混じる |
| 65 10YR4/4 (褐色) シルト混じり粘土に |
| 5Y4/1 (暗オリーブ灰色) シルト混じり粘土が混じる |
| 66 7.5Y4/3 (暗オリーブ色) シルトに |
| 10YR4/2 (灰黄褐色) 粘土混じりシルトが混じる 炭化物少量含む |
| 67 10YR3/3 (暗褐色) 粘土混じりシルトに |
| 5Y5/3 (灰オリーブ色) シルトブロックが混じる |
| 68 5Y4/4 (暗オリーブ色) 粘土混じりシルトに |
| 7.5Y3/2 (オリーブ褐色) シルトが混じる |
| 69 10YR3/4 (暗褐色) 粘土混じりシルト |
| 70 7.5Y4/3 (暗オリーブ色) シルトに |
| 7.5Y4/3 (暗オリーブ色) 粘土混じりシルトが混じる |
| 71 10YR5/3 (にぶい黄褐色) 細砂混じりシルト |
| 72 10YR3/2 (黒褐色) 粘土混じりシルト |
| 73 10YR3/3 (暗褐色) シルトに |
| 5Y4/2 (灰オリーブ色) 細砂が混じる |
| 74 5Y4/2 (灰オリーブ色) 細砂 |
| 2.5Y3/2 (黒褐色) 細砂混じり粘土が混じる |
| 75 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐色) 粘土混じりシルトに |
| 10YR4/4 (褐色) シルトが混じる |
| 76 2.5Y3/2 (黒褐色) シルト混じり粘土 |
| 77 10YR3/4 (暗褐色) シルト混じり細砂 |
| 2.5Y4/4 (暗褐色) シルトブロックが混じる |
| 78 10YR2/3 (暗褐色) シルト |
| 79 10YR4/3 (にぶい黄褐色) 細砂混じりシルト |
| 80 7.5Y4/2 (灰オリーブ色) 粘土に |
| 5Y4/4 (暗オリーブ色) シルト混じり |
| 81 2.5Y4/2 (灰黄褐色) 細砂 |
| 82 7.5Y5/3 (灰オリーブ色) 細砂混じりシルトに |
| 10YR4/6 (褐色) シルトが混じる |
| 83 10YR2/3 (暗褐色) シルト混じり粘土 |
| 84 10YR2/3 (暗褐色) 粘土混じりシルトに |
| 5Y4/2 (灰オリーブ色) 細砂が混じる |
| 85 10YR3/3 (暗褐色) シルト混じり中砂 |
| Φ 5~10mm の礫を 10% 含む |
| 86 5Y4/2 (灰オリーブ色) 細砂 |
| 87 7.5YR4/3 (褐色) 細砂混じりシルト |
| 88 2.5Y4/3 (オリーブ褐色) 粘土混じりシルト |
| 89 7.5Y4/2 (灰オリーブ色) シルト混じり粗砂 |
| Φ 5~2mm の礫を 40% 含む |
| 90 5Y4/2 (灰オリーブ色) 細砂 |
| 10Y4/1 (灰色) シルトブロックが混じる |
| 91 2.5Y4/1 (オリーブ褐色) シルト混じり細砂 |
| 92 5Y4/3 (暗オリーブ色) シルト混じり粘土 マンガン僅少含む |
| 93 7.5Y5/1 (灰色) 粘土 |
| 94 10YR4/2 (オリーブ灰色) シルト混じりシルト |
| 95 10YR4/2 (灰黄褐色) 粘土混じり細砂 |
| 96 7.5Y4/1 (灰色) 粘土 |
| 97 10YR5/6 (黄褐色) シルト混じり粘土 |
| 98 2.5Y4/3 (オリーブ褐色) 細砂混じり粘土 |
| 99 2.5Y4/4 (暗オリーブ色) 粘土混じりシルト |
| 100 5Y5/1 (灰色) シルト混じり粗砂 |
| Φ 5~30mm の礫を 80% 含む |

図134 溝 (SD) 10

に副流路が埋没する（第 50～100 層）。主流路と副流路の埋没の前後関係についてはあまり明確でないが、主流路が一定程度埋没したのち副流路が埋没したものと考えられる。主流路、副流路が埋没した後は、東側のテラス状の平坦面を含めた広い範囲が埋没し（第 43～49 層）、溝としての機能はほとんど失われたものとみられる。しかしその後、この埋没部分に再び 1 条の溝が掘削され、最終的に埋没したものと考えられる（第 1～42 層）。

ただ、県教委による平成 9 年度の発掘調査成果を参照すると（山田編 2006）、今回の調査では、本来の溝の底部まで調査できていない可能性が高い。

出土遺物：おもに弥生土器が出土しているが、なかには混入と判断される須恵器も含まれていた。このほか、鉄器 1 点が出土している。

365～421 は弥生土器である。**365～374** は壺である。**365** は胴部から口縁部である。胴部に比して頸部が窄まる形状をしており、頸部ないし口縁部は緩やかに内側に彎曲しながら外反し口縁端部にいたる。上下に拡張させた口縁端部の端面には面を有する。磨滅のため内外面ともに調整等はほぼ不明であるが、胴部内面にユビオサエの痕跡が僅かに残る。**366** は胴部に比して頸部が窄まる形状をしており、頸部ないし口縁部は緩やかに開きながら外反し口縁端部にいたる。磨滅のため全体的に調整等は不明瞭であるが、外面では胴部にタテ方向のハケメ調整が施されているほか、口縁端部の直下に刺突列点文と 3 条の凹線文がめぐらされている。また、頸部外面では突帯を貼り付けたのち、その上端に刺突列点文を施している。内面では口縁端部の直下において強いヨコナデ調整が施されている。**367** は頸部から口縁部である。頸部は直線的に開きながら外反する。口縁部は端部を肥厚させ、その端面は明瞭な面をもつ。外面ではナメ方向のハケメ調整が施されているほか、口縁端部の下位に 2 条の凹線文や刺突列点文をめぐらせている。なお、刺突列点文は、頸部の下位にも施されている。一方の内面では、口縁端部付近にヨコナデ調整が施されている。**368** は口縁部片である。残存状況は良くないが、上下に拡張させた口縁端部の端面に刺突列点文を施している。ただし、この刺突列点文については、口縁端部を全周するものではなく、一定の間隔をあけて施されたものとみられる。**369** は口縁部片である。磨滅のため内外面ともに調整等不明瞭であるが、口縁部は内側に彎曲しながら緩やかに外反し口縁端部にいたる。また、端面には若干の面を有する。**370** は無頸壺の口縁部片である。口縁部は内灣しながら内上方へ立ち上がる。口縁端部はやや肥厚させ、その端面には面を有する。また、口縁端部の直下には径 0.6 cm 前後の円形の孔が焼成前に穿孔されている。外面では最大径をもつ付近で 2 条の凹線文が確認される。**371** は頸部片である。頸部はやや内側に彎曲しながらほぼ真上に立ち上がる。外面ではナデ調整ののち 2 条を一単位とする櫛描直線文が複数回めぐらされているほか、胴部との境界付近にタテ方向のハケメが確認される。一方の内面ではナデ調整が施されている。胎土の特徴として、1～3 mm の砂礫をやや多く含む。**372** は肩部付近の胴部片である。残存状況は良くないが、外面には条数 5 条の櫛描波状文と櫛描直線文が交互にめぐらされており、内面にはハケメ調整が施されている。胎土の特徴として、1～3 mm の砂礫をやや多く含む。**373** は胴部から頸部にかけての小片である。頸部は内側に彎曲しながら緩やかに外反する形状をしている。磨滅のため調整等不明瞭なところもあるが、外面では条数 9 条の櫛描波状文と櫛描直線文が複数回めぐらされている。一方、内面にはナデ調整が施されている。**374** は壺の胴部から頸部にかけての破片である。磨滅のため調整等は不明瞭であるが、外面には条数 6 条の櫛描直線文と櫛描波状文を交互にめぐらせている。一方、内面では胴部にタテ方向のハケメ調整が施されているほか、頸部付近にナデ調整が施されている。**375** は水差の把手付近の破片とみられる。把手そのものは欠いているものの、胴部外面にはハケメ調整が、内面にはナデ調整が施されている。**376～383** は甕である。**376** は胴部から口縁部である。口縁部は

頸部に向かって緩やかに立ち上がる胴部から「く」の字状に短く屈曲し口縁端部にいたる。また、口縁部は端部に向かって肥厚しており、面を有する端面には3条の凹線文をめぐらせている。磨滅のため全体的に調整等は不明瞭であるが、胴部では内外面ともにハケメ調整が施されている。377の胴部は右上がりのタタキによって成形されており、頸部のやや下位に最大径をもつ。一方、内面ではタテ方向のハケメ調整が施されているほか、肩部付近にユビオサエの痕跡が僅かに残る。頸部ないし口縁部はヨコナデによって緩やかに外反し、端部を丸くおさめる。ドーナツ状上げ底の底部には木の葉圧痕が僅かに残る。378は胴部から口縁部である。胴部は右上がりのタタキによって成形され、内面にはヨコ方向のハケメ調整が施されており、ほとんど肩のはらない形状をしている。口縁部はそこから「く」の字状に外反し、やや肥厚しながら口縁端部にいたる。面を有する端面には擬凹線文をめぐらせている。379は口縁部である。口縁部は胴部から緩やかに「く」の字状に外反し端部にいたる。内外面ともにヨコナデ調整が施されており、口縁端部は丸くおさめる。380は口縁部である。磨滅のため調整等は不明瞭であるが、胴部から口縁端部にかけて内側に彎曲しながら緩やかに外反し、端部には若干の面を有する。381は口縁部片である。残存状況は良くないが、口縁部は胴部から「く」の字状に屈曲する。口縁端部は特にその上端を強くつまみ上げて拡張させており、面を有する端面には3条の凹線文をめぐらせている。382は口縁部片である。口縁部はヨコナデによってやや内側に彎曲しながら外反する。端部はその上端を外上方へ拡張させ、面を有する端面には擬凹線文をめぐらせている。383は口縁部片である。磨滅のため調整等は不明瞭であるが、口縁部は器壁の薄い胴部から鋭角に短く屈曲する。また、口縁部の器壁は厚く、端面には面を有する。384は鉢の口縁部片である。器高は低いものとみられ、内満気味に立ち上がる体部から短く外反する口縁部をもつ。385～407は壺や甕、鉢などの底部である。385は甕あるいは壺の底部である。胴部は厚みのある底部から少し外に開きながら立ち上がる。磨滅のため調整等は不明瞭であるが、胴部外面にはタテ方向のハケメ調整が施されており、内面にはユビオサエの痕跡が僅かに残る。胎土の特徴として、1～3mmの砂礫を多く含んでいる。386は壺などの底部とみられる。胴部は、器壁の厚い底部から比較的なだらかに立ち上がる。磨滅のため調整等は不明瞭であるが、内面には底部付近にユビオサエの痕跡が残り、外面にはタテ方向のハケメ調整が施されている。胎土の特徴として、1～4mmの砂礫を多く含んでいる。387は甕あるいは壺の底部である。器壁の厚いつくりのもので、磨滅のため調整等は不明瞭であるが、内面ではユビオサエの痕跡が僅かに残る。胎土の特徴として、1～5mmの砂礫を多く含んでいる。388は甕あるいは壺の底部である。胴部は器壁の厚い底部からなだらかに立ち上がる。胴部内面にはナデ調整、胴部外面にはタテ方向のハケメ調整が施されている。389は甕などの底部片である。胴部は底部からなだらかに立ち上がる。胎土の特徴として、1～4mmの砂礫を多く含む。390は甕などの底部片である。残存状況は良くないが、胴部はやや厚みのある底部からなだらかに立ち上がる。胴部外面では底部付近にヨコナデ調整が施されており、内面にはナデ調整が施されている。391は壺などの底部とみられる。底部は中央付近の器壁が薄くなっており、胴部はそこからなだらかに立ち上がる。磨滅のため調整等は不明瞭であるが、内面ではハケメ調整のちナデ調整が施されているものとみられる。一方、胴部外面には、ハケメないし板ナデとみられる工具痕が僅かに確認されるのみである。392は甕の底部である。胴部は水平ないしやや右上がりのタタキによって成形されており、底部からなだらかに立ち上がる。内面にはナデ調整が施されている。393は甕の底部である。胴部は右上がりのタタキによって成形されており、底部からなだらかに立ち上がる。内面では基本的にナデ調整が施されているものの、ハケメ調整とみられる痕跡も僅かに確認される。394は甕の底部である。残存状況は良くないが、外面では右上がりのタタキの痕跡が確認され、内面には工具痕が残る。395は甕の底部であ

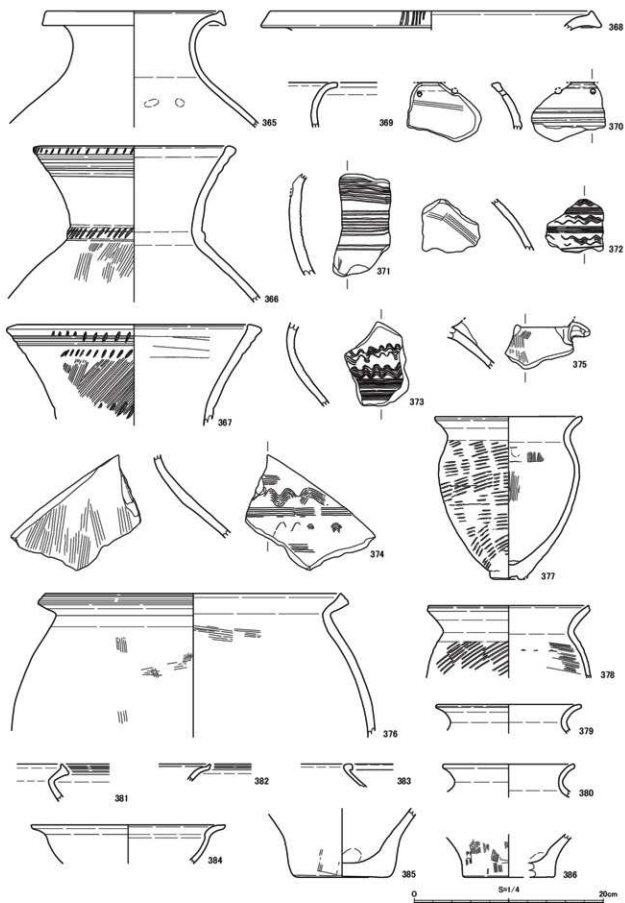


图135 潢(SD)10出土遗物(1)

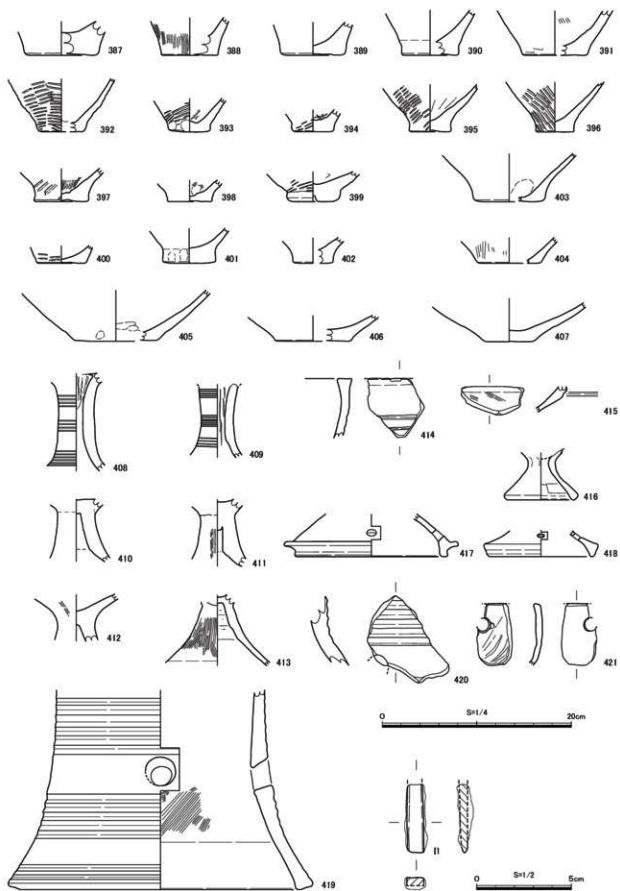


图136 溝(SD)10出土遺物(2)

る。胴部は右上がりのタタキによって成形されており、中央付近の器壁が薄い底部からなだらかに立ち上がる。内面には底部の中央から放射状に伸びた工具痕が確認される。底部はドーナツ状上げ底とみられる。**396**は甕の底部である。胴部は左上がりのタタキによって成形されており、径の小さい底部からなだらかに立ち上がる。内面にはナデ調整が施されている。**397**は甕などの底部である。胴部は、中央付近の器壁が薄い底部からなだらかに立ち上がる。右上がりのタタキによって成形されており、内面ではタテ方向のハケメ調整が施されている。底部はドーナツ状上げ底とみられ、底面には植物繊維の圧痕が残る。**398**は甕などの底部片である。残存状況は良くないが、底部は中央付近の器壁が薄く、胴部はやや開きながら立ち上がる。外面では底部付近にナデ調整が施されている。内面ではハケメ調整が施されているものの、その一部にはユビオサエやナデによる凹凸が残る。**399**は甕や壺などの底部である。胴部は右上がりのタタキによって成形されており、厚みのある底部から大きく開きながら立ち上がる。一方の内面では板ナデとみられる調整が施されている。なお、底部はドーナツ状上げ底で、胴部をタタキによって成形したのち粘土を付加している。**400**は壺や鉢などの底部とみられる。胴部は中央付近の器壁が薄い底部から緩やかに立ち上がる。磨滅のため内外面ともに調整等是不明瞭であるものの、外面の底部付近にはヨコ方向のタタキの痕跡が僅かに残る。**401**は壺もしくは鉢の底部とみられる。胴部は厚みのある円盤状の底部から内灣しながら緩やかに立ち上がる。磨滅のため調整等是不明瞭であるが、内面では底部付近にユビオサエの痕跡が残るほか、ナデ調整が施されているものとみられる。外面では底部側面にユビオサエの痕跡が残る。**402**は鉢などの底部片とみられる。底部の器壁がやや厚い形状のもので、内外面にはナデ調整が施されている。**403**は壺などの底部である。胴部は器壁の薄い底部からやや開きながら立ち上がる。磨滅のため調整等是不明瞭であるが、内面ではユビオサエとみられる痕跡が確認される。**404**は壺などの底部片である。残存状況は良くないが、底部は中央付近の器壁が薄く、胴部はなだらかに開きながら立ち上がる。胴部外面にはタテ方向のミガキ調整が、内面にはナデ調整が施されている。**405**は壺の底部である。底部の中央付近を欠いているが、胴部は内灣気味に大きく開きながら立ち上がる。磨滅のため調整等是不明瞭であるが、胴部外面ではミガキ調整が施されているものとみられる。一方、内面では底部付近にユビオサエの痕跡が僅かに残る。**406**は壺の底部である。胴部はやや厚みのある底部から大きく開きながら立ち上がる。磨滅のため調整等是不明瞭であるが、内面ではナデ調整が施されているほか、ユビオサエの痕跡が僅かに残る。**407**は壺の底部である。胴部は径の小さい底部から大きく開きながら立ち上がる。磨滅のため調整等是不明瞭であるが、内外面ともにナデ調整が施されているものとみられる。**408**～**413**は高杯の脚部である。**408**は磨滅のため調整等是不明瞭であるが、脚部外面には条数4条の櫛描直線文がやや間隔をあけて複数回めぐらされている。内面上部にはしぼり痕が残る。なお、杯部と脚部の成形にあたっては円盤充填法を用いているものとみられる。**409**は高杯の脚部である。磨滅のため調整等是不明瞭であるが、脚部外面には櫛描直線文がやや間隔をあけて複数回めぐらされている。内面にはしぼり痕が残る。**410**は全体的に器壁が厚いつくりのものである。内面では天井部から約3.8cm下の位置に明瞭な稜をもち、そこから屈曲して脚端部に向かって開く形状を示す。なお、杯部と脚部は別作りとみられる。**411**は全体的に器壁が厚く、内面が特徴的な形状をしている。内面天井部から約2.5cm下までは円柱状で、そこから屈曲して脚端部に向かって開く形状を呈する。外面にはタテ方向のハケメ調整が施されている。なお、杯部と脚部は別作りとみられる。**412**は脚部から杯部にかけて残存する。杯部は器壁の厚い脚部から直線的に開きながら立ち上がる。磨滅のため内外面ともに調整等是不明瞭であるが、外面の一部でハケメが僅かに確認できる。**413**は脚端部に向かってラップ状に大きく開く形状をしている。外面では、ハケメ調整のちタテ方向に丁寧なミガキ調整が施されてい

る。一方、内面では、その上部にヨコ方向のケズリ調整が施されているほか、ナデ調整が施されている。なお、杯部と脚部は別作りとみられ、外面の一部ではその接合にあたって粘土を付加している痕跡が認められる。**414**は高杯の口縁部片とみられる。残存状況は良くないが、口縁部はやや内溝しながらほぼ直上に立ち上がる。口縁端部は肥厚させ、その端面には明瞭な面をもつ。磨滅のため調整等は不明瞭であるが、口縁端部付近においてヨコナデ調整が施される以外はナデ調整が施されているものとみられる。なお、外面では2条の凹線文が確認される。**415**は高杯の杯部片とみられる。残存状況は良くないが、碗状を呈する杯部の体部と口縁部の境界付近の破片とみられ、外面には1条の凹線文が確認される。内面ではハケメ調整ののち、ヨコナデ調整が施されている。**416**は壺などの脚部とみられる。底部に比して上部がかなり窄まる形状をしている。脚部は端部に向かって直線的に開くとともに肥厚し、端部は若干の面をもつ。磨滅のため内外面ともに調整等は不明瞭であるが、内面ではヨコ方向のケズリが僅かに確認される。なお、脚部の上面には刺離痕が認められることから、壺などとは別作りによるものとみられる。**417**は高杯の脚部である。磨滅のため調整等は不明瞭であり、また残存状況も良くないが、ドーム状を呈する脚裾部は、端部を肥厚させるとともに、そのやや上方外面に拡張部をもつ。本来の透孔の数は不明であるが、現状では円形透孔1孔が残存する。**418**は高杯ないし壺などの脚部である。磨滅のため調整等は不明瞭であり、また残存状況も良くないが、ドーム状を呈する脚裾部は端部を肥厚させ、端面をヨコナデによって仕上げる。本来の透孔の数は不明であるものの、現状では円形透孔1孔が残存する。**419**は器台である。上半部を欠いているが、全体的に器壁が厚いつくりのもので、脚端部からやや内傾しつつ立ち上がったのち、真上に立ち上がる形状を示しており、脚端部は面を有する。また、底部から約12.5cmの高さの位置には径3.0cm前後の円形透孔が焼成前に穿孔されている。外面には連続して凹線文がめぐらされており、内面では一部にハケメ調整が施されているほか、脚端部付近にヨコナデ調整が施されている。**420**は器台の破片である。磨滅のため調整等はほぼ不明であるが、脚部から胴部への立ち上がり付近の破片とみられ、外面では6条の凹線文が確認されるとともに、その一部で円形透孔の存在が認められる。**421**は飯蛸壺片である。底部は丸底を呈するものとみられ、胴部はほぼ真上に立ち上がり口縁端部にいたる。端部は僅かな面を有し、その約2.0cm下の位置には径1.5cmの円形の孔が焼成前に穿孔されている。胴部外面はナデ調整、内面は板ナデとみられる調整が施されている。

I 1は鉄器で、鑿とみられる。幅はほとんど変化が見られないのに対して、厚さは先端に向かって薄くなっており、先端部には両刃をつくりだしている。

時期：出土遺物から弥生時代後期から終末期頃にかけて埋没したものと考えられる。

■遺物包含層等出土遺物（図137・138、写真202）

細かな出土層位は確認できていないが、**422**～**427**が第1遺構面より上方に堆積する包含層等と同遺構面での遺構検出中に出土した遺物で、**428**～**434**が第II層から出土した遺物である。

422は須恵器の蓋片である。平坦な天井部は口縁端部に向かって緩やかに下降したのち、下方に若干のかかりを成形する。内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。**423**は須恵器の壺の底部である。体部は底部から急な角度で立ち上がる。内外面ともに回転ナデによって仕上げられているものの、底部内面では回転ナデののちナデ調整が施されている。また、底部にはやや低めの高台を貼り付ける。**424**は須恵器の碗の底部片である。体部は平高台の底部からなだらかに立ち上がり、内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。底部は回転糸切りである。**425**は須恵器の碗の口縁部の小片である。内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、内溝気味に立ち上がる口縁部は端部

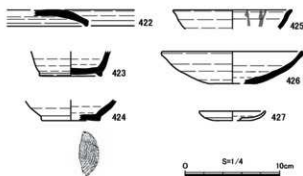


図137 調査区3 包含層等出土遺物

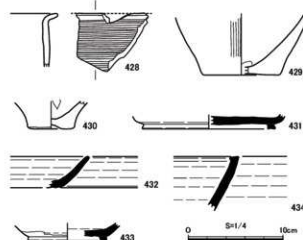


図138 調査区3 下層包含層出土遺物

を短く外方へ外反させ、シャープに仕上げる。内面では火樺痕が認められる。426は須恵器の碗である。底部の大部分を欠くものの、体部は口縁端部に向かって内灣気味に外反するとともに器壁がやや薄くなる。端部は丸くおさめる。磨滅のため調整等は不明瞭であるが、内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、底部は回転系切りとみられる。427は土師器の皿である。磨滅のため内外面ともに調整等は不明瞭であるが、全体的に器壁が薄いつくりのもので、口縁部はヨコナデによって内灣気味に外反し、端部はシャープに仕上げられている。

428は弥生土器の甕の口縁部片である。ほぼ直上に立ち上がる胴部から外方へ短く屈曲する口縁部をもつ。胴部外面には条数6・7条の櫛描直線文が密にめぐらされている。胎土の特徴として、1～3mmの砂礫を多く含んでいる。429は弥生土器の甕などの底部である。胴部は中央の器壁がやや薄い底部から内灣気味になだらかに立ち上がる。磨滅のため内外面ともに調整等は不明瞭であるが、胴部外面

ではタテ方向のハケメの痕跡が僅かに確認され、底部内面にはユビオサエの痕跡が残る。胎土の特徴として、1～3mmの砂礫を比較的多く含んでいる。430は弥生土器の鉢などの底部とみられる。底部は外面の中央付近で大きく凹み、胴部はやや開きながらなだらかに立ち上がる。磨滅のため内外面ともに調整等は不明瞭であるが、内面の一部では板ナデとみられる工具痕が僅かに確認される。431は須恵器の杯の底部である。平坦な底部は中央付近の器壁がやや厚く、内面では回転ナデののちナデ調整が施されている。底部外面は回転ヘラ切りののち回転ナデ調整が施されており、そこに幅の太い高台を貼り付ける。432は須恵器の杯片である。体部ないし口縁部は内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、直線的に外反し口縁端部にいたる。端部は丸くおさめる。底部は残存状況が良くないが、ヘラ切りとみられる。433は須恵器の碗の底部である。体部は底部からやや開きながら緩やかに立ち上がり、内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。底部にはやや幅の太い高台を貼り付けている。体部には貼り付けの際の痕跡が明瞭に残る。434は須恵器の盤の口縁部片とみられる。残存状況は良くないが、内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、直線的に立ち上がる体部は端部を内側へ鋭く突出させて口縁端部とする。また、端部端面には明瞭な面をもつ。

表3 遺物観察表(土器・土製品)

報告 No.	出土位置		種別	器種	法量 (cm)			観察所見
	調査区	遺構等			口徑	高さ	底径	
1	調査区1	SB1P2	須恵器	皿	-	>2.1	-	内面: 回転ナブ 外面: 回転ナブ 口縁部に重ね焼き痕跡あり
2	調査区1	SB1P2	須恵器	鉢	-	>4.1	*14.6	内面: 回転ナブ 外面: 回転ナブ 底部静止糸切り?
3	調査区1	SB1P3	土師器	托	-	>1.9	4.9	内面: 欠損のため調整等不明 外面: 回転ナブ 底部回転糸切り
4	調査区1	SB2P1	須恵器	椀小	-	>1.9	-	内面: 回転ナブ 外面: 回転ナブ 口縁部に重ね焼き痕跡あり
5	調査区1	SB3P7	須恵器	椀小	-	>2.4	-	内面: 回転ナブ 外面: 回転ナブ 口縁部に重ね焼き痕跡あり
6	調査区1	SB3P9	須恵器	杯or椀	-	>2.2	-	内面: 回転ナブ 外面: 回転ナブ 口縁部に重ね焼き痕跡あり
7	調査区1	SB3P10	須恵器	椀小	-	>1.9	-	内面: 回転ナブ 外面: 回転ナブ
8	調査区1	SB3P1	須恵器	椀	-	>2.5	-	内面: 回転ナブ 外面: 回転ナブ 口縁部に重ね焼き痕跡あり
9	調査区1	SB3P2	土師器	皿	*11.7	>2.1	*7.9	内面: ヨコナデ 外面: ヨコナデ 接合痕あり
10	調査区1	SB3P9	土師器	皿	*8.2	1.1	*7.2	内面: ナブ ヨコナデ 外面: ナブ ヨコナデ
11	調査区1	SB3P2	土師器	皿	-	>1.8	-	内面: ナブ ヨコナデ 外面: ユビオサエ ヨコナデ
12	調査区1	SB3P1	土師器	皿	-	>2.1	-	内面: ナブ ヨコナデ 外面: ナブ ヨコナデ
13	調査区1	SB3P4	土師器	皿	-	1.0	-	磨滅のため調整等不明
14	調査区1	SB3P7	土師器	羽釜	-	>3.5	-	内面: ヨコナデ 外面: ヨコナデ 押貼付け 煤付着
15	調査区1	SB4P5	須恵器	杯or椀	-	>2.9	-	内面: 回転ナブ 外面: 回転ナブ
16	調査区1	SB6P4	須恵器	椀	-	>2.8	-	内面: 回転ナブ 外面: 回転ナブ 底部回転糸切り
17	調査区1	SB7P6	土師器	杯or椀	-	>3.3	-	内面: ナブ底、ヨコナデ 外面: ナブ底、ヨコナデ
18	調査区1	SB7P7	土師器	杯	-	>2.9	*7.4	内面: 磨滅のため調整等不明 外面: ナブ 底部回転糸切りか
19	調査区1	SB7P10	須恵器	椀	*16.8	>5.6	-	内面: 回転ナブ 外面: 回転ナブ
20	調査区1	SB7P9	須恵器	椀	-	>7.4	*2.0	内面: 回転ナブ 外面: 回転ナブ 底部回転糸切り
21	調査区1	SB7P3	須恵器	鉢	-	>10.5	*16.2	内面: ナブ 回転ナブ 接合痕あり 外面: ユビオサエ、回転ナブ・椀ナブ? 底部ヘラ切り?
22	調査区1	SB7 P10・11・12	瓦	平瓦	長さ 30.8	幅 27.8	厚さ 1.8	内面: 帯目瓦 外面: ナブ
23	調査区1	SK1	土師器	壺小	-	>5.7	-	内面: ヨコナデ 外面: ヨコナデ
24	調査区1	SK1	須恵器	椀	-	>3.3	-	内面: 回転ナブ 外面: 回転ナブ
25	調査区1	SK2	土師器	杯小	-	>2.3	-	内面: 鉄分等沈着のため調整等不明 外面: ナブ ヨコナデ
26	調査区1	SK3	弥生土器	底部	-	>8.4	9.3	内面: ユビオサエ ナブ 外面: 磨滅のため調整等不明
27	調査区1	SK4	弥生土器	高杯	*14.1	>6.6	-	内面: 磨滅のため調整等不明 外面: 磨滅のため調整等不明 図説文
28	調査区1	SK4	弥生土器	高杯	*28.2	>7.0	-	内面: 磨滅のため調整等不明 外面: 磨滅のため調整等不明 図説文
29	調査区1	SK4	弥生土器	高杯	-	>8.2	-	内面: ユビオサエ しぼり痕あり 円盤充填法 外面: 磨滅直線文
30	調査区1	SK4	弥生土器	脚部	-	>3.0	-	内面: 磨滅のため調整等不明 外面: 磨滅のため調整等不明 円筒透孔
31	調査区1	SK4	弥生土器	壺	*33.2	>5.3	-	内面: ナブ ヨコナデ 外面: ヨコナデ 図説文 口縁部に斜交列点文、棒状浮文
32	調査区1	SK4	弥生土器	壺	-	>3.6	-	内面: 磨滅のため調整等不明 外面: 磨滅のため調整等不明 磨滅直線文 磨滅点状文
33	調査区1	SK4	弥生土器	壺	*13.6	>5.0	-	内面: ハケメ ヨコナデ 外面: ヨコナデ
34	調査区1	SK4	弥生土器	壺	*13.8	>5.7	-	内面: ヨコナデ 外面: ハケメ ヨコナデ
35	調査区1	SK4	弥生土器	壺	14.0	>12.4	-	内面: ハケメ ヨコナデ 外面: ハケメ ヨコナデ 綾紗文
36	調査区1	SK5	土師器	皿	-	1.5	-	内面: ナブ ヨコナデ 外面: ヨコナデ
37	調査区1	SK5	須恵器	椀	-	>1.6	-	内面: 回転ナブ 外面: 回転ナブ 口縁部に重ね焼き痕跡あり
38	調査区1	SK5	須恵器	脚部小	-	>6.3	-	内面: ヘラケズリ ヨコナデ 外面: ヨコナデ
39	調査区1	SK6	土師器	皿	*9.0	1.4	*6.2	内面: ナブ ヨコナデ 外面: ユビオサエ ヨコナデ
40	調査区1	SK7	弥生土器	壺	*15.2	>5.0	-	内面: ユビオサエ ナブ ヨコナデ 接合痕あり 外面: タタキ ヨコナデ

報告 No.	出土位置		種別	器種	法量 (cm)			観察所見
	調査区	通溝等			口径	高さ	底径	
41	調査区 1	SK8	弥生土器	甕	18.5	20.4	6.6	内面: ユビオサエ 外面: ハケメ 底部一部ユビオサエ
42	調査区 1	SK8	弥生土器	甕	φ21.6	>20.4	-	内面: 磨滅のための調整等不明 外面: ハケメ
43	調査区 1	SK8	弥生土器	甕	-	>14.2	7.4	内面: ユビオサエ 外面: 磨滅のための調整等不明
44	調査区 1	SK8	弥生土器	甕	φ17.0	>28.5	-	内面: ユビオサエ ナデ 外面: ハケメ
45	調査区 1	SK8	弥生土器	甕	φ20.8	>14.6	-	内面: ユビオサエ ナデ ヨコナデ 外面: ハケメ ヨコナデ後、割目 接合痕あり
46	調査区 1	SK8	弥生土器	甕小	-	>7.6	φ9.0	内面: 磨滅のための調整等不明 外面: ハケメ後、ヒガキ
47	調査区 1	SK9	土師器	製成土器	12.0	>12.3	-	内面: ユビオサエ 外面: ユビオサエ
48	調査区 1	SK10	弥生土器	鉢	-	>6.9	-	内面: 板ナデ 外面: タタキ後、ハケメ
49	調査区 1	SP1	瓦	平瓦	長さ >14.5	幅 2.1	厚さ 2.1	内面: 布目瓦痕 外面: タタキ後、一部ナデ
50	調査区 1	SP2	須恵器	甕	-	>2.4	-	内面: 回転ナデ 外面: 回転ナデ
51	調査区 1	SP2	須恵器	甕	-	>2.1	-	内面: 回転ナデ 外面: 回転ナデ 口縁端部に重ね焼き痕跡あり
52	調査区 1	SP3	土師器	皿	-	2.1	-	内面: ナデ? ヨコナデ 外面: ナデ? ヨコナデ
53	調査区 1	SP4	須恵器	鉢	-	>8.5	φ8.4	内面: 回転ナデ? 外面: 回転ナデ 底部回転糸切り?
54	調査区 1	SP5	須恵器	甕	-	>1.2	φ6.6	内面: 回転ナデ 外面: 回転ナデ 底部回転糸切り
55	調査区 1	SP6	須恵器	甕	15.6	4.8	6.9	内面: 回転ナデ 口縁端部に重ね焼き痕跡あり 外面: 回転ナデ 口縁端部に重ね焼き痕跡あり
56	調査区 1	SP7	土師器	皿	φ6.4	1.1	φ5.9	内面: ナデ ヨコナデ 外面: ナデ ヨコナデ
57	調査区 1	SP8	土師器	皿	-	>2.2	-	内面: ナデ ヨコナデ 外面: ナデ? ヨコナデ
58	調査区 1	SP9	土師器	皿	φ7.2	1.4	4.6	内面: ナデ 回転ナデ 外面: 回転ナデ 底部回転糸切り
59	調査区 1	SP9	土師器	皿	φ8.4	1.0	φ6.9	内面: ナデ ヨコナデ 外面: ユビオサエ ナデ ヨコナデ
60	調査区 1	SP9	土師器	皿	-	1.4	-	内面: ナデ ヨコナデ 外面: ナデ ヨコナデ
61	調査区 1	SP10	土師器	皿	-	1.1	-	内面: ナデ ヨコナデ 外面: ユビオサエ ナデ ヨコナデ
62	調査区 1	SP10	青磁	甕	-	>4.3	-	内面: 施軸 外面: 磨中文字彫後、施軸
63	調査区 1	SP11	須恵器	甕	-	>2.6	-	内面: 回転ナデ 外面: 回転ナデ 口縁端部に重ね焼き痕跡あり
64	調査区 1	SP11	土師器	羽釜	-	>3.5	-	内面: ハケメ 外面: ヨコナデ 割目付け
65	調査区 1	SP12	須恵器	甕	-	>2.4	φ6.0	内面: 回転ナデ 外面: 回転ナデ
66	調査区 1	SP12	須恵器	甕	-	>2.0	-	内面: 回転ナデ 外面: 回転ナデ 底部回転糸切り
67	調査区 1	SP13	弥生土器	甕	φ20.6	8.5	-	内面: ハケメ ヨコナデ 外面: ハケメ ヨコナデ 回転文 口縁端部に綾杉文、四形浮文
68	調査区 1	SP14	弥生土器	高杯	-	>2.6	-	内面: ヨコナデ? 外面: ヨコナデ?
69	調査区 1	SP15	須恵器	甕or皿	-	>1.1	φ6.0	内面: 回転ナデ 外面: 回転ナデ 底部回転糸切り
70	調査区 1	SP16	土師器	杯or甕	-	>3.0	-	内面: ヨコナデ 外面: ユビオサエ ヨコナデ
71	調査区 1	SP16	土師器	皿	-	>1.7	-	内面: ナデ? ヨコナデ 外面: ヨコナデ
72	調査区 1	SP17	土師器	杯	φ11.2	3.0	φ7.4	内面: ナデ ヨコナデ 外面: ナデ ヨコナデ
73	調査区 1	SP17	土師器	皿	φ7.8	1.2	φ6.6	内面: ナデ ヨコナデ 外面: ユビオサエ ナデ? ヨコナデ
74	調査区 1	SP18	土師器	皿	-	>2.0	-	内面: ヨコナデ 外面: ヨコナデ
75	調査区 1	SP19	土師器	皿	-	1.8	-	内面: ナデ ヨコナデ 外面: ヨコナデ
76	調査区 1	SP20	土師器	甕	-	>6.2	-	内面: ナデ ヨコナデ 外面: ハケメ ヨコナデ
77	調査区 1	SP21	土師器	甕	φ23.0	>17.0	-	内面: ナデ ハケメ ヨコナデ 炭化物付着 外面: タタキ ヨコナデ 蓮付着
78	調査区 1	SP21	須恵器	甕	-	>2.6	φ5.2	内面: 回転ナデ 外面: 回転ナデ 底部回転糸切り
79	調査区 1	SP22	土師器	皿	φ7.8	1.5	φ5.2	内面: ナデ ヨコナデ 外面: ユビオサエ後、ナデ ヨコナデ
80	調査区 1	SP23	須恵器	杯	-	>2.0	6.8	内面: 回転ナデ 外面: 回転ナデ 底部回転糸切り

報告 No.	出土位置		種別	器種	法量 (cm)			観察所見
	調査区	遺構等			口径	高さ		
						口縁	底縁	
81	調査区1	SP25	土師器	皿	7.6	1.1	7.0	内面：ナデ ヨコナデ 外面：ヨコナデ
82	調査区1	SP26	土師器	皿	-	>2.5	-	内面：ナデ ヨコナデ 外面：ナデ ヨコナデ
83	調査区1	SP27	須恵器	皿	8.8	2.5	5.4	内面：同軸ナデ 外面：同軸ナデ 底部同軸糸切り
84	調査区1	SP28	土師器	皿	-	>1.4	-	内面：ナデ ヨコナデ 外面：ヨコナデ
85	調査区1	SP29	土師器	皿	φ7.5	1.6	φ6.4	内面：ナデ ヨコナデ 外面：ナデ ヨコナデ
86	調査区1	SP29	土師器	皿	φ8.2	1.4	φ6.4	内面：ナデ ヨコナデ 外面：ユビオサエ ヨコナデ
87	調査区1	SP29	土師器	皿	φ12.8	>2.5	φ9.6	内面：ナデ ヨコナデ 外面：ナデ ヨコナデ 接合痕あり
88	調査区1	SP29	土師器	杯	φ14.0	>3.2	-	内面：ナデ 飯ナデ 外面：ナデ ヨコナデ 接合痕あり
89	調査区1	SP29	土師器	鉢	φ20.6	>8.3	-	内面：ハケメ ヨコナデ 外面：タタキ ヨコナデ 椀付着
90	調査区1	SP30	土師器	皿	-	1.8	-	内面：ヨコナデ 外面：ヨコナデ
91	調査区1	SP30	土製品	土練	長さ >3.5	幅 1.1	厚さ 1.0	ナデ
92	調査区1	SP31	土師器	杯	φ12.0	2.7	φ7.2	内面：ナデ ヨコナデ 外面：ユビオサエ ヨコナデ
93	調査区1	SP32	土師器	皿	-	1.3	-	内面：ナデ ヨコナデ 外面：ユビオサエ ヨコナデ
94	調査区1	SP32	須恵器	椀	-	>1.3	-	内面：ナデ 外面：ナデ 底部同軸糸切り
95	調査区1	SP33	土師器	皿	φ7.8	1.0	φ6.2	内面：ナデ ヨコナデ 外面：ヨコナデ
96	調査区1	SP34	土師器	杯or皿	-	>1.0	φ5.5	内面：同軸ナデ 外面：同軸ナデ 底部同軸糸切り
97	調査区1	SP35	土師器	皿	8.0	1.2	7.6	内面：ナデ ヨコナデ 外面：ヨコナデ
98	調査区1	SP36	須恵器	椀	-	>3.8	-	内面：同軸ナデ 外面：同軸ナデ 沈線
99	調査区1	SP37	瓦	平瓦	長さ >6.1	幅 >9.5	厚さ 1.6	踏面：春日瓦類 上面：ナデ
100	調査区1	SP38	須恵器	椀	-	>4.5	φ5.6	内面：同軸ナデ 外面：同軸ナデ 底部同軸糸切り
101	調査区1	SP39	土師器	壺小	-	>4.1	-	内面：ヨコナデ 外面：ヨコナデ
102	調査区1	SP40	須恵器	椀	-	>3.2	φ5.0	内面：同軸ナデ 外面：同軸ナデ 沈線 底部同軸糸切り
103	調査区1	SP41	土師器	椀	-	>3.7	φ6.4	内面：ナデ 同軸ナデ 外面：ナデ 同軸ナデ 底部ナデ後、高台足付け 接合痕あり
104	調査区1	SP42	土師器	椀	-	>2.3	φ6.2	内面：同軸ナデ 外面：同軸ナデ 底部同軸糸切り
105	調査区1	SP43	須恵器	壺	φ14.0	>1.1	-	内面：ナデ 同軸ナデ 外面：同軸ヘラケズリ 同軸ナデ
106	調査区1	SP44	弥生土器	甕	φ13.4	>14.3	-	内面：ケズリ ハケメ ヨコナデ 外面：ミガキ ハケメ ヨコナデ
107	調査区1	SP44	弥生土器	脚部	-	>12.1	11.8	内面：ケズリ 内側光澤法 外面：ミガキ 嵌成前穿孔あり
108	調査区1	SP44	弥生土器	甕or壺	-	>23.8	9.6	内面：ナデ ケズリ 外面：ハケメ 一部タタキ衣痕あり
109	調査区1	SX1	須恵器	椀	-	>2.4	-	内面：同軸ナデ 外面：同軸ナデ 口縁部に重ね焼き痕あり
110	調査区1	SX1	須恵器	椀	-	>3.5	-	内面：同軸ナデ 外面：同軸ナデ
111	調査区1	SX1	須恵器	椀	-	>2.6	φ7.4	内面：同軸ナデ 外面：同軸ナデ 底部同軸糸切り
112	調査区1	SX1	須恵器	椀	-	>1.7	φ7.0	内面：同軸ナデ 外面：同軸ナデ 高台足付け
113	調査区1	SX1	須恵器	鉢	-	>4.6	-	内面：ナデ 同軸ナデ 外面：同軸ナデ 口縁部に重ね焼き痕あり
114	調査区1	SX1	須恵器	鉢	-	>4.3	-	内面：ナデ 同軸ナデ 外面：同軸ナデ
115	調査区1	SX1	須恵器	鉢	-	>4.4	-	内面：同軸ナデ 外面：同軸ナデ 接合痕あり 口縁部に重ね焼き痕あり
116	調査区1	SX1	須恵器	鉢	-	>3.6	-	内面：同軸ナデ 外面：同軸ナデ 口縁部に重ね焼き痕あり
117	調査区1	SX1	須恵器	鉢	-	>4.9	φ9.4	内面：ナデ 外面：同軸ナデ 底部同軸糸切り
118	調査区1	SX1	須恵器	鉢	-	>2.0	-	内面：ナデ 外面：ナデ 底部同軸糸切り
119	調査区1	SX1	須恵器	甕	-	>2.2	-	内面：同軸ナデ 外面：同軸ナデ
120	調査区1	SX1	土師器	皿	φ7.6	1.6	φ5.8	内面：同軸ナデ 外面：底部同軸糸切り

報告 No.	出土位置		種別	器種	法量 (on)			観察所見
	調査区	遺構等			口径	高さ	底径	
121	調査区1	SX1	土師器	皿	-	>1.2	-	内面：ナブ ヨコナデ 外面：ナブ ヨコナデ
122	調査区1	SX1	土師器	皿	7.2	1.4	5.2	内面：ナブ ヨコナデ 外面：ナブ ヨコナデ
123	調査区1	SX1	土師器	皿	-	1.4	-	内面：ナブ ヨコナデ 外面：ナブ ヨコナデ
124	調査区1	SX1	土師器	皿	-	2.6	-	内面：ユビオサエ ナブ ヨコナデ 外面：ナブ ヨコナデ
125	調査区1	SX1	土師器	杯or皿	-	>2.8	-	内面：ナブ ヨコナデ 外面：ヨコナデ
126	調査区1	SX1	土師器	皿	-	>2.1	-	磨滅のため調整等不明
127	調査区1	SX1	土師器	皿	-	2.2	-	内面：ナブ ヨコナデ 外面：ナブ ヨコナデ
128	調査区1	SX1	土師器	杯or皿	-	3.1	-	内面：ナブ ヨコナデ 外面：ヨコナデ?
129	調査区1	SX1	瓦質土器	羽輪	*23.8	>11.5	-	内面：ハクメ ヨコナデ 外面：ユビオサエ ナブ 板ナデ ヨコナデ 罫目付け 横付着
130	調査区1	SX1	土師器	鉢	-	>6.2	-	内面：ナブ ヨコナデ 外面：タタキ ヨコナデ 横付着
131	調査区1	SX1	土師器	鉢	-	>2.1	-	内面：ヨコナデ 外面：ヨコナデ
132	調査区1	SX1	青磁	鉢	-	>3.8	-	内面：筋輪 外面：差弁文浮彫後、瓦輪
133	調査区1	SX2	土師器	皿	*10.6	1.2	*9.5	内面：ナブ ヨコナデ 外面：ユビオサエ ナブ ヨコナデ
134	調査区1	SX2	土師器	皿	-	1.0	-	内面：数分等沈着のため調整等不明 外面：ナブ ヨコナデ
135	調査区1	SX2	土師器	皿	-	>2.0	-	内面：ヨコナデ 外面：ヨコナデ
136	調査区1	SX3	土師器	杯or鉢	-	>3.5	-	磨滅のため調整等不明
137	調査区1	SX4	須恵器	碗か	-	>2.7	-	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ 口縁端部に重ね焼き痕あり
138	調査区1	SX4	須恵器	鉢	-	>2.4	-	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ 口縁端部に重ね焼き痕あり
139	調査区1	SX4	須恵器	碗	-	>1.6	-	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ
140	調査区1	SX4	土師器	皿	*8.4	1.0	*6.8	内面：ナブ ヨコナデ 外面：ヨコナデ
141	調査区1	SX4	土師器	皿	8.2	1.3	6.5	内面：ナブ 回転ナデ? 外面：回転ナデ? 底部回転糸切り?
142	調査区1	SX4	土師器	皿	-	>1.7	-	内面：ユビオサエ ナブ ヨコナデ 外面：ユビオサエ ヨコナデ
143	調査区1	SX5	土師器	埴	12.0	11.2	9.0	内面：ナブ 接合痕あり 外面：ナブ
144	調査区1	SX5	須恵器	杯	-	>2.4	6.4	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ 底部回転ヘリ切り
145	調査区1	SX5	須恵器	甕か	*21.4	>5.6	-	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ
146	調査区1	SX6	須恵器	甕	*17.6	>1.8	-	内面：回転ナデ後、一部ナデ 外面：回転ヘラケズリ 回転ナデ
147	調査区1	SX6	須恵器	碗	-	>2.4	-	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ 口縁端部に重ね焼き痕あり
148	調査区1	SX6	須恵器	碗	-	>2.5	-	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ 底部回転糸切り
149	調査区1	SX6	須恵器	碗	-	>0.9	-	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ 底部回転糸切り
150	調査区1	SX6	須恵器	甕	-	>1.9	-	内面：回転ナデ 口縁部に灰被り痕あり 外面：回転ナデ
151	調査区1	SK11	弥生土器	甕	*15.2	>9.7	-	内面：ユビオサエ 外面：磨滅のため調整等不明
152	調査区1	SK11	弥生土器	底部	-	>6.9	6.7	内面：ユビオサエ 外面：磨滅のため調整等不明
153	調査区1	SK12	弥生土器	甕	-	>5.9	-	内面：ナブ 外面：磨滅直線文
154	調査区1	SK12	弥生土器	甕	-	>7.3	-	内面：ナブ 外面：磨滅直線文 磨滅直線文
155	調査区1	SK12	弥生土器	甕	*19.6	29.0	7.1	内面：ナブ ハクメ 外面：ハクメ ヨコナデ後、罫目
156	調査区1	SK12	弥生土器	底部	-	>7.5	*8.1	内面：ユビオサエ 外面：磨滅のため調整等不明
157	調査区1	SK12	弥生土器	底部	-	>6.0	10.1	内面：ユビオサエ ナブ 外面：ハクメ
158	調査区1	SK12	弥生土器	底部	-	>10.3	9.2	内面：ユビオサエ ナブ 板ナデ 外面：ミガキ
159	調査区1	SK13	弥生土器	甕	*36.8	>6.7	-	内面：ナブ ヨコナデ 外面：ハクメ後、磨滅直線文 磨滅直線文 ヨコナデ
160	調査区1	SK13	弥生土器	底部	-	>5.0	*10.4	内面：ナブ 外面：ハクメ

報告 No.	出土位置		種別	器種	法量 (cm)			観察所見
	調査区	遺構等			法量 (cm)			
					口径	高さ	底径	
161	調査区1	SK13	弥生土器	底部	-	>4.1	*10.8	内面: ヌビオサエ 外面: 磨滅のため調整等不明
162	調査区1	SK14	弥生土器	甕	*15.0	>8.3	-	内面: 磨滅のため調整等不明 外面: 口縁部面に凹線文
163	調査区1	SK14	弥生土器	甕	*16.0	>4.4	-	内面: 板ナゲ 外面: ハケメ
164	調査区1	SK14	弥生土器	甕	*13.6	>6.0	-	内面: 板ナゲ 外面: ハケメ
165	調査区1	SK14	弥生土器	甕	*14.8	>6.3	-	内面: ハケメ ヨコナゲ 外面: ハケメ ヨコナゲ
166	調査区1	SK15	弥生土器	蓋	-	>8.0	-	内面: 磨滅のため調整等不明 外面: 磨滅のため調整等不明
167	調査区1	SP45	弥生土器	蓋	-	>6.8	-	外面: ハケメ縁、磨滅直状文 磨滅直状文
168	調査区1	SP46	須恵器	碗	16.1	6.1	8.2	内面: 同輪ナゲ 外面: 同輪ナゲ 沈線 底部へウ切り、ナゲ後、高台貼付け
169	調査区1	SD1	弥生土器	甕	12.2	17.5	3.6	内面: ハケメ ヨコナゲ 接合痕あり 外面: タタキ ヨコナゲ 接合痕あり
170	調査区1	SD1	弥生土器	甕	13.1	18.5	4.3	内面: ヌビオサエ ハケメ ヨコナゲ 接合痕あり 外面: タタキ ヨコナゲ 覆付蓋
171	調査区1	SD1	弥生土器	甕	*10.0	22.8	5.7	内面: ハケメ ヨコナゲ 工具痕あり 接合痕あり 外面: タタキ ヨコナゲ
172	調査区1	SD1	弥生土器	甕	13.4	>13.9	-	内面: ハケメ ヨコナゲ 接合痕あり 外面: タタキ ハケメ ヨコナゲ 覆付蓋
173	調査区1	SD1	弥生土器	甕	-	>3.0	-	内面: ケズリ ヨコナゲ? 外面: タタキ ヨコナゲ?
174	調査区1	SD1	弥生土器	甕	*12.6	>6.5	-	内面: 板ナゲ? ヨコナゲ 外面: タタキ縁、ハケメ ヨコナゲ
175	調査区1	SD1	弥生土器	甕	-	>9.7	-	内面: ヌビオサエ ヨコナゲ 接合痕あり 外面: タタキ ヨコナゲ 接合痕あり
176	調査区1	SD1	弥生土器	甕	-	>3.9	*4.7	内面: ナゲ 外面: タタキ ヌビオサエ ナゲ
177	調査区1	SD1	弥生土器	甕	-	>4.3	*4.9	内面: ナゲ 工具痕あり 外面: タタキ ナゲ
178	調査区1	SD1	弥生土器	甕か	-	>4.9	3.5	内面: ナゲ? 工具痕あり 外面: 磨滅のため調整等不明
179	調査区1	SD1	弥生土器	甕or蓋	-	>2.5	3.8	内面: 磨滅のため調整等不明 外面: 底部に木の葉土痕あり
180	調査区1	SD1	弥生土器	甕or鉢	-	>2.1	5.2	内面: ハケメ 外面: ハケメ
181	調査区1	SD2	弥生土器	甕か	-	>3.1	-	内面: 磨滅のため調整等不明 外面: 笠形貼付け後、刷目 磨滅直状文
182	調査区1	SD2	弥生土器	蓋	-	>4.7	-	内面: ナゲ 外面: 磨滅直状文 磨滅直状文 磨滅直状文
183	調査区1	SD3	弥生土器	底部	-	>3.5	*7.0	内面: 磨滅のため調整等不明 外面: ナゲ?
184	調査区1	包含層等	弥生土器	蓋	-	>4.4	-	磨滅のため調整等不明
185	調査区1	包含層等	弥生土器	蓋	*14.8	>5.2	-	内面: ヨコナゲ 接合痕あり 外面: ヨコナゲ
186	調査区1	包含層等	弥生土器	高杯	-	>2.2	-	内面: ナゲ ヨコナゲ 外面: ナゲ ヨコナゲ 凹線文
187	調査区1	包含層等	弥生土器	甕	-	>3.2	-	内面: ヨコナゲ 外面: ヨコナゲ 磨滅直状文
188	調査区1	包含層等	弥生土器	底部	-	>3.9	*6.5	磨滅のため調整等不明
189	調査区1	包含層等	弥生土器	底部	-	>1.9	*4.8	内面: ナゲ 外面: ヌビオサエ
190	調査区1	包含層等	弥生土器	底部	-	>1.8	*6.0	磨滅のため調整等不明
191	調査区1	包含層等	弥生土器	甕	-	>11.0	*6.9	内面: ケズリ 外面: ゴガキ
192	調査区1	包含層等	土師器	杯or碗	*12.4	>3.4	-	内面: ヨコナゲ 外面: ヨコナゲ 接合痕あり
193	調査区1	包含層等	土師器	皿	*13.6	2.6	*11.1	内面: 同輪ナゲ 横文 外面: ナゲ 同輪ヘラケズリ 同輪ナゲ
194	調査区1	包含層等	土師器	碗	*12.8	>2.8	-	内面: 同輪ナゲ 外面: 同輪ナゲ
195	調査区1	包含層等	土師器	碗	*11.3	5.1	5.7	内面: 同輪ナゲ ナゲ 外面: 同輪ナゲ 底部同輪ヘウ切り
196	調査区1	包含層等	土師器	皿	*11.2	>2.5	-	内面: ナゲ ヨコナゲ 外面: ナゲ ヨコナゲ
197	調査区1	包含層等	土師器	皿	*11.8	>2.6	-	内面: ナゲ ヨコナゲ 外面: ナゲ ヨコナゲ
198	調査区1	包含層等	土師器	皿	*11.2	>2.3	-	内面: ヨコナゲ ナゲ? 外面: ヨコナゲ
199	調査区1	包含層等	土師器	皿	-	>2.1	-	内面: 同輪ナゲ? 外面: 同輪ナゲ?
200	調査区1	包含層等	土師器	皿	-	>2.5	-	磨滅のため調整等不明

報告 No	出土位置		種別	器種	法量 (cm)			観察所見
	調査区	遺構等			口径	高さ	底径	
201	調査区 1	包含層等	土師器	皿	-	2.2	-	磨滅のため調整等不明
202	調査区 1	包含層等	土師器	皿	φ8.4	1.7	φ5.4	磨滅のため調整等不明
203	調査区 1	包含層等	土師器	皿	φ6.4	1.2	φ5.0	内面：ナデ ヨコナデ 外面：ユビオサエ ヨコナデ 接合痕あり
204	調査区 1	包含層等	土師器	皿	φ8.0	1.1	φ7.8	内面：ナデ ヨコナデ 外面：ユビオサエ ヨコナデ
205	調査区 1	包含層等	土師器	皿	-	>1.1	-	内面：ナデ ヨコナデ 外面：ユビオサエ ナデ ヨコナデ
206	調査区 1	包含層等	土師器	皿	-	>1.2	-	内面：ナデ 外面：ユビオサエ ナデ
207	調査区 1	包含層等	土師器	椀小	-	>1.3	φ6.2	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ
208	調査区 1	包含層等	土師器小	杯小	-	>2.3	φ7.9	磨滅のため調整等不明
209	調査区 1	包含層等	土師器	皿	10.8	2.4	6.0	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ 底部同転糸切り
210	調査区 1	包含層等	土師器	杯or皿	-	>1.0	6.2	内面：磨滅のため調整等不明 外面：底部同転糸切り
211	調査区 1	包含層等	土師器	製塩土器	φ13.6	>4.0	-	内面：ナデ ヨコナデ 外面：ユビオサエ ナデ 接合痕あり
212	調査区 1	包含層等	土師器	製塩土器	-	>7.6	-	内面：布目圧痕 外面：ユビオサエ ナデ
213	調査区 1	包含層等	土師器	羽釜	-	>7.0	-	内面：ナデ ヨコナデ 外面：ハケメ ヨコナデ 脚貼付け
214	調査区 1	包含層等	土師器	鍋	-	>3.4	-	磨滅のため調整等不明
215	調査区 1	包含層等	土師器	羽釜	-	>8.6	-	内面：ユビオサエ 外面：ヨコナデ 脚貼付け
216	調査区 1	包含層等	土師器	脚付羽釜	-	>8.5	-	ナデ ユビオサエ 僅付着
217	調査区 1	包含層等	土師器	鍋	-	>3.4	-	内面：ヨコナデ 外面：ヨコナデ
218	調査区 1	包含層等	瓦質土器小	羽釜	-	>6.6	-	内面：ハケメ ヨコナデ 外面：ユビオサエ ナデ ヨコナデ 脚貼付け 僅付着
219	調査区 1	包含層等	須恵器	蓋	-	>9.9	-	内面：同転ナデ ナデ 自然輪付着 外面：同転ナデ 口縁端部に重ね焼き痕あり
220	調査区 1	包含層等	須恵器	蓋	-	>2.3	-	内面：同転ナデ 外面：同転ヘラケズリ 同転ナデ 口縁端部付近に自然輪付着
221	調査区 1	包含層等	須恵器	杯	-	>1.7	φ6.0	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ 底部同転ヘラ切り？
222	調査区 1	包含層等	須恵器	杯小	-	>1.8	φ7.0	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ
223	調査区 1	包含層等	須恵器	杯	-	>3.0	φ11.9	内面：同転ナデ量、一部ナデ 外面：同転ナデ 底部同転ヘラ切り後、高台貼付け
224	調査区 1	包含層等	須恵器	杯	φ13.8	3.1	φ9.8	内面：同転ナデ 火焼痕あり 外面：同転ナデ 底部同転ヘラ切り後、ナデ？ 火焼痕あり
225	調査区 1	包含層等	須恵器	杯	-	>2.5	φ9.0	内面：同転ナデ 火焼痕あり 外面：同転ナデ 底部同転ヘラ切り後、一部ナデ 火焼痕あり
226	調査区 1	包含層等	須恵器	杯小	-	>1.8	φ10.0	内面：同転ナデ 外面：同転ヘラケズリ 同転ナデ
227	調査区 1	包含層等	須恵器	杯小	-	>2.1	-	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ
228	調査区 1	包含層等	須恵器	椀	-	>3.6	-	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ 沈積
229	調査区 1	包含層等	須恵器	椀	-	>4.0	-	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ
230	調査区 1	包含層等	須恵器	椀	-	>2.8	-	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ 口縁端部に重ね焼き痕あり
231	調査区 1	包含層等	須恵器	椀	-	>2.3	-	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ 口縁端部に重ね焼き痕あり
232	調査区 1	包含層等	須恵器	皿小	-	>2.5	-	内面：同転ナデ 接合痕あり 外面：同転ナデ
233	調査区 1	包含層等	須恵器	杯小	-	>2.6	φ6.8	内面：同転ナデ ナデ 外面：同転ナデ 底部糸止糸切り？
234	調査区 1	包含層等	須恵器	椀	-	>1.9	φ7.0	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ 底部同転糸切り？
235	調査区 1	包含層等	須恵器	椀	-	>2.0	φ6.0	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ 底部同転糸切り
236	調査区 1	包含層等	須恵器	椀	-	>1.7	φ5.9	内面：同転ナデ？ 外面：同転ナデ？
237	調査区 1	包含層等	須恵器	椀	-	>2.3	φ6.2	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ 底部同転糸切り 火焼痕あり
238	調査区 1	包含層等	須恵器	椀	-	>2.0	φ4.9	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ 底部同転ヘラ切り
239	調査区 1	包含層等	須恵器	椀	-	>2.7	φ6.0	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ 底部同転糸切り
240	調査区 1	包含層等	須恵器	椀	-	>1.7	φ7.0	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ 底部同転糸切り

報告 No.	出土位置		種別	器種	法量 (cm)			観察所見
	調査区	遺構等			口径	高さ	底径	
241	調査区1	包含層等	須恵器	碗	-	>1.4	*4.5	内面：同軸ナデ 外面：同軸ナデ 底部凹転未切り
242	調査区1	包含層等	須恵器	皿	*8.7	2.2	*5.2	内面：同軸ナデ 外面：同軸ナデ 底部凹転未切り
243	調査区1	包含層等	須恵器	鉢	-	>4.2	-	内面：ナデ? ヨコナデ 外面：ナデ? ヨコナデ 口縁端部に重むね痕跡あり
244	調査区1	包含層等	須恵器	鉢	-	>6.6	-	内面：同軸ナデ 外面：同軸ナデ 口縁端部に重むね痕跡あり
245	調査区1	包含層等	須恵器	鉢	-	>5.9	-	内面：同軸ナデ ナデ 外面：同軸ナデ
246	調査区1	包含層等	須恵器	鉢	-	>3.3	-	内面：同軸ナデ 外面：同軸ナデ 口縁端部に自然釉付着
247	調査区1	包含層等	須恵器	鉢	-	>3.4	*8.8	内面：磨滅のため調査等不明 外面：同軸ナデ?
248	調査区1	包含層等	須恵器	甕	-	>3.7	-	内面：ヨコナデ 外面：ヨコナデ
249	調査区1	包含層等	瓦	平瓦	長さ >14.0	幅 >10.0	厚さ 1.4	内面：春日庄瓦 外面：ケズリ後、ナデ
250	調査区1	包含層等	瓦	平瓦	長さ >7.9	幅 >13.6	厚さ 1.4	内面：春日庄瓦 外面：タタキ後、ナデ
251	調査区1	下層包含層 (北側)	弥生土器	甕or鉢	-	>6.5	*5.8	内面：ナデ? 外面：磨滅のため調査等不明
252	調査区1	下層包含層 (北側)	弥生土器	甕	-	>8.8	5.8	内面：ハケメ後、ナデ 外面：ハケメ後、ナデ ユビオサエ
253	調査区1	下層包含層 (北側)	弥生土器	甕	-	>8.0	-	内面：ナデ ヨコナデ 外面：ハケメ後、ヨコナデ 磨地直線文
254	調査区1	下層包含層 (北側)	弥生土器	甕	-	>14.6	7.8	内面：磨滅のため調査等不明 外面：ハケメ
255	調査区1	下層包含層 (北側)	弥生土器	甕	-	>24.5	-	内面：ユビオサエ ナデ 外面：ハケメ後、磨地直線文
256	調査区1	下層包含層 (北側)	弥生土器	甕	-	>5.2	-	内面：ナデ 外面：ハケメ 磨地直線文
257	調査区1	下層包含層 (北側)	弥生土器	甕	-	>5.9	-	内面：ナデ 外面：磨地直線文or磨地直線文
258	調査区1	下層包含層 (北側)	弥生土器	甕	-	>5.8	*10.6	内面：ユビオサエ 外面：ハケメ 底部一部ユビオサエ
259	調査区1	下層包含層 (北側)	弥生土器	底部	-	>2.5	*6.6	内面：磨滅のため調査等不明 外面：ナデ?
260	調査区2	SBP3	須恵器	碗	-	>3.9	-	内面：同軸ナデ 外面：同軸ナデ 口縁端部に重むね痕跡あり
261	調査区2	SK16	弥生土器	甕	*13.6	>7.6	-	内面：ユビオサエ ヨコナデ 接合痕あり 外面：タタキ後、ハケメ ヨコナデ
262	調査区2	SK17	弥生土器	甕	*12.0	>6.5	-	内面：ユビオサエ? ヨコナデ 外面：ハケメ ヨコナデ
263	調査区2	SK18	弥生土器	底部	-	>7.6	*10.0	内面：ユビオサエ ナデ 工具痕あり 外面：ハケメ
264	調査区2	SK19	弥生土器	甕	*21.8	>23.9	-	内面：ナデ 外面：ハケメ
265	調査区2	SK19	弥生土器	底部	-	>6.4	9.2	内面：ユビオサエ ナデ 外面：板ナデ?
266	調査区2	SP47	須恵器	碗	-	>2.1	*7.0	内面：同軸ナデ後、一部ナデ 外面：同軸ナデ 底部凹転未切り
267	調査区2	SP48	須恵器	鉢or甕	-	>2.6	-	内面：同軸ナデ 外面：同軸ナデ? 底部ナデ?
268	調査区2	SD4	弥生土器	底部	-	>8.0	10.2	内面：ユビオサエ 外面：底部ナデ?
269	調査区2	SD5	弥生土器	甕or	*14.8	>3.2	-	内面：ナデ? ヨコナデ 外面：ハケメ? ヨコナデ
270	調査区2	SD5	弥生土器	底部	-	>4.8	*6.8	内面：ユビオサエ 外面：ハケメ 底部一部ユビオサエ?
271	調査区2	SD5	弥生土器	底部	-	>5.5	*7.0	内面：ユビオサエ 外面：底部一部ユビオサエ?
272	調査区2	SD5	弥生土器	甕or	-	>4.1	-	内面：ナデ? 外面：磨地直線文・磨地直線文
273	調査区2	SK20	弥生土器	甕	*29.6	>12.4	-	内面：磨滅のため調査等不明 外面：磨地直線文 節目
274	調査区2	SK20	弥生土器	甕	*13.0	>7.8	-	内面：ユビオサエ 外面：磨地直線文 磨地直線文 圧痕?あり
275	調査区2	SK20	弥生土器	底部	-	>9.6	*9.7	内面：ユビオサエ 接合痕あり 外面：ハケメ 底部ナデ?
276	調査区2	SP49	弥生土器	水甕	*10.0	>17.5	-	内面：ケズリ ハケメ ヨコナデ? 外面：ハケメ 凹線文 把手
277	調査区2	包含層等	弥生土器	甕	-	>10.7	-	内面：ハケメ後、板ナデ? 外面：ユビオサエ
278	調査区2	包含層等	弥生土器	甕	-	>4.8	-	内面：ナデ? ヨコナデ 外面：ヨコナデ 磨地直線文 口縁部足付け
279	調査区2	包含層等	弥生土器	甕	*15.8	>6.7	-	内面：磨滅のため調査等不明 外面：タタキ後、ハケメ? 凹線文
280	調査区2	包含層等	弥生土器	二口鉢or甕	*18.4	>4.3	-	磨滅のため調査等不明

報告 No.	出土位置		種別	器種	法量 (cm)			観察所見
	調査区	遺構等			口徑	高さ	底径	
281	調査区2	白含層等	弥生土器	底部	-	>5.6	*7.0	内面：磨滅のための調整等不明 外面：ハケメ
282	調査区2	白含層等	弥生土器	脚部	-	>5.9	*7.0	内面：ナブ 外面：ナブ 縁成前穿孔あり
283	調査区2	白含層等	須恵器	杯	*12.4	3.4	9.9	内面：同転ナブ後、一部ナブ 外面：同転ナブ 底部同転へ切り
284	調査区2	白含層等	須恵器	皿	*19.3	2.5	*16.4	内面：同転ナブ 火摩痕あり 外面：同転ナブ 底部同転へ切り？ 火摩痕あり
285	調査区2	白含層等	須恵器	碗or皿	-	>1.9	*7.6	内面：同転ナブ 接合痕あり 外面：同転ナブ 溝付貼付け
286	調査区2	白含層等	須恵器	碗	-	>2.2	5.6	内面：同転ナブ 外面：同転ナブ 底部同転糸切り
287	調査区2	白含層等	須恵器	皿	*11.6	2.1	*7.6	内面：同転ナブ 外面：同転ナブ 底部同転糸切り
288	調査区2	白含層等	須恵器	皿小	-	>1.3	*6.2	内面：同転ナブ 外面：同転ナブ 底部同転糸切り
289	調査区2	白含層等	土師器	托小	-	>1.9	*6.8	内面：同転ナブ？ 外面：同転ナブ？ 底部同転糸切り
290	調査区2	下層白含層	弥生土器	底部	-	>3.0	*5.9	磨滅のための調整等不明
291	調査区2	SB0P12	土師器	杯	*13.6	3.3	8.2	内面：ナブ？ 同転ナブ 外面：同転ナブ 底部同転糸切り
292	調査区3	SB0P1	土師器	杯or皿	*11.6	>3.0	*7.6	内面：ナブ ヨコナブ 外面：ヨコナブ
293	調査区3	SB0P4	土師器	皿	*12.9	2.3	*9.0	内面：同転ナブ ナブ 外面：同転ナブ 底部同転糸切り
294	調査区3	SB0P4	土師器	皿	-	>2.7	-	内面：同転ナブ 外面：同転ナブ
295	調査区3	SB0P4	土師器	皿	*7.8	1.3	*5.6	内面：同転ナブ 外面：同転ナブ 底部同転糸切り
296	調査区3	SB0P10	土師器	皿	-	0.8	-	内面：ナブ？ ヨコナブ 外面：ヨコナブ
297	調査区3	SB0F9	須恵器	碗小	-	>3.8	-	内面：同転ナブ 外面：同転ナブ 底部同転へ切り
298	調査区3	SB0P4	土製品	土鉢	長さ 3.5	幅 1.1	厚さ 1.0	ナブ
299	調査区3	SA0P2	須恵器	蓋	-	>1.5	-	内面：同転ナブ ナブ 外面：同転ナブ
300	調査区3	SA0P3	須恵器	碗	*13.0	4.6	*5.0	内面：同転ナブ 外面：同転ナブ 底部同転糸切り
301	調査区3	SA0P2	須恵器	皿	-	>2.4	-	内面：同転ナブ 外面：同転ナブ
302	調査区3	SA0P1	須恵器	盤	-	>6.7	-	内面：同転ナブ 外面：同転ナブ
303	調査区3	SA0P4	須恵器	双耳壺	-	>8.7	-	内面：同転ナブ 外面：同転ナブ・板ナブ？ 注線
304	調査区3	SA0P2	土製品	土鉢	長さ >4.6	幅 1.6	厚さ 1.3	ナブ 接合痕あり
305	調査区3	SA0P1-2	土師器	鍋	-	>7.1	-	内面：ナブ ヨコナブ 外面：ハケメ後、ユビオサエ？ ヨコナブ
306	調査区3	SK21	土師器	皿	*12.3	2.6	*7.3	内面：ユビオサエ ナブ 外面：ユビオサエ ナブ
307	調査区3	SK21	土師器	皿	12.2	2.9	8.0	内面：ユビオサエ ナブ ヨコナブ 外面：ユビオサエ ナブ ヨコナブ
308	調査区3	SK21	土師器	皿	-	>1.3	-	内面：ナブ？ ヨコナブ 外面：ヨコナブ
309	調査区3	SP50	須恵器	鉢小	-	>14.5	*15.0	内面：ユビオサエ ナブ 同転ナブ 外面：タタキのち同転ナブ
310	調査区3	SD6	土師器	皿	*10.6	1.4	*7.9	内面：ナブ ヨコナブ 外面：ナブ？ ヨコナブ
311	調査区3	SD6	須恵器	碗	-	>1.9	*6.7	内面：同転ナブ 外面：同転ナブ
312	調査区3	SD6	須恵器	鉢	-	>6.0	-	内面：同転ナブ 外面：同転ナブ 口縁端部に重ね焼き痕あり
313	調査区3	SD6	須恵器	鉢	-	>2.1	7.4	内面：同転ナブ 外面：同転ナブ 底部同転糸切り
314	調査区3	SD6	須恵器	鉢	-	>5.8	*8.4	内面：同転ナブ後、ナブ 外面：同転ナブ ヨコナブ？
315	調査区3	SD7	土師器	皿	*7.8	1.3	*6.8	内面：ナブ ヨコナブ 外面：ユビオサエ後、ナブ ヨコナブ
316	調査区3	SD7	土師器	皿	11.7	2.7	7.7	内面：ナブ ヨコナブ 外面：ユビオサエ後、ナブ？ ヨコナブ
317	調査区3	SD7	土師器	皿	-	>2.3	-	内面：ナブ ヨコナブ 外面：ユビオサエ ナブ ヨコナブ
318	調査区3	SD7	土師器	皿	-	>2.7	-	内面：ユビオサエ ナブ ヨコナブ 外面：ユビオサエ？ ナブ？ ヨコナブ
319	調査区3	SD7	須恵器	碗	-	>2.7	-	内面：同転ナブ 外面：同転ナブ 口縁端部に重ね焼き痕あり
320	調査区3	SD7	須恵器	碗	-	>2.7	7.6	内面：同転ナブ 外面：同転ナブ 底部同転糸切り

報告 No.	出土位置		種別	器種	法量 (cm)			観察所見
	調査区	遺構等			口径	高さ	底径	
321	調査区3	S07	須恵器	碗	-	>2.0	-	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ 底部同転糸切り
322	調査区3	S08	須恵器	杯	*14.5	4.0	*11.3	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ 底部ヘラ切り後、ナデ？ 高台貼付け
323	調査区3	S08	須恵器	杯	*13.4	3.9	*9.0	内面：ナデ 同転ナデ 外面：同転ナデ 底部同転ヘラ切り後、ナデ？
324	調査区3	S08	須恵器	杯小	-	>2.0	*7.9	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ 底部ヘラ切り後、ナデ？ 高台貼付け
325	調査区3	S08	須恵器	杯小	-	>1.4	-	内面：同転ナデ後、ナデ 外面：同転ナデ 底部同転ヘラ切り
326	調査区3	S08	須恵器	杯	-	2.8	-	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ 底部同転ヘラ切り
327	調査区3	S08	須恵器	杯小	-	>1.1	-	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ 底部同転ヘラ切り
328	調査区3	S08	須恵器	碗	*14.2	4.1	5.8	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ 底部同転糸切り
329	調査区3	S08	須恵器	杯小	-	>3.0	-	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ
330	調査区3	S08	須恵器	碗	-	>2.1	-	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ
331	調査区3	S08	須恵器	碗	-	>2.7	-	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ
332	調査区3	S08	須恵器	碗	-	>5.4	-	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ
333	調査区3	S08	須恵器	碗	-	>3.3	-	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ 口縁端部に重ね焼き痕跡あり
334	調査区3	S08	須恵器	碗	-	>1.6	*6.4	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ 底部同転糸切り
335	調査区3	S08	須恵器	碗	-	>1.7	*7.6	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ 底部同転ヘラ切り後、同転ナデ？
336	調査区3	S08	須恵器	碗	-	>2.0	*5.6	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ 底部同転糸切り
337	調査区3	S08	須恵器	碗	-	>2.1	*6.9	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ 底部同転糸切り
338	調査区3	S08	須恵器	碗	-	>1.3	*5.5	内面：同転ナデ後、ナデ 外面：同転ナデ 底部同転糸切り
339	調査区3	S08	須恵器	碗	-	>2.3	*8.8	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ 底部同転糸切り後、高台貼付け
340	調査区3	S08	須恵器	碗	-	>2.3	7.7	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ 底部同転糸切り後、高台貼付け
341	調査区3	S08	須恵器	碗	-	>1.7	*7.1	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ 底部同転ヘラ切り後、同転ナデ
342	調査区3	S08	須恵器	碗	-	>2.5	*7.0	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ ヨコナデ 底部同転ヘラ切り後、同転ナデ？
343	調査区3	S08	須恵器	碗	-	>2.1	*8.1	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ 底部同転ヘラ切り後、高台貼付け
344	調査区3	S08	須恵器	皿	*12.8	3.4	*7.0	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ 自然輪付番 高台貼付け 自然輪付番
345	調査区3	S08	須恵器	壺	*10.0	>3.3	-	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ
346	調査区3	S08	須恵器	壺	*10.4	>5.6	-	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ
347	調査区3	S08	須恵器	双耳壺小	-	>3.5	-	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ 突帯貼付け
348	調査区3	S08	須恵器	双耳壺小	-	>4.7	-	内面：同転ナデ 外面：タタキ 同転ナデ 突帯貼付け
349	調査区3	S08	須恵器	壺	-	>7.8	-	内面：ナデ 同転ナデ 外面：タタキ 同転ナデ
350	調査区3	S08	須恵器	壺小	*25.0	>4.7	-	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ
351	調査区3	S08	須恵器	壺	-	>9.1	-	内面：ナデ ヨコナデ 外面：タタキ ヨコナデ
352	調査区3	S08	土師器	皿	*21.2	2.7	*18.4	内面：ナデ？ 同転ナデ 外面：同転ナデ ユビオサエ ナデ
353	調査区3	S08	土師器	碗	*14.8	>5.1	-	内面：同転ナデ 外面：同転ナデ
354	調査区3	S08	土師器	皿	-	>2.8	-	内面：同転ナデ？ 外面：磨滅のため調査等不明
355	調査区3	S08	土師器	碗	-	>3.5	*8.9	内面：ナデ？ 外面：同転ナデ？ 高台貼付け
356	調査区3	S08	土師器	托	-	>2.3	*4.9	内面：ナデ？ 外面：同転ナデ？ 底部同転糸切り
357	調査区3	S08	土師器	壺	*21.4	>9.7	-	内面：ナデ？ ヨコナデ 外面：ハケメ ユビオサエ ヨコナデ
358	調査区3	S08	土師器	羽釜	*22.2	>3.2	-	内面：ナデ？ ヨコナデ 外面：ヨコナデ 髹貼付け
359	調査区3	S08	養生土師	壺小	-	>5.7	*12.4	内面：磨滅のため調査等不明 外面：ハケメ
360	調査区3	S08	養生土師	底部	-	>3.6	*5.8	磨滅のため調査等不明

報告 No.	出土位置		種別	器種	法量 (cm)			観察所見
	調査区	遺構等			口径	高さ	底径	
361	調査区 3	SD8	瓦	丸瓦	長さ >5.8	幅 >6.7	厚さ 2.2	内面：布目瓦葺 外面：ナダ
362	調査区 3	SP51	土製品	土練	長さ >3.9	幅 1.9	厚さ 1.3	ナダ? 接合痕あり
363	調査区 3	SD9	煮潰器	杯	-	>1.3	*8.3	内面：凹輪ナダ 外面：凹輪ナダ 底部凹輪ヘリ切り
364	調査区 3	SD9	土師器	甕	-	>5.4	-	内面：ヨコナダ 外面：ハケメ ヨコナダ 覆付着
365	調査区 3	SD10	弥生土器	甕	*18.2	>12.3	-	内面：ユビオサエ 外面：磨滅のための調整等不明
366	調査区 3	SD10	弥生土器	甕	20.0	>16.5	-	内面：ヨコナダ 外面：ハケメ 安帯貼付後、朝雲判点文 凹輪
367	調査区 3	SD10	弥生土器	甕	*24.4	>10.7	-	内面：ヨコナダ 外面：ハケメ 凹輪文 朝雲判点文
368	調査区 3	SD10	弥生土器	甕	*33.9	>2.0	-	内面：ヨコナダ? 外面：ヨコナダ? □縁部に朝雲判点文
369	調査区 3	SD10	弥生土器	甕	-	>4.7	-	内面：ナダ? ヨコナダ 外面：ナダ? ヨコナダ
370	調査区 3	SD10	弥生土器	無須甕	-	>6.2	-	内面：ハケメ? ヨコナダ? 外面：磨滅のための調整等不明 凹輪文 焼成前穿孔あり
371	調査区 3	SD10	弥生土器	甕	-	>10.8	-	内面：ナダ 外面：ハケメ ナダ 輪縁直線文
372	調査区 3	SD10	弥生土器	甕	-	>5.6	-	内面：ハケメ 外面：輪縁直線文・波状文
373	調査区 3	SD10	弥生土器	甕	-	>8.9	-	内面：ナダ 外面：輪縁直線文・波状文
374	調査区 3	SD10	弥生土器	甕	-	>12.2	-	内面：ハケメ ナダ 外面：輪縁直線文・波状文
375	調査区 3	SD10	弥生土器	水甕か	-	>4.9	-	内面：ナダ 外面：ハケメ 把手
376	調査区 3	SD10	弥生土器	甕	*31.2	>15.2	-	内面：ハケメ ヨコナダ 外面：ハケメ ヨコナダ □縁部に凹輪文
377	調査区 3	SD10	弥生土器	甕	*15.2	17.2	*3.9	内面：ユビオサエ ハケメ ヨコナダ 粘土縁接合痕あり 外面：タタキ ヨコナダ 接合痕あり
378	調査区 3	SD10	弥生土器	甕	*17.0	>7.6	-	内面：ハケメ ヨコナダ 接合痕あり 外面：タタキ ヨコナダ □縁部に輪凹輪文
379	調査区 3	SD10	弥生土器	甕	*15.0	>3.1	-	内面：ヨコナダ 外面：ヨコナダ
380	調査区 2	SD10	弥生土器	甕	*13.6	>3.5	-	内面：ナダ 外面：磨滅のための調整等不明
381	調査区 3	SD10	弥生土器	甕	-	>3.9	-	内面：ヨコナダ 外面：ヨコナダ □縁部に凹輪文
382	調査区 2	SD10	弥生土器	甕	-	>1.8	-	内面：ヨコナダ 外面：ヨコナダ □縁部に輪凹輪文
383	調査区 3	SD10	弥生土器	甕	-	>2.4	-	磨滅のための調整等不明
384	調査区 3	SD10	弥生土器	鉢	*20.4	>4.1	-	内面：ヨコナダ 外面：ヨコナダ
385	調査区 3	SD10	弥生土器	底部	-	>7.3	*10.4	内面：ユビオサエ 外面：ハケメ ナダ
386	調査区 2	SD10	弥生土器	底部	-	>4.6	*9.7	内面：ユビオサエ 外面：ハケメ
387	調査区 3	SD10	弥生土器	底部	-	>3.6	*7.8	内面：ユビオサエ 外面：磨滅のための調整等不明
388	調査区 2	SD10	弥生土器	底部	-	>4.0	*5.9	内面：ナダ 外面：ハケメ 底部ナダ
389	調査区 3	SD10	弥生土器	底部	-	>3.5	*6.8	磨滅のための調整等不明
390	調査区 3	SD10	弥生土器	底部	-	>4.7	*6.0	内面：ナダ 外面：底部付近にヨコナダ
391	調査区 2	SD10	弥生土器	底部	-	>4.7	*6.8	内面：ハケメ後、ナダ? 外面：底部ナダ 工具痕あり
392	調査区 2	SD10	弥生土器	甕	-	>5.6	*4.8	内面：ナダ 工具痕あり 外面：タタキ 底部ナダ?
393	調査区 3	SD10	弥生土器	甕	-	>3.5	4.3	内面：ハケメ?後、ナダ 外面：タタキ ユビオサエ
394	調査区 3	SD10	弥生土器	底部	-	>2.3	*4.2	内面：板ナダ? 外面：タタキ
395	調査区 2	SD10	弥生土器	甕	-	>5.0	4.4	内面：工具痕あり 外面：タタキ
396	調査区 3	SD10	弥生土器	甕	-	>5.3	*4.0	内面：磨滅のための調整等不明 外面：タタキ ナダ
397	調査区 3	SD10	弥生土器	底部	-	>3.5	*5.8	内面：ハケメ 外面：タタキ ナダ 底部縁部輪縁正痕あり
398	調査区 3	SD10	弥生土器	底部	-	>2.3	*4.8	内面：ユビオサエ ナダ ハケメ 外面：ナダ
399	調査区 3	SD10	弥生土器	底部	-	>3.2	*5.4	内面：ユビオサエ 板ナダ? 外面：タタキ
400	調査区 3	SD10	弥生土器	底部	-	>1.8	5.3	内面：ナダ? 外面：タタキ

報告 No.	出土位置		種別	器種	法量 (cm)			観察所見
	調査区	遺構等			口径	高さ	底径	
401	調査区2	S010	弥生土器	底部	-	>3.7	5.5	内面: ヌビオサエ ナダ? 外面: ヌビオサエ
402	調査区3	S010	弥生土器	底部	-	>2.7	*4.2	内面: ナダ 外面: ナダ?
403	調査区3	S010	弥生土器	底部	-	>5.1	*7.4	内面: ヌビオサエ? 外面: 磨滅のため調査等不明
404	調査区3	S010	弥生土器	底部	-	>2.7	*6.6	内面: ナダ 外面: ナダ? ミガキ
405	調査区3	S010	弥生土器	蓋	-	>5.4	9.0	内面: ヌビオサエ 外面: ヌビオサエ ミガキ?
406	調査区3	S010	弥生土器	蓋	-	>2.7	*8.0	内面: ヌビオサエ ナダ 外面: 底部ナダ?
407	調査区3	S010	弥生土器	蓋	-	>4.1	5.1	内面: ナダ? 外面: ナダ?
408	調査区2	S010	弥生土器	高杯	-	>10.3	-	内面: ナダ しぼり痕あり 内底充填 外面: 磨滅直線文
409	調査区3	S010	弥生土器	高杯	-	>7.8	-	内面: しぼり痕あり 外面: 磨滅直線文
410	調査区3	S010	弥生土器	高杯	-	>6.6	-	内面: ナダ? 外面: 磨滅のため調査等不明
411	調査区3	S010	弥生土器	高杯	-	>7.1	-	内面: ナダ 外面: ハケメ 接合痕あり
412	調査区3	S010	弥生土器	高杯	-	>4.9	-	内面: ナダ? 外面: ハケメ? ナダ?
413	調査区3	S010	弥生土器	高杯	-	>7.5	-	内面: ケズリ ナダ 外面: ハケメ 磨, ミガキ ヌビオサエ
414	調査区2	S010	弥生土器	高杯	-	>6.3	-	内面: ナダ ヨコナダ 外面: ナダ? ヨコナダ 回線文
415	調査区3	S010	弥生土器	高杯小	-	>3.0	-	内面: ハケメ ヨコナダ 外面: 回線文
416	調査区3	S010	弥生土器	脚部小	-	>4.4	7.0	内面: ケズリ 磨, ナダ 外面: ヌビオサエ
417	調査区2	S010	弥生土器	脚部	-	>4.5	*16.0	内面: 磨滅のため調査等不明 外面: 磨成前穿孔
418	調査区3	S010	弥生土器	脚部	-	>2.7	*11.0	内面: 磨滅のため調査等不明 外面: ヨコナダ 磨成前穿孔あり
419	調査区3	S010	弥生土器	蹄台	-	>21.1	*32.2	内面: ハケメ ケズリ ヨコナダ 外面: ナダ 回線 磨成前穿孔あり
420	調査区2	S010	弥生土器	蹄台	-	>9.2	-	内面: 磨滅のため調査等は不明 外面: 回線文 磨成前穿孔あり
421	調査区3	S010	弥生土器	飯椀底	-	>6.5	-	内面: 飯ナダ? ナダ 外面: ナダ 磨成前穿孔あり
422	調査区3	包含層等	須恵器	蓋	-	>1.7	-	内面: 同軸ナダ 外面: 同軸ナダ
423	調査区3	包含層等	須恵器	蓋	-	>2.6	*6.6	内面: 同軸ナダ後、一部ナダ 外面: 同軸ナダ 高台貼付け
424	調査区3	包含層等	須恵器	碗	-	>2.2	*6.1	内面: 同軸ナダ 外面: 同軸ナダ 底部同軸糸切り
425	調査区3	包含層等	須恵器	碗	*12.4	>2.0	-	内面: 同軸ナダ 火跡あり 外面: 同軸ナダ
426	調査区3	包含層等	須恵器	碗	*14.8	3.4	*5.0	内面: 同軸ナダ 外面: 同軸ナダ 底部同軸糸切り?
427	調査区3	包含層等	土師器	皿	*6.8	1.0	*5.8	内面: ナダ ヨコナダ 外面: ナダ? ヨコナダ
428	調査区3	下層包含層	弥生土器	甕	-	>6.1	-	内面: 磨滅のため調査等不明 外面: ヨコナダ 磨滅直線文
429	調査区3	下層包含層	弥生土器	底部	-	>6.5	*8.0	内面: ヌビオサエ 外面: ハケメ
430	調査区3	下層包含層	弥生土器	底部	-	>2.9	*5.0	内面: ヌビオサエ 飯ナダ? 外面: ヌビオサエ ナダ?
431	調査区3	下層包含層	須恵器	杯	-	>1.5	*14.0	内面: 同軸ナダ後、一部ナダ 外面: 同軸ナダ 底部同軸ヘラ切り後、同軸ナダ 高台貼付け
432	調査区3	下層包含層	須恵器	杯	-	>3.3	-	内面: 同軸ナダ 外面: 同軸ナダ 底部へラ切り?
433	調査区3	下層包含層	須恵器	碗	-	1.9	*8.3	内面: 同軸ナダ 外面: 同軸ナダ 高台貼付け
434	調査区3	下層包含層	須恵器	甕小	-	>5.7	-	内面: 同軸ナダ 外面: 同軸ナダ 一部同軸ナダ後、ナダ

計測値における「*」は復元値。「>」は残存値を示す。

表4 遺物観察表 (石器)

報告 No.	出土位置		器種	法量 (cm)			重量 (g)	石材	備考
	調査区	遺構等		長さ	幅	厚さ			
S 1	調査区 1	包含層等	石鏃	口径 *19.6	器高 >6.9	底径 -	308.0	滑石か	内面：磨き 外面：削り 磨き 煤付着
S 2	調査区 2	包含層等	二次加工削片	>4.75	>6.1	0.65	17.7	サヌカイト	

計測値における「*」は復元値、「>」は残存値を示す。

表5 遺物観察表 (鉄器)

報告 No.	出土位置		器種	法量 (cm)			重量 (g)	備考
	調査区	遺構等		長さ	幅	厚さ		
I 1	調査区 2	SD10	鋳か	>6.2	0.9	0.4	5.9	

計測値における「>」は残存値を示す。

表6 遺物観察表 (木器)

報告 No.	出土位置		器種	法量 (cm)			重量 (g)	樹種	備考
	調査区	遺構等		長さ	幅	厚さ			
W 1	調査区 1	SP24	柱眼	>29.0	12.6	10.2	1219	マツ属残縁管束形属	工具痕あり
W 2	調査区 3	SB9P2	柱眼	>19.8	7.9	6.2	476	ヒノキ	工具痕あり

計測値における「>」は残存値を示す。

第四章 総括

「第Ⅱ章 調査の成果と既往の調査／第2節 既往の調査」でも述べたように、これまでの発掘調査成果によると、美乃利遺跡ではおもに弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が数多く確認されており、複合的な集落遺跡であることが明らかになっている。今回調査地はこれまでに発掘調査が実施されている場所のちょうど中間地点にあっていたため、今回の調査においても複数の時期にわたる遺構・遺物が確認されることが想定された。調査の結果、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が確認され、今回の調査地でも複合遺跡としての様相を改めて確認することができた。

本章では、今回の発掘調査で検出された遺構を主要な時期ごとに整理し、おもに今回調査地における美乃利遺跡の集落変遷を簡単に述べ、本書のまとめとしたい。

弥生時代中期前葉

調査区1と調査区2において土坑（SK8やSK11、SK20など）や溝状遺構（SD2やSD5など）が確認されているものの、検出遺構数はそれほど多くない。堅穴建物などの建物跡も確認されていないことから、集落の周縁域であったとみられる。過去の調査成果をみると、今回調査地の南側（図10のB地点、以下では今回調査地の南側で市教委によって実施された過去の調査地を「B地点」と呼称する）では当該期の遺構は確認されていないが、今回調査地の北側（図10のA地点、以下では今回調査地の北側で市教委によって実施された過去の調査地を「A地点」と呼称する）では、数は多くないものの、堅穴建物や掘立柱建物が検出されている。このほかにもA地点では土坑や溝などが一定数確認されているため、当該期における遺構の分布密度は北側にいくにつれて濃くなっている状況が窺える。

弥生時代中期後葉

調査区1と調査区2において土坑（SK4やSK17など）やピット（SP13やSP44、SP49など）が確認されているものの、遺構の検出数はさほど多くない。ただ、調査区1の南側で検出されたSP13のように柱根が良好に残存しているものの存在から、この周辺には当該期の掘立柱建物が存在する可能性が高い。このほか、調査区2から調査区3にかけて検出された大溝（SD10）⁽¹⁾では当該期の弥生土器が出土していることから、中期後葉には掘削され、機能していたものとみられる。今回調査地周辺の遺構の分布状況をみると、A地点では堅穴建物13棟、掘立柱建物14棟など、多数の建物跡が検出されているのに対して、B地点では当該期の遺構は確認されていない。当該期の集落の中心域は北側に広がっており、今回調査地は集落の周縁域に位置していたものと考えられる。

弥生時代後期～終末期

調査区1と調査区2において土坑（SK7やSK16など）が確認されているほか、調査区1の溝状遺構（SD1）から比較的量の弥生土器が出土しているものの、堅穴建物などの建物跡は確認されていない。A地点では後期頃の堅穴建物2棟と掘立柱建物が1棟、B地点では終末期頃の堅穴建物が3棟検出されていることから、今回調査地は集落の周縁域であったと考えられる。このほか、中期後葉以降に水路として機能していたSD10は終末期頃に埋没したものと考えられる。

奈良時代

当該期の遺構はほとんど確認されていないが、調査区3において当該期の可能性のある溝（SA4）が確認されているほか、当該期に埋没したものとみられる溝状遺構（SD9）が検出されている。また、調査区3の北端で検出された大溝（SD8）⁽²⁾も、その掘削は当該期まで遡り、その後、平安時代後期にいたるまで埋没と掘削が繰り返されていたものと考えられる。今回調査地周辺の遺構分布状況を見ると、A地点では掘立柱建物4棟や溝、木棺墓などが検出され、B地点では溝が確認されている。これらのことから、当該期の集落の中心域は、今回調査地より北側に広がっていた可能性がある。なお、今回調査地の周辺に残る条里地割の方位（N-44°-E）を参考すると（服部1989、山田編1997）、同方位を指向するSD9は条里地割を基準に開削されたものである可能性が高い。

平安時代後期

調査区1で平安時代前期に遡るピット（SK43）が、調査区3で平安時代中期に遡る溝（SA5）やピット（SP50）などが確認されているものの、今回調査で確認された遺構の大部分は平安時代後期以降に帰属する。時期比定の根拠が薄いものも含まれるが、調査区1では掘立柱建物5棟（SB1、4～7）や溝1列（SA1）などが確認されている。このほかにも建物等を復元し得なかつたピットが多数存在していることから、本来は5棟以上の掘立柱建物が存在していた可能性が高い。特に調査区1の北側に当該期のピットが多く検出されている状況を踏まえると、平安時代後期には調査区1の北側を中心に居住域が広がっていたものと考えられる。また、奈良時代以降、埋没と掘削が繰り返された大溝（SD8）は当該期に埋没し、その機能を終えたものと考えられる。今回調査地周辺の状況を見ると、A地点では比較的多くの掘立柱建物が検出されているほか、平安時代末頃から鎌倉時代初頭にかけての屋敷地が確認されている。一方のB地点では、現状では溝、土坑や井戸が確認されているのみである。これらのことから、当該期には今回調査地を含めて、その北側にいくつかの居住域のグループが形成されていたものと推測される。

鎌倉時代

平安時代後期の遺構と細かく時期を区別できていないものもあるが、調査区1～3で掘立柱建物2～4棟（SB3やSB2など）などが確認されており、広範囲に居住域が広がっている様子が窺える。ただ、このほかにも多数のピットが存在しているため、本来は4棟以上の掘立柱建物が存在していたものと推測される。特に調査区1の南側に分布の集中が認められることから、その付近には多くの掘立柱建物が存在していた可能性が高い。このほか、調査区1の南側では、鍛冶関連遺構とみられる性格不明遺構（SX4）が検出されており、鎌倉時代の前半頃には集落内の一部で鍛冶が行われていたとみられる。今回調査地周辺の遺構分布状況を見ると、A地点において当該期の可能性のある掘立柱建物が1棟検出されている以外には、A地点、B地点ともに溝が確認されているのみである。これらのことから、当該期における居住域はおもに今回調査地付近に形成されていたものと考えられる。

このように、今回の発掘調査では、これまでに発掘調査が行われた場所のほぼ中間地点における集落の具体的な様相が明らかとなり、隣接する大野遺跡を含め、当該地の周辺には弥生時代以降の遺構・遺物が広く分布している状況を改めて確認することができた。また、これらの主要な帰属時期には、弥生時代中期前葉・中期後葉・後期～終末期、奈良時代、平安時代後期、鎌倉時代があり、時期によって遺構・遺物の分布密度が大きく変化している様相を捉えることができた。集落の変遷や集落構造の

変化を考えるうえで貴重な成果を得ることができたといえるであろう。

しかしその一方で、集落の動向に大きな影響を与えたと考えられる地形環境の変化と、集落の変遷過程の対応関係については十分に明らかにできておらず、報告内容としてはきわめて表面的なものとなってしまった。また、美乃利遺跡に隣接する大野遺跡との詳細な比較検討ができていないため、両遺跡の関係性についてもほぼ言及することができていない。

より具体的な地域の歴史像を描けるように、これらの点を意識しつつ今後も継続して調査・研究を進めていく必要がある。

末筆ではありますが、現場での発掘調査から報告書の刊行にいたるまで多くのご助力を賜りました多くの方々に改めてお礼申し上げます。

註

- (1) 平成9年度に兵庫県教育委員会によって実施された発掘調査で検出された「SD15」（山田編2006）と同一遺構とみられる。
- (2) 平成9年度に兵庫県教育委員会によって実施された発掘調査で検出された「SD8」（山田編2006）と同一遺構とみられ、平成27年度に加古川市教育委員会が実施した発掘調査で検出された「溝4」と同一遺構の可能性がある。

参考文献

- 浅井達也 2020『栗津遺跡発掘調査報告書』加古川市文化財調査報告31 加古川市教育委員会
- 浅田芳朗・岩本恒美・上田哲也・多淵敏樹・中溝康則 1976『加古川市 砂部遺跡』加古川市教育委員会
- 池田征弘・仁尾一人・森内秀造編 1999『久留美・跡部窯跡群』兵庫県文化財調査報告第186冊 兵庫県教育委員会
- 石野博信・中井一夫・松下 勝・安田博幸 1968『播磨・東溝弥生遺跡Ⅰ』加古川市教育委員会
- 上田哲也・河原隆彦 1966『播磨の弥生文化』上田哲也・河原隆彦
- 上田哲也・中溝康則 1974『加古川・砂部遺跡調査略報-権現ダム配水管工事に伴う予備調査-』加古川市教育委員会
- 岡田章一・長谷川真 2003「兵庫津遺跡出土の土製煮炊具」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第3号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 加古川市史編さん専門委員 1989『加古川市史』第1巻本編Ⅰ 加古川市
- 加古川市史編さん専門委員 1996『加古川市史』第4巻史料編Ⅰ 加古川市
- 喜谷美宣 1985『加古川市カンス塚古墳発掘調査概要』加古川市教育委員会
- 北山 惇 1986「加古川市聖陵山古墳の埋葬施設の再検討」『神戸古代史』Vol. 3 No. 1 (No. 7) 間島一雄書店
- 北山 惇 1989「加古川市南大塚古墳の前方形堅穴石室と出土の三角縁神獸鏡について」『神戸古代史』No. 8 間島一雄書店
- 久保弘幸 2016『大塚遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告第481冊 兵庫県教育委員会
- 佐藤亜聖 2022「第4章 東播系須恵器」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

- 篠宮 正編 2006『溝之口遺跡』兵庫県文化財調査報告第309冊 兵庫県教育委員会
- 神野 恵 2013『都城の製塩土器』『塩の生産・流通と官衙・集落』奈良文化財研究所研究報告第12冊 奈良文化財研究所
- 高橋 学 1997「第9節 加古川下流域平野の地形環境分析 - 完新世段丘面の段丘化と美乃利遺跡の畝状遺構 -」『美乃利遺跡』兵庫県文化財調査報告第165冊 兵庫県教育委員会
- 田中眞吾 1989「第1節 地形と地質」『加古川市史』第1巻 加古川市
- 中川 涉編 2010『兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅰ』兵庫県文化財調査報告第384冊 兵庫県教育委員会
- 長友朋子編 2007『弥生土器集成と編年 - 播磨編 -』大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告第5号 大手前大学史学研究所
- 服部昌之 1989「3 条里制と遺構」『加古川市史』第1巻本編Ⅰ 加古川市
兵庫県教育委員会 1982『兵庫県の中世城館・荘園遺跡 - 兵庫県中世城館・荘園遺跡緊急調査報告 -』兵庫県教育委員会
- 西川英樹 2004『野口廃寺発掘調査概要報告書』加古川市文化財調査報告19 加古川市教育委員会
- 春成秀爾・松本正信・安川豊史 1982「播磨南部採集の旧石器」『旧石器考古学』24 旧石器談話会
- 村上泰樹・山田清朝編 2010『大野遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告第380冊 兵庫県教育委員会
- 森内秀造編 1995『相生市・緑ヶ丘竪穴群Ⅱ』兵庫県文化財調査報告第139冊 兵庫県教育委員会
- 山田清朝編 1997『美乃利遺跡』兵庫県文化財調査報告第165冊 兵庫県教育委員会
- 山田清朝編 2006『美乃利遺跡Ⅱ』兵庫県文化財調査報告第296冊 兵庫県教育委員会
- 山中リュウ編 2018『溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅳ・美乃利遺跡発掘調査報告書Ⅰ』加古川市文化財調査報告29 加古川市教育委員会
- 山中リュウ 2022『神納塚古墳発掘調査報告書・広沢山遺跡発掘調査報告書』加古川市文化財調査報告35 加古川市教育委員会
- 渡辺 昇編 2009『坂元遺跡Ⅱ』兵庫県文化財調査報告第366冊 兵庫県教育委員会

圖 版



写真 15 調査区 1 南側南半 (第 1 遺構面) 全景 (北東から)



写真 16 調査区 1 南側北半 (第 1 遺構面) 全景 (南西から)

図版 2



写真 17 調査区 1 北側 (第 1 遺構面) 全景 (南西から)



写真 18 SB1P1 断面 (西から)



写真 19 SB1P2 断面 (北から)



写真 20 SB1P3 断面 (南から)



写真 21 SB2P1 断面 (南から)



写真 22 SB2P2 断面 (北から)



写真 23 SB2P3 断面 (北西から)

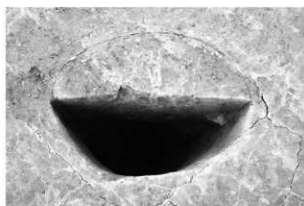


写真 24 SB3P2 断面 (南から)



写真 25 SB3P3 断面 (北西から)



写真 26 SB3P3 柱根 (北西から)



写真 27 SB3P3 根石検出状況 (北から)



写真 28 SB3P4 断面 (北から)

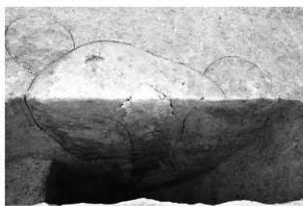


写真 29 SB3P5 断面 (西から)

図版 4



写真 30 SB3P5 板核検出状況 (北西から)



写真 31 SB3P6 断面 (東から)

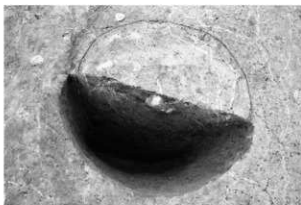


写真 32 SB3P7 断面 (北から)



写真 33 SB3P8 断面 (東から)



写真 34 SB3P8 根石検出状況 (北から)



写真 35 SB3P9 断面 (北東から)



写真 36 SB3P10 石積み検出状況 (北東から)



写真 37 SB3P10 完掘状況 (北から)



写真 38 SB4P1 断面 (東から)

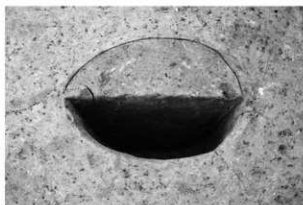


写真 39 SB4P2 断面 (南西から)



写真 40 SB4P4 断面 (西から)



写真 41 SB4P5 断面 (西から)



写真 42 SB5 (北から)



写真 43 SB5P2 根石検出状況 (東から)



写真 44 SB5P3 断面 (東から)



写真 45 SB5P4 根石検出状況 (北西から)



写真 46 SB6・SB7(北東から)

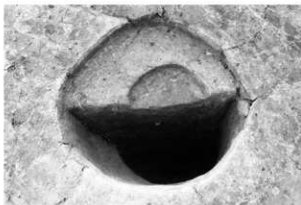


写真 47 SB6P1 断面(南から)

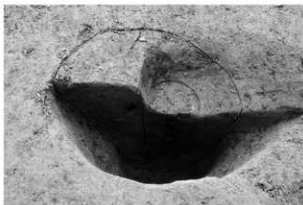


写真 48 SB6P3 断面(北西から)



写真 49 SB6P5 断面(南東から)



写真 50 SB6P6 断面(北から)



写真 51 SB7P1 断面 (南東から)



写真 52 SB7P2 断面 (南から)



写真 53 SB7P3 遺物出土状況 (西から)

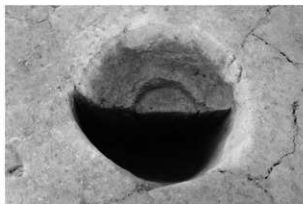


写真 54 SB7P4 断面 (東から)



写真 55 SB7P5 断面 (南西から)



写真 56 SB7P6 断面 (北西から)



写真 57 SB7P7 断面 (北西から)



写真 58 SB7P8 断面 (南から)

図版 8

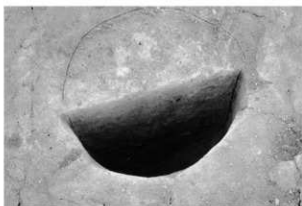


写真 59 SB7P9 断面 (南西から)



写真 60 SB7P10 断面 (西から)



写真 61 SB7P11 断面 (東から)



写真 62 SB7P11 遺物出土状況 (北東から)



写真 63 SB7P12 断面 (南東から)



写真 64 SB7P12 遺物出土状況 (東から)

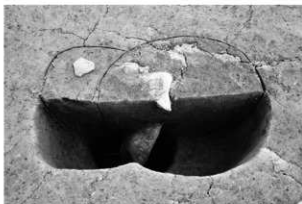


写真 65 SA1P3 断面 (北から)



写真 66 SA1P4 断面 (北から)



写真 67 SK1 断面 (北東から)



写真 68 SK3 断面 (北から)



写真 69 SK4 遺物出土状況 1 (北から)



写真 70 SK4 遺物出土状況 2 (南から)



写真 71 SK8 断面 (南東から)

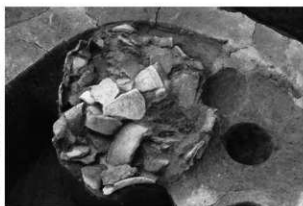


写真 72 SK8 遺物出土状況 (東から)



写真 73 SK9 断面 (北西から)



写真 74 SK9 遺物出土状況 (北から)

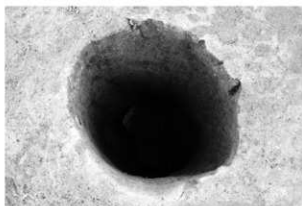


写真 75 SP1 遺物出土状況 (西から)

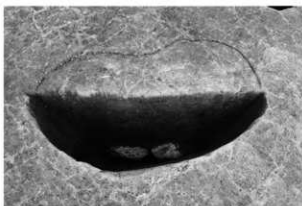


写真 76 SP7 断面 (東から)



写真 77 SP13 断面 (北東から)



写真 78 SP19 断面 (西から)

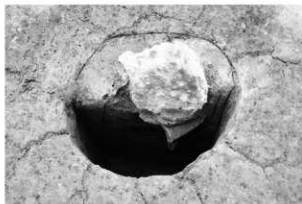


写真 79 SP21 断面 (北から)



写真 80 SP24 断面 (北から)



写真 81 SP27 断面 (南西から)

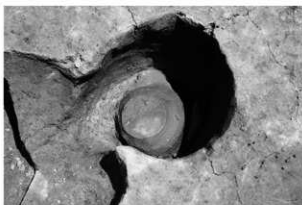


写真 82 SP27 遺物出土状況 (南西から)



写真 83 SP28 断面 (東から)



写真 84 SP29 完掘状況 (東から)



写真 85 SP32 断面 (南東から)



写真 86 SP44 (第1面) 遺物出土状況 (南西から)



写真 87 SP44 (第2面) 遺物出土状況 (西から)

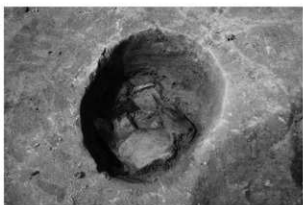


写真 88 SP44 (第3面) 遺物出土状況 (東から)



写真 89 SP44 (第4面) 遺物出土状況 (東から)



写真 90 SP44 (第5面) 遺物出土状況 (北から)



写真 91 SX1 土層断面（北から）

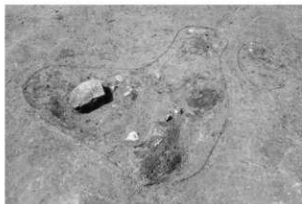


写真 92 SX2 検出状況（北から）

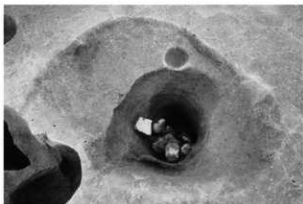


写真 93 SX3 礎出土状況（北東から）

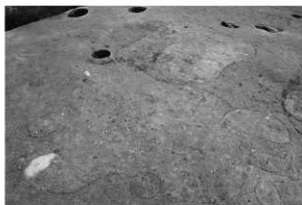


写真 94 SX4 検出状況（北から）



写真 95 SX4(a-a') 断面（北から）



写真 96 SX4 炭化物集中部断面（北西から）



写真 97 SX4 (b-b'、c-c') 断面（北から）



写真 98 SX5 断面（西から）



写真 99 SX6 断面（南東から）



写真 100 調査区 1 南側（第 2 遺構面）全景（東から）



写真 101
調査区 1 中央南側
(第 2 遺構面) 全景 (南西から)



写真 102
調査区 1 中央北側
(第 2 遺構面) 全景 (南東から)



写真 103
調査区 1 北側
(第 2 遺構面) 全景 (南東から)



写真 104 SK11 断面 (南東から)



写真 105 SK11 遺物出土状況 (南から)



写真 106 SK12 検出状況 (東から)



写真 107 SK12 断面 (北から)



写真 108 SK12 完掘状況 (南東から)



写真 109 SK12 遺物出土状況 (北から)



写真 110 SK13 断面 (南東から)



写真 111 SK13 炭化物検出状況 (東から)



写真 112 SK14 断面 (南から)



写真 113 SP45 断面 (西から)



写真 114 SP46 遺物出土状況 (南から)



写真 115 SP46 断面 (北から)



写真 116 SD1 遺物出土状況 (南から)



写真 117
SD1 南半部遺物出土状況 1
(東から)



写真 118
SD1 南半部遺物出土状況 2
(南西から)



写真 119 SD2・3 完掘状況 (北西から)



写真 120 調査区 1 北西壁土層堆積 (南から)



写真 121 S88 (北から)

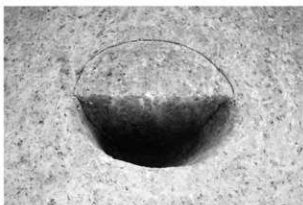


写真 122 S88P1 断面 (東から)



写真 123 S88P2 断面 (北から)



写真 124 S88P4 断面 (北から)



写真 125 S88P5-1・2 断面 (北西から)



写真 126 S88P6 断面 (南西から)



写真 127 SA2・SA3 (南から)



写真 128 SA2P3 (前)・SA3P3 (後) 断面 (南から)



写真 129 SK16 完掘状況 (北西から)



写真 130 SK19 遺物出土状況 (東から)



写真 131 SD4 断面 (東から)



写真 132 SD4 遺物出土状況 (北西から)



写真 133 調査区 2 (第 2 遺構面) 全景 (北西から)



写真 134 SK20 断面 (北から)



写真 135 SP49 遺物出土状況 (東から)



写真 136 調査区 2 西壁土層堆積 (東から)



写真 137
調査区 3 (第 1 遺構面)
全景 (南から)



写真 138 SB9、SA4(北西から)



写真 139 SB9P1 断面 (北東から)

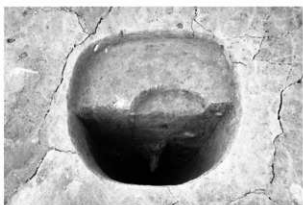


写真 140 SB9P2 断面 (北東から)



写真 141 SB9P4 断面 (北東から)



写真 142 SB9P4 (第1面) 遺物出土状況 (北東から)

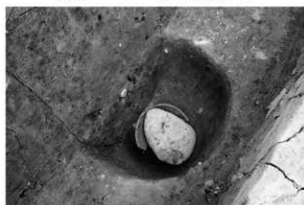


写真 143 SB9P4 (第2面) 遺物出土状況 (南から)

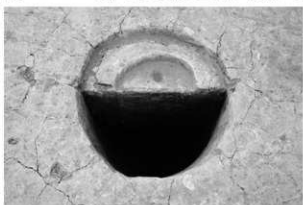


写真 144 SB9P5 断面 (北東から)



写真 145 SB9P6 断面 (南西から)



写真 146 SB9P6 根石検出状況 (西から)



写真 147 SB9P7 断面 (北東から)



写真 148 SB9P8 断面 (北東から)



写真 149 SB9P9 断面 (西から)



写真 150 SB9P9 根石検出状況 (西から)



写真 151 SB9P10 断面 (北東から)



写真 152 SB9P11 断面 (北東から)

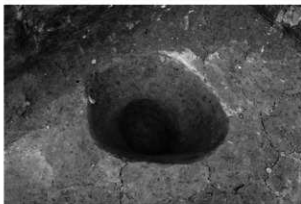


写真 153 SB9P12 完掘状況 (南西から)



写真 154 SA4P1 断面 (北東から)



写真 155 SA4P2 断面 (北東から)



写真 156 SA4P3 断面 (北東から)



写真 157 SA5 (写真上が東)



写真 158 SA5P1 断面 (西から)

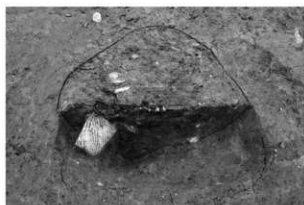


写真 159 SA5P2 断面 (西から)



写真 160 SA5P3 断面 (西から)



写真 161 SA5P4 断面 (南東から)



写真 162 SA5P4 遺物出土状況 (南西から)



写真 163 SA6 (南から)



写真 164 SA6P1-1・2 断面 (西から)



写真 165 SA6P2 断面 (南東から)



写真 166 SA6P3 断面 (南西から)



写真 167 SK21 断面 (東から)



写真 168 SK21 遺物出土状況 (南から)



写真 169 SP50 遺物出土状況 (南東から)

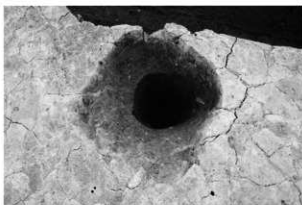


写真 170 SP50 完掘状況 (北東から)



写真 171 SD6・SD7 検出状況 (北から)



写真 172 SD6 断面 (南西から)

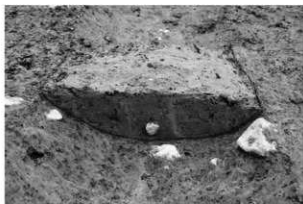


写真 173 SD7 (c - c') 断面 (南西から)



写真 174 SD7 遺物出土状況 (南西から)



写真 175 SD8 (北東から)



写真 176 S11 (東から)



写真 177 S11 周壁溝断面 (南東から)



写真 178 SD9 (北東から)



写真 179 SD9 断面 (北東から)



写真 180 SD10 (北から)



写真 181 SD10 断面 (南から)



写真 182 SD10 下層断面 (南から)

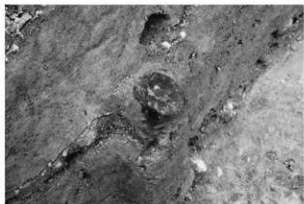


写真 183 SD10 遺物出土状況 (南西から)



写真 184 調査区3西壁土層堆積 (南東から)



写真 185 SD8 付近下層土層堆積 (北から)

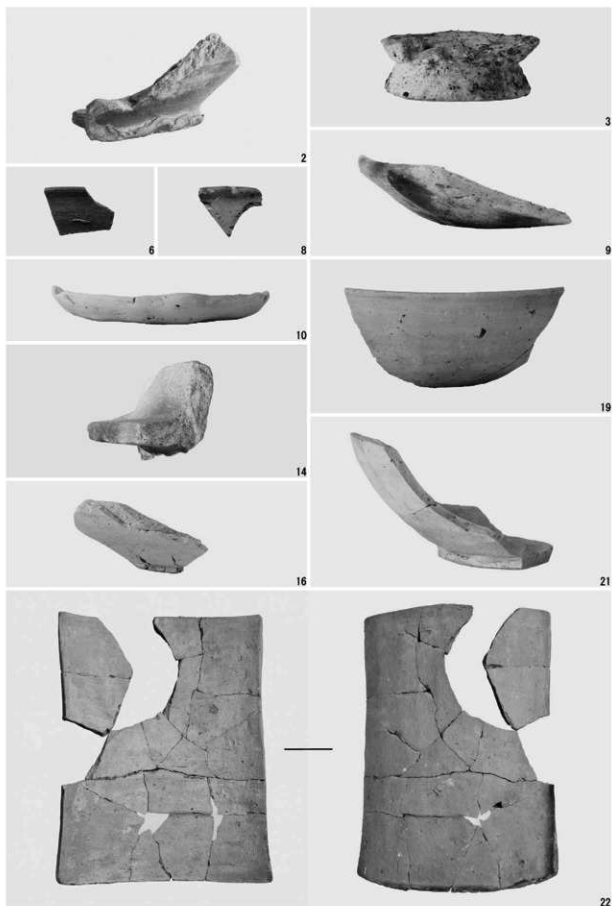


写真 186 出土遺物 (1)

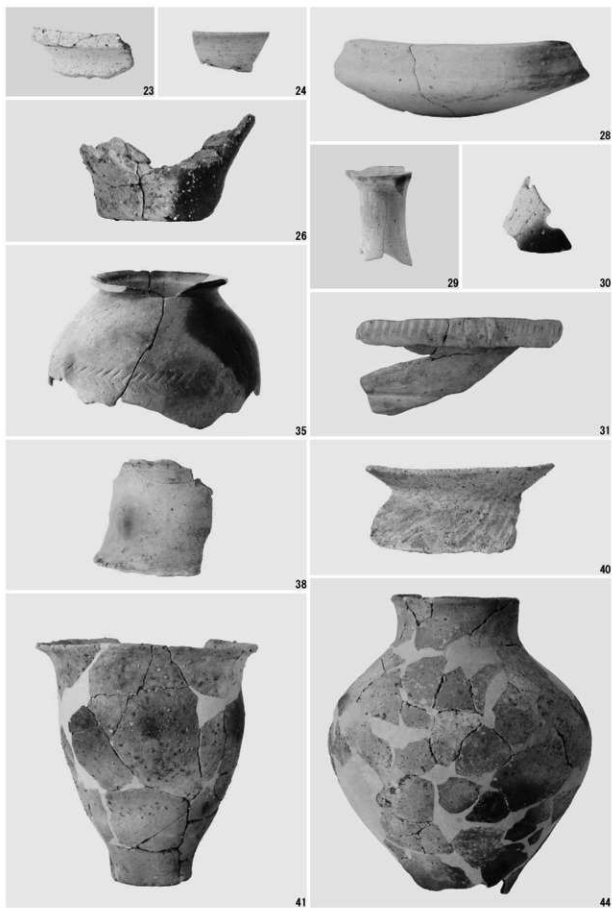


写真 187 出土遺物 (2)

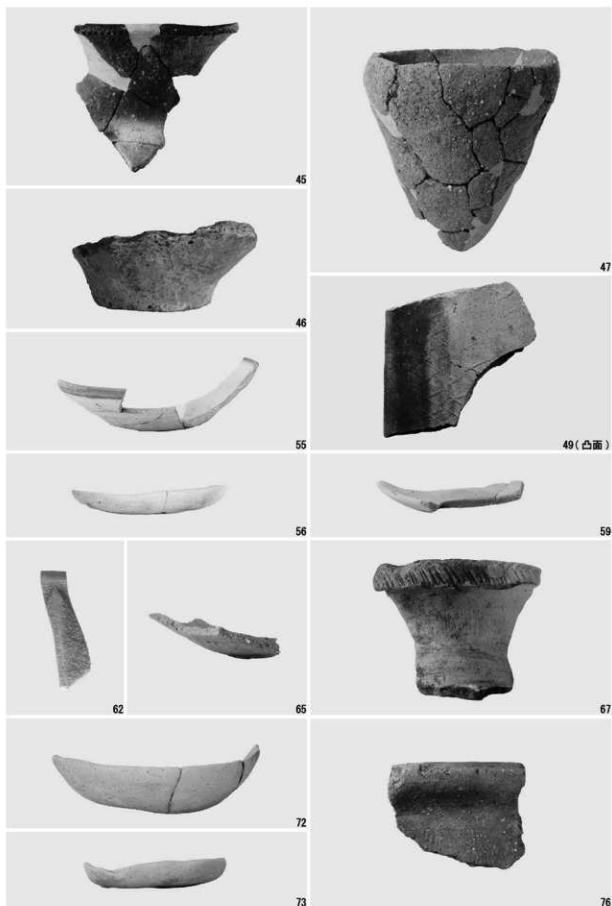


写真 188 出土遺物 (3)

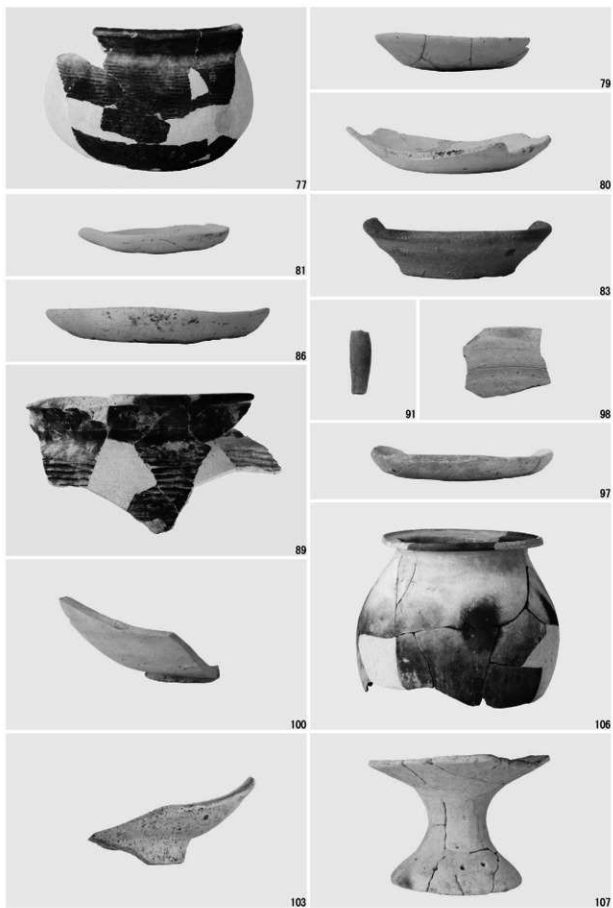


写真 189 出土遺物 (4)

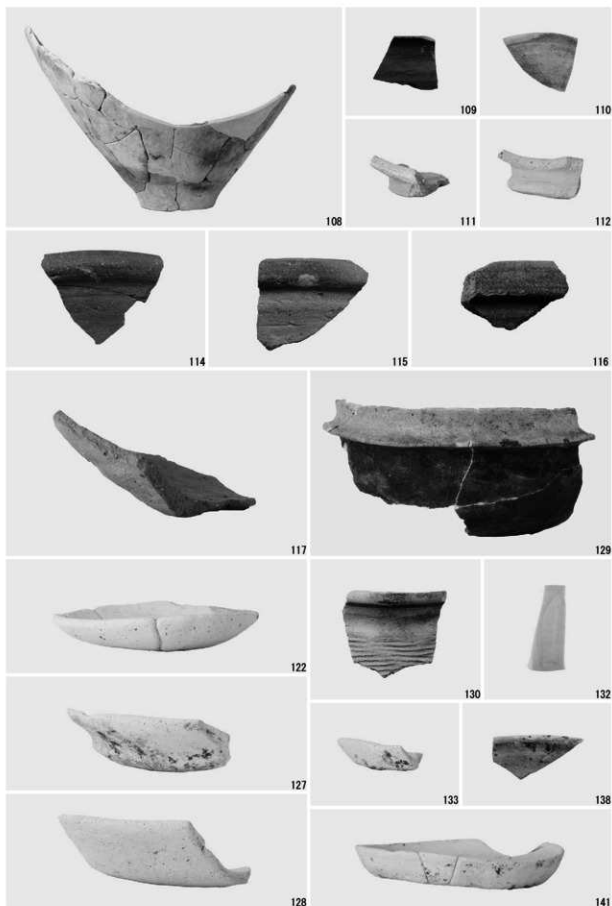


写真 190 出土遺物 (5)

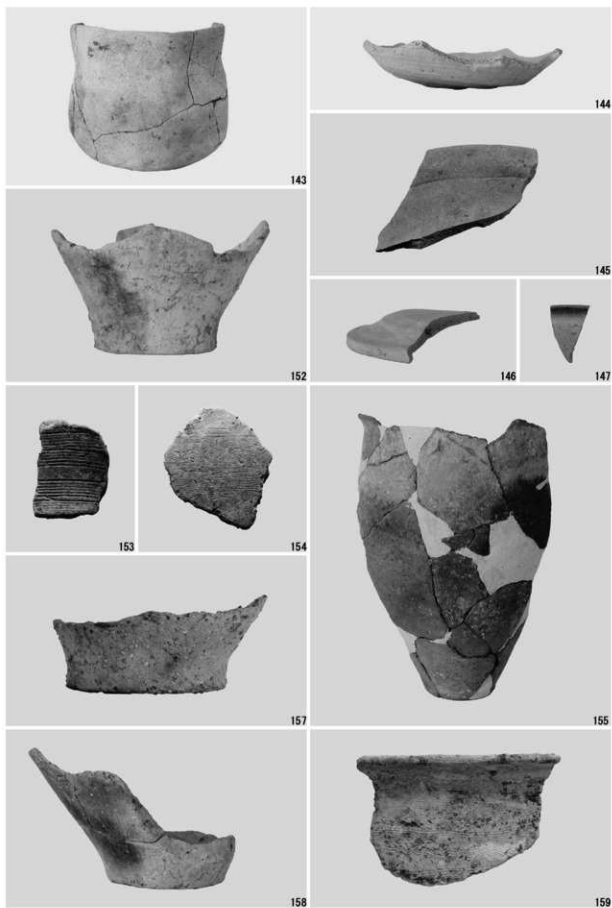


写真 191 出土遺物 (6)

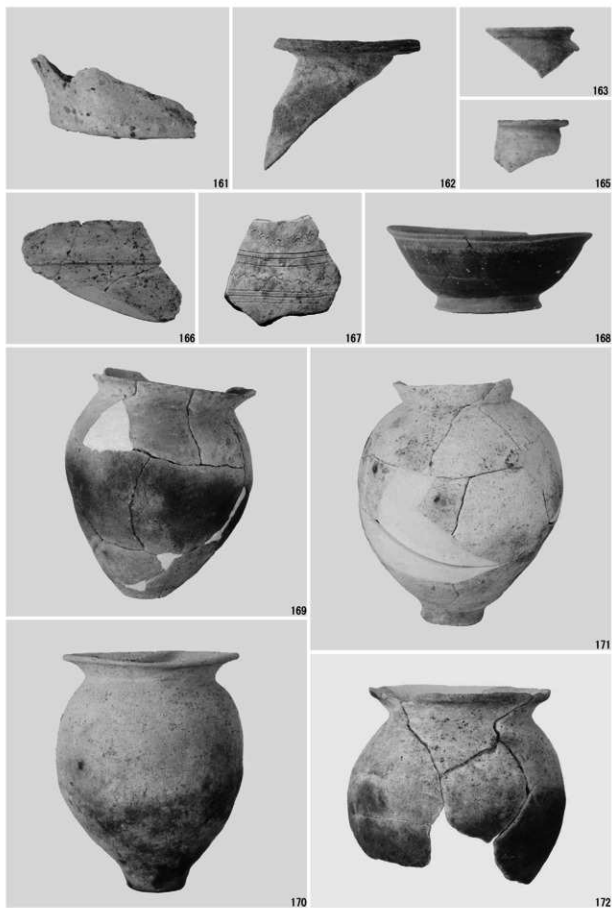


写真 192 出土遺物 (7)

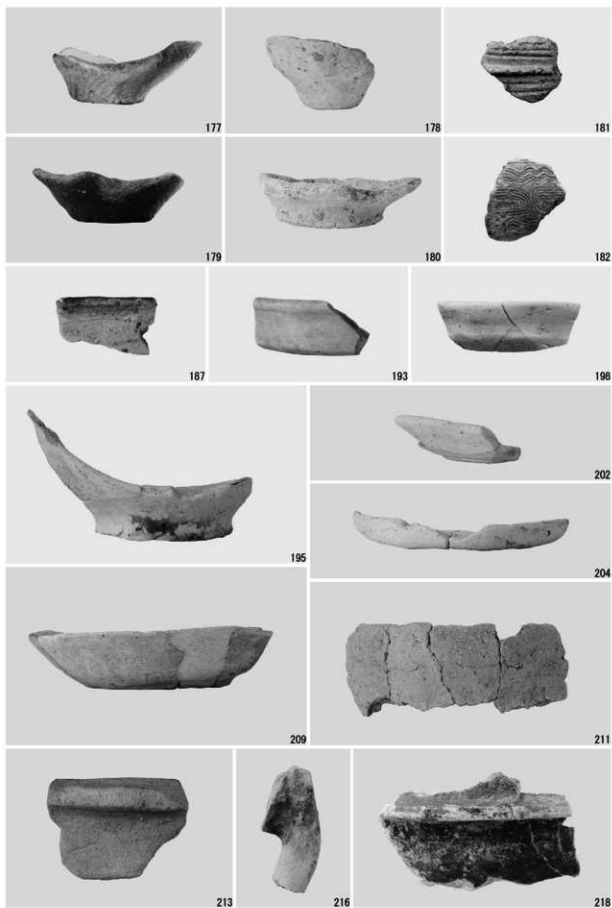


写真 193 出土遺物 (8)

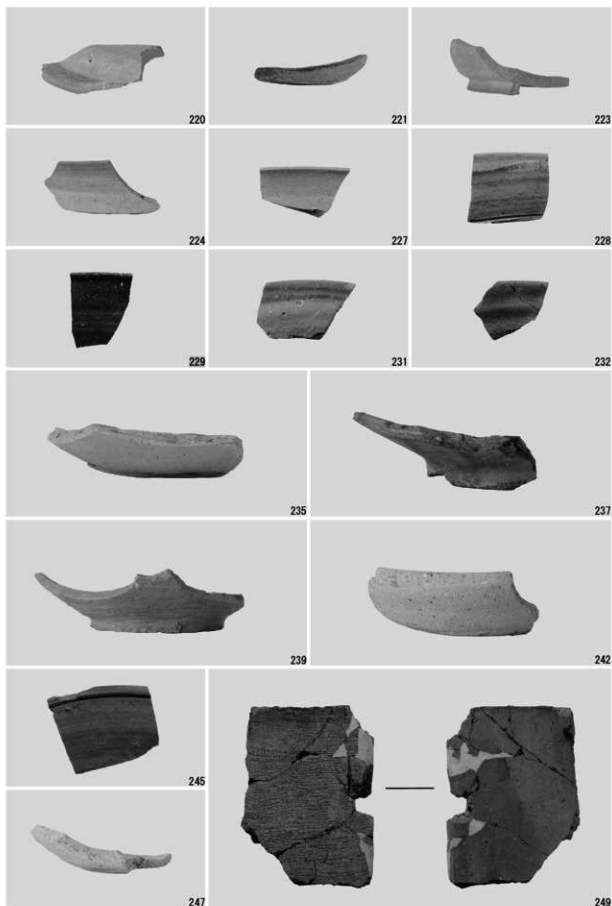


写真 194 出土遺物 (9)

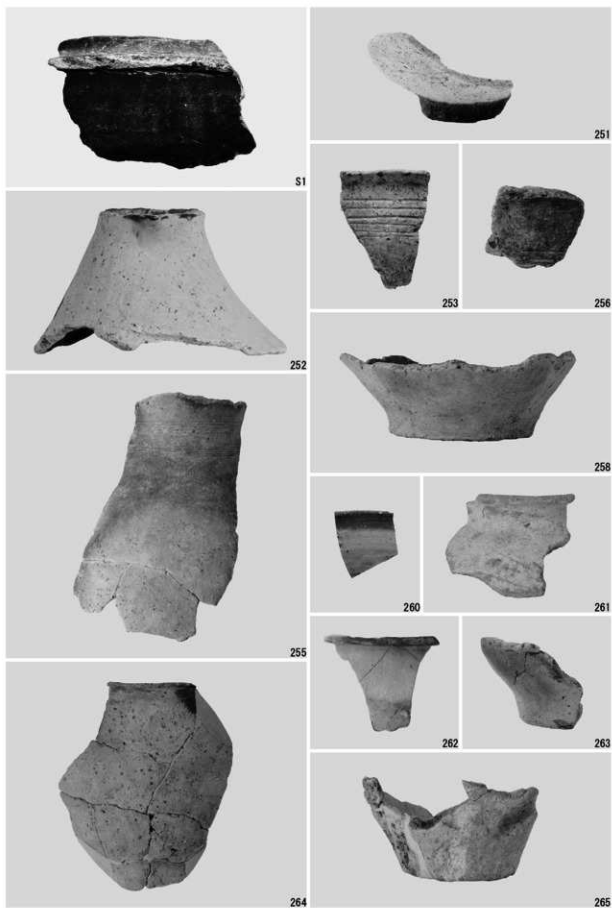


写真 195 出土遺物 (10)

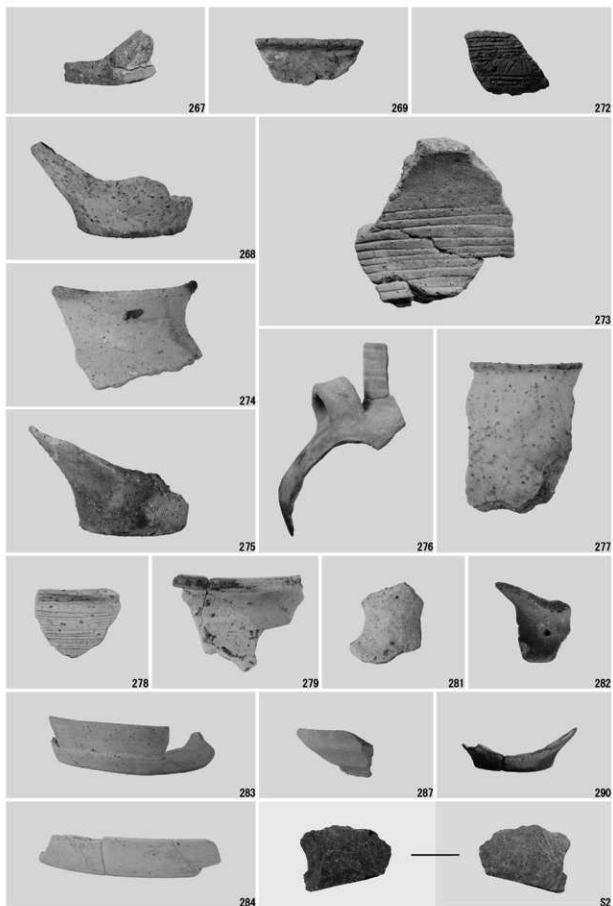


写真 196 出土遺物 (11)

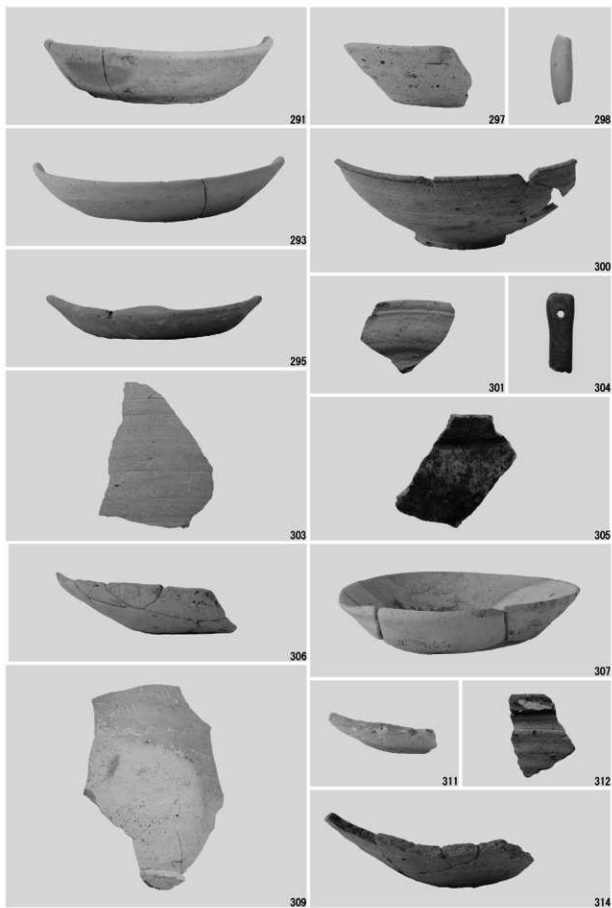


写真 197 出土遺物 (12)

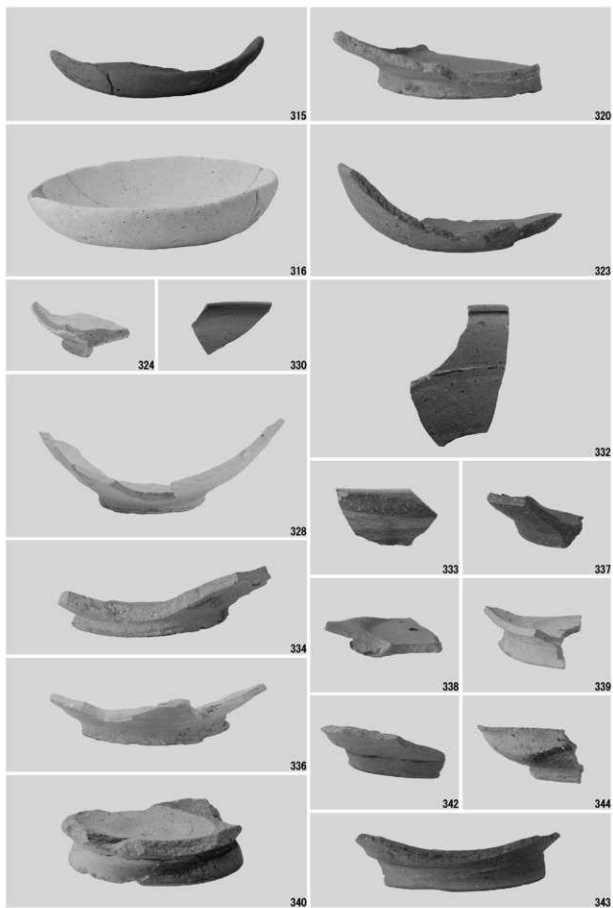


写真 198 出土遺物 (13)

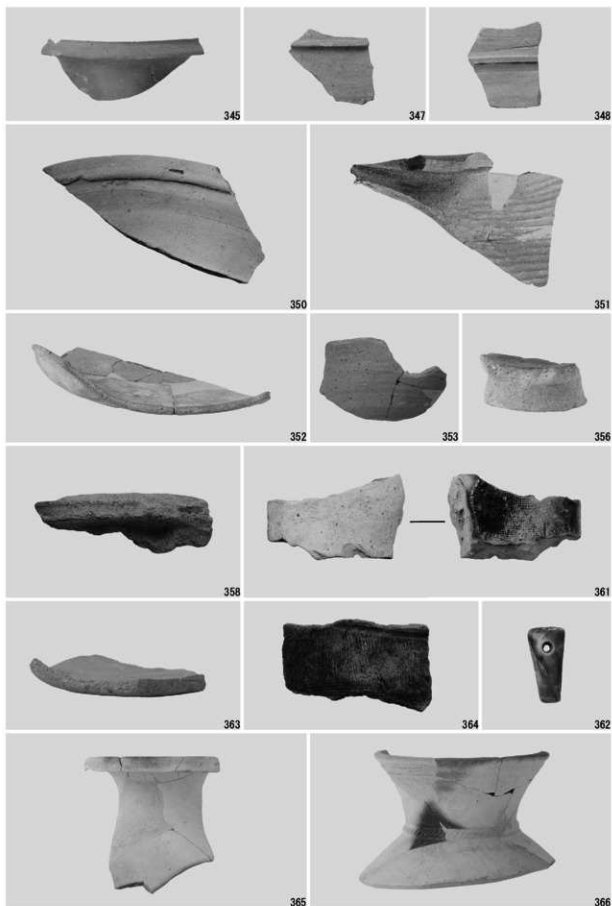


写真 199 出土遺物 (14)

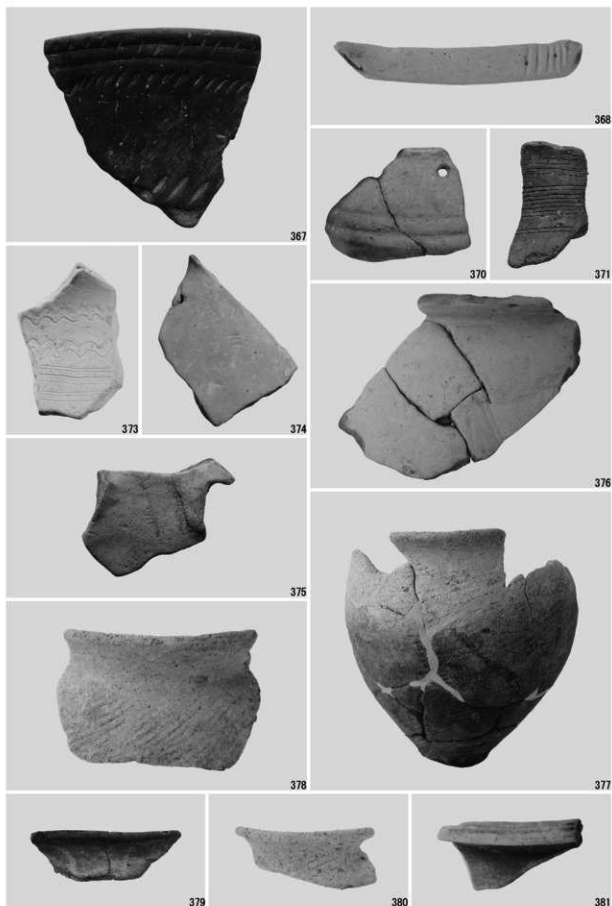


写真 200 出土遺物 (15)

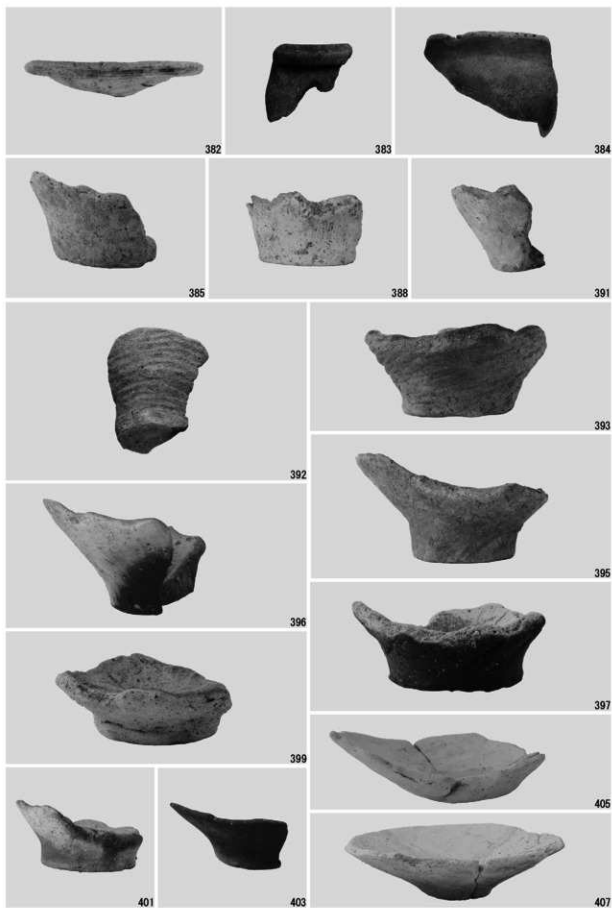


写真 201 出土遺物 (16)



写真 202 出土遺物 (17)

報 告 書 抄 録

ふりがな	みのりいせきはつちようさほうこくしょ							
書名	美乃利遺跡発掘調査報告書Ⅱ							
副書名								
巻次								
シリーズ名	加古川市文化財調査報告							
シリーズ番号	38							
編著者名	平尾英希							
編集機関	加古川市教育委員会							
所在地	〒675-0101 兵庫県加古川市平岡町新在家1224-7							
発行年月日	令和6（2024）年8月30日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
みのりいせき 美乃利遺跡	ひょうごけん かこがわし 兵庫県加古川市 かこがわちよう さほう 加古川町大野	28210	110218	34° 46' 14"	134° 51' 13"	20200217 ～20200617 20220328 ～20220805	890㎡	道路

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
美乃利遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴建物 土坑 ピット 溝状遺構	弥生土器 石器剥片 鉄器	土坑やピット、溝状遺構から弥生土器が一括で出土
		奈良時代	榭 土坑 溝状遺構	土師器 須恵器 製塩土器	糸里地割の方位を基準に掘削された可能性のある溝状遺構を確認
		平安時代	掘立柱建物 榭 土坑 ピット 溝状遺構	土師器 須恵器 瓦	1枚の瓦を分割し、それぞれを根石の替わりとして使用したとみられる掘立柱建物を確認
		鎌倉時代	掘立柱建物 榭 土坑 ピット 溝状遺構	土師器 須恵器 青磁 石鍋	複数の掘立柱建物などを確認したほか、鍛冶関連遺構の可能性のある遺構を確認
概要	道路建設に伴い、加古川左岸に位置する美乃利遺跡の発掘調査を実施した。調査の結果、おもに弥生時代中期前葉・中期後葉・後期から終末期、奈良時代、平安時代後期、鎌倉時代の複数の時期の遺構・遺物が多数確認された。時期によって遺構・遺物の分布密度が大きく変化している様相を確認でき、過去に周辺で実施されている発掘調査の成果を含め、複合遺跡としての様相を改めて確認することができた。				
資料保管機関	〒675-0101 兵庫県加古川市平岡町新在家1224-7 加古川市教育委員会文化財調査研究センター				

加古川市文化財調査報告38

美乃利遺跡発掘調査報告書Ⅱ

令和6（2024）年8月30日

編集・発行 加古川市教育委員会
〒675-0101 兵庫県加古川市平岡町新在家1224-7
TEL079-423-4088

印刷 能登印刷株式会社
〒920-0855 石川県金沢市武蔵町7番10号
TEL076-233-2550